

火花

第 29 号

特别号～第1分册～

1984.1

火 花

第 29 号 1984, 1

特別号～第 1 分冊～

共産主義者同盟 (火花)



われわれの綱領について

ここに、五分冊にわけて刊行するのは、われわれの綱領(草案)の、とくに原則的部分にたいする解説といふべきものである。綱領(草案)のとくに党派闘争上の特徴は、これらの文書によってより一層鮮明になる。

五つの文書はそれぞれ執筆された時期が異なる。それらは『火花』特別号(第十七号)で基本的に明らかにされたわれわれ自身の闘いの歩みと密接不可分であり、その意味で各文書のねらいも異なっており、統一性に欠けるところがある。にもかかわらず、綱領を作成し、われわれのものとする闘いの中で書かれたものであり、その重要な一環であったという共通の性格をもっている。

第一分冊は、原則部分の前半、いわゆる古い資本主義に関する部分の解説である。一九七五年末、綱領から党を確認点として再結集して以降、それまでの田原理論への傾斜を総括しつつ、綱領(草案)原則部分の前半部とともに作成されたものである。「序 なぜ、プロレタリアートの革命か」、「綱領草案の構成について」に、われわれの綱領観・立場はもつとも鮮明に示されている。

「ただもっぱら、ひとりプロレタリアートだけを革命的階級とみなしていること、だから、われわれの任務をもっぱらプロレタリアートの革命をこそ勝利に導き、共産主義社会を建設するための指導という点に集約している」点は、その後の原則部分の後半や、実践的部分を作成していく際の導きの糸となつたのであり、われわれの党活動全体を貫く一本の赤い糸である。

なお、この解説は第四項までの解説までで中断している。この点の補足の意味もふくめて第五分冊がある。われわれがなお田原理論の強い影響下にあつた時期——とはいへ、われわれは、田原理論の欠陥が、資本主義にたいする根底的批判の点(綱領原則的部分前半)に顕著に現れており、そこを結びついてあれこれの未来学的傾向をプロレタリアート独裁—共産主義論領域、あるいは、綱領の実践的部分に強く示している点にあることに気づき、克服せんとしつつあつた。第五分冊文書はその作業の一つでもあつた——に執筆されている。この点で今日からみていくつかの欠陥がある。だが、この文書の意義は、連合赤軍の敗北以降、なだれをうって進行しつつあつた清算主義の台頭に断固として闘かむとしたところにある。清算主義潮流の中心部分であつたいわゆる臨臨派(——プロ独編集委員会)への批判は、今日のその末えいたる赫旗派を射程にとらえているといえる。ただ、後日付した「注四」にあるように、当時のわれわれが、一方で、綱領から党、他方で、世界革命戦争路線」という二元論におちいっていったことから欠陥はまぬがれない。

さて、第二分冊—第四分冊はほぼ同時期に執筆された。綱領から党」と世界革命戦争路線」の二元論を、党活動上発生した組織問題の解決・党内論争の組織化の過程をへて克服し、綱領—戦術—組織をあくまで一つのものとして、党活動全体を転換していった時期である。

第二分冊は、綱領原則的部分後半の解説といふべきものであり、あくまで生きた現実を批判するものとして、

へ帝国主義—現代過渡期世界—批判を貫こうとしたのである。第三分冊はこの作業の一環として、ソ連への再評価をおこなつたものである。これらの文書からもみてとれるように、へ帝国主義—現代過渡期世界—批判の領域では、理論的にも、まだ多くの未整理な部分、未解決な部分をのこしている。だが、これらの領域への接近の角度を基本的に確定したものととして、第二、第三分冊は意義をもっている。

第四分冊は、われわれが、綱領—戦術—組織—分野にわたる党活動の転換をはかつていく際の一つの重要なテコともなつた戦術論争・帝国主義的経済主義批判の一成果である。われわれはこの党内論争によって、世界革命戦争路線」を最終的に決着つけたのであり、同時に、その後刊行される『火花』を貫く政治宣伝暴露の核心を確定したのである。本文書は『火花』の中にかかされている。

今日、階級闘争のつまりがますます進行する中で、共産主義者の党—他でもなくプロレタリアートの党にとって、政治的民主主義をめぐる問題への態度が問われている。この意味からして、本文書のブルジョア民主主義的偏向と帝国主義的経済主義的偏向への批判は、いさした意義をもっている。

以上、かんたんに各文書の性格についてのべてきた。これらの文書を、『火花』を武器とした党活動の一つのテコとして活用されるよう望む。

われわれの綱領について

第一分冊

第二分冊

第三分冊

第四分冊

第五分冊

ソ連の評価について

帝国主義批判と民主主義問題

『プロレタリア独裁』創刊号、その「綱領」批判

われわれの綱領について

第一分冊 目次

序 なぜ、プロレタリアートの革命か? 四

綱領草案の構成について 十七

Ⅰ いわゆる古い資本主義について

はじめに 二二

(一) 第二項の解説 二二

(二) 賃労働—資本関係の核心 二四

(三) ① 二重の意味で自由な労働者、労働力の売り買い 二六

② 資本の生産過程 二六

③ 剰余価値生産の秘密の暴露—労働力と労働、労働の二重性 二六

④ 資本の蓄積過程 二六

⑤ 資本の原始的蓄積について 二六

(四) スターリニズムおよび中共派の経済学「批判」の批判 四四

① はじめに 四四

② スターリニズムの経済学「批判」の批判 四四

(a) 経済学批判の小ブル性—俗流ブルジョア経済学への転落 四四

(b) へ法則万能論—社会主義経済学「批判」 四四

(c) 構造改革派(軟派スターリニズム)発生の理論的根拠について 四四

③ 中共派の経済学「批判」の批判 四四

(五) 第三項の解説 六二

(六) 第四項の解説 七九

(七) 恐慌論についてのもろもろの誤った諸説の批判 九二

【汎例】

- ① — 文中の傍線はすべてわれわれによる
- ② 「」引用文中の「」内はすべてわれわれによる

序 なぜ、プロレタリアートの革命か?

今日における種々の偏向について

草案の逐条的な解説にはいるまえに、草案全体にたいする根本問題について述べておこう。

われわれの草案を一すじ、真紅に貫いているのは、次の思想である。すなわち、ただもっぱら、ひとりプロレタリアートだけを革命的な階級とみなしていること、だからわれわれの任務を、もっぱらプロレタリアートの革命とすること、これである。われわれは決して革命一般を、たとえば大衆の、あるいは人民の革命を問題にしているのではなく、ただ、ひとりプロレタリアートの革命だけを問題にしているのであり、だから、組織的にはプロレタリアートの革命を、すなわち共産主義革命を、最後の最後まで指導しぬく党を建設せんとしている。それ以外の一切の問題は、われわれにとつて、副次的であり、ただ、われわれにとって利用しうる限りにおいてのみ、意義をもっているにすぎない。だがもちろん、われわれは、純粋プロレタリアや、純粋プロレタリア革命などというものが、なにかしら別に存在しているなどと考えているわけではない。マルクスが鋭く指摘したように、「共産主義とは、われわれにとって成就されるべきなんらかの状態、現実がそれへ向けて形成されるべきなんらかの理想ではない」(『ドイツ・イデオロギー』合同新書、P七二)それは「現状を止揚する現実の運動」(同前)のことと他ならない。

だから、問題はかかる一切の「現実の運動」に、「現状を止揚する」方向を刻印すること、すなわち、プロレタリアートの階級性を刻印し、プロレタリアートの革命へと導き、共産主義社会の建設へと導く、その党の指導、その政治基準—組織に關してなのであって、まさに、われわれの言わんとするのは、この党の政治基準—組織に關してなのである。この点につ

第一回代表者会議以前になされた綱領草案の改正について

☆ 第二項「それ故、後者の人々はブルジョアの雇い人となって……」

「それ故、後者の人々は、常時あるいは定期的に、ブルジョアの雇い人となって……」

プロレタリアを一方で古代奴隷、農奴等から区別し、他方でいわゆる学生アルバイトのような偶然的な一時的な労働力の売り買いと区別するため。プロレタリアは自己の労働力を、それだけを(自分の体ではなく)不斷に、しかも切り売りする。これが特質。これをはっきりと示さねばならない。(P二六参照)

☆ 第三項 第三項の最後につづけて次の語句を付加する。
「この事態は、生きた労働にたいする資本の側からの需要の相対的減少を導き、かくて賃労働の資本のもとへの隷属はより一層強まる」

第三項は、賃労働の資本のもとへの隷属の内包的および外延的強化・拡大・深化について述べられている。この点で、現行のままでは、後者の側面が述べられないままになってしまう。単に階級分化の拡大・進行が述べられるにとどまり、そのプロレタリアートにとっての意義がふれられない。
☆ 第四項①「ブルジョア諸国内での労働の社会的生産力の発展、生きた労働にたいする資本の側からの需要の相対的減少、そして……」

「ブルジョア諸国内での右のような事態と、そして……」

「……鋭い恐慌をもたらす。その後には産業沈滞期がつづく。しかも恐慌の規模はますます拡大していく」

恐慌とその後につづく産業沈滞期の時期全体を通じて階級分化のより一層の進行。そして、プロレタリアートの相対的もしくは絶対的窮乏化はすすむ。

いは、もう少しくわしく述べる必要がある。つまり、われわれの革命—共産主義にたいする基本思想から、草案においては、まずはじめに、プロレタリアートだけを、もっぱら別にとりだし、規定しているわけだが、このことの革命的意義、階級性、だから党派性とはなにか、この点についてである。

われわれは、マルクス、レーニンの党にたいする思想、プロレタリアートの革命にたいする思想を継承している。かつて、レーニンは「いま国際社会民主主義派は、思想上の動揺を経験している。これまで、マルクスとエンゲルスの学説は、革命的理論の堅固な基礎とみなされてきたが、いまや、この学説は不十分で古くさくなつたという声が、あらゆる方面からとあげられている」(「われわれの綱領」『党綱領問題』—国民文庫版P三四)といったが、いま、われわれのこの現代においては、「思想上の動揺」は、レーニンの時代よりもはるかに広く、深刻である。この「動揺」を大いに深め、広げているのが、第一にもろもろのスターリニストたちであり、第二に、中国派、第三世界派といわれるのが現代の「革命家」たちである。だが、われわれは、この「思想上の動揺」にたいし、レーニンと同じように「完全にマルクスの理論の基盤に立っている」(同前)とともに、さらにそのような明白で厳格なレーニン自身の理論の基盤に立っている。レーニンは、このような態度を、「資本論」をはじめ、マルクス・エンゲルスの学説を十全に消化し、それをなによりもプロレタリアートの前衛党の組織思想として結実させたのであった。それを、いま、われわれは、とりわけ、レーニンの初期諸著作のうち、たとえば、市場問題に關する諸著作、「ロシアにおける資本主義の発達」『人民の友』とはなにか、一九〇三年綱領作成過程の一連の著作、メモ等、「何からはじめべきか」『何をなすべきか』『同志に与える手紙』等々のうちに見ることができ、これらの諸著作の中で、レーニンが一貫して強調していることは、たとえば次のようなことばに現れている、もっぱらプロレタリアートだけを真に革命的な階級とみなし、そのプロレタリアートの一切の闘争を指導し、プロレタリア革命を最後までやりぬくように導く党建設の問題である。

「それ(マルクスの理論)は、革命的社會主義党の真実の任務を明らかにした。その任務とは、社会の改造計画を編みだすことでも、資本家やその取まきどもに労働者の状態の改善を説くことでも、陰謀を

たからむこともなく、プロレタリアートの階級闘争を組織し、そして、プロレタリアートによる政治権力の獲得と社会主義社会の組織とを終極目標とするこの闘争を指導することである」(「われわれの綱領」同前P三五)

「せひとはじめに自分をすべてのものから切り、ひとり、ただ、もっぱらプロレタリアートだけをべつに分離し、そのあとではじめて、こう声明することが必要である——プロレタリアートはすべての人を解放するであろう、そしてすべての人々に呼びかけ、すべての人々をまねく、と」(「小委員会の綱領草案にたいする補足意見」同前P一四五)

ここにいわれていることは、あまりにも明白であつて、なんの疑問も生じさせないようみえる。ところが、わが現代の「革命家」たちは、このプロレタリアートの革命性、プロレタリアートの革命、その終極目標である共産主義社会の建設というものを、なにかしらもはや歴史によつて論破された、古くさくなくなったものとみなしているのである。彼らは、プロレタリアートを口にするとしても、大変謙虚につつしみ深くそうするか、あるいは「プロレタリア人民」とかで、こっそりと逃げの姿勢をみせるか、あるいはまた、公然と開きなおつて、「プロレタリアート」を一切放棄して、「人民」だとか、「窮民」だとかをもちだしてくるからである。彼らは、こそつていう。「プロレタリアは、もはやダメになつてしまつた」と。

このような現代風の「革命家」たちが、プロレタリアートを一つの問題目にし、あるいはすっかりなげすめてしまつて「人民」などとかわりにもちだしているのには、しかし、次のようなおおよそ二つの事実があつた。

第一に、プロレタリア労働者像が、著しく変貌し、それが人口の完全な圧倒的多数となり、その社会上の意義が、決定的なものになつたにもかかわらず、帝国主義の寄生、腐朽過程の深化に照応し、プロレタリア労働者像が深刻な分裂が生じ、その分裂にまた照応して、種々様々の党派が乱立していること(念のため、どこかの「良心的」な御人のためにいいさえれば、この逆ではありません。党派がもっぱらそのエゴで、分裂し乱立しているのではないのです。本質的には)、したがつて、プロレタリアなる概念が分裂し、革命的階級ということが、完全に見えなくなつて、そして第二に、このことと対照的に、中国革命、ベトナム革命をはじめとするいわゆる第三世界の革命運動において、土地をもたな

共産主義とは、「現状を止揚する現実の運動」のことであつた。だが、この「現実を止揚する」とはなになのか、それは、決して、権力奪取にとどまるものではない。権力奪取という場合には、ブルジョア国家をこなごなに打ち砕くこと、プロレタリアートの独裁をうちたてることであつた。だが、一体何故に? 「政治権力の獲得は、プロレタリアートの偉大な義務となつてゐる」(「国際労働者協会一般規約」)から。そうだ、まさしく義務ではあつても目的ではなかつた。では目的は? 「労働者階級の経済的解放が大目的である」(同前)。「経済的解放」? そう、「共産主義がこれまでのすべての運動から区別される点は、それが、これまでのすべての生産と交通との諸関係の基礎をくつがえし、はじめて自覚的に、すべての自然成長的諸前提を、これまでの人間たちの手になるものとみ、それらの自然成長性をはぎとつて、結合した諸個人の力に服せしめることにある。それゆゑ、共産主義の制度は、本質的に経済的であり、これらの結合の諸条件の物質的創出である」(「ドイツ・イデオロギー」合同新書、P一四四)これは、すなわち、「窮迫と外的合目的性によつて規定された労働」(「資本論」第三卷P八七三)を完全に一掃し、「労働がたんに生活の手段たるのみならず、労働そのものを「生活欲求」と(「ゴータ綱領批判」国民文庫版、P四五)すること、これである。プロレタリアートの革命、共産主義革命とは、まさしく、このことをめざす「現実の運動」なのであつた。わが「革命家」たちは、この前立ちどまり、ここまですすもうとしない。ここまですすもうとしない。実践しようとしなさい。彼らは、この点で日和見主義におちいり、プロレタリアートの革命を、もつとなにか別のものにかえようと望んでゐる。人民とかなにかで、この点をゴマかし、ただただ、眼前のことからにかがらずに、「義務」と「目的」とをとり違へてゐる。

プロレタリアートが、ただ、ひとり革命的である、というのは、この目的に向けて、ただ、ひとり真に首尾一貫して革命的にふるまひうるということであつた。つまり、ただただに、ブルジョア国家権力の打倒の担い手としてではなく、それ以上に、なによりも、共産主義革命の唯一の担い手であるということ、このことこそプロレタリアートの真の革命性があるのである。

ここで、われわれは、わが「革命家」たちがどうして義務を目的ととり違へることになつたのか、ということについて、もう一歩すすめた考察を

い農民たちの、革命の表舞台への圧倒的な登場があること。ここからして、現代社会においては、おおよそ二つの政治的潮流が、いわゆる左翼陣営に登場する。その右をなす一潮流は、プロレタリアートを水まじし、勤労大衆一般、国民一般に革命主体をふくらませ、「広範な民主勢力の統一」「民主連合政府」「プロレタリア独裁」はもはや、現実にあわなくなつた」等ワメキちらしているあのスターリニズム社会帝国主義者の一派である。そして、いま一つ左翼をなすのは、なんとか先のスターリニズム社会帝国主義者にたいして、革命性を維持しようとして、プロレタリアートを人民にやらせて、やりくりしている種々雑多な第三世界派の人々、つまり、現代のわが「革命家」たちである。

こうして、いまや、プロレタリアートの概念の再検討や、放棄がさかんに吹聴され、人民や国民が叫ばれ、下層プロレがアジられ、様々の想ひいが、乱れに乱れているわけである。これらの人々の、その面貌は、千差万別であろうと、しかし、その本質は同じである。マルクス、エンゲルス、レーニンがその活動の基礎としたプロレタリアートの革命ということを否定したがつてゐること、プロレタリアートを口にするとしても、それはイヤイヤながら、なにか別のものをもとめてゐること、この点では、まさしく同じ穴のムジナである。

だが、これらの人たちが、どれほど真剣で、また誠実であつたとしても、彼らによつてたつ「現実」は、むくいられることのない「現実」であつた。現実には現実でもいろいろあるというものだ。人が、一体どのような思想、イデオロギーによつて現実をみるかで、現実はその姿をかえる。

結局、彼らは、革命を、共産主義革命を放棄したがつてゐるのだ。エッ、なんだつて、革命を放棄したがつてゐる、だつて? あの右翼のスターリニスト社会帝国主義者どもは、なるほどそうに違ひないが、あのベトナムや中国の革命に、真剣に学ぼうとしてゐる左派の人々が、革命を放棄したがつてゐる?! だが「想ひ」は別として、事実は厳格である。つまり、こうなのだ。なるほど彼らわが「革命家」たちは、革命をもとめてゐる。誠心誠意、革命につくそうとはしてゐる。だがしかし、彼らの想ひをよせてゐる「革命」とは、とどのつまり、権力奪取だけせばめられたものに他ならないのである。こうして、結果として、共産主義革命を否定し、プロレタリアートの革命を否定し、一歩一歩と革命そのものを否定せんとしているのである。くわしく述べよう。

加えることができる。

わが「革命家」たちは、革命的であることとの根拠を、ただただに資本主義—帝国主義によつてもつとも搾取され、収奪され、抑圧されてゐる、という点にとめてゐる、ということである。だが、このような見方は、木を見て森を見ない類である。レーニンは次のように述べてゐる。

「労働者を絶対主義との闘争に立ちあがらせることが必要であるといふ結論へは、二つの道によつて到達することができる。一つは、労働者を社会主義体制のための唯一の戦士とみる道である。このときには、政治的自由を、労働者の闘争を容易にする一条件とみることになる。これが社会民主主義者の見方である。もう一つは、労働者を、現代の制度にもつともくらしめられ、もはやなにか一つしなうものもなく、絶対主義に反対してもつとも断固として行動することのできる人間としてだけ、取りあつかうことである。だが、これは、労働者を、ブルジョア急進主義者の後尾についてあるかせることを、意味するであろう。そして、このブルジョア急進主義者は、絶対主義にたいする全「人民」の共同一致の背後に、ブルジョアとプロレタリアートとの敵対を見ようとしなないのである」(「人民の友とはなにか」国民文庫版、P二三三)

ここでレーニンのいっていることは、あまりにも明白ではなからうか。労働者を、社会民主主義の立場からみるか、それともブルジョア急進主義の立場からみるか、について、その相異が、みごとに描きだされてゐる。わが「革命家」たちは、まさにこの「ブルジョア急進主義者」の見方におちいつてゐるわけだ。

ただただに、帝国主義にもつとも苦しめられ、抑圧され、弾圧されてゐるという見方だけからして、真に革命的かどうかは、言ひえないのである。だが、ここで、わが「革命家」たちは、こういつて窮地をぬけだそうとするかも知れない。「中国はどうなんだ? ベトナムや朝鮮北部は? 彼らは農民に依拠し、りっぱに革命をやつて、社会主義建設をすすめてゐる」。しかし、このことも、いつこうわが「革命家」たちの援護をつとめるわけにはいかない。われわれは、彼らにこう尋ねかえそう。「では一体、なぜ、中国は、あれほど真剣に、さかんに、ブルジョアの残滓の問題についてとりくんでゐるのか? なぜ、人民や、農民や、農民ではなく、プロレタリアートの独裁の強化を叫び、実践してゐるのか?」と。だから、レ

1 ニンは、この点について次のようにいつていた。すこし長いが引用しよう。

「わが国の革命の運命、国際プロレタリア軍のわが部隊の運命がどうなるにせよ、また革命の今後の屈折がどうであるにせよ、この戦争に変わって、もっとも先進的な国々を飢餓や、零落や、野蠻化に陥れた帝国主義諸国の客観的な地位は、いづれにしても見込みのないものである。この点で、いまから三〇年まえの一八八七年に、フリードリヒ・エンゲルスがヨーロッパ戦争のありうべき見通しを評価して言ったことを、述べなければならぬ。彼は、ヨーロッパでは王冠が幾ダースも道ばたにころがるだろうが、だれひとりそれをひろう者もないだろう、と述べている。彼はまた、信じられないほどの崩壊がヨーロッパ諸国の運命になるであろうし、ヨーロッパ戦争の惨禍の最後の結果はたゞ一つしかありえない、と言っている。彼はこう言っている。『労働者階級が勝利するか、それとも、この勝利を可能また必要にする諸条件がつくりだされるか、どちらかである』と。この問題についてはエンゲルスは、異状に正確に、また慎重に述べている。マルクス主義を歪曲して、経済的崩壊を基盤として社会主義はありえないという、遅ればせのえせ理屈をまくしたてて連中とは違って、エンゲルスは、すべての戦争は、あらゆる先進社会においてさえ、解体や、さらに、流血におぼれさせられる大衆の野蠻化、苦痛、困苦を生み出すにはとどまらないということ、しかし、その結果として社会主義がかならず勝利するとうけあうことはできないということ、みごとに理解していた。彼はこう言っている。『労働者階級が勝利するか、それとも、この勝利を可能また必要にする諸条件がつくりだされるか、どちらか』であろう、と。つまり、このばあいは文化と生産手段が大規模に破壊されるという条件のもとで、なお幾多の苦しい過渡段階がありうるが、結局は、勤労大衆の前衛である労働者大衆が台頭し社会主義社会をつくりだすために権力の掌握にむかってすすむ結果としかならぬ、といふのである。というのは、どれほど文化が破壊されようと、この文化を歴史生活から抹殺することはできないからである。それを復興するのは困難であるかもしれないが、どんなに破壊されようと、この文化が完全に消滅するまではけつてならぬからである。この文化のある部分、ある物質的残存物は除去できるものではない。

以上、われわれの言ってきたことを総括していえば次のようになる。ただ、ひとり、プロレタリアートだけが真に革命的であり、共産主義革命を最後の最後までやりぬき、人類史の歴史から後史への転換というもつとも偉大な事業をやりとげるといふ、まさにそのことを、われわれは、党の政治基準、根本基準にしていること、だから、かかる内実をもつ党をこそ、創建せんとしていること。まさしく党の根本基準・内実として、プロレタリアートの真の革命性を把握すること、これであつた。

ここからして、われわれの党の、その党性、党派性は、第一に、プロレタリアートの革命性、階級性を右からしないものにし、勤労大衆一般や果ては、国民一般に溶解させ、プロレタリアートの独裁を放棄し、革命を、共産主義をきれいさっぱり清算したスターリニスト社会帝国主義者どもへの鋭い武器であるとともに、第二に、誠心誠意、革命性をなんとか維持し、「現状を止揚」しようとしているが、近視眼におちいり、義務と目的とをとり違え、プロレタリアートの革命性についてしっかりと把握せず、人民とかなんだとかに思いいれをするにいたっているわが「革命」家たちへの批判の武器である。

ここでわれわれは、レーニンが、次のように言つたことを思いおこしてみることができる。

「われわれが必ず、批判家ブルジョア・ブルジョア・ベードモスチヤ・クルスコエ・ボガートストボグの左派諸氏ブルジョア・エル派の連合力を相手とする避けられない闘争をまえにひかえていればこそ、われわれはプロレタリアートの階級闘争を、勤労・被搾取大衆の闘争（はたして闘争だらうか？）から分解しなければならぬのである」

「マルクス批判家が、社会民主主義者は、農民への敵意」をいだいて、いるといつて批判しており、エス・エル派が、階級闘争の概念を、すべての勤労・被搾取者の闘争」といふ概念でおきかえることが必要だとさげんでいる……このロシアでこそ、われわれは、はじめに、ひとりプロレタリアートだけの階級闘争だけをもちもするべく規定すること、これらのやくざ連中の全体から仕切り、そのあとではじめてこう声明しなければならぬのである——われわれはすべての人に呼びかける、そしてすべての人を受け入れ、すべてのことをおこなひ、すべての人におしひろげるであろう、と。」（「小委員会の綱領草案に

く、ただその復興が困難なだけであるう」）（ロシア共産党第七回大会一九一八年三月）における「綱領の改正と党名の変更についての報告」——『党綱領問題二』、P五二六（八）

「社会主義をつくりだすためには、一定の文化水準（もつとも、このほかならぬ一定の文化水準）がどのようなものなのかはだれにもいえない。それは西ヨーロッパ諸国のそれぞれでちがっているからである）が必要としたら、なせまずこの一定の水準のための前提を革命的方法で獲得することからはじめて、つぎに労働力とソビエト制度とにもついで、他の諸国民に追いつくように前進してはいけぬのだらうか？」（「われわれの革命について」一九二三年口述——『カー

ル・マルクス』岩波文庫版、P二八〇（一））

レーニンは、プロレタリアートの革命について、まさに「異状に正確に、また慎重に述べている」。レーニンは、一方で、マルクス「批判」家——第二インター派（そして今日では、あの悪名高い構造改革派や、マルシェ、ベルリッゲル、宮本といつた輩が、ものみごとにそれを継承している）を批判して、どのように経済的崩壊が著しくとも、どのように、文化や、生産手段の破壊が大規模であつたにせよ、社会主義（共産主義）が、その基盤のうえにつくりだされるべき文化、たゞ歴史的に資本主義が、それだけが生みだしてきた文化の物的残存物は、かならず、存在し、そうである以上、この文化を担い、再興し、社会主義—共産主義をそのうえにきづきあける唯一の主体であるプロレタリアートが、おそかれはやかれかならず歴史の前面に台頭し、勝利へ向けてつきすすんでいくであろう、といつて

るのであるし、「労働者階級の解放は、労働者階級自身によって、たかいたとられなければならないこと」が把握されるのであり、共産主義革命の終極目標に向けた党の首尾一貫した指導が可能になるのである。

このように考へてはじめて、プロレタリアートの真の革命性が理解しうるのであるし、「労働者階級の解放は、労働者階級自身によって、たかいたとられなければならないこと」が把握されるのであり、共産主義革命の終極目標に向けた党の首尾一貫した指導が可能になるのである。

たいする補足意見——前出、P一四五（六）

あの根っからの右翼主義者、排外主義者、社会帝国主義者どもは、その打倒、粉砕のみ心がけるものだとしても、われわれが、必ず、中国派左派諸氏ブルジョアもろもろの第三世界派の連合力を相手とする避けられない闘争をまえにひかえていなければこそ、われわれは、プロレタリアートの階級闘争を、人民一般や第三世界の被抑圧人民の闘争から分解しなければならぬのである。

以上述べてきたように、われわれが、たゞ、ひとりプロレタリアートだけを真に革命的な階級とみなし、それを基礎とする党を建設するのだといふことを、鋭く規定し、いまあるすべての党派から仕切るため、草案は、たゞ、はじめに、プロレタリアートだけに述べて述べるというだけでなく、資本制生産の、ブルジョア社会のその発展によつてなにか結果として、プロレタリアにこうむつてくるのかについて、すなわち、たゞ、もつぱらプロレタリアにこつての意義を軸に述べている。

このように、資本主義の発展を、そのまま述べるのではなく（資本の運動としてだけ述べるのではなく）、なによりも、そのことが一体プロレタリアにとつて、いかなる意義をもつのか、プロレタリアはそのことによつてどうなるのかを、もつぱら中心に述べることに、このことによつてこそ綱領は、綱領として成りたつのである。このようにしてはじめて綱領は、なにかしらの経済学の教科書や、中学生やなにかの説教書といったものではなく、闘う党のプログラム、たゞプロレタリアートだけの前衛である党のプログラムになりうるのであり、その綱領をもつて、革命的階級の党として、世界の資本主義—帝国主義への宣戦布告となりうるのである。

(二)

以上われわれが述べてきたところから次のようなとんでもない誤解がうまれるかもしれない。つまり、われわれの主張はかのトロツキズム的純プロ主義への先祖帰りでないかということ、すなわち理念としてのプロレタリア論への純化に他ならないのではないかということ、これである。このような誤解がいつたん生じるや、その理の当然として、つまり、理念の純化と現実からの剣離と現実と現場への無批判的溶解、ベッタリズムとなつて、さらにとんでもない誤解が生じる。権力奪取とその後とを恣意的に

分離し、だからプロレタリアートの革命の「義務」と「目的」を機械的に分離し、結局のところ国家にたいするプチ・ブルジョア的な日和見主義におちいり、構造改革派の主張をわれわれのものの中から読みとろうというものである。

だが、このような誤解——それは従来根強く現に存在していた（いる）考え方だが——の発生の根拠を批判するのがわれわれの仕事だ。かかるトロツキズムの純プロ論||理念化されたプロレタリア論の純化と、一方におけるスターリニズムの現場ベッターリズム||定在プロレタリア論（現にある賃金労働者を、より厳密にいえば労働組合員を、そのままにプロレタリアとしてしまう）とは実に表裏一体の関係にあるのであり、われわれはかかるインポテンツな相互反発||相互依存を批判せんとしているのだ。

このトロースタとの、純プロ||理念プロ||定在プロとの二極分解、相互反発||相互依存の枠内では、絶対に次のことが（それこそプロレタリアートの革命の全中心でありすべてである）閉却される。

第一に、プロレタリアートの前衛党の党形成、党組織化ということ、第二に、第一のこの基礎をあたる資本主義への根本的批判。

つまり、スタートロ的図式の内部においては、決して党形成が問題にならず、党、党と叫ばれながらも、結局階級形成一元論におちいること、だから理論的にはますます階級意識論の沼地の深みへとはまっていくこと。現実の組織実体としては、だから反体制的サークル、結社、団体に終ること、そしてこのことの基礎として、資本主義をより一層深く批判することなく、プチ・ブルジョアの反体制的告発に終ること、「市民社会の解剖を経済学に求」めることなく、情念や、憤激によってなそうとすること、まさしくこのことである。以下この二点について述べていくことで、われわれの主張への誤解、その根拠を一掃しておく。

階級とはなにか、ということについて、レーニンが次のように簡潔な定義をあてた。

「階級と呼ばれるものは、歴史的に規定された社会的生産体制の中で占めるその地位が、生産手段にたいするその関係（その大部分は法律によって確認され、成文化されている）が、社会的労働組織の中でその役割がそれ故に、自分の意のままにできる社会的富の分けまえて受ける方法と分けまえての大きさが、相異なる人々の集団である。階級とは、一定の社会経済制度の中に占める地位の違いによって、その

たといえば『偉大な創意』においても、先の引用句は、プロレタリアート独裁による階級の廃絶という一つの階級闘争からして述べられたものであつて、ただ一般的に、いわば社会学的に概念規定したもので決してなかつたのである。

では、階級闘争からして、階級をとらえていくと、どうなるか、まず、階級闘争ということについて、述べておこう。レーニンは、この階級闘争ということについて、自由主義的経済主義的考えを批判して、もののみごとくに次のように述べた。

「階級闘争はすべて政治闘争である。自由主義的の考えの奴隷である日和見主義者達は、マルクスのこの深遠なことを、誤まって理解し、それをねじ曲げようとしたことを、我々は知っている。……経済主義者達は、階級間のどんな衝突でも、それだけで政治的な闘争だと信じていた。だから彼らは、政治目的のために、もつと高度な、もつと発展した、全国的規模の階級闘争を見ようとしなくて、一ループリのため五ペイカの闘争を、階級闘争とみなしていた。」

「階級闘争は、それが政治の分野をとらえるときはじめてほんとうの、首尾一貫した、発展したものとなるというだけでは十分ではない。政治的にも、些末な部分的なものだけに過ぎることもできれば、いっそう深くつきすすみ、根本的なものにまで達することもできる。マルクス主義は、階級闘争が、単に政治をとらえることだけでなく、政治においてもつとも本質的なもの、すなわち国家権力の構造をとりあげるばあいには、はじめて階級闘争を完全に発達した、全国的な階級闘争とみなす」（『階級闘争の自由主義的概念とマルクス主義的概念について』の覚え書）L全第十九巻、P一一三）

階級闘争が、ただ国家権力の構造をとらえるときではなくて、ほんとうに、階級闘争といふものとなる、というこのレーニンの深遠なことを、われわれはよく考えてみる必要がある。このことは、とどのつまり、ただ国家との関係の中でこそ階級概念が、先のレーニンの規定として確定されうる、階級が階級たりうる、ということを示している。つまり、ここから階級形成という問題が提起されるのである。だから、結局こういふことになる。階級といふことは、ただそれを、静的な、固定的な、したがって社会的あるいは非政治的にだけ、とりあげることはできず、なによりも、運動として、階級闘争として、だから、階級形成といふことにおいて

うちの一方が、他人の労働をわがものとするような、そのような人々の集団のことである」（『偉大な創意』L全第二九巻、P四二五）

「階級とは、なによりもまず、社会的な生産機構のなかでの地位を異にするところの、また、ひとつのグループが他のグループの労働を自分のものにするところの、また、ひとつの点に相異をもつところの、人々のグループ」（『不正確ないかただが』）（『プーリッソ、過渡期経済論』評注）現代思潮社版、P一一三）

レーニンのかかる階級概念の規定は、スターリンばりの「生手手段にたいするその関係」だけから階級をとらえていく規定と、きわめてあざやかな対照を示している。このようなレーニンの概念の把握によって、はじめに、階級全般の廃絶について深く理解し、プロレタリアートの独裁の任務をさだめるのであるが、いま、ここでは、それについてはおいておいて、次の点をとりあげよう。すなわち、階級概念を、レーニンが規定したように把握しようするためには、なにが必要なのか、という点である。どういふことか。

レーニンの先の規定を、ただその字面だけを見てみれば、それはもつぱらいわゆる下部構造から分析し、指定したようにみえるかもしれない。「社会的生産体制のなか」での位置、「生産手段にたいする」関係、「社会的労働組織の中の」役割——こういふことの分析は、ただもつぱら、あれこれの下部構造分析から、最後までなしうるようみえる。

だが、一体、そうなのか。すこし深く考えてみれば、それは決して可能でないことがわかる。いま、われわれが規定しようとしているのは、階級といふことなのである。いま、諸階級の相違、区分、連関がまさしく問題になつてくるからである。そのような違い、区分のさまざまな現れをとらえ、分析しなければならぬ、といふことである。そのことは、一つの静的な対象を想定しえない。対象は動くものとして、すなわち、階級闘争といふこととして、あらわれている。だから、つまり、階級闘争といふことからえかえかねばならぬ、といふことなのである。

だから、以上述べたところから、問題を逆転させねばならない。階級概念の規定||階級として考えていかねばならない。まさしく、動くもの、運動するもの、階級闘争といふことからして、はじめて、階級全般をレーニンの先の規定のようにとらえることができるのである。ただ、そのようにはいなく、かかる規定はなされえ、また意義をもつのである。

とらえるばあいにだけ、十全にとらえられるといふこと、これである。われわれにとつては、階級を、学者風に、教科書風に把握することは決して問題ではない。もちろん、そういうことも可能ではあるかもしれないが、それはわれわれの仕事ではない。やりたい人はどうぞ御自由に。われわれにとつて、階級といふことが問題になるのは、ただもつぱら、階級形成という観点からのみ、問題なのである。だが、このようにいふと、人は、われわれが、階級を、なにか狭い、部分的な枠の内におしこめていてと考えるかもしれないが、実は、決してそうではなく、まったく逆なのである。それこそいま流行の「フィールド・ワーク」にしたがって、階級概念を規定しようとするばあいは、膨大な何巻もの書物を書くことはできようが、階級といふことは、一向にはつきりしない、死んだ抽象のまぜものに終るのがオチなのである。

さて、それは良いとして、階級を、階級形成として把握せねばならないといふことは、一体なにを意味しているか。われわれは、ここでようやく問題の核心にふれることができる。

われわれは、いままで、まわり道をしながら、くどくどと、述べたてきたわけであるが、そのとき、われわれは、注意深く、一つの問題を一方では浮かびあがらせるようにしながら、それを提起しないできた。それは、すなわち、「とらえる」とか、「把握する」とか、述べてきた際のその主体とはなにか、ということである。

階級といふことを、まさしく、階級形成といふことからして、レーニンのようにとらえ、かくて、形成過程を、一つの運動、階級闘争として、「国家権力の構造をとらえる」ものにならぬ、断然に高めあげていくその主体、これである。言うまでもなく、主体とは、党であり、階級形成は、党形成としてとらえられる。そう、階級、階級闘争、階級形成、プロレタリアート、プロレタリアートの階級闘争といふことを、決して、一般的に、学者風に、教科書風にあつかってはならない。ただもつぱら、党||党形成にそれら一切をにつめ、集中するようしなければならぬ。

党にとつての「プロレタリアート」の問題はこのようにとらえられねばならない。一般的に、なにをしていて、階級をとらえることではない。プロレタリアートをとらえることではない。党に組織し、党の周囲に集結させ、共産主義革命を最後の最後までやりぬくように一切のプロレタリアートの闘争

(三)

われわれは、レーニンに学ぶことによって、プロレタリアートを、プロレタリアートの階級闘争を党形成においてつかまねばならぬということを確認した。では、レーニンは、この党形成としてプロレタリアートをつかむということ、いかなる基盤のうえにおこなったか。ここで先の第二の問題にはいる。

それは、すでに(一)で述べた通り、「完全にマルクスの理論の基盤に立つ」ことによってである。その基盤は、彼の初期諸著作として結実していた。つまり、レーニンは、マルクス・エンゲルスに深く学ぶことによって、資本主義への、資本と賃労働との関係への根本的批判をわがものとしていたということである。賃労働—資本関係の根本的批判(経済学批判)、これがその基盤である。

プロレタリアートとはなにか、といった問いそのものは、それ自体としては意味をもちえない。それは一方で、経済学批判(資本—賃労働関係の根本的批判)、つまりは賃労働者の地位の解明(経済的な、そしてそれゆえに政治的、文化的な等)と、その地位からして彼がなにを感じ、考えざるをえなく、余儀なくされているか、を明らかにすること、(このことはいわゆる古い資本主義の時代だけに妥当するものでは決してない。帝国主義の、また現代過渡期世界の内でもそうである)、そして一方、この批判を武器として、党形成においてプロレタリアートをつかむ(組織化する、党活動)ということ、この実践にどうかかわられねばならない。これ以外にない。われわれはますます深くこの社会を、資本主義社会を批判していかなければならぬ。経済学批判がますます鋭くかかれていかなければならぬ。そしてこのことを基礎として、このことのみ基盤を置いて、ますます現実的に党形成がなされ、単に一般的にプロレタリアートの存在分析、階級階層分析をおこなうことは無意味である。ただ一般的に階級意識を云々することは無意味である。この党の二重の作業からはなれて種々の問いを、新たな「発見」を、新たな論を提起するのは一切無意味である。なぜ、階級意識論な

を指導すること、このことが問題なのである。だからこそわれわれは、(一)において次のように述べておいた。「だから問題はかかる一切の、現実の運動」に、現状を止揚する方向を刻印すること、すなわち、プロレタリアートの階級性を刻印し、プロレタリアートの革命へと導き、その党の指導、その政治基準—組織に関してなのであって、まさに、われわれの言わんとするのは、この党の政治基準—組織に関してなのである」と。ここまで述べれば、われわれが、プロレタリアートだけが真に革命的である」ということの内容もよく理解されよう。われわれは、プロレタリアートを、なにか、静的な、フィールド・ワークのにとりあつかって、そこに革命性を発見(?!?)しているのでは断じてないのであって、われわれは、プロレタリアートだけを、もっぱら、別にとりだし、それを鋭く規定することによって、共産主義革命を最後の最後まで指導しうる党建設ということにおいて述べているわけである。まさに、このような党建設—党形成の問題として、プロレタリアートの革命性をとらえるからこそ、現実の、生きた、労働者階級の状態を、生き生きと具体的に分析しうるのである。

このことを、別の角度からみてみよう。プロレタリアートの階級闘争が、真に、階級闘争になること、「国家権力の構造をとらえる」ということは、国家にたいして、プロレタリアート一般が対するのでは決してなくて、「国家権力の構造をとらえる」ように党が、組織すること、まさに、党によって組織されたプロレタリアートが、国家に對峙するということである。このように、プロレタリアートの革命性を、党形成においてとらえてはじめて、国家にたいする首尾一貫した革命的な態度をとることができるのである。ブルジョア国家権力を粉碎・打倒し、さらに、すべての民族国家を廃絶し、共産主義社会を射程に入れて、階級、階級差異全般を根こそぎにする階級闘争を、プロレタリアートの独裁下での階級闘争として、組織し、指導し、かくて、国家全般を死滅へと導くわけである。

以上、マルクスの述べた次のことばでしめくろう。
「有産階級の集会的な力にたいする闘争において、プロレタリアートは、有産階級によってつくられたすべての古い政党に對立する別個の政党に自分を組織することによってのみ、階級として行動することができ。このようにプロレタリアートを一つの政党に組織することには、社会革命とその終極目標たる階級の廃止との勝利を確保するのに

どがいるのか? それをなによりも、中途半端な経済学批判と、それに照応した中途半端な党組織論、プチ・ブルジョアの資本主義告発と、プチ・ブルジョアの反体制的団体・結社に特有の産物ではないのか? もし、人が階級意識とはなにか、と聞くなら、われわれは即座に答えるだろう。「それは党の活動の中に現れており、それ以外ではありえない」と。

このことが多くの凡百の「革命家」たち、イデオログに理解されていない。論としての階級意識論などといったシロモノは、ひっきょう、マルクス学者のメソッドであり、世の凡百の「革命家」たちは、彼らに屈服すること、自分たちのプチ・ブルジョア根性に安らぎをあたえているのだ。なぜ、黒田寛一にとって、プロレタリアの人間の自覚の論理が必要なのか? なぜ藤本進治にとって、主観的生産手段の内的矛盾の発展の論理が必要なのか? 彼らの頭の中で、このもののみごとく理念化されたプロレタリアートが飛びかう一方で、現実の実践においては、なぜ、前者が動労といった組合幹部への出世の論理になるのか? また、なぜ後者が、右はヤマガシズムから左は赤軍派までにうけいられ、彼らにたいし、「諸君は正しい、それでよい、だから前進するな」という現状合理化と反動の論理になるのか? またわれわれは次のように問うこともできる。なぜスターリニズムは、経営細胞論—労働組合員大衆—プロレタリアートというズブズブの現場主義、定在プロレタリア主義なのか? そしてその一方で彼らはなぜ、そのおかれた環境の違いによって、プロレタリアートを「全人民」「勤労大衆」「民主的勤労大衆」といった風に拡散させていかなければならないのか? と。

問題は、われわれにとってすでに解決されている。従来のスターリニズム、反スタ・マルクス主義のいづれにおいても、また、種々のパリエーションをもちながらも、上にわれわれが述べたようなインポテの二元主義の枠内にある。階級形成—党形成論の二元論は、どこのつまり、定在プロレタリアと理念プロレタリアの異なる表裏一体・密着なのであり、だから理論においては無限の階級意識論の深化(?!?)なのである。われわれは次いで、従来のものもろものプロレタリアートの階級闘争把握批判をおこなわねばならない。

(四) 種々のプロレタリアートについての所説への批判(プラン)

(一) スターリニズム

彼らの経済学批判(これについては別にくわしくやる)貧乏人としてのプロレタリアート、不平等なあつかいを受けているものとしてのプロレタリアート、不当なあつかいを受けているものとしてのプロレタリアート

かかるプロレタリアート像、搾取されているものとしてのプロレタリアート 直接的生産過程の中の搾取、この制度としての資本、自己の労働全部にたいして支払いがなされていない

この一方で、史的唯物論—弁証法的唯物論体系、すなわち、客観主義、経済決定主義(タダ物主義) だから、まさしく労働現場にある賃労働者を即時的にプロレタリアートへとつかもうとする。

組織された労働組合員大衆これこそプロレタリアート(一九二六年以降のポリシエビキ化運動、経営細胞論) とところで、スターリニズムとしても、資本打倒、プロレタリアート独裁等を叫ばぬわけではもちろんない。だが、打倒すべき資本とは、プチ・ブルジョア急進主義的ないしプチ・ブルジョア日和見主義的に告発された対象としてのそれであり、かくて、常に組織された現実の組合員大衆に足をすくわれる、ということになる。結局、その時々、所々の組合員大衆のおかれていた状況によって、プロレタリアート像が変化していく。

ソ連の全人民、フランス、イタリア、日本での民主的勤労大衆一般、ポルトガル(一時期)のゴリゴリのプロレタリアート等。

このような現場主義的プロレタリアート把握と対をなして、党としては、せいぜい目的意識としての党、あるいは啓蒙組織としての党、この目的意識(啓蒙すべき内容)は、スターリニズム特有の弁証法的唯物論、史的唯物論によって、革命の道すじとして確定されている(*)。↓道すじをよく見きわめる人々(多くは、というより、中核は知識人・インテリ)の集団としての党。

* 一つの閉じた意識、完成されたそれ、客体・主体の絶対的同一性としてのそれ、無謬性、この党にとって、党員にとっての必要十分条件は、プロレタリアートの立場に立つことと思ふこみ。

へ2) グラムシュー構造改革派

プロレタリアート把握のしかた、構造はスターリニズムと同じ。スターリニのスターリニズムが先進国の文化によってプロボヨにふやかされたもの、そして、それゆえ、アナルコサンジカリズムへと密通したもので、これである。

いまや、古典的労働者像——貧困と不平等の極致としてのそれとそこに立脚したプロレタリアートの「先進的階級意識論（中世的禁欲主義的目的意識論）」の崇高な怒号にかわって、高い文化にみあった知性と、礼儀と市民としてのおつきあい精神があふれてなければならぬ、というわけだ。ヘゲモニー、それはスターリニの粗野で野蛮な「目的意識」が、ふやかせられ、知性があふれさせられた「民主主義的」シロモノだ。ここでもやはり、プロレタリアートの立場が先鋭化させられている。知識人がここでも中核となる、主人公となる。もつと露骨に。職人的な粗野で野蛮な目的意識が、知性豊かで礼儀をわきまえたヘゲモニーに比べてかわられたように、職人根性にあふれた狭益な精神は、いんぎんなる市民たるおつきあい精神（連合権力論、階級・階層の中でのヘゲモニー）に比べてかわられる。プロレタリアートの独裁は、お題目に、そして、さらにはきれいなさっぱりと投げすてられる。スターリニのスターリニズムにおいて、党の目的意識（理念化され、先鋭化されたプロレタリアート像をとまらう）は、現実のプロレタリアートと大きくへだたっている。現実のプロレタリアートはあきらかに啓蒙されるべき無知蒙昧なる大衆にすぎなかった。「思想は現実に迫れ」と叫ばれていたのだ。

だが、資本主義の発達、プロレタリア大衆の文化水準・知的水準の著しい向上、という帝国主義—現代過渡期世界に広汎にみられる現象のもとでは、かの先鋭的プロレタリアートは、現実のプロレタリアートにそのままダブらされずにはいない。なんと、現実が思想に迫ったというわけだ。思想が現実を、そして現実が思想に迫ったということは、必要かつ十分なる条件がそろったということだ。なんの？ 革命の？ いやいや、現代過渡期世界のもつとも強力な反革命的支柱としての、である。スターリニズムはここで一つの完結した体系をもつていたつた。

かくあいなれば、とめどもない「現実」への溶解がはじまるのは、理の当然だ。そして、スターリニズムのサンジカリズムへの密通がはじまる。

へ3 トロツキズム

理念としての理念たるプロレタリアート、未だ見はてぬ理想的恋人たる

条件と、資本の生成の諸条件との恣意的な混同、というよりは、資本の運動の論理性を、藤本がかつてにつくりだした歴史性へと編成がえすることによって、彼の「主観的生産手段の内的矛盾の展開の論理」が「革命の哲学」が生れた。しかし、これもまた、階級形成論と名づくる藤本式階級意識論に他ならない。

もちろん、彼があくまで資本の運動の論理性から出発し、それをとらえんとしたことによって、ブントの運動の一つの理論的根拠をあたえ、また革共同両派、解放派等への批判（もちろん限定つき）の武器ともなった。彼は、その独特の編成がえのキーワード「キーコンセプト」として、主観的生産手段を生みだした。それは、一方で、資本制生産の前史たる本源的蓄積過程での「裸一貫の労働者」の生成、つまり、直接的生産者が「自分の労働力の実現に必要ないっさいの物象から引離され」ということと、また一方で、資本の労働過程の中に現れる「一方では対象的な生産手段、つまり客体的な生産条件、他方では、活動する労働能力、合目的に発揮される労働力、主観的な生産条件」との両極的分離・対立とを混同することによって、生みだされたのだ。

だから、彼が、一方で、資本—賃労働の対立関係の全運動、まさしく、その分離・対立が「賃労働と資本との関係で、完全なものにはじめて指定され」、かつ不断に深化・拡大されて指定されつづけていくものを、見ようとする限りにおいて、彼は、資本制生産の歴史的特殊性を一定程度あきらかにせざるをえず、かくて疎外された労働一般に資本主義の特殊性を埋没させてしまっている疎外革命派への批判の武器をあたえたのであり、彼の理論は一定程度の現実の運動の中で革命的意義をもちえたのである。

だが、この藤本に忠実に依拠して、ブント内部から、革マルに屈服した日向を生みだしたことは、不思議ではなかった。結局彼の理論は、階級意識論—革命の解釈学の一つにすぎないからである。

彼は、いま述べてきたような、積極面をかいま見せながらも、資本の現実の運動を、彼の頭の中につくられた一連のなだらかな歴史過程の中に塗りこめてしまふ。彼は、資本と賃労働との対立関係のダイナミズム、「賃労働と資本との関係で完全なものにはじめて指定されるような分離」を分析するのではなく、主観的生産手段なる藤本がかつてにつくりだした概念の内的矛盾の発展の論理に、この矛盾の形而上学の中に逃げこんでしまふ。のっぺらぼうな、私的に、恣意的に思惟された「歴史」の中に。あとは、藤

プロレタリアート、純粹プロレタリアート、この立場からのスターリニズム批判、それゆえ、ひつきょう、反対派的批判、これと照応して、経済学批判の貧しさ（トロツキー選集第一期補巻二をみよ、これについては別に詳述する）。

夢みる諸個人の党、現実的には、行政手段としての党、さてトロツキー自身とその後の第四インターのトロツキズムとは、いちおう区別してやらねばなるまい。まずトロツキーだが、行政対象としてのプロレタリアート、心の内なる理念化されたプロレタリアート、この間をゆれ動くトロツキー、かくて、調停主義者、過渡的綱領主義者としてのトロツキーのおめ見えだ。彼は、首尾一貫して、レーニンとその反対者たちとの調停者たらんとしたレーニン・ポリシエビキとマルトフ等メンシエビキとの、レーニンとカメネフ・ジノビエフらとの、レーニンとブハーリンらとの、レーニンと左翼反対派らとの……この態度こそは、トロツキーのプロレタリアート論の核心である。

このトロツキーにたいし、第四インターのトロツキストは、調停主義、過渡的綱領主義の立場そのものを純化してしまふ。それを目的とすりかえる。かくて、軟派化したスターリニズム—構改派との密通がはじまる。

へ4 日本主体性論とトロツキズムのダンゴ

黒田寛一のプロレタリアの人間の自覚の論理
宇野の労働力商品化論の人間主義的「転倒」(?!)、つまり、宇野の労働力商品化論が、労働力商品化を、資本の自立的運動に比べての一つの根本的な矛盾だとして把握するのにはたいし（原理論の動力たる根本矛盾）、黒田はこれを、人間一般の立場から、つまり、こともあろうに人間さまが、モノに、商品になるのはけしからん、という矛盾としてとらえる。人間主義。ありもしない人間一般の立場からの（要するにブチブルジョア急進主義の立場からの）資本主義告発・弾劾から出発し、このケンカランこと—疎外を、対自的に自覚していく意識の自己運動、これが黒田式階級意識論だ。トロツキーにあつては、未だ少なくとも現実の階級闘争のダイナミズムの中で、理念化され、彼岸化されたプロレタリアートが、ここでは完全に、現実から剝離している。その分だけ、少女趣味的な人間で、満たされているのだ。

へ5 藤本進治

資本の運動における歴史性と論理性との（換言すれば、資本の現実化の諸

本の頭の中でつくられた基準による歴史の解釈だけがのこる。「革命の哲学」『革命の弁証法』『革命闘争の論理』といった書物が、商品市場にだされる。

藤本が、一方において、「自由な労働者」を、また、一方において、資本に包摂された労働過程の中であらわれる「主観的労働条件」を、ゴチャマゼにして、主観的生産手段なる概念を生みおとしたとき、彼は、賃労働—資本関係の中に、その生産過程の中にその全運動の中に矛盾をみるのではなく、その主観的生産手段の中に、いっさいの矛盾の根源を、はらませるといふ意図をもつていたのだ。万物の創造神、万物の運動の根源たる主観的生産手段。こうでなければ、資本制生産の解明を、のっぺらぼうな単なる「歴史性」の中に説明してしまふことはできなかったのだ。これほどに完璧な転倒があるのか。かくて、主観的生産手段の内的矛盾の論理は、主観的生産手段の内容としての社会性と形態としての私的商品所有者との矛盾への転形、そしてその揚棄として、展望される。宇野労働力商品化論の黒田的「読みこみ」への密通が、はらまれる。日向が生みだされる。

【補】藤本は次のようにいっている。少し長いが引用しよう。

「かれら（ブルジョアジー）は、……生産者と生産手段との無媒介的結合を破壊した。そしてそのことによって、物的生産手段と生産者とを完全に分離させた。こうしてかれらは、物的生産手段を他の物的生産手段から解放することによって、この物的なものを一個の独立した人間にかえたけれども、この人間は実質のない主体、すなわち、主観的生産力であった。それは、なにもにも束縛されることのない自由な主体であるが、その主体が主体として行動するための条件をすべて実質的にうばわれている。生産者は物的なものから自由な主体となったが、それとともに、物的生産手段から完全に解放されてしまったのである。そしてこの分離を媒介するものとして、貨幣が、すなわち、資本があらわれる。主観的生産力と物的生産手段との対立は、賃労働と資本との対立、労働という商品と貨幣という商品との対立として、競争と商品交換という形式に媒介されて結合する。」（『革命の哲学』、P 十九—二〇）

「物的生産手段からのへ遊離と結合」ということが、主観的生産手段の本来の内的矛盾であった。この矛盾は、自然成長性の条件のもとでは、巨大な組織的生産力が無力な分散した生産力として、物的生産

手段から遊離するという姿をとるのである。すなわち、この巨大な社会的生産力は、私的な商品所有者の労働力という形態をとらずにいられないのである。遊離と結合という主観的生産力の内的矛盾は、こうして内容の社会性と形態の私的性質となつて外化する。」(同前P二八)

引用された二つの文章は、同一のことが語られている(もともと第一の文章の方が、同じ内容を、資本と賃労働という両極からとらえる視点を形だけでも持っているにたいし、後者は、それが完全になくなつていくという違いがあり、その意味で、後者の方が、より藤本の主張を、純粋にあらわしている)。要するに、主観的生産手段の本来の矛盾と結合が、内容と形態との矛盾へと外化することが語られている。藤本にしたがって、定的にいえば、農民から、貧民(都市流入の)の生成、そこから、そのプロレタリアへの転化を述べている。

ところで、藤本の全論理は、いま引用したところが、 α であり β であることがくずれば、いっさいがくずれる。彼の誤謬は、二重にあらわれている。マルクスは次のように言っている。

「所有の労働からの分離は、この資本と労働との交換の必然的法則として現われる。非資本そのものとして指定された労働は次のようなものである。(1)否定的に把握された非対象化労働(それ自体は対象的であつても、客体的形態では非対象的なものそれ自体)。このようなものとしては、それは、非原料、非労働用具、非原料生産物であり、あらゆる労働手段と労働対象、その全客体的から切りはなされた労働である。これら労働の実質的現実性の契機からの抽象として存在する生きた労働(同様に非価値)、これらの完全な剝離、あらゆる客体的性を欠いた純粋に主体的な労働の存在。絶対的貧困——対象的富の不足としての貧困ではなく、それらからの完全な排除としての貧困——としての労働。あるいはまた、存在している唯一の非価値として、したがつてまた媒介なしに存在する純粋に対象的な使用価値として、この対象性は、人間から切りはなされていない対象性——その直接的肉体的性と一致している対象性のみありうる。その対象性は純粋に直接的であることによつて、同じくまた直接的に非対象性なのである。別のことは、たとえば、個人そのものの直接的定在をはなれて存在しない対象性である。(2)肯定的に把握された非対象化労働、非価値、すなわちみずからに關係づける否定性、それは非対象化の、したがつて非対象的な、

として。否定的に、そして肯定的に把握された非対象化労働とは、マルクスによつて把握された生きた労働の概念に他ならない。一方、藤本のはい、もはや、生きた労働と対象化された労働、商品で表示される労働の二重性といったものは、完全に、分析の対象ではない。それらは後に説明されるべきものではあつても、分析され、概念的に把握されるべきものではない。

さて、かように藤本が、主観的生産手段を指定し、そこに万物の創造主たる「本来の内的矛盾」を付与した以上、彼にとっては、論理を、歴史的に逆にひっくり返して、現代へといたる首尾一貫した体系をつくることだけが、問題になるのだ。現に生きたプロレタリアートを分析し、概念的に把握するのが問題ではなく、プロレタリアートを指定することが、だから、実は、解釈することが、意味付与することが、問題となる。「君は、ここま

で意識が高まった」という階級意識論である。

ところで、この藤本の矛盾の形而上学の始元であるところの「主観的生産手段の本来の内的矛盾」すなわち「遊離と結合」ということをみてみよう。これも、すでにマルクスによつて完全に批判されている。この本来的矛盾なるものは、ひつきよう、賃労働と資本關係の運動總体を分析の彼岸においやることによつてのみ、大げさにかく宣言されたものに他ならぬ。「本来の」とは、藤本にとつてのみ、大げさにかく宣言されたものに他ならぬ。「本来の」とは、ひつきよう、交互に制約しあうもの」に他ならない。マルクスは、一方での「絶対的貧困」また、一方での「富の一般的可能性」ということを、生きた労働の「本来の内的矛盾」だとはいっていない。逆に、それは「すこしもたがい矛盾するものではな」く、むしろ「交互に制約しあうもの」だといっている。それは、この労働が、一方

で「資本の対立物として、その対立的定在として、資本によつて前提される」ともに、他方ではまた資本を前提とする」というものであること、この「労働の本質から出てくるもの」なのである。藤本では、これが、いびつに逆立ちされる。内的矛盾が、資本と賃労働との対立を生むという風に藤本の理論のいっさいが、つぎの始元である主観的生産手段の本来的内的矛盾なるものは、結局、あるがままの賃労働と資本關係、その運動的分析を彼岸化し、主観的生産手段という一つの抽象化された定在を生みだした

すなわち主体的な、労働の存在そのものである。対象としてではなく、活動としての、それ自体価値としてではなく、価値の生きた源泉としての労働。富が対象的に現実性として存在している資本に對立して、行為そのもので確認されるその一般的可能性としての、一般的富。こうして、労働が一方では対象としての絶対的貧困であり、他方では主体として、活動としての富の一般的可能性であるといふことは、すこしもたがい矛盾するものではない。というよりはむしろ、このあらゆる点でたがい矛盾しあつていゝ命題は、交互に制約しあうものであつて、労働が資本の対立物として、その対立的定在として、資本によつて前提されるともに、他方ではまた資本を前提するといふその労働の本質から出てくるものである。」(『経済学批判要綱』大月書店版第二分冊、P一五二—一五六、傍線は引用者)

マルクスは、非常に難解な表現をしているが、ここでいわれていることは、藤本の論理をその根柢から批判している。藤本は、プロレタリアが、その自己の労働力を實現しうる物的諸条件から完全に分離していることに注目しながらも、それを概念的に把握していない。彼は、その分離を、資本と賃労働關係の内部に、その生産過程の内的作用の中に分けいつて、分析するのではなく、その外部に、そこからはなれて、別に、つまり、歴史過程の中に、本源の蓄積過程の中に、彼がかつてにひねりだした物的諸手段から分離され、抽象化された一つの定在としての主観的生産手段の問題にねじまげる。AとBとの分離といふば、AとBを結ぶ關係總体、その運動の總体の中にへ分離が分析され、把握されねばならない。にもかかわらず、藤本のば、AとBとの分離とは、ただ、Bといふ一つの定在の說明概念になつており、だから、その分離は、表面的に、把握された、直観的に見られたものになつてしまつていゝ。

だからマルクスのば、このへ分離を本源の蓄積過程によつて基礎づけられるものとして把握し、かつ、なによりも賃労働と資本との關係で完全なものにはじめて指定されるその運動總体を、したがつてさらに、その再生産を問題にしている。一方、藤本は、この分離を、主観的生産手段という抽象化された定在の說明概念として用いたにすぎず、この定在の中に、資本と賃労働のその後の關係のいっさいがはらまれていゝ、とするのである。だからマルクスは、このへ分離を、賃労働と資本との現実の「交換」の過程、資本の生産過程の中に、分析していく。生きた労働の分析

これは大モノすぎて、これまでのようには簡単に料理できない。すさまじい現実主義と矛盾の形而上学との対立、拮抗、二極分化。彼らのスターリニズム、反スターリニズムにたいする強さ、優位は、貧農を中心とした赤軍一党を、公式主義とも誤解されうるようなプロレタリアートの革命理論によつて組織したというその二重性にある。彼らが、プロレタリアートと言ひ、労働者階級と言ひ、マルクス・レーニン主義と言ひとき、彼らは、トロツキーのように、理念として、単に述べたのではない。レーニンの現実主義が、継承されていたといふべきだろう。だが、問題であつたのはそのへ現実である。

なぜ彼らが、コミンテルン解散に賛成するのか、なぜ、へ世界党が、彼らに欠落するのか、それは、彼らのへ現実そのものの狭さではないか、へ現実そのものの浅さではないか。資本主義、帝国主義、現代過渡期世界把握の弱さ。だが、中国共産党はいまや岐路に立っている。いままででもっとも豊かで、危険な、混沌の中にある。プロレタリアートの革命を最後までやりぬく道、そのような道を指導しぬく党建設への道へとすすむのか、それとも、人民一般や、その他もろもろの、要するに修正主義の道をすすむのか。毛沢東よ、だれがその死体をかたづけるのか。ゴミムシ、ウジムシ、シデムシ、あるいはコヨーテ、ハゲタカといった連中に、かつてにさせておくわけにはいかない。「民族」共産主義者||毛沢東を葬りうるのは、共産主義者だけではないか。ただもつぱらプロレタリアートの革命だ、それだけを最後の最後まで指導しぬく共産主義者の党(世界共産党)だけではないか。

へ7 武闘派の依拠するプロレタリアート——第三世界派左派

(イ) 共産主義の母胎論

(ロ) 武装プロレタリアート論 トロツキスト的理念、一方での定在論への屈服。

(ハ) 疎外論左派(中核派) 本来の労働、人間主義的憤激のもつともはげしい吐露、プロレタリアート独裁自体の欠落。

へ8 第三世界派右派

抑圧された人民一般、としてのプロレタリアート(理念化)、下層プロレタリアート論。一方で、政治のスポイル化された共同体志向、中国派の構改派へのにみより、本来の共同体としてのプロレタリアート(ヤマギンズム)。

必読文献 『党綱領問題 一』

- ☆ 「ブレハーノフの第二次綱領草案に対する意見」(とりわけ、P 一三三〜一三七)
- ☆ 「小委員会の綱領草案に対する意見」(とりわけ、P 一三一〜一三四)
- ☆ 「小委員会の綱領草案に対する補足意見」(P 一四五〜一四六)

一 綱領草案の構成について

草案の逐条的な解説に入るまえに、草案の構成について若干述べておかなければならない。

草案は大きく二つの部分に分たれる。前半(第一項から第十七項)は、いわゆる綱領の原則的部分とよばれるもので、綱領の残りの部分の根拠となつて見解がすべて述べられてゐる。この部分では、プロレタリアートは現代社会の中で、いったいどんな地位をしめてゐるのか、プロレタリアートと資本家との闘争がどんな意義をもつてゐるのか、またプロレタリアートがこの現代社会の中で、どのような政治的地位にあるのか、ということが示されてゐる。

この第一の部分の根拠として、第二の部分では、党の任務が示されてゐる。さて、第一の部分であるが、これはまた二つに分たれる。第一項の前文は別として、第二項から第八項の部分と、その残りの部分である。前半は、いわゆる「古い資本主義」に関する部分であり、後半は、新しい現代の資本主義、つまり帝国主義に関する部分であり、後者は、新しい現代の資本主義である。かかる構成について解説しておかねばならぬ。

われわれはこの点につき、一九一七〜一九一九年の綱領改正時におけるレーニンの立場をまっすぐに継承してゐる。というのは、このことが、ただ理論的に正しいというばかりでなく、まさしくそのことを強く押しださねばならない現実の階級闘争における政治的根拠があるからである。というのは、現代帝国主義の分析・批判、あるいはいわゆる「情勢分析」と、それによつて導かれるいわゆる戦略・戦術だけをもつて綱領的立場とし、革命に勝利しようという考えに多かれ少なかれわれわれは支配されてきた

の分析を純一体としての帝国主義の分析に『代える』ということとは、理論上誤つてゐる。なぜなら、そういう純一体などは存在しないからである。存在するのは競争から独占への過渡である。だから、交換、商品生産、恐慌等々の一般分析はそのままにして、成長しつつある独占の特徴づけをわける綱領の方が、ずっと正しいだろうし、はるかに正確に現実を再現するであろう。……そのうえ、ロシアには現物経済や半現物経済から資本主義へ移行しかけてゐる地方や労働部門がまだ非常に多いという理由からも、ロシアにおいて帝国主義をまっただ純一体のように描きだすことは、まちがひである。……そういう経済はおくれたものであり、微弱ではあるが、とにかく存在してゐる。……(同前P 四三八〜四三九)

現実の階級闘争のあくまで現実的指針としてなければならぬ綱領は、現実の総体を鋭くとらえたものでなければならぬ。頭の中で考えられた理論にしたがつて、純一の、体裁のととのつた綱領をつくらうとしたブハーリンにたいして、だからレーニンは、「絶対に確かめられたもの」に徹頭徹尾依拠し、体裁の悪さ、雑多性を、現実からの反映としたのであつた。かくて、19年綱領は、周知のような構成をとるにいたつた。

さて、次いで、われわれは、レーニン以降、コミンテルンおよびその各国支部において、前に述べた綱領にたいするレーニンの態度が、どのようにわすれられ、歪められ、スターリン・ブハーリン的、ないしは、トロツキー的な修正が支配的となつてゐたかを一瞥しよう。このことによつて、かかるスターリン・ブハーリン的ないしトロツキー的歪曲がいかにいままお根強く残つてゐるのか、いかにわれわれを束縛してきたのか、そしてそれゆえいかに、そのことを決着づけることがとめられてゐるのかがあきらかになるであろう。

かの有名なコミンテルン二カ条加入条件は、コミンテルン加盟各国共産党綱領について、次のように規定した。

- 「十五 旧来の社会民主主義的綱領を今なお保持する諸党は、できるだけ速やかにそれらを修正し、それら諸国の諸条件に従い、共産主義インターナショナルの諸決定に一致する新しい共産党綱領を作成する義務を有する。共産主義インターナショナルに加盟する各党の綱領は、通例、共産主義インターナショナルの定期大会もしくは執行委員会の承認を必要とする」(『コミンテルン・ドキュメント一』P 一四九)

であり、この点が未だに決着づけられずに大きな課題になつてゐるからである(註)。一九一九年の綱領改正にいたる論争において、ブハーリン等は、「古い資本主義を論じた部分をすっかり削除した綱領をつくらう」と主張したのであつたが、これに反対してレーニンは、「資本主義の最高の発展段階としての帝国主義の特徴づけと、さらに、社会主義革命の時代がはじまつたという事実にもとづいて、この社会主義革命の時代の特徴づけとを補いさえすればよい」(『党綱領問題二』P 五二四)と主張した。

(註) われわれは、この課題を戦術論争の中で、戦略・戦術の党批判として克服した。

レーニンの主張は、二つのまさに現実の根拠にもとづいてゐた。第一は、時代が帝国主義の時代であるにしても、帝国主義は、古い資本主義のいわば上部構造であつて、古い資本主義の広汎な基層をすっかりなくしてしまつてはゐないといふことであり、したがつて、一九一九年当時の帝国主義戦争直後の時期には、この上層の破壊と基層の露呈が、いたるところに現れてゐるといふこと、そして第二は、とりわけロシアにおいては、一方でプロレタリア独裁が樹立へと至りながらも、他方できわめて広汎な、またきわめて根強い小商品生産が残存し、日々資本主義化していく傾向にあること、これであつた。レーニンは言つてゐる。

「現在の構文では、綱領の総論的部分は、社会経済体制としての資本主義のもつとも主要な、もつとも本質的特質の記述と分析をふくんでゐる。これらの特質は、帝国主義すなわち金融資本の時代になつても、基本的には変わらないでゐる。帝国主義は、資本主義の発展の継続であり、またある点では社会主義への過渡段階である。……だから、資本主義一般の基本的特質の分析に帝国主義の分析をわけるのを、私は『機械的』だと思つてゐることはできない。実際に、帝国主義は資本主義を上から下まで改造するものではなく、また改造することもできない。帝国主義は資本主義の諸矛盾を複雑にし、激しくし、自由競争と独占とを『絡み合わせる』が、交換、市場、競争、恐慌等々を排除することは、帝国主義にはできない。……帝国主義は、寿命がおわろうとしてゐるがまだおわつてはゐらず、死滅しつつはあるがまだ死滅してゐない資本主義である。純粹の独占ではなくて、交換や、市場や、競争や、恐慌とならんで存在する独占——これが帝国主義一般のもつとも本質的な特質である。……だから、交換、商品生産、恐慌等々

この規定を受け、さらにコミンテルン四回大会では、より本格的に、各国党の綱領、そしてコミンテルン自身の綱領をどうするか問題となつたといふのも、コミンテルン加盟各党は、一つには社会民主主義諸党から分離してきたものであり、また他方では、コミンテルン成立そのものに大きく影響されて新たに創立されたものであり、ともかく、綱領という点においては、まったく未熟であつたのである。かくて四回大会において、コミンテルン全体の一般綱領、そして各国支部それぞれの行動綱領につき、次のような決議がなされた。

- 一、……略
 - 二、……現在なお各国支部綱領をもたない、共産主義インターナショナル各国支部は、その綱領の起草に即時着手し、その草案を、遅くとも第五回世界大会の三カ月前までに執行委員会に提出し、次の第五回世界大会による批准を受けるようにしなければならぬ。
 - 三、各国支部綱領は、過渡的要求のための闘争を行う必要性を明確に規定するとともに、この過渡的要求が時期および場所の具体的事情いかによつて左右されることについて、必要な保留条件をつけなければならぬ。
 - 四、あらゆる過渡的、部分的要求の理論的基礎が、一般綱領に明記されるべきである。……
 - 五、一般綱領は、各国の政治・経済構造の根本的相違……に依つて、各国支部の過渡的要求の基本的、歴史的な型を明瞭に説明せねばならない。(同前P 三八八)
- ここからわかるように、各国支部は、どこもがコミンテルン全体を律する一般綱領をいだいて、それに各国支部独自の過渡的要求の綱領を付加するといふしだいになつてゐた。問題はだから、この一般綱領の内実、各国支部にたいしての意義であつた。それ以後、そしてコミンテルン以来の共産党の今日の姿をみて明白なのは、この一般綱領の部分が、単に一つのお題目に転落せられ、各党はただ行動綱領だけにしたがつて行動し、コミンテルンなきあと、この行動綱領にほんの少々毛のはえたものをもつて綱領としてゐる、ということである。このあからさまな現実こそ、レーニン死後のコミンテルンにおいて、形式的な体裁だけにとのえていきながら、その内実においては、ブハーリンとの論争においてレーニンが力をこめて主

張し、それを押しとらした諸点が、きれいさっぱりとなげすめられたこと
のなによりもの証拠である。

どの各国支部もが、コミンテルン全体に共通な一般綱領を一致してわが
ものとし、そのもとで、全国各地域ごとの特殊性にしたがつた行動綱領を
もつというにはなんの誤りもない。その点はまったく擁護されねばなら
ない。だが、では、なにゆえに、コミンテルンの一般綱領はそのような
ものにならず、各支部においては単なるお題目に祭りあげられ、かくて各
支部は、行動綱領主義におちいつていったのか？ それはまさしく、一般
綱領の内実があり、その意義を正しく、明確につかみえていなかっただけ
に他ならない。

最初に、コミンテルン四回大会に提出されたブハーリンの綱領草案から
検討してみよう。ここでは、その構成において、一、資本主義的搾取制
の項で、いわゆる古い資本主義と帝国主義についての叙述がなされている
が、内容的には、そのようにスッキリと書かれてはいるわけではない。19年
綱領改正時にレーニンにあれほど厳しく批判されたにもかかわらず、ブハ
ーリンは明白な理解をその批判にもちえなかつたようにみえる。このこと
は草案の次のような構成を一瞥すればただちにみてとれる。

「序論」

一 資本主義社会

- (a) 搾取制度としての資本主義の一般的特徴づけ
- (b) 商品経済と私的所有
- (c) 生産手段の独占
- (d) 労働力の販売
- (e) 支配階級の独占組織としての国家権力。武器の独占
- (f) 教養の独占
- (g) 賃金奴隷としての労働者
- (h) 賃労働と搾取関係
- (i) 資本主義制度の基本的諸矛盾の発展
- (j) 階級闘争
- (k) 生産の無政府性、競争、恐慌
- (l) 支配をめぐる資本主義の闘争。戦争
- (m) 資本主義の諸矛盾の再生産としての資本の集中過程
- (n) 相対立する社会勢力の組織化

このつたものを書こうとする傾向にある。つまり、ブハーリン的世界資本
主義論—国家資本主義的トラスト論をもって帝国主義論を改ざんし、これ
を中心一つの純一な、統一的な社会把握をなそうというものである。

「全資本主義発展を考察するには、如何なる視角からなすのが最も妥
当であるか？」(『スターリン・ブハーリン著作集第十六巻P111—
112』)

と彼は問いを提出し、これに自ら次のように答えている。

「私は、全資本主義発展は資本主義的矛盾の拡大再生産の立場から考
察されねばならぬと考える。即ち、この観点から出発して、我々は資
本主義発展の一切の過程を考察しなければならぬ」

これだけみるとなにか正しいことをいっているようにみえる。しかし、
ブハーリンは、さきの自ら提出した問いの後に次のように述べていた。

「だが、資本主義発展の全考察に際しては何等かの理論的枢軸が与え
られねばならぬ。此処で勿論種々の枢軸を選ぶことができる。我々は、
労働者階級の地位を決定的なものとして結晶し出すこともできれば、
資本の集中を結晶し出すこともできるし、或いはまた新社会の要素の
形成という立場から綱領の構造を組み立てることも出来れば、資本主
義的發展の何かその他の特徴を決定的なものとも考えることもできる」
と。そして、この後に続けて「だが、私は」として自らの「枢軸」—立場
を述べていたのである。これをみればすでにブハーリンが、問題の立てか
た、その把握において混乱し、一種のスコラ談議におちいつていることが
みてとれる。綱領で述べねばならぬことは他でもなく、

「労働者階級が現代社会でどんな地位を占めているか、労働者階級の
工場主との闘争がどんな意義と意味をもっているか、また、ロシア国
家(これを書いた一八九五—一八九六年のレーニンにとってはこうで
あるが、その時々、所々において、その現実にしたがって具体的に措
定されねばならない)における労働者階級の政治的地位はどんなもの
であるかということ」(『党綱領問題』P15)

であり、かつそれ以外ではない。ブハーリンのように問題を提出し、
あれこれ「悩み」「主張すること、そのこと自体が、綱領に掲ぐべき
資本主義批判を、なにか一つにまとめた、体系的なものとして、しかも
それを教科書風に述べようとする傾向を示している。具体的には、草案の
中では、

- (f) 資本主義制度の崩壊の不可避性
- (g) 新しい社会の前提条件
- (h) 資本主義の最後の段階としての帝国主義
- (i) 資本主義の世界的性格
- (j) 最新の資本主義の独占的性格
- (k) 競争の新たな形態とその激化
- (l) 金融資本の国家権力、帝国主義、軍国主義
- (m) 資本主義的抑圧の中心点、従属的な国家・経済連合、植民地
- (n) 反資本主義勢力(労働者階級、植民地諸国民)。阻止的な諸傾
向(労働貴族、社会民主党、その他)
- (o) 諸矛盾の激化と資本主義の崩壊の開始としての一九一四年の
大戦
- (p) 戦争の結果と資本主義の解体の開始
- (q) 戦争の失費と生産力の破壊
- (r) 世界の交通の瓦解
- (s) 植民地予備源の離脱
- (t) 減少しゆく社会的所得の再配分
- (u) 帝国主義的寡頭グループ間の競争の激化
- (v) 植民地と本国とのあいだの競争の激化
- (w) 階級闘争の激化
- (x) 資本主義制度の絶対的不安定性

(以下、略)

(『コミンテルン資料集第三巻』P七四—七九)

以上、余計と思われるほど詳細に構成を引用してきたが、それは、いか
に一貫してレーニンによる批判が諒解されていなかったか、を理解しても
らうためである。そしてこのことは、レーニンから「幾分スコラ哲学的な
ところがある」「弁証法を学んでいないし、これを十分理解しているとは
考えられない」と評されたブハーリン、そして実際に、現実を鋭くとらえ
るよりも、思弁の中だけで、現実をもてあそんだブハーリンが、コミ
ンテルン綱領作成に一貫した主導的役割を果たしたという事実を考えあわ
せれば、よりいっそう納得しうるといえるものであろう。

さて、分析していこう。この草案全体を貫いている欠陥は、やはりレー
ニンが鋭く指摘した「スコラ哲学」的傾向、なにかしら純一な、体裁のと
かかる点に如実に示されている。

このようにブハーリンは資本主義批判を、かつて考えた種々の「
枢軸」の中から「資本主義的矛盾の拡大再生産の立場」を選びだし、一つ
のまとまった叙述として、教科書風に、「論理的」になさんとしているの
である。かかる一般論、思弁の中なる純理論的、教科書風の論理が、その
裏返しとして、単なる歴史的諸事実の列記となるのはけだし当然である。
現実からの乖離としては、その両者は両極である。つまり、ブハーリン式
一般論的体系志向的スコラ談議と、スターリン式法則万能的歴史羅列的
スコラ談議とがランデブーし、かくて一九二八年、かの有名なスターリン
ブハーリン綱領が生まれた。かかる両極一対の様相の揚棄は、現在なおわ
れわれの今日的課題である。宇野がブハーリンとして(そして、かつての新
左翼が、代々木がスターリンとして、たち現われてきているのだ。かの有
名なる三段階論なる宇野の頭の中だけに論理への現実のはめこみと、
これまた宇野の頭の中だけに原理論の世界への現実の古い資本主義の
はめこみが、一方でなされるのたいし、後者では、産業資本主義、独占
資本主義といったのつべらぼうの資本主義発達史教科書が現われる。もち
ろんここでは、このあとにスターリンというところの「昼のあとに夜がつつ
くように」社会主義が続くことが宣託されているというしだいだ。かのレ
ーニンの現実をたいする厳しい対応、絶対にそこから遊離しない厳格な態
度は完全にすてられていくわけだ。

スターリン綱領をみよう。これにおいては、第一章 資本主義的世界
体制、その発展、およびその不可避的倒壊の、第一節 資本主義的動力
の法則と産業資本時代、第二節 金融資本主義(帝国主義)の時代が
おのおの、いわゆる古い資本主義、および帝国主義に関する部分となつて
いる。すると、その節のタイトルからあきらかかなように、それは単に歴史

叙述として述べられていることがわかる。そしてその内容は、たとえばスターリン・ブハーリン的搾取制度(しくみ)論としての資本主義批判、抽象的一般論になっていることがわかる。

このようにスターリン・ブハーリン的歪曲は、一方において一般論、体系的抽象論、そして他方で歴史法則化、歴史羅列的叙述という現実から遊離した裏表としてなされた、このスタ・ブハ綱領においてしあげられた。これらを各国支部は共通の一般綱領とし、それに各民族的部分、行動綱領を付加することになった。しかしすでに述べたように、このような一般綱領の文字どりの一般性、歴史叙述は、その一言一句への異状なまでの信仰をもたらしながら、一つのお題目へと昇化していくのは不可避であった。であり、各国支部は単なる行動綱領主義、戦略・戦術主義(戦前日本共産党のテーゼへの対応をみよ)へと転落していったのである。この行くべきは、コミンテルン解散後の今日の諸共産党に明白に表われている。資本主義を根本から批判し、労働者階級の地位をあくまで固めた綱領ではなく、単なるテーゼ、情勢分析、戦略・戦術といったものがゴチャマゼにされ、綱領として声高に宣言されているのである。たとえば現行の日本共産党綱領(一九六一年八大会で決定、以後部分的に修正)をみてみよう。それは綱領といえるのか? それは、日本共産党「闘争」史であり、情勢分析であり、戦略・戦術テーゼであり、行動綱領であり、その他なんでも、ではあっても、ただ唯一綱領ということだけは決してないであろう。彼らの綱領にたいするかかる態度そのものが、すでに、共産主義革命をやりとげることから著しく速いということ、一度もまじめにこの点を考えてこなかった、ということであらわしている。

われわれは、レーニンに帰らねばならぬ。ブハーリンを厳しく批判したレーニンをまっすぐに継承せねばならぬ。そこでわれわれは、われわれ自身身の反レーニンの残滓をぬぐいさらねばならぬ。

トロツキー式の戦略・戦術主義、過渡的綱領主義、あるいはそれとブハーリン・ピヤタコフ的帝国主義的経済主義、帝国主義一本やり主義との訣別である。

トロツキーは、レーニンが03年綱領確定前後にやりとげた深くほりさげた資本主義批判、19年綱領改正時にブハーリンその他にむけられたそれ、また、一九二一年十回大会で労働者反対派にむけられたそれを決して理解しなかった、といつてよい。トロツキーの資本主義の根底的批判について

実によっている。この現実の資本主義、この現実を徹底的に深く批判し、その止揚の方向を現実の運動に刻印することこそ、われわれの任務である。帝国主義批判をいくらち密にやっても、現実はとらえきれない。レーニンも力をこめてブハーリン等にたいし主張したように、

「帝国主義は資本主義を上から下まで改造するものではなく、また改造することもできない。帝国主義は資本主義の諸矛盾を複雑にし、激しくし、自由競争と独占とを『絡み合わせる』が、交換、市場、恐慌等々を排除することは、帝国主義にはできない。」(前出)

われわれのこの現在も、事態は、根本的には変わらないままである。もちろん、現代の帝国主義は、レーニンの時代にくらべても、より矛盾を複雑化し、階級闘争を錯綜させ、また恐慌という資本主義の根本矛盾を、引きのばすといった種々の重要な特徴をみせてはいるが、しかし、現代の帝国主義もやはり、古い資本主義の上ののつており、それを上から下まで改造するものではなく、改造することもできないものである。

II いわゆる古い資本主義について

(一) はじめに

われわれはすでにこの第二項から第八項部分の現実の階級闘争における意義について、草案の構成について、でくわしく述べておいた。そこで述べられているように、この部分は、いわゆる古い資本主義に関する部分といふものの、まさしく現実、日々更新される現実に関する部分として述べられている。そのことはなによりも、第二項の冒頭、「今日、商品生産は全世界を覆い、資本主義の生産関係が決定的な支配を獲得している」という表現に示されている。この表現に鋭く示されているように、われわれはこのいわゆる古い資本主義について、あくまで現実として、現にわれわれの生きている時代のこととして述べている。決して、単に資本主義とはなにか、ブルジョア社会とはなにか、といった問いに答えるべき経済学教科書を書かんとしているのではない。この点でわれわれは、すでにとりあげたレーニンのブハーリンにたいする批判とともに、レーニンのブレハーノフにたいする批判とともに、レーニンのブハーリンにたいする批判——

の無能ぶりは、ある意味ではスターリン、ブハーリン以下ともいえないことがないくらいであり、この点については後にくわしく論ずるが、ともかく、資本主義批判を、単なるブチ・ブルジョア急進主義の立場からの告発でことたれりとした彼が、レーニンのブレハーノフ、メンシェビキ等、ピヤタコフ等、シリヤニコフ等労働者反対派の人々にたいしてなされた鋭い、厳密な批判が理解されていたとはいえず、事実彼は、第四インターにおいておびだたしい文章を書いたものの、それを綱領としてまとめあげ、それを基礎としてふたたび、さまざまな闘いの具体的指針を生み出すということをけつしてしなかつた(しえなかつた)。結局彼は、龐大な戦略・戦術テーゼ(悪く言えば、まったくすぐれた歴史解釈文)と、それをまとめあげたかの有名な過渡的綱領をだけ残したにすぎない。彼のスタ・ブハ綱領批判をみる限り、彼が、現実を、と問題にするとき、そのとき、彼はひつきよりすぐれた行政家としての現実をみていたではあるが、レーニンの左革命家としての現実をみていなかったといふべきであろう。

このようなトロツキー主義を理論的には継承し、しかも、運動を第一義とする運動至上主義者であった共産主義者同盟は、理の当然であるが、レーニンの資本主義批判にまったく無知であった。無限に続く情勢分析、戦略・戦術、だから結局現に生きていた時代としての帝国主義批判だけで、党的実践を導いてきた。もちろん、第一次ブントは、その第三次綱領草案において、資本主義への批判を試みている(第一章)。だがそれも結局成功していない。第二次ブントではかかる試み自体がほとんど省みられることなく終わった。われわれも、とどのつまり代々木一派と対をなして行動綱領主義に転落していたのであった。あくまで大衆運動を重視し、運動に全力を投入してきたことだけが、われわれの利点であった。過渡期世界論においては、良い面でも、悪い面でもその頂点にあった。それは一方において帝国主義批判の徹底とそれによる現実へのぎりぎりの肉迫と、だが一方で資本主義へのもっとも深い批判(プロレタリア革命!共産主義革命の根本的意義を導くそれ)の完全な捨象、現実からの致命的遊離に特徴を有する。現実の資本主義への根本的批判の欠落がいかにわれわれを脆弱なものに、ブチ・ブルジョア急進主義の立場に固定したかは、一九七〇年代初頭——連合赤軍の闘争において厳しくあきらかにされた。なぜわれわれが他でもなくプロレタリアートの革命を、共産主義革命をなさんとするのか、このことは、まさしく現実が、資本主義の時代であるといふごくごく単純な事

九〇三年の綱領の作成当時の——を検討しておくことが、きわめて現実的な意義をもっていると考えられる。一九〇二〜三年のブレハーノフが結局は、一九一九年のブハーリンなのであり、それゆえに、すでに述べたように、かつてのわれわれであったのである。しかも、現在、資本主義批判といふことの重要性が浮上したことにたいし、プロレタリアの(註)、ともかく資本主義批判をやればよい、帝国主義批判に足せばよいと考えてしまっている人々——その意味で、これらの人々は、資本主義を定義風に叙述しようとしているのである。プロレタリア第三次綱領草案をみよ——が少なからずあり、その意味で、細かな字句の表現にわたって批判を遂行したレーニンの作業がわれわれに大きな教訓を示しているのである。

(註) これはプロレタリアに限らない。今日、これをもっとも典型的な姿で示しているのは、革命の旗派から「発展」(?)した赫旗派である。

レーニンは、すでに一九一五〜六年に執筆した綱領草案において、「ロシアでは、大工業がますます急速に発達して」云々という表現から叙述をはじめている。彼はあくまでロシアの資本主義の現実に立脚し、それを批判することを追求したのであった。この態度は、首尾一貫しており、ブレハーノフ草案に對抗して書かれた一九〇二年二月の草案にも、「ロシアでは、商品生産がますます急速に発展し、資本主義的生産様式はロシアではますます完全な支配を獲得しつつある」という表現が冒頭にきている。このような態度をもっていたレーニンが、ブレハーノフ第一次草案「現代社会の主要な経済的特質をなすものは、この社会における資本主義的生産関係の支配である、すなわち」云々、第二次草案「資本主義的生産関係にもとづく商品生産の支配」、小委員会草案「この社会の特徴をなすものは、資本主義的生産関係のもとでの商品生産の支配である。すなわち」云々といった表現に厳しい批判を向けたのは当然であった。ブレハーノフの諸草案は、どれも結局「資本主義の特徴づけを扱っているもっとも重要な部分の定式化の仕方からして、この草案は、きわめて特定な資本主義のきわめて現実的な現われにたいしてたかろプロレタリアートの綱領(プログラム)ではなく、資本主義一般を論じた経済学教科書の教条(プログラム)であたえられている」(『党綱領問題』①、P.112)というシロモノであったのであり、なにかしら資本主義一般を特徴づけようという、資本主義とはなにかといふことを定義づけようというブレハーノフの資本主義にたいする、態度の(したがって、それを叙述する綱領への態度の)如実な現われであったの

である。レーニンは同じくブレハーノフ第二次草案にたいし次のように批判している。

「第五節は『発展した』資本主義一般の定義をあたえ……こういう叙述の仕方は……正しくない。正しくないというものは、たまたかプロレタリアートは、資本主義とは何か、ということ定義によつてまなぶのではなく(人々が教科書でまなぶようにまなぶのではなく)、社会の発展とその諸結果を実践的に知ることによつて資本主義の諸矛盾をまなぶのだからである。だから、われわれは綱領のなかでは、この発展を規定し、事態はこういうふうにする……できるだけ簡潔に、また鮮明に——かたならなければならぬ。それがまさになぜこうであつてそれ以外ではないかの説明や、基本的な諸傾向の発現形態についてのくわしいことは、いっさい注解にゆずるべきである。資本主義とはなにか、ということは、事態はこういうふうになつてゐる(あるいはすすんでゐる)ということについてのわれわれの特徴づけから、すでにおのずからでてくるであらう。」(同前P九六)

ここまで述べてくれば、問題点はきわめてはっきりしている。われわれは、レーニンの一八九五〇六年、一九〇二年の態度を継承し、そして帝国主義—現代過渡期世界という特質を考慮して、草案のような表現をとつてゐるのだ。

さて、ここで次のような疑問が生じるであらう。レーニンのかかる態度にもかかわらず、ではなぜ、一九〇三年の綱領は、字句の修正をともないながらも周知のようなものになつたのか、そしてまた、その表現が19年綱領にもそのままひきつがれたのか、と。この疑問は、単に文献学的「あらさがし」的なものではなく、次のような現実把握にもとづき、それと結びついて提出されてゐるであらう。すなわち、現代過渡期世界においては、中国、ベトナム等プロ独国家が存在してあり、商品生産は全世界を覆つてといへないのでないか、このように現実が商品生産が全世界を覆つてゐるといふふうに純一的に把握されえない以上、商品生産が、帝国主義の広汎な基層をなしてゐるとしても、一九〇三—一九一九年の綱領のように、一つのみとまつた叙述をあたえるべきではないか、というものである。われわれはこの問題にたいして次のように考える。

03年—19年綱領がなぜにこのような表現になつてゐるかについて、われわれは資料の不足のためににも言うことはできない。ただわれわれがは

「ロシアでは商品生産がますます急速に発展し」云々と書いたそのレーニンの態度を。

しかも、現代過渡期世界にあってはもう一つの事情がかさなる。プロ独国家の存在ということが、このことによつて、問題をゆがめてしまふという事態がおこる。いま、この現在「商品生産は全世界を覆い」という現実から眼をそらすことは、そしてその代りに、なにかしら別のものをもちだして、それを商品生産に対抗させるという虚構をつくりだすことは、さまざまなニュアンスの差、あらわれの差はあるとしても、とどのつまり、体制間矛盾論的誤謬にとらわれることになるであらう。それはよくても、せいぜい「社会主義的要素」と「資本主義的要素」とのあいだの闘争といった抽象図式を生むだけであらう。良心的中国派の人々のように。だが、こういつたいさゝいの立場は、結局は、商品生産そのものへの深い分析・批判へのないがしろな態度を招来するのであり、かくて、その温存、それへの屈服へとつながるであらう。

現実をみよ、世界のどこに商品生産から無縁な真空地帯があるのか? 中国共産党は公然と商品生産について語つてゐる。いまや完全に変質してしまつた連等ではいふまでもない。この現実を無視し、古い資本主義について、なにか限定された現実であるかのように、一つのみとまつた叙述をあたえることはできない。「この社会の特質は」云々というぐあいに、さて次いで第二項から第八項の解説を逐一に行つていこう。

(二) 第二項の解説

「今日、商品生産は……支配を獲得してゐる」この部分の根本的な意義についてはすでに述べてある。前半部分はさして問題はないであらうが、問題は後半である。現代過渡期世界において「資本主義的生産関係が全世界の決定的な支配を獲得してゐる」ということ。これはわれわれの過渡期世界把握の特質を鋭く提示してゐる。つまり現代世界、現代過渡期世界は、歴史上の封建時代や資本主義社会の時代といったものとは決定的に違つた一歴史時代であり、まさしく国際共産主義運動の歴史的な限界の固定化、歪曲によつて、換言すれば国際共産主義運動の党的未成熟によつてこそもたらされてゐるものなのであり、それゆゑに、少なくともこの党的未成熟を克服しえない限りは、いかにプロ独の国家が現に存在してゐようと、

つきりと確認しうることは、かの表現が提出された一九〇三年当時、レーニンはそれにはたいし、すでにみたと同様に厳しく批判したということ、そしてその批判の内幕が政治的理論的な首尾一貫したレーニンの態度からして、それにはまことにびつたりと一致してゐること、また後日、その批判を撤回したという明白な根拠がみあたらないこと、以上である。だからレーニンが、どのような理由でかの成文を良しとしたかはまったく知る由がないとしても、かのレーニンのブレハーノフへの批判そのものは、まったく疑問の余地なく正しい、ということだ。だから結局問題なのは、かつていかなる理由からかレーニンが、良しとした19年綱領の表現が、いまこの現代において、まったく疑問の余地がないか、誤解の余地がないのか、という点である。

われわれはあえて言うが誤解がおこりうる、それも二重の意味で、と考へる。まさしくかの誤解が、現実のものとなつており、われわれが揚棄すべき現われとして眼前にある、と考へる。

ここで、03年綱領よりもはつきりとレーニンのかわりか確認しうる19年綱領をとつてみよう。その古い資本主義に関する部分の叙述のされかたは周知のようによつてである。

前文としてロシア革命の勝利とそれに続く世界プロレタリア共産主義革命の開始についてふれたあと、「この革命は、いまのところ大多数の文明国で支配してゐる資本主義の発展が不可避的にもたらした結果であつた。わが党の従来の綱領は……資本主義とブルジョア社会の本性をつぎのようになつていく特徴づけていた」という文章があり、このすぐあとに、03年綱領のくだんの部分がかッコにつつまれて入れられてゐる。「このような社会の特質をなすものは」云々と。

このような表現はこの現代社会の中で、古い資本主義について、誤解を生ぜしめないであらうか。かのレーニンによつて厳しく批判されたブルハーリンの誤りの亜流を、その純化を、そのゴジラ化したものを。われわれはすでに知つてゐる。スターリン、スターリニストたちというものすごい者どもを。彼らこそ、すでにわれわれが批判してきたように、レーニンによるブルハーリン批判をすてさり、19年綱領の当該部分を、一つのお題目におしあげてしまつたブレハーノフ、ブルハーリンの純化した姿、そのゴジラ化した姿ではないか。われわれは歴史の現実に学ばねばならぬ。レーニンのあの厳しい態度をこそ、この歴史的現実に照らして押しださねばならない。

全世界における規定的生産関係として、資本主義的生産関係があるのである。まさにこの世界において、あれこれの社会主義的な諸要素ではなく、資本主義的生産関係こそが、決定的な支配を獲得してゐるがゆゑに、レーニンが述べた次のこと——

「『労働者は祖国をもたない』——これは(2)彼(賃金労働者)の経済的地位が一国的でなく、国際的なこと、(3)彼の階級敵が国際的なこと、(4)彼の解放の条件もまたさうであること、(5)労働者の国際的統一が一国的な統一よりも重要であることを意味してゐます。」(イネッサ・アルマンドへの手紙) [全集三五、P二五八]

——をへ綱領・戦術・組織ををつらぬく党活動の核心としておしださねばならない。この点をあいまいにするものはかならず、社会主義的要因の漸進的にせよ、急速にせよ、その拡大、つまり一国的なプロレタリアート独裁の樹立の拡大によつて世界革命を展望することになるのである。総和革命論への転落、これである。

複雑な様相をみせてゐるこの現代過渡期世界を「商品生産が覆い、資本主義的生産関係が全世界で決定的な支配を獲得してゐる」と正しくとらえることこそ重要である。

この部分の全体の意義はこれだけにして、ついで、「資本主義的生産関係」という表現について一言述べておきたい。この表現は、03年綱領論争時に、レーニンによるブレハーノフ批判の中で問題にされてゐる。ブレハーノフ草案の「資本主義的生産関係にもとづく商品生産」という表現にたいし、レーニンは次のように批判してゐる。

①「『資本主義的生産関係にもとづく商品生産の支配』。なんとなく不細工なものになつてゐる。もちろん完全に発展した商品生産は資本主義社会でしか可能ではないが、しかし『商品生産』一般は、理論的にも歴史的にも資本主義にたいし *primus* (先行物) である。」(『党綱領問題』P一〇四)

②「『資本主義的生産関係にもとづく商品生産』という句は第三巻の基本思想を表現したものだ、とゲ・ヴェ・ブレハーノフが言うのは、まったく正しい。だが、それだけのことだ。綱領にこの思想を入れるわけにはいかない。それは、綱領に、第二巻の基本思想をなす実現の構造の記を入れるわけにはいかないのと同様であり、またその中に超過利潤・地代への転形の記述を入れるわけにはいかないのと同様である。

綱領では、資本による労働の搾取イコール剰余価値の形成を指摘すれば十分であって、この剰余価値の転形や形態変化のあらゆる種類について論じるのは適当でない(それは二、三の短い命題ではやりえないことだ)。(同前P一四四)

③「草案では『資本主義的生産関係』という用語が、一貫して用いられていない。ときおりそれは、『資本主義的生産様式』(第十一節)という用語で置きかえられている。私の考えでは、綱領を理解するうえでの困難をすくなくするために、一つの用語を、すなわち後者を、一貫して用いるべきだと思ふ。というのは、前者はより理論的なものであって、(諸関係の)『体系』等々の言葉を補わないかぎり、なにか完結した全一的なものを示さないからである。」(同前P一〇四)

便宜上、われわれが①②③と番号をつけた三つの引用句のうち、①と②とは、資本主義的生産関係ということ、商品生産とを結びつけていることへの批判である。われわれの草案では、両者は、別にして「商品生産は……資本主義的生産が……」としているので問題はない。で、③で述べられているレーニンの批判であるが、われわれは、このレーニンの批判にもかかわらず「資本主義的生産様式」ではなく、「資本主義的生産関係」という用語がより適切であると考えられる。というのは、なるほど「生産様式」の方が、より全一的な表現ではあるが、だが、それはより経済学的な概念・表現であって、いまわれわれが綱領でもっとも強調しにしなければならない政治的な表現、階級関係の表現としては「生産関係」の方がより適していると考えられるからだ。すなわち、われわれの草案においては、一つの経済的社会構成体たる資本主義社会をその核心においてつかみ、それを鋭くおしだすことが、なによりもスターリニズム・反スター・マルクス主義にたいする党派性の問題からして(この点については後に詳述)きわめて重要なことになっており、そうである以上、結局階級関係としてあらわれる「生産関係」という用語をもちいることが適切なものである。つまりわれわれは次のレーニンの言葉に依拠し、それを綱領の中にそのままはつきりとおしだす必要性に迫られているのである。

「経済社会構成体の発展の自然的過程というマルクスの基本思想が、社会学という名称を僭称することの子供じみた道徳訓を根こそぎ掘りくずすものであることは明白である。ではマルクスはどのような方法でこの基本思想をつくりあげたか? 彼は、社会生活の種々の分野のな

だからわれわれは、19年綱領へのレーニンの態度、資本主義への批判を正しく受けつぎ、まったくなんの誤解もなきように、草案のごとく定式化しているのである。だからもちろん、隷属の具体的内実、より深まっています。その内実については、ここでは問題とされない。それは第三項以降に具体的に述べられる。ここではただ、この隷属関係、生きていくためには、常時あるいは定期的自己の労働力を売って、社会の上層階級のために働かなければならない、というこの現実が、鋭く示されればよいのである。続いて当該部分の二、三の語句につき説明をしておこう。

①「商品の生産諸手段」——生産という概念にたいして「生産—消費(生活)があるいは、生産—流通」という対となった表現がしばしば用いられる。前者は『資本論』等で、生産手段—生活手段という形で用いられ、後者は、19年綱領にもある「生産および流通の諸手段」といったふうに用いられている。前者の生活手段というばあいは、『資本論』第二巻で分析されている社会的総生産第二部門(消費部門)の商品生産物である。したがってそれらは、資本の生産過程における純然たる結果物であって、直接的には(もちろん)労働力を再生産するために供せられるという意味では、ふたたび生産過程に作用するが「ふたたび生産過程に入る」という部分である。その意味で、ここで生活手段が出てくるわけにはいかない。ついで、流通手段ということであるが、生産手段—流通手段という両概念は、『資本論』にしたがって区分しうるわけではあるが、それは綱領本文では必要ない。このように形で解説でふれば十分である。というのも、厳密な意味で生産手段から区別される流通手段——たとえば銀行、商社等の業務に関する諸物——は、一般に生産手段として一括して表現されるのであり、そのことは、資本主義の発展にとっても生じる生産的労働概念の拡大にも照応している。マルクスも、フランス社会主義労働党綱領で、「生産手段(土地、工場、船舶、信用等々)……云々と書いており、またレーニンも一九〇二年の綱領草案で「……生産手段の重要な部分(土地と工場、道具と機械、鉄道その他の交通手段)……云々としている。要するに、草案での「生産諸手段」というばあいは、それは、厳密な意味で区別される流通諸手段をもふくむと解される、ということである。

②「半プロレタリア」——ほとんどのにたらないものとはいえないくばくかの生産手段を所有して、ここからもなんらかの収入を得ることのできる人々。もちろん種々の差はあるが、賃金労働者としてあることが不

かから経済の分野をとりだすことによって、またあらゆる社会関係のなかから生産関係を、それ以外のすべての関係を規定する基本的な、本源的なものとしてとりだすことによって、それをおこなったのである。」(「人民の友」とはなにか」国民文庫版、P十二)

さてついで、先に保留しておいた問題、つまりスターリニズム・反スター・マルクス主義にたいする党派性の問題について述べたい。この点は第二句、第三句への解説とともになされる。

「この発展の深化と拡大によって、……プロレタリア・半プロレタリアがますます増大する。／＼それゆえ、……余儀なくされている。」

この短い簡潔な句によって、資本主義的生産関係が支配している社会の階級関係、すなわち経済的な支配—隷属関係がはつきりと示されている。この表現は、その部分からだけすれば、03年—19年綱領とはほぼ同じ表現となっているが、しかしすでに述べてきたその前にあたる部分の表現、したがって当該句の「現実性」という点からして、スターリニズム等への鋭い批判をなしている。つまりここでは、先の句をうけて、日々の現実のこととして賃労働制度が歴史的な一つの奴隷制度であること、今日自分がプロレタリアであるならば、よほどの特別な事情がない限り、明日もまた半プロレタリアであろうということ、しかも自分の息子たちや娘たちもまたそうであろうこと、この日々厳然たる事実が語られている。この現実の日に、プロレタリアとしての自己が、その定在に縛りつけられていくという、この隷属状態が、はつきりと示されている。この点において、スターリニズムは、ブレハーフを継承することで、この事実をたなあげにして19年綱領のこの部分でないものにしてしまったのである。原則的部分は原則的部分だ、というふうに。過去より一貫して資本主義批判を正しく把握せず、したがって、資本主義を、搾取のしくみ、なにかしらの不平等・不正当のしくみとして批判するというブチ・ブルジョア急進主義の立場にあったスターリン、そしてまた、スターリンよりは、よく研究もし、マルクス、レーニンをよく理解しえていたであろうが、結局は、この資本主義批判の核心をつかみとりえないままに、スターリンに屈服していったブハリン——この二人が、かの悪名高い一九二八年のコミンテルン綱領を作成したのには、ひとえに19年綱領の当該部分を、日々の現実のこととして、現実的にとらえることなく、それを、原則一般に昇華させてしまったからに他ならない。

可欠である人々。出稼ぎ(しかも恒常的な)農漁民等。かかる定在である以上、この人々も、プロレタリアと同様に「常時あるいは定期的に、ブルジョアの雇い人にならねばならない。」

③「常時あるいは定期的に」——ほほ誤解の余地はないと思うが、二つの点だけ注意しておこう。

「……労働力の所有者がそれを何時でもただ一定の時間ぎめで、売ることが必要である。けれど、彼がそれをひとまとめに一度きりに売らなければ、彼は自分自身を売るのであり、自由人から奴隷に、商品所有者から商品に、転化するからである。人格としての彼は、いつでも自分の労働力を自分の所有物として、したがってまた自分自身の商品として、取扱わねばならない。そして彼がそうなしうるのは、ただ、彼が労働力をば、その購者をしてつねにただ一時的にのみ、一定の期限つきでのみ、自由にさせ、消費させ、かくして労働力を譲渡することによって労働力に対する自分の所有権を放棄しないという、その限りにおいてのみである。」(『資本論』第一巻、P一七五)

だから「常時」の意味は、奴隷としての常時ということでは決してない。同様のことはあるが、「定期的」は、偶然的に、ということへの反対概念である。だから、小商品生産者や学生等のいわゆるアルバイトといったものは、それを生活費のためのものとしては、ここでいわれていることに該当しない。

④「上層階級」——総括的にはブルジョアジーということであり、とりわけ先進諸国のはあ、ブルジョアジーとはほぼ一致しうる。だが世界的にみればあ、南米、アジア、アフリカなどでは、大土地所有者の階級があり、彼らはかならずしも自ら資本家であるのではない。こういった人々もふくめてということである。別の言葉でいえば、さまざまな形で剰余価値の分配にあずかり、それによって食っている人々のことである。

(三) 賃労働—資本関係の核心

ここでつごう上、賃労働—資本関係の内実を概念的に解説しておきたい。この内容は、もちろん第二項—第六項全体によって述べられているものがあるが、草案全体に眼を通したあとに、解説にかかるといふ手順からして、ここでその概略を述べておく方が、すでに述べてきたスターリニズム、

反スタ・マルクス主義にたいする党派性の問題からしても、理解をよりよくするだろうと思ふゆえである。

① 二重の意味で自由な労働者、労働力の売り買い

資本—賃労働—関係の現象としてまずあらわれているのは、労働力というマルクス主義の概念が定着している以上、それをブルジョア経済学的に歪曲したうえでの、相矛盾した二つの事象——労働者は自らの労働力を雇主—資本家に売り、雇主—資本家は労働者に彼の労働(具体的働き)にたいして支払いをする——としてある。

現代のブルジョアにとって、労働力という概念とは、一方で労働力人口等として計量化される量的概念であり、一方では、力能としてのその質的概念でもある。しかし、それはマルクスの商品—価値論によって基礎づけられたものとはまったく似て非なるものであって、結局は古典派経済学派の「労働者の生産費」と同じものである。ただ昔と違うところは、労働者のバラエティを強調するという点ぐらいである。だから彼らは、労働者への支払いという点では昔ながらに、労働への支払いを頑として固持しており、口がさけても労働力にたいして支払うなどとは言わないのである。かくて先にあげた現代化された「資本—賃労働—関係があらわれる。

だが、この現象の背後でおこなわれる現実の関係は、マルクスによって解明された事態とまったく変りはない。それを確認していこう。

一方における生産諸手段、貨幣の所有者、一方における労働力以外に売るべきものをもちたい裸一貫の労働者——この対立構造こそ資本制生産の基礎であり、かつ不断に再生産される構造である。この裸一貫の労働者の存在、彼の「身体、すなわち生きた人的存在のうち実存して、彼が何らかの種類の使用価値を生産するたびに運用する、肉体的および精神的な諸能力の総計」(『資本論』第一巻P一七五)である労働力が不断に商品化すること、このことこそ資本の実現条件であり、かつ資本制生産の不断の結果である。

「……貨幣を資本に転化するためには、貨幣所有者は自由な労働者を商品市場に見いださねばならぬのであって、ここに自由とは、自由な人格として自分の労働力を自分の商品として処分するという、また他方では、売るべき他の商品をもたず、自分の労働力の実現に必要ないっさいの物象から引離されている。自由である。ところが、二重の意味

P五九九)

「労働者階級の絶えざる維持および再生産は、資本の再生産のための恒常的条件である。」(同前P六〇〇)

では、この商品化された労働力の売り買いという局面について述べよう。

一方に貨幣所有者、一方に二重の意味での自由な労働者が、商品市場の一つたる労働力市場で対する。商品化した労働力の売買がおこなわれる。貨幣と労働力との交換。だから、この局面に限ってみれば(注意)、それは単に貨幣所有者にとってはG↓Wとして、また労働者にとってはW↓Gとしてあらわれ、何の変哲もない商品交換関係に他ならないように見える。そこには何のむずかしいものもない。何のマヤカシ、ゴマカシもない。一方が価値どりに売り、一方が価値どりに買う(註)。それは単純な流通に属しているものとして現象している。

もちろん、労働力の売買が、価値どりになされる、というのは仮定の話しであり、現実には、おおむね、価値どりに売買されない。それは価値以下でなされる。この点については、第三項の解説で述べよう。だが、価値以下で売買されながらも、価値法則が貫徹していくというこのゆえに、ここでは、先の仮定は、事態の単純化のために有効である。

だが注意せよ、このことは「その限界内で行われる流通または商品交換の部面」(『資本論』第一巻P一八四)のことであるからであり、資本制生産の総体からみれば、それはまったく趣きを異にする。

「この両者(労働者と資本家)が外観上互いに商品所有者として相対するところの第一の關係は、資本主義的生産過程の前提であるが、それはまた、もっとあとでみるであろうように、資本主義的生産過程の結果であり、所産である。」(『直接的生産過程の諸結果』国民文庫、P三四)

この点をあくまで留意しつつ、マルクスのいうところを聞こう。「労働力の所有者がそれを商品として売るためには、彼はそれを自由に処分することができなければならない。つまり、自分の労働能力・自分の人格、の自由な所有者でなければならない。彼と貨幣所有者とは市場であり、同じ身分の商品所有者として相互に關係を結ぶのである。彼らの異なるところは、一方は購買者であり、他方は販売者だ

においてである。」(『資本論』第一巻P一七六)

「商品生産が必然的に資本主義的生産になるのは、労働者が生産条件の一部であること(奴隸制、農奴制)をやめるか、または基礎が自然発生的な共同体(インド)ではなくなるべきである。」(『直接的生産過程の諸結果』国民文庫、P一五五)

「……剰余労働、すなわち労働者が自分を維持するのに必要な労働時間をこえる労働、およびこの剰余労働の生産物の他人による取得、すなわち労働の搾取は、これまでのすべての社会形態に、それらが階級対立の形で運動してきたかぎりにおいては、共通なものである。しかし、この剰余労働の生産物が剰余価値の形態をとるときにはじめて、生産手段の所有者が自由な——社会的な束縛から自由であるとともに自分の所有からも自由な——労働者を搾取の対象として自分の眼前に見だし、商品を生産する目的で彼を搾取するときにはじめて、マルクスによれば、生産手段は資本という独特な性格をもつことになるのである。」(『反デューリング論』(下)岩波文庫、P一〇四)

「商品交換は市場を媒介とする個々の生産者たちの結びつきを表現する。貨幣はこの結びつきがますます緊密になってゆき、個々の生産者達のあらゆる経済生活を一つの全体として切りはなせないように結合していることを意味する。資本はこの結びつきのいっせいの発展を意味している。つまり、人間の労働力が商品になるのである。」(『カー・マルクス』岩波文庫、P一〇一)

このように現象的には、労働力の商品化が、資本の発生そして実現の根本条件であるということは他方では、このことが、資本の発生と不断の結果であるということの意味している。このような一つの総合的な運動があるようにみえる。もちろん、この労働力の商品化↓労働力の商品化として資本の運動をとらえることは誤りであって、それはその運動の形式、外観にすぎない。まさしく問題は、なぜこのような外観をとらえて資本の運動があらわれるか、であるが、それは、いま、ここでは問題ではない。

「……資本家はまた、たえず労働力を主体的な——それ自身の対象化および現実化の手段から引離された、抽象的な、労働者の単なる生身のうちに実存する——富の源泉として、簡単にいえば、労働者を賃労働者として、生産するのである。この、労働者のたえず再生産または永遠化は、資本制生産の不可欠の条件である。」(『資本論』第一巻

という点だけであり、かくて両者は法律上平等な人格である。」(『資本論』第一巻P一七五)

「労働者と資本家との交換は単純な交換であって、どちらも等価物を受けとる。すなわち一方は貨幣を受けとり、他方は商品を受けとるが、この商品の価格は、それに支払われた貨幣と正確に相等し。」(『経済学批判要綱』第二分冊大月書店、P二〇三—四)

「労働力の購買と販売とがその限界内で行なわれる流通または商品交換の部面は、事実上、真の天賦人權の樂園であった。ここでもつばら支配的に行なわれるのは、自由、平等、所有、およびベンサム(功利主義)である。自由、けだし、一商品、たとえば労働力の購買者と販売者は彼らの自由意志によってのみ規定されているのだから。彼らは自由な、法律上同じ身分の人格として契約する。契約は、それにおいて彼らの意志が共通な法的表現を与えられる最終結果である。平等、けだし、彼らは、商品所有者としてのみ相互に關係しあい、等価物を等価物と交換するのだから。所有、けだし、誰もみな、自分のものだけを自由に処分するのだから。ベンサム、けだし、双方のいづれにとっても肝要なのは、自分のことだけだから。彼らをついて關係させる唯一の力は、彼らの自利、彼らの特殊便益、彼らの私的利益の力である。」(『資本論』第一巻P一八四)

こうして賃労働と資本との間の「交換」の第一の局面は終る。交換の第二の局面、これは説明を要する。マルクスは、賃労働と資本との「交換」を、二つの局面に分けて分析し、批判しているが、ブルジョア経済学者たちは、これをいっしょくたにして、資本家は労働者に賃金を支払い、労働者は、資本家に労働を売るといふふうにいふらしている。労働にたいする支払いとしての賃金ということが、過去一貫した彼らの主張である。労働と労働力を明確にマルクスが区別したゆえに彼らは労働力という言葉を使わざるをえないが、しかし、それも、過去一貫した彼らの主張を押しとおすカクレミノとして使われるのである。労働者は、資本家に生きた労働を商品として売るのはない。あくまで商品は、労働力である。だから、労働力の売買の局面と、この労働力の現実の力の発現、生きた労働としての労働そのものの局面と(そしてこれは、資本として定在する過去の死んだ労働による生きた労働の吸収である)は、まったく異った、別の次元の問題である。

「資本と労働との交換を考察すれば、それが、形式的にばかりでなく質的にも異なる、そしてそれ自体対立した次の二つの過程にわかれてゐることがわかる。すなわち——(1)労働者は、彼の商品、労働、つまり他のすべての商品と同じように、商品としてやはり一つの価値をもっている使用価値を、資本が彼に譲渡する一定額の交換価値、一定額の貨幣と交換する。(2)資本家は、労働自体、すなわち価値を指定する活動としての、生産的労働としての労働を交換で手に入れる。すなわち彼は、資本を維持し、倍化させ、そしてそれとともに資本の生産力、資本を再生産させる力、資本自体に属する力となる。この、生産力を交換で手に入れる。この二つの過程の分離はきわめて明白であるので、これらの過程は時間的に別々におこなわれうるし、また同時に同時にこなされることを必要としない。第一の過程は、第二の過程がいよいよはじまるまえに、完了しうるのであるし、またある程度まではたいてい完了している。第二の行為の完了は、生産物の完成を前提としている。……第二の行為と第一の行為との区別——すなわち資本のかわからず労働の領有という特殊な過程が第二の行為である——は、まさしく資本と労働との交換の、貨幣が商品間の交換を媒介する交換との区別に他ならない。資本と労働との間の交換では、第一の行為が交換であり、まったく普通の流通に属している。第二の行為は、質的に交換とは異なる過程であり、そしてそれは一般にある種の交換と呼べないことはないが、それは言葉の濫用というものである。それは直接に交換に対立しており、本質的に別の範ちゅうである。」(『経済学批判要綱』第二分冊大月書店、P一九六七)

「……貨幣の資本への転化は、二つの独立な、まったく違った部分に属し、互いに分離されて存在する過程に分かれる。第一の過程は商品流通の面に属しており、したがって商品市場で行なわれる。それは労働能力の売買である。第二の過程は買われた労働能力の消費、すなわち生産過程そのものである。第一の過程では、資本家と労働者とはただ貨幣所有者と商品所有者として相対しているだけで、彼らの取引は、すべての買い手と売り手との取引がそうであるように、等価物どうしの交換である。第二の過程では労働者は一時的に資本そのものの生きている成分としてあらわれ、交換の範ちゅうはここではまったく排除されている。なぜなら、資本家は生産過程のいっさいの要因を、

物的なそれも人的なそれも、この過程がはじまるまえに買入れられてわがものにしていくからである。しかし、この二つの過程は、独立に相並んで存在するにもかかわらず、互いに制約しあっている。第一の過程は第二の過程を準備し、第二の過程は第一の過程を仕上げるのである。」(『直接的生産過程の諸結果』国民文庫P五二)

「第二の過程」あるいは「第一の行為」についてはまだ解説をしていない段階ではいささか先走りすぎることまで引用されていたが、ここで改めて賃労働と資本との「交換」の二つの過程の区別を強調し、そしてそのうえで「第一の過程」の分析が、あくまで「その限界内で行なわれる流通または商品交換の部分」に限定したうえでのことだという点をも強調しておいたのは理由があった。前者の強調はスターリニズムにたいする、そして後者の強調はその裏返しとしての宇野派にたいする党派闘争上の意義である。かんたんに言えば、スターリニズムの方は、かの「第一の過程」と「第二の過程」を厳密に区別せず、なんだかんだのいいながらも結局、第一の過程で厳密に価値法則が貫かれていることをあまいにしてしまい、「不当な」とか「不正な」とかのレベルで、資本—賃労働関係を批判せんとし、しまっているのである。

かかる違いはあるが、両者は共に資本—賃労働関係を、その運動の総体においてとらえていないブルジョアないし小ブルジョア経済学の立場なのであって、マルクスがまさしく批判・克服せんとした傾向なのである。もう少し詳しくわしくみてみよう。

スターリニズムは、たとえれば次のようなエンゲルスの言葉——
「……しかし、この剰余労働の生産物が剰余価値の形態をとるときにはじめて、生産手段の所有者が自由な……労働者を搾取の対象として自分の眼前にみえだし、マルクスによれば、生産手段は資本という独自の性格をもつこととなるのである。」(『反デューリング論』(下)岩波文庫、P一〇四)

——を中途半端に、一面的に、歪曲して理解し、そこから小ブルジョア経済学派の道に踏みこんでいったのである。彼らは剰余価値の生産というこ

とを誤って理解し、剰余価値の取得↓不払労働の取得↓不払労働・支払労働というぐあいによって、結局、剰余価値の搾取とは賃労働者が彼の労働全体にたいして支払われていない、というふうと考えてしまうのである。搾取の一面的な強調は、不払労働・支払労働(この両者の正しい意義については後にスターリニズム批判の項でくわしく述べるので参照せよ)の一面的な強調を生み、かくて労働力の価値の価格表現たる賃金は、彼の労働によって生みだされる価値(価格)よりも小であることの強調となり、彼の全労働時間の一部は無報酬で働かされていることの強調となる。つまり労働の支払か不払いに足をすくわれ、「労働者の支出した全部の労働が完全に支払いをうけるか」(ソ連邦科学院経済学研究所『経済学教科書』第一分冊、合同新書P一〇九)否か、が問題の中心であるかのように考え、こうして先の第一の過程たる労働力の売買をなにかしら「不当」「不正」なことのようによって考えてしまうのである。それゆえ彼らは第一の過程が、価値法則に貫かれており、だからそこに「不当」「不正」といったことで批判を向けるわけにはいかないものであり、にもかかわらず、その不当、不正とかの基準そのものに対立する関係に転化させる、あるいは逆に、かかる敵対関係にありながら、にもかかわらず、価値法則が貫かれていく、というこの運動に、無自覚である。彼らはだから資本—賃労働関係をその運動としての全体においてとらえ、そこで剰余価値を生産をとらえるのではなく、マルクス経済学批判の核心は剰余価値を生産の核心にあるということをもっとたく表面的に理解し、それだけを抽出し、かくてそれ独自の道をとって小ブルジョアブルジョア経済学の立場に合流したのである。

一方、宇野派の方はどうかというところ、宇野は、「純粹の資本主義社会でも資本の生産物として商品となるものではない」(『資本論と社会主義』P九)労働力が商品化するという点をおしだし、「この点を基軸とした全生産過程は、商品経済に特有なる法則性を与えられるのである」(『経済原論』P一三四)とする。だから「商品形態が資本主義社会の基本的な規定をなすということは、労働力が商品化することによって生産過程自身が商品形態を通して実現されると言うことにある」(『マルクス経済学原論の研究』P七三)とそういふに、さういふそれ自体をとれば、——たとえばマルクスが、「……貨幣の資本への転化は、二つの独立な、まったく違った部分に属し、互いに分離されて存在する過程に分かれる。……しかし、この二つの過程は、独立に相並んで存在するにもかかわらず、互いに制約

し合っている。第一の過程は第二の過程を準備し、第二の過程は第一の過程を仕上げるのである」(『直接的生産過程の諸結果』前出P五二)といている意味に限定すれば——正しい内容を述べてはいるが、しかし、その限定をこえ、形態に内容をあたえていくや誤謬に転化していかざるをえない。だから宇野が「……生産物ではなく、したがってまた本来商品ではない、人間の労働力をも商品とせざるをえないのであって、それ自体階級的形態とはいえない商品形態のうに階級関係を包摂することになる」(『資本論と社会主義』P二二七)というとき、その理論の逆立ち、白日のもとにさらされる。形態から内容を、価値関係(あるいは商品交換関係)から階級関係を導くという完全に転倒した考え方がでてくるわけだ。結局彼らも運動を理解していない。だからたとえれば、マルクスが『資本論』で、貨幣から資本への転化を論証する際に述べた次の有名な一句——
「だから資本は、流通から発生しえないのと同様に、流通から発生しえないものでもない。それは流通において発生しなければならぬと同時に、流通において発生してはならない」(『資本論』第一巻P一七三)

——を形式的にしか理解できないのだ。だから宇野は、労働力商品化とまったく同じ思考にしたがって、「……商品経済の原理を明らかにする経済原論」(宇野野は、『資本論』を本来そのようなものとしてあるのだと主張し、それに徹底しきっていないことをもって、マルクスを批判するのだが、当然のことながら、『資本論』は、そのようなものではまったくなくない。それは「近代社会の経済的運動法則を暴露すること」を究極目的とするものであり、つまり、資本—賃労働関係を、経済学批判としてあくからにするものなのである)は、当然にも流通論をもって始められ、生産論はこの流通形態によって把握された生産過程として、その次に展開されることになるのである」(『経済原論』P十六)などと言ってしまうのである。

ともあれ、宇野は、商品形態のうちに、階級関係を解消し、後者が前者に包摂されるというふう理解してしまっているのである。

以上、横道にそれだが、ついでかの第二の過程について説明せねばならぬ。貨幣所有者—資本家は、いったい何のために労働力を買ったのか。あらかじめ生産諸手段の準備されている作業場に、彼—労働者を連れていき、彼を働かせるためにだ。この作業場ではじめて、彼を働かせるということではじめて、資本家は労働力の使用価値を手に入れるわけだ。労働力の讓

渡ではなく、その力の現時的発現そのものが、真に資本家にとっての関心事である。第二の過程とはまさしく資本の生産過程である。

「労働力の消費は、他の各商品の消費と等しく、市場または流通部門の外で行なわれる。だから吾々は、貨幣所有者および労働力所有者といふに、この騒々しい、表面上でおこなわれていて誰の眼にもつゝ流通部門を見ずして、右の両者のあとについて、その入口には無用の者入るべからずと揭示されてある隠された生産の場所にはいつて行こう。」（『資本論』第一巻P一八四）

「この単純流通あるいは商品交換の局面……から訣別するに際し、わが登場人物たちの風はうはすでに幾らか変わってゐる様に思われる。さきの貨幣所有者は資本家として先に立ち、労働力所有者たちは彼の労働者としてその後につづく。——前者は、意味ありげに作り笑いをしながら、業務一途に。後者はあたかも自分自身の皮を売り渡してしまつていまやなめし皮にされること以外には何も期待できない者のように、おぼろげとぼろげながら。」（同前P一八四）

労働者と資本家との関係を『資本論』の当該部分で分析してゐるようなきわめて限定された局面で分析するだけでも、賃労働者の資本のもとへの経済的隷属関係が、見すかされるのだということが、マルクスによつてものみことと言ひあらわされてゐる。限定された局面の中でもその局面の総体を鋭くとらえるというこの重要性が、いかにも鋭い表現によつてあきらかに示されてゐる。

② 資本の生産過程

ここでは、資本のもとへの形態的包摂、実質的包摂としてあらわれる形態変化や、あれこれの内容的な変化については述べない。それらは、第三項の解説でくわしく述べられる。ここでは、資本の生産過程の抽象的な、核心的なことがらだけを述べるにとどめる。

「労働力の消費過程は、同時に、商品の、および、剰余価値の、生産過程である。」（『資本論』第一巻P一八四）

「……吾が資本家は、彼の購置した商品たる労働力の消費にとりかかると。すなわち彼は、労働力の担い手たる労働者をして、その労働により生産手段を消費させる。」（同前P一九三）

この消費過程は、それを一つの孤立的過程として分析するだけでも、つ

価値であり、かくて不断に貨幣は資本に転化し、資本は増殖する。

「資本家は、貨幣を諸商品——新たな生産物の質料形成者——または労働過程の要因——として役立つ諸商品——に転形することによつて、価値を、過去の対象化された死んだ労働を、資本に、自己を増殖する価値に、あたかも胸に恋を抱くかのように「働か」はじめる活気ある怪物、に転化させる。」（同前P二〇三）

全過程の結果は一方において資本家、しかも従来は価値以上の価値を取得した資本家、そして他方には過程に入るまゝと同じ労働者。過程の終りは過程の出発と同じである。しかもよくみると、ここでの資本家は、以前の彼より「肥え太つて」おり（富んでおり）、一方、彼ら労働者の方は、その個人としてみれば、ただ一日分を死んだ、その分だけ労働力を磨減させられたものとなつてゐる。過程の終りは過程の始まりであり、労働者は明日また生きていくためには、ふたたび自己にとつては唯一の商品である労働力を売らねばならない。労働力の商品化はふたたび労働力の商品化を導く。だから、資本の生産過程の内部では、労働者は労働を強制されるのであり、それ以外ではない。

「わが労働者は、生産過程にはいつたときとは違つたものとして、そこからでてくる、ということが認められねばならない。市場では、彼は「労働力」という商品の所有者として、他の商品所有者たちに対応した、——商品所有者に対する商品所有者。彼が自分の労働力を資本家に売つた契約は、彼が自由に自分自身を処分するのだといふことを、いわば判然と証明した。取引が終つたあとになつて、彼は「何ら自由な行為者」ではなかつたといふこと、彼が自由に自分の労働力を売る時間は彼がそれを売ること余儀なくされてゐる時間だといふこと、実際のところ彼の吸取者は「なほ搾取すべき一片の肉、一本の腱、一滴の血でもある限りは」手放さないとすることが、暴露される。」（同前P三一六）

かくて以上をまとめてみよう。

「現実の労働過程では彼（労働者）は、労働手段を自分の伝導器として役立て、労働対象を自分の労働がそこに現わされる材料として役立てる。まさにそうすることによつてこそ、彼は生産手段を生産物の合目的な形態に転化させるのである。ところが価値増殖過程の立場から見れば、事柄は違つて現われる。労働者が労働手段を充用するので

まり、過程の継続再生産過程として分析することがなくとも、次のような結果を導く。すなわち資本のもとへの労働の経済的隷属化の過程が、分析される。

「……労働過程は、それが資本家による労働力の消費過程として行なわれるときには、二つの独自の現象を呈する。労働者は、彼の労働の帰属者たる資本家の統制のもとで労働する。資本家は、労働が整然と進行し生産手段が合目的に使用されるように、かくして原料がちつともむだ使いされず労働用具が大切にされる——すなわち作業中のその使用によつて余儀なくされる限りでしか傷められない——ように見張つてゐる。／＼とところで第二に、生産物は資本家の所有物であつて、直接的生産者たる労働者の所有物ではない。資本家は、たとへば労働力の日価値を支払う。かくして労働力の使用は、他の各商品、……の使用と同じように、その日じゅう彼に属する。商品の使用は商品の購置者に属する。そして労働力の所有者は、事実上、自分の労働を渡すことによつてのみ、彼によつて販売された使用価値を渡すのである。彼が資本家の作業場にはいつた瞬間から、彼の労働力の使用価値が、つまり労働力の使用たる労働が、資本家に属したのである。資本家は、労働力の購買により、生きた酵母としての労働そのものを、やはり彼に属する死んだ生産物形成要素に合体させたのである。彼の立場からすれば、労働過程は、彼によつて購買された商品たる労働力の消費に他ならぬが、しかし彼は、この労働力に生産手段を付加することによつてのみ、それを消費することが出来る。労働過程は、資本家が購買した諸物のあいだの、彼に属する諸物のあいだの、一過程である。だから、この過程の生産物は、彼のぶどう酒倉における発酵過程の生産物とまったく同じように、彼に属する。」（同前P一九三〜四）

労働の消費過程はこうして終る。この過程の中で、もちろん決定的なのは、労働力という商品が、その使用価値そのものが価値の源泉であるという独自の性状を有し（同前P二七四）してあり、つまりその現実的消費そのものが労働の対象化であり従つて価値創造である（同前）こと、それだけではなく、労働力が「価値の——しかも、それ自身がもつよりも多くの価値の——源泉である」というこの商品の独自の使用価値であつた（同前P二〇二）。「労働力の価値と、労働過程における労働力の価値増殖とは、二つのあい異なる大いさである」（同前）り、こうした価値差額こそが剰余

なくて、生産手段の方が労働者を充用するのである。生きてゐる労働者自分の客体的な器管としての対象的な労働のなかに、自己を実現するのではなく、対象的な労働が生きてゐる労働を吸収することによつて自己を維持し、増殖し、そうすることによつて自己を増殖する価値すなわち資本となり、資本として機能するのである。生産手段は、ただ、できるだけ大きな量の生きてゐる労働の吸収者としてのみ現われる。生きてゐる労働は、ただ、既存の価値の増殖の、したがつて、その資本化の、手段としてのみあらわれる。そして……まさにそれだからこそ、やはり生産手段は生きてゐる労働に對立して特にすぐれた意味で資本の存在として現われるのであり、しかも今では生きてゐる労働に對する過去の死んだ労働の支配として現われるのである。まさに価値形成者として、生きてゐる労働は、絶えず価値形成過程において対象化された労働に合体されるのである。……それだから、このような価値を維持し新たな価値を創造する力は、資本の力なのであり、かの過程は、資本の自己増殖の過程として、また、むしろ労働者の窮乏化の過程として、現われるのである。なぜなら、労働者は、彼によつて創造される価値を、同時に彼自身にとつて外的な価値として創造するのだからである。」（『直接的生産過程の諸結果』前出P二九〜三〇）

「生産過程の内部において、資本は労働に對する——すなわち、みづからを裏証しつづつある、労働力または労働者そのものに對する——指揮にまで発展した。人格化された資本たる資本家は、労働者がその仕事を秩序正しく、しかるべき強度をもつておこなうように、見張りをする。／＼資本はさらに、労働者階級をして余儀なく彼ら自身の狭い範囲の生活欲望が命ずるよりも多くの労働をおこなわせる、一つの強制関係にまで発展した。そして、他人の勤勉の生産者として、剰余労働の汲出者および労働力の搾取者として、資本は、精力・無節度・および効果の点で、すべての従来の、直接的強制労働にもとづく生産制度を凌駕してゐる。」（『資本論』第一巻P三二四〜五）

「生産過程を労働過程の見地のもとで考察すれば、労働者は、資本としての生産手段に關係したのではなく、彼の合目的な生産的活動の単なる手段および材料としての生産手段に關係したのである。……生産過程を価値増殖過程の見地のもとで考察したときには、趣きが異なる。生産手段はただちに他人の労働の吸収のための手段に転化した。

もは、労働者が生産手段を使用するのではなく、生産手段が労働者を使用する。生産手段は、労働者により彼の生産的活動の質料的要素として消費される代りに、労働者を生産手段自身の生活過程の酵母として消費するのであって、資本の生産過程とは、自己を増殖する価値としての運動にほかならない。……貨幣の、生産過程の对象的要因・生産手段への単なる転形が、後者を、他人の労働および剰余労働にたいする権源および強制権に転化させる。」(同前P三二五)

この局面でみる限りにおいても、賃労働の資本のもとへの経済的隷属は深まっている。

以上、資本の生産過程を、蓄積過程からいちおう切りはなして、概略をみてきたわけだが、このように、資本の運動の全体としてみることに、従来しばしばいわれるところのマルクス経済学批判の核心たる剰余価値生産の秘密の暴露というものを十分に理解しよう。

「マルクスは、……どのような仕方でも剰余価値が発生するか、諸商品の交換を規制する法則の支配するところではどのような仕方でも剰余価値が発生できるか、ということを示すことを証明し、それによって今日の資本主義的生産様式とそれにもとづく取得様式との仕組みを暴露し、今日の全社会秩序がどこを中心にした結晶核を裸にして見せたのである。」(『反デューリング論』(前出P一〇〇))

「剰余価値についての学説はマルクスの経済学説の土台である。」(『カール・マルクス他』岩波文庫P一〇一)

これらのエンゲルスやレーニンの言明を皮相に理解してはならない。スターリニズムのように理解してはならない。この点を深く理解しえないがゆえに、ここ数年の資本主義批判の深化の中で、スターリニズム批判を遂行しえず、それにこびを売って、屈服していく部分が出てきたのであり、また逆に、賃労働と資本関係を、前者の後者への隷属一般に解消し、先のエンゲルスやレーニンのいったことの内容を捨てた部分が出てきたのである。前者は一向健康なプロ革派の面々であり、後者は、プロ独編集委一紅旗派の連中であり、仏派はその中間で動揺しているのだ。われわれはこの点をはっきりとさせねばならぬ。

③ 剰余価値生産の秘密の暴露——労働力と労働、労働の二重性

剰余価値生産の秘密の暴露がなぜ「マルクスの経済学説の土台である」

階に結びつけられていただけだということ。(2)階級闘争は必然的にプロレタリアートの独裁に導くということ。(3)この独裁そのものは、ただ、いつさいの階級の廃止と無階級社会への通過点をなすにすぎないということ。(『資本論書簡』①国民文庫P一四二)

われわれが傍線を引いた部分に注目してほしい。マルクス以前にすでに「諸階級の経済学的な解剖」がおこなわれ(不十分ではあれ)、それに照応して階級の存在、階級闘争の存在がすでに知られていた、ということである。しかもここで注意をしておく必要のあるのは、マルクスはこの手紙を書く以前、一八五〇年末から一八五一年中に本格的な経済学にとりくみ、十四冊にもほる龐大な抜粋ノートをつくっているということ、したがって、マルクスは、すくなくとも先の手紙を書いた時点では、後の『経済学批判要綱』『経済学批判』『資本論』へといったって全面展開される批判的作業の基礎をほぼなしていったということ、これである。たとえれば次のような手紙にもそれは見てとれる。

「……僕はあと五週間のうちには経済学のごたごたを全部片づけられるところまでできている。もしこれができれば、家では経済学を仕上げ、博物館ではほかの科学を勉強することにしよう。経済学にはうんざりしてきた。要するに、この科学はA・スミス、D・リカード以後は少しも進歩していないのだ。たとえ個々の研究では、しかも往々にして非常に細かい研究では、たぐさんのことがなされているにしろだ。」(エンゲルス宛一八五一年四月二日付、同前P九三)

「……僕が手を加えている材料は恐らく多方面にわたっているもので、どんなに努力しても六〜八週間からなければ片づけられそうもない。……だが、なにがどうあろうと、仕事は結末に向って突進している。」(ツァイデマイヤー宛一八五一年七月二七日付、同前P九八)

「……僕はいま経済学の仕上げに取り掛かっている……」(エンゲルス宛一八五一年十月十三日付、同前P一二六)

このように、すでにかのツァイデマイヤーにあてて手紙を書いた時点では、そのもつとも偉大な批判的作業の基礎を十分にたもつていたのであり、その上に立って、マルクスは、自分よりまえに、すでにブルジョア学者たちが、階級・階級闘争の存在を指摘し、階級の経済学的解剖をやってきている、と言っているのだ。

すでにブルジョア学者たちがなしてあげたことはおおよそ次のことだ。

といわれるのか、といえば、そのことによって始めて資本主義社会ブルジョア社会という一歴史的な社会構成体の発展を、一つの自然史的過程として科学的にあらわすにえられたからである。つまり、そのことによって「近代社会の経済的運動法則を暴露することが」(『資本論』——第一版への序言、P八)、完全に科学的にあらわすこととなったからである。そのときどきの人間の思惟や、個人的思惑等に依拠することなく、あくまで客観的な、人間の意志からは独立した自然史的過程としてブルジョア社会の経済的運動法則を説明すること、これがなしとげられたのである。だからきわめて当然のことだが、ただ単に搾取のしくみをあらわすに止まらないうこと、問題の中心は、資本の総体の運動を説明しえたいということにある。古典派経済学がすでに説明しえたいもろもろの事実のうえに立って、それらいつさいを総括し、批判的にとらえかえすことにより、偉大な新たな説明をなしとげたのである。

古典派経済学者もすでに多くのことをなしとげていた。ただ彼らはそれを首尾一貫した科学的な研究によって基礎づけえなかつただけである。彼らはある点までは科学的な、批判的な態度をもってことをなしとげたけれども、ある地点までくるとつねに、人間の思惟や個人的行為等の中へ逃げこみ、科学的批判的態度をなげ捨てたのである。この点をはっきりさせておかなければ、マルクスの『経済学批判』を正しく理解することはできず、スターリニズムのようなマルクスの言葉で飾りたてたブルジョア経済学(小ブルジョア経済学)——マルクスのはるか以前のレベルへの後退——が横行することになる。

したがって、ここでマルクスとスミス、リカードに代表される古典派経済学との関係を一べつし、そのことによって、剰余価値生産の秘密の暴露はマルクス経済学説の土台である」という意味をはっきりさせよう。

マルクスはあの有名な一八五二年三月五日付のツァイデマイヤーあての手紙で次のようにいっている。

「ところで僕のことだが、現代社会の諸階級の存在にせよ、諸階級相互間の闘争にせよ、それを発見したという功績は僕のものではない。僕よりもずっと前に、ブルジョア歴史家たちは、この階級闘争の歴史的な発展を、そしてブルジョア経済学者たちは諸階級の経済学的な解剖を記述している。僕が新しくやったのは、次のようなことを論証することだった。(1)諸階級の存在はただ生産の特定の歴史的な諸発展

(1) 賃労働と資本との敵対関係——前者の後者への隷属関係を——を、さまざまな事象においてしかもますます深化・拡大するものとして述べたこと、したがって、(2) 剰余価値の存在を知っていたこと——だがもちろん、それをそれとして把握しえただけでは決してなく、その特殊な諸形態(利潤、地代等)として——、(3) しかもその剰余価値が、労働者にはなんの関係もなく、土地所有者、資本家等によってのみ取得されること、(4) このことを理論的に基礎づけるものとして労働価値学説を展開したこと。その内容として、資本と賃労働との対立関係を、蓄積された労働と生きた労働との対立としてとらえ、両労働を労働一般として把握したこと。

以上、きわめて乱暴に概略をのべたが、マルクス以前に、古典派経済学者たち——とくにA・スミス、D・リカード——は多くのことをなしとげていたのである。だが彼らは、敢然たる事実として確認され、それゆえ種々に部分的には分析もなされた資本のもとへの賃労働の、ますます深まり、拡大する経済的隷属関係を、首尾一貫して科学的に、経済学上に説明しえなかつたのであり、これは、なによりも彼らの最良の成果でもあった労働価値学説(価値論)における不十分さ、混乱によっていたのである。

ポイントをはなれたのか。先に①で引用したエンゲルスの次の言葉をおもいおこそう。

「……この剰余労働の生産物が剰余価値の形態をとるときにはじめて、生産手段の所有者が自由な……労働者を搾取の対象として自分の眼前に見出し、商品を生産する目的で彼を搾取するときにはじめて、マルクスによれば、生産手段は資本という独特な性格をもつことになるのである。」(『反デューリング論』)

つまり、剰余価値であって剰余生産物ではないということ、これである。古典派経済学は価値論を首尾一貫して、剰余価値——その生産にまで貫徹させえなかつたのである。その難点は具体的には次の二点に明瞭にあらわされた。第一は労働概念から労働力を明確に確定しえなかつたこと、そして第二は商品で表示された労働の二重性について明らかにしえなかつたこと、これである。

まず第一の点からみよう。

古典派経済学が、その価値論を展開したとき、労働一般を抽出し、その労働こそが、価値の唯一の源泉である、としたのであったが、そのとき、だれの眼にもつく最大の難点は次の点にあった。労働そのもの、生きた労働

働の、商品としての労働の価値はどうなるか、ということである。そこで、彼らは、諸商品の価値は、その生産費に等しい、という規定をかりにもちだした。では、労働の生産費とはなにか？「この問題を解くためには」とエンゲルスはいう。「経済学者たちは論理に少しばかり暴力を加えねばならぬ。労働そのものの生産費——これは残念ながら明らかにされえない——の代りに、彼等は今や、労働者の生産費とは何かということの研究する」(『賃労働と資本』一九八一年版への前書き、岩波文庫P二二)。そしてこの行きつく先は周知のように、同じ労働が、労働者にとつての価値(賃金で表示される)、と資本家にとつての価値(支払った賃金+利潤で表示される)というまったく異なる価値をもつという拡大された矛盾である。したがってなによりもマルクスによってなしたとげられたのは、労働からの労働力の区別であった。こうして剰余価値の源泉があらわらなくなっていく。だが、それだけでは不十分であった。というより、労働を労働力から区別しうるためには、まだ価値論における別の作業を必要とした。

ここで第二の点に入る。
すでに述べたように、古典派経済学は、資本を蓄積された労働として把握し、それを生きた労働とともに労働一般とした。そしてここから剰余価値について接近せんとした。だが、蓄積された労働」という把握自体が明白にも語っているように、不断に資本をモノとして考えてしまう傾向に足を引っぱられてしまうのと同様に、剰余価値を純粋に社会的諸関係の抽象的概念の価値においてとらえることなく、一方で、素材的富(使用価値)との混同におちいり(重農学派に典型であり、スミス自身も、この混同から抜けきってはいない)、一方、剰余価値の特殊な現象形態である利潤、地代等との混同におちいっていたのであった。

この点があきらかにならなければ、すでに彼らによって、直観的即時的につかまれていた搾取、剰余価値、賃労働の資本のもとへの隷属といった事態は、労働価値説から首尾一貫して展開されえないのであった。

剰余価値を剰余価値としてつかむこと(いっさいの素材的富からはもちろん、利潤、地代といったことからも別されたそれ)が問われていたのであり、だからマルクスは価値を価値として明確にとらえきつたうえで、それをなしとげたのであった。これはまた換言すれば、『資本論』冒頭の一句——「資本制生産様式が支配的に行なわれる諸社会の富は、一つの『膨大な商品集成』として現象し、個々の商品はかかる富の原基形態として

現象する」ということの説明、すなわち商品——価値論の批判的説明であった。

価値が、第一に素材的富、使用価値からは完全に区別され、自然的規定性をみじんもふくまぬものとして、また第二に、価格から区別された交換価値からも区別されたものとして確定されねばならなかった。価値とは純粋に社会的諸関係の反映であり、労働諸生産物をその質のどんぶりまに抽象したときの「幻影のような同じ対象性に他ならず、無区別な人間の労働の、すなわちその支出の形態に係りのない人間の労働の支出の、単なる凝結に他ならない」(『資本論』第一巻P四二)ものである。商品がこの価値と、自然的対象性としての使用価値との統一としてある以上、この「商品」を「労働」に還元するだけでは十分ではないのであって、それを二重の形態における労働に還元することが必要なのである」(『直接的生産過程の諸結果』前出P三六)。

この商品で表示される労働の二重性の批判的説明によってこそ、価値を純粋に社会的概念として確定しえたのであり、かくて、剰余価値を剰余価値として把握でき、剰余価値生産の秘密の暴露がなされられたのである。資本の全運動が、これを軸点として説明されたというわけである。

マルクスのいうように「商品に含まれている労働の……二者闘争の本質は、私(マルクス)により初めて批判的に指摘されたものである。この点は経済学を理解するための軸点である」(『資本論』第一巻P四八)。
このようにトータルに考えてこそ次のようなマルクスの言葉は理解されるであろう。

「僕の本『資本論』のなかの最良の点は次の二点だ。(1)これには事実のいっさいの理解がもたれている(2)すぐ第一章で強調されているような、使用価値で表わされるか交換価値で表わされるかに従っての労働の二重性、(2)剰余価値を利潤や地代などというその特殊な諸形態から独立に取り扱っているということ」(エンゲルス宛一八六七年八月二四日付『資本論書簡』前出P五六)

「……この本の根本的に新しい要素……それは次の三つだ。(1)以前のすべての経済学が、地代や利潤や利子という固定的な形態をもっている剰余価値の特殊な諸断片を、始めから、与えられたものとして取り扱っているのとは反対に、僕は、まず第一に、すべてこれらのものがまだ分解しないでいわば溶解状態に存在しているところの、剰余価値の一般的な形態を取り扱っているということ。(2)商品が使用価値と交

換価値との二重物だとすれば、商品に表わされる労働も二重の性格をもっていないなければならない、という簡単なことを経済学者たちは例外なく見落していたのだが、他方、スミスやリカードなどにおけるような単なる労働への単なる分解は至るところで不可解なものにぶつからざるをえない、ということ。これこそは、じつに、批判的な見解の秘密の全部なのだ。(3)はじめに賃賃が、その背後に隠れている関係の非合理的な現象形態として示され、そのことが労賃の二つの形態である時間賃金と出来高賃金とによって正確に示される、ということ」(エンゲルス宛一八六八年一月八日付『資本論書簡』前出P一一二—一一三)

スターリニズムはいま述べた点についてほとんどなにも理解しえていない。彼らは、剰余価値生産の秘密の解明を一面的に歪曲して理解し、マルクスの全批判的作業の中に位置づけえない。だからこそ剰余価値生産の秘密の解明は搾取のしくみというぐあいに小ブルジョア告発主義に転落していくのだ。

④ 資本の蓄積過程

賃労働——資本関係を以上に述べてきたような局面に限ってみても、つまり再生産過程を度外視した局面だけからみても、前者の後者への経済的な隷属化の過程が、手にとるようにはみられた。ここでは、この過程を、再生産過程からとらえかえてみて、この関係の総括的内容を把握しておこう。単に再生産過程を単純再生産過程としてみただけでも、過程の回復の一定の継続のあとには、資本は、その物質的諸成分の変化の如何にかかわらず、価値としては、過去の不払労働によって表示されたものとなる。出発点の資本の価値は、過去の剰余価値によって完全にとってかわられる。

「……おおよそ蓄積なるものを全く度外視しても、生産過程の単なる継続または単純再生産によって、長かれ短かれの期間の後には、どの資本も必然的に蓄積された資本または資本化された剰余価値に転化される。資本は、それが生産過程にはいつた時にはその充用者が働いてえた財産だったとしても、早晩、等価なしに取得された価値、または、他人の不払労働の——貨幣形態をとるか否かを問わず——物質化、となるのである」(『資本論』第一巻P五九八)——この点、スターリニズム批判の項参照。

したがって、資本の可変部分、労働者にとっては賃金として支払われ

価値は、遅かれ早かれ過去の自分たち(労働者階級)の不払労働部分となるのであり、つまり生活手段として彼らが手に入れるものは、資本家階級が等価なしに取得した労働による諸生産物なのであり、だから、彼ら(労働者たち)は、生きていくためには、つねに、自分たちの過去の不払労働を、買ひもどさなければならぬのである。しかも、それは彼らが、新たに不払労働を資本にあたる限りにおいてのみそうなのである。

かくて、単純再生産の過程からみただけでも、賃労働——資本関係がたえず更新され、永遠化される。

「はじめには出発点にすぎなかったものが、過去の単なる継続——単純再生産——に媒介されて、資本制生産の独自の成果として絶えず新たに生産され永遠化される。一方では、生産過程はたえず質料的富を資本に、資本家のための価値増殖および享楽手段に、転化させる。他方では、労働者はつねに生産過程から、彼がそこにはいつたままの姿で——富の源泉ではあるが、この富を自己のために実現するあらゆる手段を奪われたものとして——出てくる。彼自身の労働は、彼が過程にはいる前に彼自身から疎外され、資本家に取得され、資本に合体されているので、過程でたえず他人の生産物に対象化される。生産過程は同時に資本家による労働力の消費過程であるから、労働者の生産物はたえず商品に転化されるばかりでなく、資本に——価値創造力を吸収する価値に、人格を購買する生活手段に、生産者を使用する生産手段に——転化される。だから、労働者自身は、たえず客体的富を資本として、彼にとつては外的であった、彼を支配し搾取する力として、生産するのであり、資本家はまた、たえず労働力を主体的な——それ自身の対象化および現実化の手段から引離された、抽象的な、労働力の単なる生身のうちに実存する——富の源泉として、簡単にいえば労働者を賃労働者として、生産するのである」(同前P五九八—九)この隷属は、だから単に直接的生産過程の内部でのことではない。「……社会的立場からみれば、労働者階級は、直接的な労働過程の外部でも、死んだ労働用具と同じように資本の附属物である。彼等の個人的消費でさえも、特定の限界内では、資本の再生産過程の一契機たるにすぎない。しかもこの過程は、これらの自己意識ある労働用具が逃走しない限り、彼らの生産物をたえず彼らの極から資本の反対極に遠ざける。……によって配慮する。個人的富は、一方では、彼等自

身の維持と再生産のために配慮し、他方では、生活手段の蕩尽によって労働市場における彼等のたえざる再現のために配慮する。ローマの奴隷は鎖によってその所有者に繋がれていたが、賃労働者は見えないうえに、彼等によってその所有者に繋がれている。彼等の独立という仮象は、個々の雇主のたえざる変動と、契約という法的擬制によって維持されるのである。」(同前P六〇一〜二)

まとめ

「かくして資本制生産過程は、それ自身の進行によって、労働力と労働条件との分離を再生産する。かくすることによってそれは、労働者の搾取条件を再生産し、永遠化する。それはたえず労働者をして生きるために労働力を売ることを余儀なくさせ、たえず資本家をして致富のために労働力を買うことを得せしめる。資本家と労働者とを購買者および販売者として商品市場で対応させあうものは、もはや偶然ではない。後者をたえず自分の労働力の売り手として商品市場に投げ返し、彼自身の生産物をたえず前者の購買手段に転化させるといふことは、過程そのものの筋書きである。事実上、労働者は、彼が自己を資本家に売る前に資本に属している。彼の経済的隷属は、彼の自己販売の周期的更新や、彼の個人的雇主の交換や、労働の市場価格の動揺によって、媒介されると同時に隠蔽されているのである。だから資本制生産過程は、関連において考察すれば、すなわち再生産過程としては、商品を生産するばかりでなく、剰余価値を生産するばかりでなく、資本関係そのものを、——一方には資本家を、他方には賃労働者を、生産し、再生産するのである。」(同前P六〇六〜七)

かかる資本のもとへの賃労働の経済的隷属は現実の資本の再生産過程、つまり拡大再生産過程(蓄積過程)をもふくめてきたとき、よりはっきりと拡大され、深化されるものとして把握される。はじめ自由、平等、所有、ペンサムを原則とする「真の天賦人權の楽園」として見えた賃労働と資本との交換の過程は、等価交換の仮象をもつにすぎないその反対物に完全に転化する。しかも商品交換の法則をまったくそこなわずに。

「……各個の取引がいつでも商品交換の法則に照応し、資本家はたえず労働力を購買し、労働者はたえず労働力を販売する——しかもその売買は価値通りに行なわれると仮定しよう——かぎりには、明らかに、商品生産および商品流通にもとづく取得法則または私的所法則は、過程の中では極めて偏狭唾棄すべき専制支配に彼を服せしめ、彼の生活時間を労働時間に転化させ、彼の妻子をジャガノートの車輪のもとに投げ入れるのである。ところが、剰余価値生産のすべての方法は同時に蓄積の方法であり、蓄積のあらゆる拡大は逆に右の方法の発展の手段となる。だから、資本が蓄積されるにつれて、労働者の状態は、彼の給与がどうあろうとも、——高かろうと低かろうと——悪化せざるをえないということになる。最後に相対的過剰人口または産業予備軍をたえず蓄積の範囲および精力と均衡させる法則は、ヘンライストスのくさびがプロメテウスを岩に釘づけにしたよりも一そう固く、労働者を資本に釘づけにする。それは、資本の蓄積に照応する貧困の蓄積を条件づける。だから、一方の極での富の蓄積は、その対極では、すなわち、自分自身の生産物を資本として生産する階級の側では、同時に、貧困・労働苦・奴隷状態・無知・野性化および道徳的墮落の蓄積である。」(同前P六八〇)

かくて、われわれは、次の点をふたたび強調しておかねばならない。賃労働—資本—関係の批判にわたる方法的核心は、その関係の運動総体において批判する(とらえる)こと——資本を全運動において批判すること——であって、直接的生産過程や単純な流通過程等々に分解して、個々の批判することでも、また、そのように批判された諸過程を「関係」づけることでもない。かかる観点をしっかりと堅持してこそ、スターリニズム、宇野、黒田等を根本的に批判しうるのである。

まさしく、資本のトータルな運動において、賃労働が資本のもとへ経済的に隷属していることが見ぬかればならぬのであって、スターリニズムのような、直接的生産過程での搾取へのかの関係の切りちぢめや、宇野のような階級関係を価値関係へおしこめてしまうことや、また黒田のような、直接的生産過程に階級関係をみて、その結果から労働力の売買は仮象だとする見方等、すべて誤った批判でしかない。だからこういつた人々は、どうしても無視できない『資本論』の蓄積過程の叙述——賃労働が資本のもとに隷属していることを暴露しているそれら——を、不純なものとして切りすてるか、あるいは、直接的生産過程のみ軸として、そこからみだ蓄積過程を歪曲して理解するか、ということになるのである。前者はいうまでもなく宇野であり、後者は、スターリニズム、黒田である。

それ独自の、内的な、不可避的な、弁証法によって、その正反對物に転変する。本源的操作として現われた等価物どうしの交換は、一変して、仮象的のみ交換されるようになる。けれど、労働力と交換された資本部分そのものは、第一には、等価なしに取得された他人の労働生産物の一部分にすぎぬのであり、第二には、その生産者たる労働者によって填補されねばならぬばかりでなく、新たな剰余をとまなつて填補されねばならぬからである。つまり、資本家の労働者との交換関係は、流通過程に属する仮象に過ぎぬもの、内容そのものとは無縁であつて内容を神秘化するにすぎない単なる形式となる。労働力のたえざる売買は形式である。その内容は、資本家が、たえず等価なしに取得するすべに対象化された他人の労働の一部分を、より多量の生きた他人の労働とたえず再び転換するということである。本源的には所有権は自己労働にもとづくかで見えた。少くともかかる仮定が為されねばならなかった。けれど、平等な権利を有する商品所有者たちのみが対立しあうのであって、他人の商品を取得する手段は自己商品の譲渡のみであり、しかも商品は労働によってのみ生産されるものだからである。所有はいまや、資本家の側では他人の不払労働またはその生産物を取得する権利として、労働者の側では自分自身の生産物を取得することの不可能性として、現象する。所有と労働との分離は、外観的には、それらの同一性から生じた一法則の必然的結果となる。」(同前P六一二)

さらに資本の蓄積過程は、生産過程の内部におけるもろもろの変化と、そして、階級分化の拡大(内包的にも、外延的にも)をとまなないながら、ますます、賃労働の資本のもとへの隷属を拡大し、固定化し、深めていく。この点については、第三項の解説でくわしく述べよう。ここでは結果を述べるにとどめたい。

「……資本主義制度の内部では、労働の社会的生産力を高めるすべての方法は個々の労働者を犠牲にして行なわれるのであり、生産を進展させるすべての手段は生産者の支配および搾取手段に転変し、労働者を部分人間に不具化させ、彼を機械の附属物に格下げし、彼の労働の苦痛をもって労働の内容を破壊し、自立的機能としての科学が労働過程に合体されるにつれて労働過程の精神的諸機能を彼から疎外するのであり、それらの方法・手段は、彼の労働諸条件をねじ歪め、労働

⑤ 資本の原始的蓄積について——綱領におけるその意義は如何——

資本の原始的蓄積過程について簡単にまず確認しておこう。それは歴史上資本がどうして発生したか、その出発点をなすものとしての蓄積——だから④で分析されたものと区別されるそれ——、つまり換言すれば、一方において貨幣所有者(したがって、貨幣、生産—生活手段所有者)、一方において労働力以外売るべきなものもたぬ裸一貫の労働者(なぜ相対することとなつたかの歴史的根拠である)。

「それ(資本)の歴史的な実存諸条件は、商品流通および貨幣流通ともには決して定まれない。資本は、生産—および生活手段の所有者が、じぶんの労働力の販売者としての自由な労働者を市場で見いだす場合のみ成立するのであり、そしてこの歴史的な条件は一つの世界史を包括する。だから資本は、そもそもから、社会的生産過程の一時代を告知する。」(『資本論』第一巻P一七八)

「貨幣や商品が最初から資本でないことは、生産手段や生活手段がそうでないのと同じである。それらのもは資本への転化を必要とする。だが、その転化そのものは、つぎの点に帰着する一定の事情のもとでのみ行われうる、——というのは、一方には自分の所有する価値額を他人の労働力の購入によって増殖せねばならぬ貨幣、生産手段および生活手段の所有者、他方には自分の労働力したがって労働の販売者たる自由な労働者という二つの非常に異なる種類の商品所有者が対応し接せねばならぬという事情がこれである。……資本関係は、労働者と労働実現条件の所有者との分離を前提とする。資本制生産がひとたび自己の足で立てば、それは、右の分離を維持するばかりでなく、ますます増大する規模でそれを再生産する。だから、資本関係を創造する過程は、労働者を彼の労働条件の所有から分離する過程——すなわち一方では社会的な生活—および生産手段を資本に転化し、他方では直接的生産者を賃労働者に転化する過程——以外のなものでもありえない。だから、いわゆる本源の蓄積は、生産者と生産手段との歴史的な分離過程以外のもではない。それが『本源の』なものとして現象するのは、けれど、それが資本の——および資本に照応する生産様式——の歴史をなすからである。」(同前P七二〜三)

「自然は、一方に貨幣—または商品所有者を、他方の側に単なる

自己労働力所有者を、産みだしはしない。この関係は、自然的関係ではなく、また、すべての歴史時代に共通な社会的関係でもない。それは明らかに、むしろ、先行せる歴史的發展の成果であり、幾多の経済的変革の——社会的生産の全一連の古い諸構造の滅亡の——産物である。」(同前P一七七)

「本源的蓄積の歴史において画期的なものと云えば、資本家階級の自己形成に成り代わつて役立つすべての変革がそうであるが、わけても、人間大衆が突然かつ暴力的に彼等の生活維持手段から引き離されて無一物をプロレタリアとして労働市場に放りだされる瞬間がそうである。農村生活者・農民・からの土地収奪は全過程の基礎をなす。この収奪の歴史は、国が異なれば異なる色彩をおび、また、順序を異にし歴史的時代を異にする相異なる諸段階を通過する。」(同前P七五四)

「……個人的で分散的な生産手段の社会的に集中された生産手段への転化、したがって多数者による小量の所有の少数者による大量の所有への転化、したがって人民大衆からの土地や生活手段や労働用具の収奪、——人民大衆のこの怖るべき且つ非道な収奪こそは、資本の前史をなす。この収奪は一連の暴力的方法を包括するのであって、……直接的生産者の収奪は無慈悲な野蛮をもつて、また、最も賤しむべき・最も不浄な・最も陋劣で腹黒い・激情の衝動のもとで遂行される。みづから働いて来た・いわば個々独立の労働個人と彼の労働諸条件との癒着にもとづく・私的所有は、他人の・しかし形式的には自由な・労働の搾取にもとづく資本制的私的所有によって、駆逐される。」(同前P八〇二)

それゆえ、この一連の、
「収奪の歴史は、血と火の文字をもって人類の年代記に書きこまれてゐるのである。」(同前P七五三)

かかる過程は、資本制生産様式が支配的におこなわれてゐる社会においては、種々様々の色合の相異、歴史的順序の相異、諸段階の相異をみせながらも、存在してきた過程であった。では、それは現在のわれわれ、——商品生産が全世界を覆い、資本主義的生産関係が全世界の決定的な支配を獲得している時代のわれわれ——にとってはいかなる意義をもつか、そして第二に、そのわれわれの掲ぐべき党綱領にとつての意義はいかなるものか、これが問題である。われわれはこの過程に特別な意義を見いだして

ということも、自立的運動ということにおいて、そこで説明されてしまひ、原蓄過程のもつ特殊な意味でのその問い自体問われないことになってしまふ。せいぜいタイプ論としての段階論、および現状分析において、タイプ論、あるいは、具体的な一國においての説明としてのみふられるにすぎないであろう。これは宇野がそもその出発点からしてまったくマルクスとは違つた道を歩すすめてゐることの当然の結果であり、内容的には、価値関係の中に階級関係を包摂してとらえてゐることの結果である。
だが、これではこまる。現実の、賃労働—資本—関係が「なぜこうであつてそれ以外ではないか」にこたえるためには、どうしても原蓄過程にふれざるをえない。かの関係の創出はまったく歴史的なものであつて、その歴史的過程としての原蓄過程を説明することによつてこそ、現実にある関係が、「まさになぜこうであつてそれ以外ではないか」をあきらかにしえるのである。しかもこのことによつて、賃労働—資本—関係が、歴史的に、自然成長的な階級関係であることがはっきりと示される。かの関係がなにかしら特別なもの、永遠なもの、といったブルジョアジーの言い草がはっきりと粉砕される。

この点につきわかりやすい表現で書かれたフランス語版『資本論』邦訳は、林直道編訳『マルクス資本論第一巻フランス語版』(大月書店)より少し長い引用しておこう。

「この本源的蓄積は、原罪が神学において果してゐるとほとんど同じ役割を、経済学において果してゐる。……昔々の大昔、社会が二つの陣営に分かれていた時代があつた。すなわち一方には、勤勉で聰明で、とりわけ儉約の習慣を身につけたえりぬきの人々があり、また他方には、明けても暮れても浮かれて遊んでゐるたくさんのやぐざものがあった。前者がほとんど富をつみ重ね、後者がやがて無一文になつてしまつたのは言うまでもない。それから以後、どんなに休みなく働いても自分自身の身体で支払わなければならぬ大多数の人の貧困と、自分ではなにも仕事をしなくてもよくて、労働の全成果をうけとる少数の人々の富とが生じた、とされるのである。(中略)現実の歴史の年代記においては、征服や、隷属や、武器をもつてする略奪や、暴力による支配がつねに勝利を占めてきた。これに反して、もろもろの、おめでたい経済概論では、いつの時代にも牧歌が支配してきたことになつてゐる。それによれば労働の権利以外には、これまでどんな

いる宇野弘蔵、平田清明、黒田寛一をとりだし、それらの諸説を批判することでの問題をあきらかにしよう。

「……たかうプロレタリアートは、資本主義はなにか、ということ定義によつてまなぶのではなく(人々が教科書でまなぶようにではなく)、社会の發展とその諸結果を実践的に知ることによつて資本主義の諸矛盾をまなぶのだ……だから、われわれの綱領のなかでは、この發展を規定し、事態はこういふふうにする——できるだけ簡潔に、また鮮明に——かたならなければならぬ。それがまさにこうであつてそれ以外ではないかについての説明や、基本的な諸傾向の発現形態についてのくわしいことは、いっさい注解にゆずるべきである。」(『プレハラの第三次綱領草案にたいする意見』(綱領問題③)P九六)

すなわち、原蓄について、いっさい説明しないことは、現実の、賃労働—資本—関係が「まさになぜこうであつてそれ以外ではないか」を述べないことになるし、また一方、原蓄に、特殊な意味を付与して綱領本文中に掲げることには、賃労働—資本—関係を経済学教科書ふうりに、定義ふうりに述べることになる。前者はいうまでもなく宇野であり、後者は同じく平田、黒田である。

さて宇野は周知のように『資本論』を体系的に完結される原理論(『経済学方法論』P六二)として純化することを主張する。この「経済学の原理論は、如何なる時代の、如何なる国の資本主義にも直ちにそのままにはあらわれない純粋の資本主義社会の経済的運動法則として展開されるのであるが、しかし、如何なる時代、如何なる国の資本主義にしても、この原理的規定なくしては、科学的に分析し、解明しえないという、そういう基本的規定を与えるもの」(同前)とされ、すなわち、あたかも永遠にくりかえされる「自立的運動体の内部構造を明らかにするもの」として、特殊の体系をなす(同前P四二)とされる。それゆえ「本源的蓄積過程の問題は、資本主義の形成の歴史的過程であつて、……理論的規定には直接関連しない」(『資本論研究』P一九三)ので、それは「原理論」としての体系の外に出るのである」(『経済学方法論』P三六)と主張される。

このような主張にしたがえば、賃労働—資本—関係の核心はかの「原理論」の中に、永遠にくりかえされる自立運動としてあきらかにされることになり、先のレーニンという「なぜこうであつてそれ以外ではないのか」

致富の手段もなかつたのであるが、ただ今年だけは例外なのである。だがじつさいは、本源的蓄積の方法は、他のどんなものであつても、けつして牧歌的なものではないのである。資本家と労働者との公的な関係は、純粋に商取引的なものである。たとえ前者が主人の役を演じるとしても、それは一個の契約によるものであり、この契約によつて、後者はたんに前者に奉仕し、したがつて従属しただけではなく、彼自身の生産物にたいするあらゆる所有権を放棄したのである。だが、賃労働者はいっさいなぜこのような取引を行うのであろうか? それは彼が自分の個人的労働力以外には、この可能態にある労働以外には、なにももつていないからであり、他方、この可能態を具現するためには必要ならざる外的条件、すなわち、有用な労働行使のために必要な原料や労働用具、労働力の維持、その生産的活動への転化のために不可欠な生産手段の処分権、これらすべてが相手方ににぎられてゐるからである。かくして、資本主義体制の根底には、生産者と生産手段との根源的な分離が存在する。この分離は、資本主義体制がひとたび確立されるや、累進的な規模で再生産される。だがこの分離は、資本主義体制の基礎をなすものであるから、後者は前者なしには確立されない。だから資本主義体制が確立するためには、生産手段の少なくとも一部分が、自分自身の労働を実現するために生産手段を使用してきた生産者の手から、すでにきつぱり引き離されて、他人の労働をあてにして利殖するために生産手段を使用する商業的生産者の手になつてにぎられていなければならぬ。かくして労働をその外的条件から離反させる歴史的運動、これこそが、ブルジョア世界の前史時代に属するがゆえに『本源的』とよばれるあの蓄積の核心なのである。」(同前P一二九—一三〇)

さて、ついで、原蓄過程にかつてな思ひいれをおこない、現実の、賃労働—資本—関係をその歴史過程に解消してしまふ傾向をもつ二人——平田清明と黒田寛一——をとつてみよう。

「本源的蓄積とは、封建的な生産様式の資本家的な生産様式への転化を、したがつてまた、封建的支配様式の資本家的支配様式への転化を媒介する過渡である」(『経済学と歴史認識』P四〇五)。

ここまでは、通説とかわらな。平田の独得な主張は、この過程を、

「封建社会に於て成立する『商品生産という歴史的に規定された社会的生産様式』すなわち『市民的生産様式』の自己発展であり、その資本家的生産様式への自己展開である」(同前)

とするところにある。これが平田市民社会論(市民社会の理想化)の基礎的主張なのだが、それそのものの批判はここではおこなわない。ここでわざわざおくべきは、封建社会内で発生してきた市民的生産様式(商品生産)の自己発展として、封建社会から資本家社会への転化を把握していることである。この意味で、スターリニスト茶坊主林直道が、この点をとらえて、封建的生産様式↓資本制生産様式の過程として原始的蓄積をとらえるか、『近代的、市民的生産様式』↓資本制生産様式の過程として原始的蓄積をとらえるか、ゴタマゼになって混乱しているといつて批判しているのは、まったく形式論主義者として面目躍如たるものがある。

それはさておき、このような把握のゆえに、平田は、「本源的蓄積とは、狭く経済学的にいえば価値関係の資本関係への転化を、広く歴史理論としての経済学の用語でいえば、市民的生産様式へ有様式への転回を、媒介する過程である」(同前P四二二)

という。そしてかく把握することによって、従来あった二つの誤謬——一つは原蓄を生産者と生産手段との暴力的分離に一面化すること、また一つは、それを農民層の分解、あるいは小経営的生産様式の発展的自己解体過程としてみることを克服しようと平田はいう。つまり平田は、本源的蓄積を、『市民的生産様式』から『資本家的生産様式』への転化としてとらえることによって、かの過程に固有の暴力を、価値法則と不可分一体のものだと位置づけ、かつそうすることで、資本主義的蓄積が、その暴力を内包化している、と主張するのだ。このように、資本家社会の法的契約関係としてあらわれる平等・自由な関係というその仮象にかの暴力性が存在しているということを、彼は独自の本源的蓄積把握によって根拠づけようとしているわけだ。(ここで、またまた林直道の無意味な批判——前出P二四六参照)

「この本源的蓄積と資本家的蓄積の本質的同一性を、われわれは確認しなければならぬ」(『経済学と歴史認識』P四一七)

「本源的蓄積の時間的先行性を、排他的に固定された区別性とみなしてはならない。資本の『前史』を、本史展開のたんなる歴史的与件とみなしてはならない。／＼本源的蓄積は、資本家的生産様式および蓄積の歴

史的前提であると同時に、この資本家的生産様式および蓄積過程の論理的前提である。しかもその過程それ自体の中で、たえず再生産される前提なのである」(同前P四一九)

「本源的蓄積の過程は、……資本家的生産様式および蓄積の過程にひきつがれ、そこに生きる」(同前P四一九)

「……資本の前史はたんに前史ではなく、本史の本源的構成そのものである。……前史としての年代記に書きこまれた経済学的原罪は、資本的生産様式および蓄積過程の本源的構成であり、それ自体現存する体制犯罪である」(同前P四二三)

かくて平田は言う、「原罪は現罪である」(同前)と。こういつた殺し文句でそうそう人はダメでない。なるほど、文学的表現としてはオモシロイ。が、ひつきょうそれだけだ。

問題は、だが、「ひきつがれ」とか、「再生産される」とかで表現されることじたいにある。換言すれば、なぜ現実のこの社会の根本にある階級的暴力を、この社会の分析そのものによってではなく、本源的蓄積過程という歴史的な過程から根拠づけ、説明せねばならないのか、ということ、これである。今日の階級的非和解性、そこにはらまれる暴力を「過去のものが、これも形をかえて再生産されている」ということから説明せざるをえない理由はなになのか。

これは裏をかえせば、平田が、今日の社会の階級的非和解性を根本的につかんでいないことを意味している。平田は言っている。

「封建社会にあっては、直接的に人格的な支配関係があらわれるのに対して、資本家社会にあっては、(商品↓貨幣↓)資本に媒介されて、間接的に人格支配があらわれるのである」(同前P四〇六)

「……近代市民体系は、私的領有(横奪)の権威↓権力体系であり、私的支配の権威↓権力体系である……それは、まことに、文明史上の近代市民にふさわしい強力な体系である。それはもはや、本源的蓄積に特有であった直接的な暴力の体系ではない。ぎらぎらとしたあるいは騒然たる直接的暴力の発動体系ではない。それはマルクスが適切にも表現したように、静かなる『沈黙的抑圧』の体系なのである」(同前P四二〇)

こんなふうに自分の言葉を引用されてマルクスは苦笑いしたであろう。「寛容的抑圧」(マルクーゼ)とかなんとか様々の言い様はあるであろうが、まさし

本源的蓄積がとらえられていくのだ。

「……人間の真実意識を社会歴史認識として現実化させるものこそ、マルクスの経済学的原罪論なのである」(同前P四二八)

これはもう、まったく黒田の自覚の論理における「根源的蓄積過程への歴史的反省」と同じ内容である。

このように平田は、歴史への逃げこみによる階級意識論によって、今日の階級関係の批判にとってかわらせんとしている。原蓄論は、その根拠を提出するものとしてある。だからつきにわれわれは、この立場をより首尾一貫し、純化した形で示している黒田寛一の『プロレタリアの人間の自覚の論理』の検討にうつらねばならぬ。

黒田の「自覚の論理」における本源的蓄積過程は、つぎのようなものである。

労働力の売買における階級関係の「感性的直観」を基礎に、直接的生産過程における「疎外された労働」およびその過程と先の労働力売買過程の反復→円環の中で階級関係の、だからみずからプロレタリアートであることの、「感性的直観」から「理性的自覚」へと高まるとされるのだが、この根本契機として「根源的蓄積過程」への「歴史的反省」があるとされる。いささか長くなるが引用しよう。

「……賃労働者の自己疎外における自己分割の生きた直観は、かかる自己分割の止揚のための前提たる、疎外されない生産的労働者としての生産的労働者という労働者の本来的な姿(注意)！ とういう黒田論理の生産的労働者という労働者の本来的な姿(注意)！ とういう黒田論理の思弁性！」への物質的反省(分析下向という経験的反省)を媒介として、賃労働者の自己分割の歴史的自覚へ、すなわち資本制生産判断が生産判断の疎外された一形態であることの自覚へ(上向的综合という概念的構成)高まるのである」(『プロレタリアの人間の論理』P一〇五)

「それゆえに、賃労働者の自己疎外における自己分割の物質的直観は、その現実的基礎である資本の生産過程の直観的現実性において、そこにおける資本の定有としての生産手段と生きた労働との分割の根源的、な唯一の原因への、そこに根源的なものとして媒介的に指定された本質的な事態への分析的な下向へと必然的に展開するものである。……賃労働における『貧困・労働苦・奴隷状態・無知・野蛮および道徳的墮落の蓄積』の反面をなす資本家における巨大なる富の蓄積の根源的な

く平田のように今日の社会の階級関係を把握することは、それに「表面として」とか、「現象的には」といったことをつけ加えたとしても、すてにはっきりとした態度を表明していることになる。この平田のように言ってしまうならば、たとえば、封建社会も、間接的人格支配の社会として描きだすことが可能であり、また、本源的蓄積過程をも、平田が先に批判したように、暴力ぬきに描くことも可能なのだ。つまり、解釈学者という立場に落ちこんでいるのだ。問題は解釈にはない以上、今日の社会の階級関係を、その直接性、暴力性においてとらえるためにはどうするか、というすぐれた実践的課題が問題なのであり、だから、批判は、かの直接性、暴力性の広い意味での暴露にしなければならぬ。

平田は、まさしく資本制生産関係にある、賃労働↓資本↑関係の非和解性を批判的に把握しえなかつたがゆえに、法↑国家をまえにして解釈学者の立場に立っているのである。われわれ革命家は、かの階級関係の非和解性を批判的に把握するがゆえに、法↑国家をまえにして、その非和解性の直接性、暴力性を暴露するという態度をとるのであり、また、そうすることによって、ますます、階級関係の非和解性を深く批判していくのである。このように平田は、今日の階級関係を正しく把握しきれていないがゆえに、解釈学者の立場に落ちこみ、その解釈の根拠づけを、必然的なものとして、歴史から引っぱってくるわけである。こうして、問題は、実践的にいかにかこの階級支配を打倒するのではなく、またそのテコとしての批判的遂行ではなく、認識の問題、今日のこの非直接性と、その背後にある暴力性をいかに自覚するかの問題にされてしまう。階級意識論へのスリカエ、転落であり、かくて、黒田のプロレタリアの人間の論理への密通である。

「本源的蓄積は、資本家的生産様式および蓄積の歴史的前提である」と同時に、この資本家的生産様式および蓄積過程の論理的前提である。しかもその過程それ自体のなかで、たえず再生産される前提なのである。これは、この過程そのものにおいて再生産されるものであるがゆえに、つねに、過程の帰結としてあらわれ、また、そのようなものとして意識される。過程の前提は、過程そのものの帰結のうちに融合して、もはや、前提として自覚的にとらえられにくい。市民的日常生活意識のうちには消えはてるこの前提の理論的検出こそが、資本蓄積論なのである」(『経済学と歴史認識』P四一八)

こうして、今日のプロレタリアートの階級的自覚の根本的契機としての

事態の探究へ、賃労働者の物質的直観の内容が展開していくのである。だからして賃労働者は、『資本制蓄積』を先行する一つの「根源的」蓄積を、すなわち資本制生産様式の結果ではなくてその出発点たる蓄積を、想定するにいたる。」(同前P一〇六〜七)

「……現実の生産過程における敵対的資本関係としてあらわれならしめられたこの根源的な資本制階級関係こそが、媒介的な生産過程に原因として措定されたり、また直接的な流通過程に結果として止揚されたりしてラセンの円環をえがきながら自己を拡大再生産するのだということを、しかもそれが日々われわれの眼前で演じられていく資本の成立史としての資本蓄積過程に物化されていることを、理性的立場にある賃労働者は自覚するのである。」(同前P一〇七)(注意、先にみた平田の所説とまったく同一であること)

「賃労働者の物質的自覚において定立されるのは、それゆえに、資本制蓄積過程の根源的で本質的な事態としての『根源的蓄積過程』でなければならぬ。」(同前P一〇八)

「資本制生産社会の本質としての資本の現実的威力の発現過程たる現実の資本制蓄積過程の根源的な事態は、『根源的蓄積過程』という歴史過程であるというのを、いまや、賃労働者はその自己疎外の物質的直観を起点として自覚したのである。」(同前P一〇九)

「……この資本制生産の出発点が歴史的発展過程にある、それぞれの現実の資本制生産過程の基底にある根源的な事態、そこに措定された本質的な事態であり、出発点として根源的な原因をなす根源的蓄積過程、根源的な資本制生産関係は、それぞれの終局ないし結果としての資本制蓄積過程に措定されて、その基底に動的な自己同一性を保持しつつ実存するのである。まさにこの点こそ、現実の結果としての資本蓄積過程そのものの矛盾の物質的直観を発条とした賃労働者の歴史的自覚において、その根本的な前提としての根源的蓄積過程が措定されなければならない必然性があるのである。」(同前P一〇九〜一一〇)

「資本蓄積過程の直接的現実性において、そこに措定された本質的事態として、……『根源的蓄積過程』を、賃労働者は、自己の非人間化された人間性||自己疎外における自己分割を土台として自覚するのである。『……賃労働者には、日々の資本発生のおびごとくに「血と火の文字をもって人類の歴史に書きこまれた」幾世紀かの剝奪の過程を、あ

それは現実の関係そのものの中に、はつきりと批判的に把握されうるものとして現存しており、それ以外ではない。具体的にいえば、われわれの草案が簡潔に述べているように、非和解的階級関係の内包的強化・深化と、一方では、その外延的拡大・強化、これである。本源の蓄積過程の問題は、それ自体として綱領本文中にとりあげられるわけにはいかない。それは解説で述べられるべきものである。綱領本文中では、いま言った階級関係の外延的拡大・強化として述べられる。

(四) スターリニズムおよび中共派の経済学「批判」の批判

① はじめに

われわれは草案第二項の解説につづけて、資本―賃労働関係の核心について述べてきた。この点では、草案―解説の前後関係からしていささかそわなない面もあったのだが、しかし、あえてそうしてきたのは、そのように述べておくことが、現代のプロレタリアートとブルジョアジーとの階級関係の局面からして、すなわち、プロレタリアートだけを真に革命的な階級として前面に押しだし、共産主義革命を最後まで指導しぬくという共産主義の旗をこそ掲げた党を、スターリニズムとその追随者たち、および中共派やその他の第三世界派の諸党派から、きっぱりと自らを分界することによって創建することが焦眉の課題となっている現局面からして、非常に重要な意味をもっているからである。

このように、先の二潮流はこのことにおいて明確な態度をとりえず、たとえば、ソ連共産党と中国共産党のように、あれほどきびしく批判しあいつながらも、この点に関しての相違は明確ではないのであって、つまり中共派がこの点でスターリニズムに屈服しているのである。なによりも中国共産党その他のものもろの中共派との党派闘争の遂行上からしても、この点は明確にしておかねばならないのだ。またさらに、このようなくとも基本的な諸点について厳密に批判的作業をしておくことこそ、修正主義批判を強化しながらも決して中共派とはならないベトナム共産党やその他のグループ、あるいは「イデオロギーおよび階級闘争の分野では共存もデータも可能ではない」といいながら、ソ連社会帝国主義に妥協せざるをえないキューバ共産党にたいする根底的な批判を基礎づけるものなのである。

らたに胸に刻みこむほかはない。」(梯明秀) 歴史的自覚にある賃労働者は、それゆえに自己を賃労働者階級として、プロレタリアートとして自覚せざるをえない。」(同前P一一一)

長々と引用してきたが、これで十分黒田の誤謬はあきらかになったと思う。本源の蓄積あるいは原始的蓄積を、なぜ、黒田は、根源的蓄積と呼ぶのかがよくわかるというものだ。それ自体、黒田の高級なる(?)思弁がしみわたっている。

それはさておき、黒田は、日々現実に進行している資本の運動、そこにおいて賃労働の資本のもとへの経済的隷属をあきらかにするのではなく、それを、歴史的な過去||『根源的蓄積過程』から説明しようとし、そして結局、日々の階級関係のいっさいを、その過程に還元してしまおうのである。まさしく「根源的蓄積」こそがいっさいであって、日々進行している資本のもとへの賃労働の隷属の強化、拡大は、二義的なもの、そこから説明されるべきものとなっている。完全な転倒した把握がなされている。

プロレタリアの人間の自覚を目的化し、それゆえ、共産主義運動(あるいは階級闘争)を、認識運動にしてしまっている黒田にとって、その認識運動の内容は、結局、かの「血と火の文字をもって人類の年代記に書きこまれた」収奪の過程を、日々刻々思ひおこし、それを呪文のごとくに唱えることと同一のものとなる。だから、もつといえ、プロレタリア革命とは、過去の報復の革命ということになる。

さて、問題なのは、黒田(あるいは平田)のように、いかにして今日の階級関係を自覚するのか、にあるのでは決してない。このように考えてしまふことは、まったく、この今日の階級関係の中途半端な、プチ・ブルジョアの把握と照応しており、だから、階級関係の非和解性が、じかに眼に見える(と考えられる)本源の蓄積過程をもって、そこから、あるいはそこへといっさいを収約すること、説明しようとするのだ。問題はあくまで現実の、日々の階級関係の中にこそある。そこから逃げてはならない。それを批判的に切開し、把握し、暴露することだけが問われているのであって、どのように認識するのか、どうやって自覚するのかなどは、まったく理論の範囲外である。それらは日々の実践の中で解決されていくものであって、先のように問いを提出したことにしたい、観念論の沼地にはまりこんだことを意味している。

現実の階級関係の非和解性は、決して歴史から説明すべきものではない。

で、これまでも随所で述べてきたスターリニズム批判その他をまとめ述べておきたい。

② スターリニズムの経済学「批判」の批判

(a) 経済学批判の小ブルジョア性―俗流ブルジョア経済学への転落

スターリニズムは、資本主義をある一つの搾取制度だと考えている。彼らはこのことを経済学批判の根本におく。

「現在の体制は資本主義体制である。これは世界が二つの陣営に、つまり、ほんのひとりにぎりの資本家の陣営と、大多数―プロレタリアートの陣営にわかれている、ということだ。プロレタリアは昼も夜も働かないが、それにもかかわらず、いぜんとして貧乏である。資本家は働かなく、資本家が天才だなどというためではない。それはプロレタリアに知恵がなくて、プロレタリアの労働の成果を奪うからである。資本家がプロレタリアを搾取するからである。」(スターリン「無政府主義が社会主義か?」国民文庫版「弁証法的唯物論と史的唯物論他」、P九四)

「商品生産を基礎に発生した資本主義社会は、最も重要かつ決定的な生産手段において資本家・大地主により占有される独占に、すなわち、生産手段を奪われて、自己の労働力売るよう強いられているプロレタリア階級の賃労働の搾取に特徴を有する。」(コミンテルン綱領第一章第一節より―いわゆるスター・ブ・綱領―「コミンテルンドキュメント」II、P四三四)

「資本主義生産方法は、封建制生産方法にかわってあらわれたものであって資本家階級が賃労働者の階級を搾取することをもととしている。」(ソ同盟科学院経済研究所「経済学教科書」合同新書、P一一二)

「ブルジョアジーがプロレタリアートを搾取することは、資本主義の主要な標識であり……」(同前P一七八)

「資本主義制度のもとでは、生産関係の基礎は、生産手段の資本主義的所有であって、この所有は、賃労働者を搾取するのに利用される。」(同前P二〇二)

このように、スターリニズムは、資本家階級による賃労働者階級の搾取ということを、異状に強調し、前面におしだす。なるほど、このことは、主義社会において、現実の事象であって、また、この社会を、もつと

も基本的に特徴づけることではある。だが、しかし、問題なのは、この事実——ブルジョアジーによるプロレタリアートの搾取というこの内実ではなく、ということ、したがって、より厳密にいえば、搾取というこの事実が生起するその総体的な内容はいったいなにか、ということである。

搾取一般は、これまでの階級社会に於てであった。このことは、スターリニズムも気づいている。それゆえスターリニズムは、他のだれでもなくブルジョアジーが、これまで他のだれでもなくプロレタリアートを搾取する、というわけだ。だが、このように、ブルジョアジーがプロレタリアートを搾取するなどといってみても、その事実の内容は、一向あきらかにならない。だから問題は、ブルジョアジーによるプロレタリアートの搾取という事実が生みだされる一つの総体としての分析なのである。このような搾取を、ブルジョアジーとプロレタリアートの関係の総体的な動きの中でとらえるというのをスターリニズムはできない。一つの過程の中に、搾取をおいて考え、把握することができない。スターリニズムにおいては、搾取は、だから、その過程の結果としてとらえられ、固定的、静的にとらえられる。先ほどのスターリンの著作からの引用をみていただこう。そこにはこうある。

「それは資本家がプロレタリアの労働の成果を奪うからである。資本家がプロレタリアを搾取するからである。」

つまり「労働の成果を奪う」ことが「搾取する」ことなのであって、資本の生産過程の内実において、搾取の問題はみられず、それが終了した以後に、生産物の分配・帰属をめぐって、搾取ということがいわれている。このような見方は、スターリニズムに非常に特徴的である。

このスターリンの表現ほど露骨ではないにせよ『経済学教科書』においても、このような観点が貫かれている。そこでは、なるほど、価値増殖過程の分析、必要労働と剰余労働の分析、機械制生産等々の細かい分析において、とらえて言っているようにみえる。しかし、このことも実は「労働の成果」を資本家階級が、奪う——より多く、より速く奪うことの説明としてしか語られてはいないのである。いうなれば、過程としての不払い労働の取得ということではなく、結果としての（結果としての）不払い労働の取得というふうにみているのである。

このように資本の運動を、まさに運動として、過程においてみるのではなく、固定的に過程の結果・結果としてみるということから、当然にも、

いる。生産過程の社会的性格と取得の私的・資本主義的形態のあいだの矛盾は、資本主義生産方法の基本的矛盾である。』（『経済学教科書』P二四八〜九）

この「生産の社会的性格と取得の私的・資本主義的形態のあいだの矛盾は、資本主義生産方法の基本的矛盾である。』（『経済学教科書』P二四八〜九）

これは、資本を一つの過程、運動としてみるのではなく、過程の結果において、そこに強調点をおいてみる方法の典型をあらわしている。つまり、「生産の社会的性格」というとき、そのことが、まさしく資本の運動として、とらえられず、なにかしら資本ということから、はずされてしまっているのである。どのように、社会化されようとも、生産過程は、資本の生産過程なのであり、資本の運動の軸なのであって、ますます拡大するその社会的性格は、資本の社会的性格として、資本に吸収されるものとしてあらわれる。労働の社会的生産力は、いっさいがっさい、資本のものとしてあらわれる。このことが、スターリニズムにおいてはまったく理解されていない。だから、「生産の社会的性格」とスターリニズムがいうとき、なにか資本の運動に包摂されないもの、いうなれば、社会主義をそこに発見(?)しているのである。だからスターリンは次のようにいう。

「社会主義体制の確立が不可避であるという証明はどこにあるのか? ……歴史は、所有形態が生産形態に直接、依存することを示している。…最後にやってくる時代は、何百何千の労働者が一つの屋根の下にあつめられ、一つの大工場での共同の労働に従事する、大規模な資本主義的生産の時代である。ここでは、各人がひとり占めにする、独立で働く古い労働はみられない。ここでは各労働者が、また各職場の全労働者が、仕事のうえで、自分の職場の仲間とも他の職場ともしっかりとむすばれている。どの職場かが仕事をやめさせれば、全職場の労働者の仕事がなくなる。ごらんのように、生産過程、労働がすでに社会的性格をもち、社会主義的な色あいをおびてきた。また、同じようなことが個々の工場だけでなく、生産の全部門でも、また各生産部門のあいだでもおきている。鉄道労働者がストライキでもはじめさえすれば、産業は苦境におちいり、石油や石炭の生産が停止しさえす

生産手段の私的所有の異様な強調、それを、資本制生産の根本におくということが生まれてくる。これは先ほどの引用にみられるとおり、搾取ということ、対になって主張されている。

なるほど「商品の生産手段の最も重要で著しい部分が、社会の全人口の少数の部分に独占されている」ことは、資本主義社会の主要な標識ではある。そしてそれは、この社会の階級関係を、決定するもつとも大きな規定の一つである。だが、だからといって、このことから出発して資本主義的生産を説明することはできない。それは、資本の発生の条件としては、そうではあるが、資本制生産がひとたび確立されるや、その結果として、不払いに生みだされることでもあるから。つまりは、だから、資本制生産を固定的にではなく、一つの過程、運動としてみなければならぬのである。だからBであるという論理では役にたたないのである。

だからスターリンのように「資本主義制度のもとでは、生産関係の基礎は生産手段の資本主義的所有であって」（『弁証法的唯物論と史的唯物論』P四〇）というぐあいにして、そこから、説明を開始していくわけにはいかないのである。

かくて、スターリニズムにおいては、生産手段の資本家階級による私的所有（独占）のゆえに、労働（賃労働）の成果の資本家階級による取得というぐあいに、資本の生産過程を、いわばすどおりの命題が立たれてしまっている。

過程を軸に、資本をその運動の全体としてとらえるのではなく、生産手段とか、生産物とかの取得・所有ということ、資本を考えると、結果が生まれてくる。

そして、これをさらにすすめれば、資本を、生産手段や、諸生産物といったものとして考えるところにいきつくのである。だが、資本は、一つの関係、動くもの、不常に増殖しつつある価値なのであって、決して、静的な、ある固定されたもの（もの）ではない。

もちろん、スターリンといえども、このようなことを、そのまま口にしてはいるわけではないが、結局は、資本をなにか実体的なものと考へてしまっている。このことは、次のようなスターリニズム特有の命題をよくみれば、みとれる。

「生産は社会的性格をおびているが、他方、生産手段の所有は、生産過程の社会的性格と両立しない私的・資本主義的なものとどまっていれば、やがてすべての工場が閉鎖されてしまう。あきらかに、ここでは、生産過程は社会的、集団主義的性格をおびてきた。ところで、取得の私的・資本主義的性格は、生産の社会的性格に照応しないし、また、現代の集団主義的労働はかならず集団的所有をもたらずはすである。したがって、社会主義体制が、夜のあとに昼がつづくのと同じように不可避に、資本主義のあとにつづくだろうということは自明のことである。」（『弁証法的唯物論と史的唯物論』P一〇一〜三）

この引用だけみると、たとえば、レーニンが「人民の友」とはなにか」の中で、同じような例をたしながら、労働の社会化について述べたこととまったく同一の主張をしているかみられるかもしれない。しかし、そこでも注意深くみれば、根本的相違に気づくはずである。すなわち、スターリンは、この「生産過程、労働の社会的性格」と「取得の私的・資本主義的」との矛盾というものを、「社会主義体制の確立が不可避である」という証明、「その科学的証明」、「夜のあとに昼がつづくのと同じよう」な不可避性の証明として述べていることである。

だが、いま、これはすこしおいておこう。スターリンとレーニンの違いは、さらに次のようにスターリンが、つづけて述べていくくたりではっきりする。

「社会的生産で主要な役割を演じ、生産の主要な機能を掌中におさめている階級ないし社会集団は、時がたつにしたがい、かならずこの生産の主人になるにちがいないことを歴史はわれわれに語っている。…いまや、プロレタリアが生産の主要な役割を演じはじめ、生産のあらゆる重要な機能が彼らの手にうつり、彼らなしには一日も生産を存続することができず（ゼネラル・ストライキを想起したまえ）、資本家は生産にとって必要でないばかりか、それを妨げさえしている時代、資本主義の大生産の時代がやってきつつある。これはなにを意味しているか? それは、いっさいの社会生活が完全に崩壊せざるをえないか、あるいは、プロレタリアートがおそかれはやかれ、だが不可避的に、現代の生産の主人公、その唯一の所有者、その社会主義的所有者にならざるをえないかのどちらかだということの意味している。」（同前P一〇三〜四）

ここまで引用すれば、先の引用の中で、スターリンのいわんとしていること、思いを入れていた内容がよくわかるというものだ。つまり、こうい

うことだ。

スターリンは、資本をその運動の総体においてとらえきれず、運動の結果、つまりは、労働の生産物、生産手段等を資本として考え、だから、資本主義の発展、労働の社会化の進展につれて、なにか、資本に包摂されない、社会主義の芽のようなものが、一方で実体的に成長してくと考えているのであり、搾取し取得し生産物・生産手段↓資本……X、労働↓生産過程↓社会化……○というふうに形式論理におちいつているわけなのである。だからますます、資本は、生産手段・生産物↓労働の成果として、ものゝけにおいて、とらえられていってしまうのである。

何度でも強調するが、資本主義社会では、生産過程は、他でもなく資本に包摂された資本の生産過程であって、それがどれほどに社会性をもともとも、また、その過程に、資本家が人格的にまったくタッチしないとしても、資本の運動としてあくまであらわれるのであり、それゆえ、資本はますます社会的諸関係を反映し、社会的諸力を体現したものであるとして現われる。この点をスターリンは理解できていない。資本をこのようになにかものゝけとしてしか考えられないがゆえに、資本家も、それが、資本の人格的表現としてのみ資本家であることを理解せず、せいぜい「資本家イコール機械制大経営をいとなむ富裕で教養のある企業家である、という月なみの俗流的な考え以上にすすま」ない（『人民の友』とはなにか）P二一〇）のである。

このようなスターリニズムの主張から、もう一度、彼らのいう資本主義を一つの搾取制度とみる見方をとらえかえしてみると、搾取というのは、結局、もろもろの生産物の一方的な取得ということであって、直接的生産者であるプロレタリアの労働の成果のいっさいを、ブルジョアが一方的に奪うということの意味しているのである。だから、結局、プロレタリアートとブルジョアとの階級関係とは、後者が前者の作ったものを一方的に奪って金持ちになり、前者が、つねにみずから作ったものを奪われて貧乏のままにしている、いう貧富の差、不平等性の関係とみているわけである（先のスターリン論文をみよ）。それだから、資本の運動ということ、生産過程そのものについては、ただもっぱら、この奪うこと（搾取すること）をどれほど多く、速くするか、という観点からのみ、分析されるにすぎないのである（『経済学教科書』をみよ）。

こうして、スターリニズムにおいては、生産過程の内実の分析そのもの一部にたいしてだけ支払われるのだということ、ここから「企業家と賃労働者との関係」の平等の仮象の根拠を証明している。

だが、このような見方は、いうまでもなく経済学としては完全なブルジョア経済学の、また、実践上では完全な経済主義のそれに他ならない。それこそ、商品交換の仮象に幻惑され、そこにある真の階級関係を、見ぬけなかつたものにすぎない。われわれが、本解説でたんねんに述べてきたとおり、マルクスが、資本と賃労働との「交換」の関係を、交換の仮象だと呼んだのは、決して、この『経済学教科書』の筆者のように、支払いが不払いかという点ではなかつた。まさしく、支払い部分と不払い部分とにわたれる根拠として述べたのである。

そもそも「不払労働」↓「支払労働」という表現それ自体が、一定の説明なしには言いえないのであり、それでマルクスは、この表現に幻惑されないようにちゃんと警告を発しているであって、かの『経済学教科書』の筆者たちは、このマルクスの警告を理解しなかつたのである。マルクスは、支払労働、不払労働という表現を導入するにあつた次のように述べている。「資本論」第十六章「剰余価値率を表わす種々の範式」のところである。

ここでマルクスは、剰余価値率を表わす範式をかけた、これと対比しながら古典派経済学の派生的な範式をあげ、

「これらすべての範式においては、労働の現実の搾取度または剰余価値率が間違つて表現されている」（『資本論』第一巻P五五六）と批判する。つまり、

「これらの派生的な範式は、事実上、労働日またはその価値生産物がある、と述べ、さらに次のようにいう。

「剰余価値および労働力の価値を価値生産物の分数部分として叙述することは、……資本関係の独自の性格を、すなわち、可変資本の生きた労働力との交換、および、それに照応する生産物からの労働者の排除を、隠蔽する。その代りに現われるもの、——それは、そのもとでは労働者と資本家とが生産物をその相異なる形成諸要因の比率に従つて分配する一組の関係という、間違つた仮象である。」（同前P五五七）

このように、マルクスは、労働日あるいはその価値生産物が、あたかも労働者と、資本家に分配されるような考えを示すブルジョア経済学者の見方を批判し、そのうえで剰余価値率の新たな範式、すなわち「不払労働」↓「支払労働」との関係を導入する。そして次のようにいう。

から、資本と賃労働との非和解的な階級関係を把握すること、資本の運動のその過程、その総体から、階級関係を把握することが完全に放棄される。だから、われわれが、綱領草案の②、およびその解説として述べてきた、賃労働と資本との階級関係は、いっさいふれられずに終る。先の『経済学教科書』では、資本と賃労働との関係、その交換の仮象性について、次のように完全な謬論をふりまく。

「プロレタリアが資本家に自分の労働力を売って、賃金のかたちで一定額の貨幣をうけとるばあいには、この貨幣額は、労働力という商品の価格としてではなく、労働の価格としてあらわれる。……こうして、賃金が労働の価格であって、……労働日の全体にたいして支払われたものであるかのようないつわりの外見が生まれる。……もし……生産したものの量に応じて賃金を支払うことになつていならば、労働者は、彼がつくった商品のひとつひとつに支出した労働にたいして支払をうけるかのような外見がうまれる。すなわち、ここでもまた、労働者の支出したすべての労働が完全に支払われるかのような外見がうまれる。……こうしたいつわりの外見は、人びとが偶然に考えがいがいしてできたものではない。それは、資本主義生産の条件そのものによつてうみだされるのであって、そのような条件のもとで、搾取がおおいにかくされ、ぬりかくされて、企業家と賃労働者との関係は平等な商品所有者の関係であるかのようないつわりの外見がうまれるのである。」（『経済学教科書』P二〇四～五）

「現実には、賃金労働者の賃金は、彼の労働の価値または価格ではない。……俗に『労働の価値』とよばれているものは、実際には、労働力の価値なのである。……しかし、賃金はかたちのうえでは労働にたいする支払としてあらわれるので、労働日の全部が完全に支払われているかのような考えがうまれる。……賃金は、労働日が必要労働時間と剰余労働時間とに、支払労働と不払労働とにわかれるということ、あとかたもなくおおいにかくし、こうして資本主義的搾取関係の正体をかくす。」（同前P二〇五～六）

ここでこの『経済学教科書』の著者は、賃金として支払われる貨幣額は、労働によつて生みだされた全価値の貨幣額ではないのですよ、その一部分なのですよ、と一所懸命われわれに説いている。労働日が必要労働時間と剰余労働時間にわかれ、労働日の全体にたいして支払われるのではなく、

払労働を導入する。そして次のようにいう。

「範式「不払労働」↓「支払労働」は、資本家は労働の支払いをするのであって労働力の支払いをしないかのような誤解を招きうるが、この誤解は、前に与えられた説明によつてなくなる。不払労働↓「支払労働」は、剰余労働、必要労働を表わす通俗的表現にすぎない。資本家は、労働力の価値、またはこれと背離する価格、を支払って、その代りに、生きた労働力そのものの処分権を受けとる。この労働力についての資本家の利益は二つの期間に分かれる。一方の期間中は、労働者はただ一価値彼の労働力の価値、つまり一等価値を生産するにすぎない。かくして資本家は、投下した労働力の価格の代りに、同じ価格の一生産物を受けとる。それはあたかも、彼が既成生産物を市場で買ったのと同じである。これに反して剰余労働の期間中は、労働力の利益は資本家のために、我が代償を要しない価値を形成する。彼は労働力のこの流動化を無償で手に入れる。この意味では、不払労働とよばれる。」（同前P五五八～九）

ことからは非常につきりと述べられている。このマルクスの説明から明瞭にみてとれるように、不払労働↓「支払労働」というとき、それは資本家にとつて、その立場からみて、そうなのだとしたこと、決して、労働者にとつて、支払われている、支払われていないという、労働者にとつての、労働者の立場からのものではないこと。なぜなら、生産過程は、絶対に資本の生産過程なのであり、いま、われわれが、この生産過程の内実についてみる限り、この過程全体は、資本家のもに他ならないのであるから。『経済学教科書』の筆者たち、その他もろもろのスターリニストたちは、完全にこのことを見誤っている。彼らは、資本の生産過程の呈する「労働者と資本家とが生産物をその相異なる形成諸要因の比率に従つて分配する一組の関係という、間違つた仮象」にコロリと幻惑され、かくて、資本の生産過程では、労働者は、その労働の生産物の全価値を支払われていない、とわめきちらすのである。だが、再度くりかえすが、生産過程は、そもそも資本の生産過程、資本家に属する一過程であり、労働者はここにはただ生きた要因、可変資本としてのみ入つていくにすぎないのであり、だから、労働者にとつては、もとより「不払い」か、「支払いか」などということは、まったく関係ないことなのである。賃労働者は、分配には決してあざからな。資本に完 全に従属した一要因、賃金奴隷でしかないのである。だから

ら、だからこそ、資本と賃労働との間におこなわれる交換は、単なる形式、仮象にすぎない、とマルクスはいうわけである。スターリニストたちは、この隷属を理解せず、先の引用にもあるとおり、こっけいにも、支払われていない(不払いの)部分が、賃金の支払いによって隠蔽されるということをもって「仮象」を理解したつもりになっているのだ。

ここで「仮象」について述べておこう。
労働力の売り買いとは、その表面上の、その局面だけに限ってみると、価値どおりの売買であり、商品交換の原則にのっとっており、単純な等価交換に属している。だが、にもかかわらず、資本と賃労働との関係をその動きの中で、その総体からとらえかえしてみると、その交換それ自身が、もはや単なる形式上のもの、交換の仮象をもつてすぎない、とマルクスは述べているのである。

「……資本の増大とプロレタリアートの増殖とは、同じ過程の対極的に分かれた所産だといえ、同じ過程の共属的な所産としてあらわれるのである。……これとともに、この関係が表面で示していた次のような外観もまた消滅する。すなわち、流通では、商品市場では、対等な商品所有者どうしが相対しているのであって、彼らは、すべての他の商品所有者と同様に、ただ、彼らの商品の素材的な内容によってのみ、彼らが互いに売り合わなければならない商品の特殊な使用価値によってのみ、互いに区別される、という外観がそれである。言い換えれば、この関係のそのような本源的な形態は、ただ、その根底にある関係の、すなわち資本主義的な関係の、外観として残っているだけなのである。／＼ここでは次に述べるような二つの契機を区別しなければならぬ。……(1) 第一には、流通過程のなかで行なわれる準備的な過程、すなわち労働能力の売買に関して。……単なる商品販売者どうしの関係は、彼らが種々の使用価値に具体化された彼ら自身の労働を交換する、ということを含んでいる。資本主義的な生産過程の断続の結果としての労働能力の売買は、労働者が絶えず彼自身の生産物の一部分を彼の生きている労働と引き換えに買ひもどさなければならぬ、ということを含んでいる。こうして、単なる商品所有者どうしの関係という外観は消えてなくなる。このような、労働能力の断続的な売買は、そしてまた、労働者自身によって生産された商品が、彼の労働能力の買い手として、また不変資本として、絶えず彼のまゝにあらわ

所有権は自己労働にもとづくかに見えた。少なくともかかる仮定が為されねばならなかった。ただし、平等な権利を有する商品所有者たちのみが対立しあうのであって、他人の商品を取得する手段は自己商品の譲渡のみであり、しかも商品は労働によってのみ生産されるものだからである。所有はいまや、資本家の側では他人の不払労働またはその生産物を取得する権利として、労働者の側では自分自身の生産物を取得することの不可能性として、現象する。所有と労働との分離は、外観的にはそれらの同一性から生じた一法則の必然的結果となる。／＼だから、資本制取得様式は商品生産の本源的な法則をひどく傷つけるように見えるとはいえ、それは決してこの法則の侵害から生じるのではなく、むしろ反対にこの法則の適用から生ずるのである。」(『資本論』第一巻P六一二〜三)

ここで『経済学教科書』の筆者たち・スターリニストどもは、やぶれかぶれのいちゃもんをつけてくるかもしれない。「なるほど、君たちの言いたいことはわかる。だが、君たちの言っていること、マルクスの引用を見てもわかるように、それは、資本の蓄積過程を論じる段になってはじめていえることだ。われわれもそこでは、こう書いてある」と。

「資本主義的な再生産の過程では、労働生産物だけでなく、資本主義的な搾取関係もまた、たえず更新される。……一つの生産過程がおわると、そのたびに、企業家は、いつも資本の所有者となっており、この資本のおかげで彼は労働者を搾取して富んでいくことができる。他方では、労働者はつねに生産過程から無産のプロレタリアとして出てくる。そのため、彼は、餓死しないためには、いつも自分の労働力を資本家に売らなければならない。雇用労働力の再生産は、つねに、資本の再生産のなくてはならない条件である。／＼このように、生産過程では、基本的な資本主義的な関係、すなわち、一方では資本家、他方では賃金労働者という関係が、つねに更新される。労働者は、企業家のだれかに自分の労働力を売るまゝに、すでに、総資本のもの、すなわち資本家階級全体のものである。プロレタリアは、はたらく場所をかえても、ある搾取者を他の搾取者とかえるだけである。労働者は、一生、資本の車につながれている。……労働力の売買を、孤立してではなく、再生産の要因として、たえずくりかえされる関係としてみるならば、この取引の真の性格があらかになる。／＼第一に……資本家が

れるということは、労働者の、すなわち自分にたいして独立化された対象的労働の維持および増殖の単なる手段としての生きている労働の、資本のもとへの隷属を媒介する形態としてのみ現われるのである。これは、この生産様式に内在する媒介形態であり、労働の買い手としての資本と労働の売り手としての労働者との関係の永久化である。とはいえ、この形態は、労働の隷属化および生産条件所有者の側における労働所有のいっそう直接的な他の諸形態からは、ただ形態的に区別されるだけである。この形態は、この売買の媒介によって絶えず更新される現実の取引と恒久的な従属関係を、単なる貨幣関係として、おおい隠すのである。スターリニズムの諸君、よく聞きなさいよ、支払われている、否という貨幣関係に惑わされてはいけませんよ」この取引の諸条件が絶えず再生産されるだけではない、一方が買うために用いるもの、そして他方が売らなければならないものは、この過程の結果なのである。この売買関係の断続的な更新は、ただ独自な従属関係の恒常性を媒介するだけであって、これに、互いに平等に自由に相対する対等な商品所有者たちのあいだの取引であり契約であるかのような欺瞞的な外観を与えるのである。この準備的な関係が、今では、それ自身、資本主義的な生産のなかで生み出されるところの、生きている労働にたいする対象的な労働の支配の内在的な契機として現われるのである。(『直接的な生産過程の諸結果』P一四四〜七)

「……商品生産および商品流通にもとづく取得法則または私的所有法則は、それ独自の、内的な、不可避的な、弁証法によって、その正反對物に転変する。本源的な操作としてあらわれた等価物同志の交換は、一変して、仮象的のみ交換されるようになる。ただし、労働力と交換された資本部分そのものは、第一には、等価なしに取得された他人の労働生産物の一部分にすぎぬのであり、第二には、その生産者たる労働者によって填補されねばならぬばかりでなく、新たな剰余を伴って填補されねばならぬからである。つまり、資本家と労働者の交換関係は、流通過程に属する仮象にすぎぬもの、内容そのものとは無縁であって内容を神秘化するに過ぎない単なる形式、となる。労働力の絶えざる売買は形式である。その内容は、資本家が、たえず等価なしに取得するすべに対象化された他人の労働の一部分を、より多量の生きた他人の労働とたえず再び転換するということである。本源的には

プロレタリアに賃金をはらうのは、自分の基金からではなくて、まえの生産期間に(たとえば前月中旬)労働者の労働がくりだした価値からである。マルクスの表現によれば、資本家階級は、昔の征服者のやりかたをまねている。つまり、まけた者から略奪した貨幣で、まけた者の商品を買ひとるのである。／＼第二に、他の商品とちがって、労働力は、労働者が一定の労働をしたあとではじめて、資本家から支払をうける。したがって、資本家がプロレタリアに貸しつけるのではなくて、反対にプロレタリアが資本家に貸しつけるのである。／＼資本家階級は、賃金という形で、労働者に生活手段を買うための貨幣をたえずひきわたすが、この生活手段は、労働者の労働でくりだされて、搾取者が自分のものにする生産物の、一定部分にほかならない。」(『経済学教科書』第九章 資本の蓄積とプロレタリアートの貧困化 P二三一〜三)

だが、このように、かの人々が言うようにすれば、それこそ、やぶへびといふことになる。それも、へびが一匹どころか、大きなやつがりよりよててくることになる。

まず、この『経済学教科書』からの引用と、先の『資本論』からの引用とをよくみくらべてみると、『経済学教科書』が微妙にちがったことをいっていることがわかる。まず、現象的にみて、第一に、われわれがいま問題にしている資本と賃労働との交換が、流通に属する仮象であるというところが(マルクスの方では、そのことが非常に明快に、また鋭く強調されている)、そこにまったく述べられていないという点である。第二に、マルクスは、そのことの内実(説明)として、二つのことをあげて、一つは、労働力と交換された資本部分が「等価なしに取得された他人の労働生産物の一部分にすぎぬ」こと、いま一つは「その生産者たる労働者によって填補されねばならぬばかりでなく、新たな剰余を伴って填補されねばならぬ」こととしているのに対して、わがスターリニストたちは、労働力の売買、「この取引の真の性格」について、二つの内実をあげ(ここでは形式的に同じ)てはいるものの、一つは「資本家がプロレタリアに賃金をはらうのは、自分の基金からではなくて、まえの生産期間に……労働者の労働がくりだした価値からである」こと、いま一つは「他の商品とちがって、労働力は、労働者が一定の労働をしたあとではじめて、資本家から支払をうける」こと、としている。つまり、マルクスは、かの仮象の内実として、

可変資本部分そのものが、過去の不払労働(剰余価値)部分であり、しかも、それを、新たな剰余価値を伴って填補しなければならぬものであるといっているのにたいし、一方の人々は、可変資本部分を、たんに過去の労働生産物一般にし、だから混乱して、困惑して、賃金の支払が労働のあとでなされ、労働者は労働力を前貸しする、とだけいつているわけだ。搾取、搾取と騒ぎだててきた人々が、じつは、搾取・剰余価値の生産をまったくなにひとつ理解していなかったことが、ここで満天下にあきらかにされている。マルクスは、かの「仮象」について述べたとき、その論理展開を次のようにしていた。第七篇第二章単純再生産および、第二章剰余価値の資本への転化の部分である。

「資本価値の周期的増加分または過程的資本の周期的果実としては、剰余価値は資本から生ずる収入という形態を受けとる。この収入が資本家にとり消費元本としてのみ役立つとすれば、または周期的に獲得されるのと同様に消耗されるとすれば、他の事情が同等不変ならば単純再生産が行なわれるわけである。ところで単純再生産は同じ規模での生産過程の単なる反復であるといえ、この単なる反復または継続は、過程にたいし特定の新たな性格を刻印する、——あるいはむしろ、過程が孤立的事象にすぎぬかの如き仮象的性格を消滅させる。」(「資本論」P五九四)

と述べる。この傍線を引いた部分が問題である。マルクスはつづけて言う。「生産過程は一定期間にわたる労働力の購買をもって開始されるのであって、この開始は、労働の販売期間がきれ従って一定の生産期間……が経過すれば絶えず更新される。だが、労働者が支払われるのは、やっと、彼の労働力が働いてそれ自身の価値ならびに剰余価値を商品に実現させた後である。だから労働者は、剰余価値……と同様に、彼自身の受ける支払の元本たる可変資本を、それが労賃の形態で彼の手に還流する以前に生産しているのであって、彼は、この元本をたえず再生産する間だけしか就業させられない。……労賃の形態でたえず労働者の手に還流するものは、労働者自身によって絶えず再生産される生産物の一部分である。……今日または今後半年間の彼の労働は、前週または過去半年間の彼の労働をもって支払われる。貨幣形態によって生み出される幻想は、個々の資本家と個々の労働者の代りに資本家階級と労働者階級とを考察すればただちに消滅する。資本家階級は労働者階級にたいし、後者によって生産され前者によって取得された生産物の一部分を受け取りうる手形を、たえず貨幣形態で交付する。労働者はまたこの手形を資本家階級にたえず返済し、かくして、労働者自身の生産物のうち彼自身の手に帰すべき部分を資本家階級から受けとる。生産物の商品形態と商品の貨幣形態とはこの取引を包装させる。」(同前P五九四～五)

ここに、かのスターリニストたちが、「仮象」の内実としてあげていたことが述べられている。だが、ここでマルクスが述べていることは、すでに述べたように、生産の「過程が孤立的事象にすぎぬかの如き仮象的性格を消滅させる」その内容を述べているのであって、決して、かの「仮象」について述べているのではないのである。このようにマルクスは述べたうえで、さらに、「……資本制生産過程の単なる継続すなわち単純再生産は、なお他に、可変資本部分のみならず総資本にも及ぶ特有な諸変化を生ぜしめる。」(同前P五九七～八)

として、かの「仮象」の内実の暴露に、ここから入っていくのである。「一千ポンドの資本をもって周期的に、たとえば年々生み出される剰余価値を二百ポンドとし、この剰余価値が年々消費されるものとすれば、明らかに、同じ過程が五年間反復された後には、消費された剰余価値の総額は115×200であり、最後に投下された一千ポンドの資本価値に等しい。……一般的に云えば、——投下資本価値を年々消費される剰余価値で除すれば、その経過後に最初の投下資本が資本家によって消費しつくされ、従って消滅する年数または再生産期間の総数が出てくる。自分は他人の不払労働の生産物たる剰余価値を消費して最初の資本価値を保存するのだという資本家の表象は、絶対に事実を変化させえない。特定年数の経過後には、彼によって所有される資本価値は同じ年数間に等価なしで取得された剰余価値の総額に等しく、彼によって消費された価値総額は最初の資本価値に等しい。なるほど彼は、元のままの大きい資本をその手に保存しているのであり、その一部たる建物・機械などは、彼がその事業を始めた時にすでに現存していたものである。だが、ここで問題なのは資本の価値であって、資本の物質的諸成分ではない。……この資本の価値は、もはや、彼によって無償で取得された剰余価値の総額を代表するにすぎない。彼の

旧資本の価値は、みじんも存続しない。だから、おおよそ蓄積なるものを全く度外視しても、生産過程の単なる継続または単純再生産によって、長かれ短かれの期間の後には、どの資本も必然的に蓄積された資本または資本化された剰余価値に転化される。資本は、それが生産過程にはいつた時にはその充用者がみずから働いてえた財産だったとしても、早晩、等価なしに取得された価値、または他人の不払労働の……物質化となるのである。」(同前P五九七～八)

ここまで引用してくれば「なお他に」ということばでつながれた前後を、資本の再生産過程の二重の観点からのマルクスの分析であるということがとらえかえされるであろう。すなわち、かのいわゆる労働の二重性からの分析である。第一の面から分析されていることは、具体的有用労働—使用価値の系に属している。ここでマルクスは、「生産物」という表現を使っているが、決して、かの『経済学教科書』の筆者たちのように「生産物の価値」(正しくは、彼らは、「まえの生産期間に……労働者の労働がつくりだした価値」といっている)というようない方はしていない。ここではあくまで、資本のその物的姿態が問題であり、だからマルクスは、「手形」という表現をもって、この取引を説明しているのである。一方、「なお他に」の後の部分では、まさしく価値が問題になっており、「資本の物的諸成分」はまったく度外視される。抽象的人間的労働—価値の系で分析されている。そしてまさしく、いま問題としている、かの「仮象」については、この価値系の分析にもとづいてのみ、あきらかにすることができるといえる。ただし、流通に属する仮象である以上、商品の価値形態(交換価値)が問題だからである。

スターリニストたちはまったく混乱し、またここでも、資本がなにかもの「実体としてしか考えられない」ということを暴露している。

さて、マルクスはかかるいわゆる「労働の二重性」を基礎とした分析の後、この単純再生産の過程の諸契機そのものが、この過程の中で再生産されることを分析し、そのうえで次のように総括する。「かくして資本制生産過程は、それ自身の進行によって、労働力と労働条件との分離を再生産する。かくすることによってそれは、労働者の搾取条件を再生産し、永遠化する。それは、たえず労働者をして生きるために労働力を売ること余儀なくさせ、たえず資本家をして致富のために労働力を買うことを得せしめる。資本家と労働者とを購買

労働者階級にたいし、後者によって生産され前者によって取得された生産物の一部分を受け取りうる手形を、たえず貨幣形態で交付する。労働者はまたこの手形を資本家階級にたえず返済し、かくして、労働者自身の生産物のうち彼自身の手に帰すべき部分を資本家階級から受けとる。生産物の商品形態と商品の貨幣形態とはこの取引を包装させる。」(同前P五九四～五)

「……資本制生産過程の単なる継続すなわち単純再生産は、なお他に、可変資本部分のみならず総資本にも及ぶ特有な諸変化を生ぜしめる。」(同前P五九七～八)

として、かの「仮象」の内実の暴露に、ここから入っていくのである。「一千ポンドの資本をもって周期的に、たとえば年々生み出される剰余価値を二百ポンドとし、この剰余価値が年々消費されるものとすれば、明らかに、同じ過程が五年間反復された後には、消費された剰余価値の総額は115×200であり、最後に投下された一千ポンドの資本価値に等しい。……一般的に云えば、——投下資本価値を年々消費される剰余価値で除すれば、その経過後に最初の投下資本が資本家によって消費しつくされ、従って消滅する年数または再生産期間の総数が出てくる。自分は他人の不払労働の生産物たる剰余価値を消費して最初の資本価値を保存するのだという資本家の表象は、絶対に事実を変化させえない。特定年数の経過後には、彼によって所有される資本価値は同じ年数間に等価なしで取得された剰余価値の総額に等しく、彼によって消費された価値総額は最初の資本価値に等しい。なるほど彼は、元のままの大きい資本をその手に保存しているのであり、その一部たる建物・機械などは、彼がその事業を始めた時にすでに現存していたものである。だが、ここで問題なのは資本の価値であって、資本の物質的諸成分ではない。……この資本の価値は、もはや、彼によって無償で取得された剰余価値の総額を代表するにすぎない。彼の

者および販売者として商品市場で対応させあうものは、もはや偶然ではない。後者をたえず自分の労働力の売り手として商品市場に投げ返し、彼自身の生産物をたえず前者の購買手段に転化させるということば、過程そのものの筋書きである。事実上、労働者は、彼が自己を資本家に売るまえに資本に属している。彼の経済的隷属は、彼の自己販売の周期的更新や、彼の個人的雇主の交換や、労働の市場価格の動揺やによって、媒介されると同時に隠蔽されているのである。だから資本制生産過程は、関連において考察すれば、すなわち再生産過程としては、商品を生産するばかりでなく、資本関係そのものを、——一方には資本家を、他方には賃労働者を、生産し、再生産するのである。」(同前P六〇六～七)

マルクスはこのように、まず資本の単純再生産過程を分析し、そこから資本のもとへの賃労働の経済的隷属をあげだし、そして、資本と賃労働との交換の関係、すなわち労働力の売り買いが、商品交換法則に厳密に一致しながらも、労働力と交換される資本部分(可変資本部分)が、ある一定の期間後には、完全に過去の剰余労働に他ならないことをあきらかにし、その限りでは、かの流通に属する仮象の内実を暴露する。つまり、先の引用したマルクスの第一、第二として述べられた内容の第一の内容までがここであきらかとなる。

一方、わが『経済学教科書』の筆者たちは、労働の二重性からする分析を理解せず、混乱し、マルクスのことばをやたらと引用しながらも、まったくそれらを理解せず、デタラメを言い、だから、先にわれわれが指摘したマルクスの「価値系」からの分析について、

「したがって、資本のはじめのみなもとがどうであろうとも、すでに単純再生産がすむなかで一定の期間がたつと、この資本は、労働者の労働によってつくりだされて資本家がただで自分のものにした価値となる。」(『経済学教科書』P三三三)

と述べながらも、じつは、その内容をなにとつ理解できていないことを、その根拠を述べたすぐそのまえで、

「もし企業家が労働者の不払労働を自分のものにしなかつたら、彼の資本は、十年後(ここでは、十万ポンドが最初の前貸資本、年剰余価値が一万ポンドという例によって説明がおこなわれている)には完全に食いふされてしまうことになろう。だがそういうことにはなら

ない。なぜなら、資本家はその期間に個人的消費に支出した十萬ポンドという額は、労働者の不払労働がつくりだした剰余価値によって、完全に更新されるからである」(同前)

と述べることで白日のもとにさらけだしているからである。なんとこのように乱である。なんという浅薄さであろう。そして、いままでこのようにナタラメが、わがマルクス主義者のあいだでも見すごされてきたとは?! 日本の「すぐれた」マルクス主義者の程度が知れるネ、それはそれとして、本當に驚くべきことに、この筆者たちは、どうしても、資本をモノとむすびつけなければ理解できないらしく、そこをぬけきれないやめ、ここではともと消費元本として考えられている十年間分の剰余価値が、十年間分の剰余価値で更新される、というなんともいいよりの軽薄なことが述べられているわけだ。

だが、資本というのは、その物的状態にかかわらず考えられねばならないのであり、物的諸形態(成分)はただもっぱら、資本という価値の担い手としてのみ意義をもつにすぎない。資本も一つの価値なのである。だから、マルクスは、この例にしたがっていえば、十年間で消費された剰余価値総額十萬ポンドは、最初に資本家の手もとにあった資本価値十萬ポンドに等しく、資本は、あくまでその価値としてみていくことが必要なのであるから、その物的状態——たとえば、工場、機械等——が、はじめのままであろうとも、その価値としては、完全に、元の価値は更新され、賃労働者が生みだした剰余価値——不払労働によってなっている、といっているのだ。

さて、やや横道にそれだが、このようにマルクスは分析したうえで、さらに資本の拡大再生産の分析に歩をすすめ、かの可変資本部分が、単純再生産においては、同じ大きさの価値額として不断に再生産される、とされているのにたいし、ここでは、この部分が、それが資本の価値たる限りは、不断に新たな増加分をもたず再生産されることをあきらかにしている。こうして、かの「流通に属する仮象」の内容の「第二に」として述べられたこともあきらかとなり、ここにづけて、先に引用したかのパラグラフが入ってくるのである。これがマルクスの述べているところである。(註)

(註) 価値は、絶対になにか物的状態をもつたものと考えられてはならぬのであるから、不変資本部分の増加分と可変資本部分の増加分とによって、新たな資本の増加分が構成されるなどと考へてはならない。増加分がどのように、可変部分と不変部分に転態されるかは、ここで

このところだけを見ると、まったく正しい。それがマルクスからの引用である以上、当然のことだ。だが、マルクスのことばを正しく理解するか、しないかはまったく別問題である。別のところではこうある。

「ブルジョアジーは、生産手段を所有して、賃労働を搾取するためにそれを利用する階級である。プロレタリアートは、生産手段をうばわれており、そのためやむをえず自分の労働力を資本家に売らなければならぬ、賃労働者の階級である。資本は、機械制生産にもとづいて、賃労働を完全に従属させる。賃労働者の階級にとっては、プロレタリア的な状態は、一生の運命となった。」(同前P一九九)

「資本主義制度のもとでは、生産関係の基礎は、生産手段の資本主義的所有であって、この所有は、賃労働者を搾取するのに利用される。」(同前P二〇〇)

このように、賃労働と資本、あるいはプロレタリアートとブルジョアジーとの関係を、搾取ということからしかみない以上、「賃金奴隷」であるとか、「ブルジョアジーとプロレタリアートとの階級利害は、和解できない」とかいつてみても、なんの役に立たない。ただマルクスのら列でしかない。賃労働と資本の関係をまったく理解できないために、この第七章で、それを概括的に述べようとしながら失敗し、だから、第八章の賃金の章では、最初のべたような、なんともこっけいなことが述べられるのである。だが、じつは、スターリニストたちの程度の悪さのゆえに、この第七章などが挿入されてきたのである。つまり、マルクスのばあい、資本のもとへの賃労働の隷属が、資本の運動によってどのように変化し、深まっていくかを、厳密に理論的にその位相ごとに対応してあきらかにされていってあり、そうして、総括として、第七篇第二四章いわゆる本源的蓄積、第七節資本制的蓄積の歴史的傾向のところまでまとめられているのであるが、スターリニストどもは、そのような点はまったくみられず、ただ混乱して、マルクスからの引用でゴマカそうとしているのである。だから、とつびようしもないところにブルジョア国家の説明まででてくるわけである。

(b) へ法則万能論—社会主義経済学—批判

(a)において、われわれはスターリニズムの経済学批判が、まったくブルジョアの立場からの批判に終っており、俗流ブルジョア経済学に転落していることを暴露してきたが、ここではさらに、まさにスターリニズムは

はまったく別問題である。

これに反してスターリニスト「経済学教科書」の筆者たちは、ただマルクスのことばだけをなんの中味の理解なしに列しただけであり、賃労働の資本のもとへの経済的隷属の内実を、なんらあきらかにせず、混乱に混乱をかさねていたわけである。

以上で、彼らの「やぶへび」をみてきたのであるが、さらに、もう一つ大きなやつをみておこう。

ここに来て問題が発展した、かの「賃金」の章は第八章であり、その次に第九章として、いま分析してきた蓄積の章(第九章 資本の蓄積とプロレタリアートの貧困化)がある。ところで、この第八章のすぐまえは「資本と剰余価値。資本主義の基本的経済法則」という章がおかれており、ここで驚くべきことには、資本制生産の総括が与えられているのである。この章の節目は次のようになっていっている。

「資本主義生産関係の基礎 貨幣が資本となる 商品としての労働力 労働力の価値と使用価値 剰余価値の法則は資本主義の基本法則である 資本は生産の社会関係である。不変資本と可変資本 剰余価値率 搾取の程度を高める二つの方法。絶対的剰余価値と相対的剰余価値 労働日とその限界 労働日短縮のための闘争 特別剰余価値 資本主義社会の階級構成。ブルジョア国家 要約」

以上であるが、ご覧のように、ブルジョア国家にいたる総括的な内容が述べられているわけである。これからわかるように、このような章構成の問題点はおくとしても、そのような構成にしたがえば、そこで賃労働と資本との関係が、概括的にあきらかにされねばならないことはいうまでもない。事実そこではこう書いている。

「資本主義は、賃労働者が一定の時間を資本家のためにたらくかぎりだけ、賃労働者に労働する可能性を、したがってまた生活する可能性をあたえる。ある資本主義企業をやめた労働者は、もともともまくいっただけでも他の資本主義企業にはいるだけであって、そこでも同じような搾取をうける。マルクスは賃労働の制度が、賃金奴隷の制度であることをあきらかにして、ローマの奴隷は鎖にしばりつけられていたが、賃労働者は眼にみえない糸でその所有者にむすびつけられている、と指摘した。この所有者というのは、全体としての資本家階級のことである。」(「経済学教科書」P一八五)

そうであるがゆえに、法則万能論におちいり、剰余価値法則なるものをねつ造し、結局は、商品生産—価値法則、資本制生産を擁護し、そして、社会主義経済学なるとてもない戯言をなすにいたっていることを、ここで暴露しておこう。

スターリンは、賃労働と資本との敵対的、非和解的關係を、まさしく経済学批判として暴露することができず、小ブルジョア急進主義的な資本主義告発に終っていることはすでにみた。だが、かかる批判水準にありながらも彼は、資本主義の打倒とプロレタリア独裁をかかげねばならなかった。プロレタリアートの階級闘争の物的根拠の解明をなしえないにもかかわらず、プロレタリアートによるブルジョア権力の打倒—プロレタリア独裁樹立をかかげねばならなかった。そしてなによりも、レーニン死後のロシアにおいて、社会主義建設をすすめねばならなかった。この矛盾を、スターリンは、歴史法則に依拠することによって解決することになった。法則万能論者としてのスターリン様のおでましというしだいた。

経済学批判における理論的脆弱性を、スターリンは早くから歴史法則主義によってゴマカそうとしていた。彼のごく初期の著作である『無政府主義が社会主義か?』(一九〇六年)の中で資本主義から社会主義への移行を、「夜のあとに昼がつづくのと同じように不可避」だと証明しようとしていることはすでにみた(註)。このような理論的態度は、レーニン死後の実践的に社会主義建設をすすめていかなければならなくなつたときに、もつとも露骨な形で、だから「現実」ともつと矛盾をあらわにした形であらわれざるをえなかった。それを典型的に示すものが『ソ同盟における社会主義の経済的諸問題』であり、またスターリニズム一般としては『経済学教科書』である。

そこには次のようなモノスゴイ法則系列が登場する。

* 商品生産 — 価値法則

* 資本制生産 — 剰余価値法則

* 帝国主義段階の資本制生産—最大限利潤の法則

以上を、科学としての経済学が、説明するとする。

* 社会主義 — 社会主義の基本的経済法則

○ 国民経済の計画性ある、つりあいのとれた発展の法則

○ 労働生産性のためみない向上という法則

○ 労働に応じた分配という法則

これを、科学としての社会主義経済学が、解明するとする。このように一覽すればスターリニズムの経済学批判のデタラメさは一目瞭然となる。

中途半端な、誤った経済学批判「タダモノ主義」超主観的科學主義（科學としての経済学—科学としての社会主義経済学なる系）↓そのふりまわし・現実のそぎおとし（いわゆる左右のブレ）↓一方で「ムチャクチャな農業集団化、一方での商品生産・価値法則の擁護」という誤謬の体系が理解しうる。

つまり、プロレタリア独裁下での社会主義建設という、すぐれて実践的な課題にたいし、スターリンは、超主観的科學主義—法則論によって対処しようとしたのである。たとえばスターリニズムは、プロレタリア革命による剰余価値法則の「掃き」価値法則の制限という図式を想定するが、この制限は、決して階級闘争としての制限として考えられてはいない。

「…：価値法則の作用する範囲は、わが経済制度のもとでは、厳重に制限されており、わくにはめられているのである。…：商品生産の作用する範囲は、われわれの制度のもとでは、制限されており、わくにはめられていっている。価値法則の作用する範囲についても、同じことをいなければならない。うたがいのなく、生産手段の私的所有の欠除と、都市ならびに農村における生産手段の社会化とは、価値法則の作用する範囲と、価値法則が生産に影響をあたえる程度とを、制限せずにはおかないのである。」（『ソ同盟における社会主義的経済的諸問題』国民文庫、P二九）

「生産手段が社会的所有であり、賃労働制度が一扫され、また人間による人間の搾取が一扫されているというような、決定的条件のおかげで社会主義のもとでの商品生産は、一定の枠をはめられている。それは資本主義生産に転化することはいえず、社会主義に奉仕する（?!?!）のである。」（『経済学教科書』）

階級闘争はいつさいいらず、あとは生産力の増強だけで、という具合だ。プロレタリア独裁下での社会主義建設は、あくまで階級闘争なのであって、科学によって解明されうるものでもなく、また法則によってわかりきれるものでもない。それは、商品生産をも根こそぎにすることに

にして眼前にいる雇主をブルジョアジーとして現出させるのか、というすぐれて実践上の課題が、完全にスポイルされているのだ、かくして、この悪玉が、より多く、早く、むだなく搾取するかの単なるテコとして国家を外からもちこむのだ。だから国家は、粗野で野蛮な搾取貫徹・拡大のためのテコの体系としてとらえられる。だが、国家は、このように、階級闘争ぬきに、科学的にとらえられたり、認識されたりするものではない。たとえば、先の『経済学教科書』のように。

「ブルジョア国家は、…：資本家の手にあって、労働者階級や農民や…：の勤労者を隷属させ抑圧する道具となっている。…：ブルジョア国家は、…：資本家や地主が勤労者を搾取することを保障し、資本主義制度にたいする勤労者の闘争を弾圧する。…：資本主義的秩序をまもり、人民大衆を弾圧する任務を、国家は、行政機構、警察、軍隊、裁判所、刑務所、強制収容所その他の暴力手段をつかって、実現する。これらの暴力方法をおぎなうのにならなければならないものとして、イデオロギー的にはたらしめかける手段があり、ブルジョアジーはこれらの手段をつかって自分の支配を強めているのである。ブルジョア新聞、ラジオ、映画、ブルジョア科学と芸術、教会がそれである。」（『経済学教科書』P一四二—三）

なるほど「教科書」ではある。だが、このような優等生的答案（方々にまちがった）は、まったくなんの役にもたない。問題は、国家を、プロレタリアートに対立するものとして、このような形でもって現出させること、暴力的抑圧の体系として現出させること、この階級闘争にあるのであって、だから、あくまで賃労働者と資本家とがいかに非和解的に対立しているかを具体的に広い意味で暴露していくことが問われねばならぬ。そしてこのことが十分に、レーニン的意味でなしとげられるためには、賃労働—資本—関係の非和解性の部分的でないトータルな批判が、それこそが必要なのだ。この点をしっかりとつかみうる者にはじめて、次のマルクスの言葉は真に理解しうる。

「…：革命は徹底的である。それはまだ煉獄を通る旅の途中にある。革命は手順をおってその仕事をなしとげる。…：革命ははじめに議会権力を完成して、それを転覆できるようにした。この仕事をやりとげた今では、革命は執行権力を完成し、それをその最も純粋な表現につ

つて、資本主義が発生することさえできなくする階級闘争であり、それゆえに、ますます経済学批判がとぎすまされていかねばならない。価値法則—商品生産は「制限」されているなどといって、それを容認・擁護することではないし、ありもしない社会主義経済学なるものをデッチあげて、それをふりまわして現実をそぎおとし、そのことでもない。

法則へののめりこみ（タダモノ主義と科学主義とは、その一方で、超（ウルトラ）主観主義—それによる現実の切りきざみ・そぎおとしであること）を忘れてはならない。

(c) 構造改革派（軟派スターリニズム）発生論の根拠について
すでに(c)において、スターリニズムが、労働の社会化を生産の社会化に一面化し、かくて、生産の社会的性格と取得の私的性格との矛盾を、完全に誤って理解し、生産の社会的拡大に、なにか社会主義の芽を具体的にみて言っていることを暴露してきた。

生産の結果—分配論からする経済学批判によって、生産過程に、資本の運動に包摂されざるある社会的実体（社会主義の芽のようなもの）をみていくというこのことを一方に、他方で、国家をあくまで階級対立の非和解性の産物としてとらえきれずに、それを賃労働—資本—関係把握に外在的に接木したこと、この双方が結合することによって、後の構造派発生論の根拠があるのである。

すなわち、階級関係からは、外在的に接木されている国家を、「革新」（または「民主化」）することによって、かの社会主義の芽をそだてようというわけだ。

生産の社会性と取得の社会的性格との矛盾の荒唐無稽な理解はすでにわしくみただ、ここでは国家把握の誤謬について少しみておこう。
スターリニズムは賃労働—資本の非和解的対立を、直接的生産過程における搾取—被搾取の關係に一面化してとらえるために、国家をも、プロレタリアートとブルジョアジーとの非和解的対立のその総体からとらえるのではなく、せましく把握された直接的生産過程の窓をとうしてとらえていってしまう。まず、彼らは、資本家階級—ブルジョアジーを、直接に雇主にかさねあわせ（したがって、彼らにとって党に指導されたレーニンの意味における階級闘争の実践以前に、資本家は悪玉として「党」によって宣言され、かくてそれを認識することが階級闘争に代替される。つまり、い

こうして自力の破壊力をあげて執行権力にたいして集中できるようにする。そして、革命がその準備作業のこのあとの半分をなしとげたとき、ヨーロッパは席からとびあがって歓呼するであろう。あつぱれ掘りかえしたぞ、老いたるもぐらよ」と。（『ブリュメール十八日』岩波文庫、P一四一—二）

階級闘争の中途半端な批判—階級関係把握外部からの国家論の接木—しかも階級闘争視点ぬきのその国家本質論的展開—これこそ、今日の構改派（宮本・不破一派、マルシェ一派、ベルリンゲル一派も当然これにふくまれる、というよりその先頭だ）の民主化路線、ズブズブ議会主義の根拠なのだ。

俗物的な眼にはますます階級対立の非和解性が見えがたくなってきている現代過渡期世界—いわゆる先進資本主義国において、かかる路線が開いたことは驚くにはあたらなし。

③ 中共派の経済学「批判」の批判

解説のこの部分を書かれたのはその内容からあきらかなように、いわゆる「四人組」追放以前である。だが、われわれは次の二つの理由から、これをそのまま発表することにした。

理由の第一は、ここで主に批判の狙上にのせている『政治経済学の基礎』—これはいわゆる「四人組」派—文革左派が主流であった時期の、しかもその拠点であった上海での一つの成果である—が、その理論水準、傾向においてこれまでの中国での一典型を示していると考えられ、それがいわゆる「四人組」追放後、後退していることはあってもより深化されているとみられないこと（たとえば、最近はじめられた張春橋、姚文元への理論的批判をみよ—『北京周報』一九七八年一—）、これである。それゆえ、われわれの批判はいまなお、中国共産党の経済学批判にたいして有効であるという点なのである。

さて理由の第二に、本批判では、中国共産党の経済学批判の取りくみを、中国共産党の闘いの中に位置づけているが、その内容からして、華—鄧体制の出現と性格とをある程度裏づけているからである。

第三に、本批判は、中国共産党の経済学批判の限界を、ソ連共産党への理論上の脅通として暴露しているが、華グループの追放、鄧派の勝利の中で生じて、理論上のソ連共産党へのよ

判によって一定程度鮮明になっていくからである。

プロ独学習運動以降、走資派批判、鄧小平追放・批判、文革左派追放・「四人組」批判鄧小平復活というドラスチックな中国共産党内闘争の過程を、その根本から批判する視角と内容を本批判は提示しており、しかもそれが基本的に正しいということがあきらかになった、とわれわれは考えている。

林彪批判をその核心において遂行しえず迂回することではじめられたプロ独学習運動の限界が、経済学批判の不十分、誤謬を生みだし、克服できず、それが鄧小平批判での停滞と後退の結果し、さらに「紅か専か」といったブルジョア論理の地平に足をすくわれてまきこまれた、というのが文革左派のいわゆる「四人組」の道程ではなかったか。そこにすでに明確に、彼らの党的敗北と鄧小平の勝利とを読みとることができると。

中国共産党における経済学批判は、従来あまりみるべきものがないようにみうけられる。われわれが知りうる限りにおいては少なくともそうである。このことは、中国の特殊な諸条件、とりわけ革命前・革命後初期の経済・社会状況に大きく起因しているではあるが、それが、中国革命の特殊なあらわれ方に照応し、そしてまたそれは、中国共産党には、党としての綱領がないということも照応している。

だが、このような状況は、根本的に変わろうとしているとみてよい。彼ら自身のことばによれば、「中国では、新民主主義革命の段階が、基本的に終って以降、社会の根本矛盾は、ブルジョア階級とプロレタリアートとの矛盾となった」と述べており、このように、革命の問題を、ブルジョア階級とプロレタリアートの階級矛盾からとらえていこうとする限り、経済学批判が絶対に必要になるからである。事実、プロ文革以降、その傾向は顕著であるといえる。この傾向は、つまるところ経済学批判たるマルクス主義経済学の学習・摂取として、しかも例のごとく大衆的な討議にささえられ、実践上のものもろの課題とむすびつけられたものとして遂行されている。党のレベルでは相当に広く、深く問題がとりあげられているとみてよい。では、彼らのこの傾向の問題意識と構造とを、次にざっとみておこう。

そしてそのうえで、彼らの経済学批判を批判していこう。
中ソ論争を伏線とし、プロレタリア文化大革命、批林批孔、プロレタリア独裁学習運動、走資派・鄧小平批判という流れの中で毛沢東・中国共産党が一貫しておこなってきたのは、それはとどのつまりプロレタリア独裁

とが問題とされ、そしてなにかんずく小商品生産という問題が大きくとりあげられることとなった。つまり、いささか読みこみではあるが、社会主義・共産主義を、その基礎のうえに建設するブルジョア社会の解剖へとすすんでいったわけである。プロレタリアートの独裁（他のなにもものでもなくプロレタリアートの）ということが、本当に問題になりはじめたといつてもよい。もちろん、全国的なプロレタリア独裁学習運動以降の動きをみても、きわめてジグザグを示しており、最近の鄧小平批判の過程では、なにかしら、この理論的内容が、やや後退したかの感もみられるが、しかし、経済学批判が大きな課題となっていることは、絶対に確かめようと思う。このことは、最近、資本主義に関する文献がいくつかわれわれにも紹介されていることにも示されている。

ところで、彼らが、このように経済学批判を本当に問題にしはじめたという点と、その批判の内容が正しいかどうかという点とは、絶対になんの関係もない。われわれは、いま、プロ独中国で、プロ独理論の深化、経済学批判がおこなわれているという点に無条件に支持するが、だが、まさに支持するがゆえに、彼らの経済学批判の誤謬を指摘し、批判しなければならぬ。

さて、いよいよ本題にはいろう。彼らの経済学批判の内容は、現在ほとんど文献が知られていないので、党の公式見解としてわれわれは知ることができない。ここでは、先にスターリニズム批判としてとりあげた『経済学教科書』に對抗して、その批判としてだされた『政治経済学の基礎』（『政治経済学基礎知識』執筆組編、東方書店出版）を中心にみる。

さて、この『政治経済学の基礎』（以下「基礎」と略す）は、上海の人民出版社から「青年自学叢書」の一冊としてだされたもので、大学進学まえの青年たちを対象としている。したがって、これは党の公式の見解を述べたものではないし、学習用文献としてわかりやすく書かれたものである。だが、このことはかえって、中国共産党が経済学批判をどうなしているかをわれわれにあきらかにしてくれるのではなからうか。まえおきはこれくらいにして本論にはいろう。

まず結論から先にいえば、われわれがすでに述べてきたように、いま中国において商品生産―資本制生産について正しく分析・批判することがもとめられている客観的な状況があったわけだけれども、この『基礎』においては、このことが明確につかまれている。本書には冒頭に、政治経済学

とはいったいなにか、そしてその任務とはいったいなにか、ということをもぐってなされたとみてよい。だが、その内容にたいして分析を加えてみると、中ソ論争から現在にいたる過程で、その問題のたて方自体が微妙にちがってきている。中ソ論争をふまえてプロレタリア文化大革命の中で、それはなによりも、中国という一国のプロレタリア独裁が、世界革命にたいしていかように貢献するのか、という問題意識に強くささえられており、それは日まに激化していったベトナム戦争によって、きわめてリアルなものとしてあらわれていた。この時期にはだから、世界革命に貢献することを第一にたてて、そのために、中国をその革命の根拠地化することとが提議され、かくてそのために、内外の修正主義批判を通じた社会主義建設―根拠地化がなされていくことになる。だが、この時期における理論的な内容は、中ソ論争での問題提出の限界（すなわち、毛沢東『実践論』『矛盾論』からするところの解明方法）に大きく規定され、きわめて原則的な確認がなされたにとどまった。つまり、社会主義の時代の全体を通じて階級、階級矛盾、階級闘争が存在し、このブルジョア階級とプロレタリアートとの死活的闘争を最後までやりぬくことが不可欠である、というものである。このこと自体は、中国での現実の階級闘争（大躍進、プロレタリア文化大革命、種々の党内闘争）をあくまでリアルに確認したものであったが、しかし、それはきわめて現象的な理解にしかならない、いわば現実からの直観にすぎなかった。階級、階級矛盾、階級闘争といったことの内実が、深くとらえられていたわけでは決してない。なぜそれらが、社会主義の時期全体を通じて残るのか、は決して解明されることなく、このこととが、この時期の経済学批判の程度を示している。

ところで、プロレタリア文化大革命以降、批林批孔以後の過程においては、一方で先の時期にまずたてられていた世界革命へのプロ独中国の貢献ということが、希薄になっていくことになった。つまり、世界革命のため修正主義を批判する、資本主義の復活をたたくということが、中国を正しく社会主義―共産主義へと導くために、資本主義の復活を防ぐ、修正主義の発生を防ぐというぐあいに、問題のたて方自体が、能動から受動へ、攻撃から防禦へと転化していったのであった。だが一方で、修正主義批判の理論的内容は深化したといえる。つまり従来、直観的な形でのみいわれてきた社会主義の時期全体を通じての階級、階級矛盾、階級闘争について、その根拠の解明にすすんでいったからである。ブルジョアの残滓といふこ

を学ぼうという一節をわざわざ設けて、このことについて強調しているのだけれども、かえって混乱を示しているといつてもよい。たとえばこういふ「政治経済学を学ぶことは、マルクス主義に精通し、修正主義批判を深め、世界観を意識的に改造するうえで、とりわけ、社会主義の全歴史段階における党の基本路線と政策とを深く理解するうえで、きわめて重要な意味をもっている。」（『基礎』P十五）
あるいは、

「マルクス主義政治経済学は、ブルジョア階級と修正主義のあらゆる政治経済学と根本的に対立するものであり、しかもブルジョア階級、修正主義の政治経済学との闘争をつうじて発展してきたものである。マルクス主義政治経済学を学習することによって、われわれはブルジョア階級のそれぞれの境界をはっきりとさせ、正しくない風潮をあらため、われわれの思想的自覚を向上させることが可能となる。必要するに、反党的、反マルクス主義的思潮のうち勝つために、よりすばらしく社会主義全体の歴史的段階における党の基本路線を一貫して実行し、より深く批林整風運動を展開し、偉大なる社会主義革命と社会主義建設において、たえず新しい、より大きな勝利を勝ちとるためには、政治経済学を学ばなければならぬのである。」（同前P二六）

ほほ正しい問題意識にたち、問題を提出してはいながらも、しかし、微妙なニュアンス上ともとれる誤謬の芽がそこにはらまれている。つまり、経済学批判をどれほど深くなしているかということが、社会主義―共産主義建設の要であるということが、まっすぐに、はつきりとはだされていない。なにかしら、修正主義批判の一つの重要なテコといったニュアンスが感じられる。このような誤謬の芽は、たとえば、

「……マルクス主義政治経済学はマルクス主義哲学、科学的な社会主義の理論と一体になって、プロレタリア階級の党が基本路線を判定する際の理論的基礎となっている」（同前P二四）

だとか、
「社会主義政治経済学の基本的任務は、ほかでもなく社会主義社会の生産関係の生成、発展および共産主義的生産関係への転化についての法則を研究し、解明することである」（同前P二五）
だとか、またあるいは、

「政治経済学は弁証法的唯物論および史的唯物論の証明と運用そのものである。したがって、政治経済学の学習もまた、弁証法的唯物論によって導かれる必要がある」(同前P二一六)

といたふうなことが述べられると、本格的な誤謬とむすびついていることはあきらかになるであろう。いかえれば、問題意識の不明確さと混乱は、結局、彼らの経済学批判の混乱と誤謬とに照応しているということである。

これまた結論から先にいえば、この書の経済学批判は、スターリニズムとほぼ同一であり、時には後退さしているというものでしかない。つまり、資本主義の搾取制度論、搾取のしくみ論に他ならないのである。スターリニズムと同じであるというこの点は、この『基礎』の構成と、かの『教科書』のそれとの比較からしてもすぐさまみとれる。次にそれを掲げよう。

序論 <政治経済学の基礎>

序論

第一篇 資本主義以前の生産方法

第一章 原始共同体の生産方法

第二章 奴隷制生産方法

第三章 封建制生産方法

第二篇 資本主義の生産方法

第一章 独占以前の資本主義

第二章 商品生産、商品と貨幣

第三章 商品生産は資本主義発生の出発点であり、資本主義の一般

的特徴である

商品とその性格、商品という

かたちをとった労働の二重の

性格

単純労働と複雑労働、社会的

に必要な労働時間

一政治経済学を学ぼう

二資本主義以前の社会経済制度

三原始共同体は人類史上最初の生産関係を築いた

四奴隷制は歴史上もっとも古い搾取制度である

五封建制もまた階級対立の搾取制度である

六資本主義社会の分析は商品から始めなければならない

七商品関係は資本主義のあらゆる矛盾の萌芽を内包している

八賃金は資本主義の搾取関係をおおいかくしている

* 貨幣の機能

* 金と紙幣

* 価値法則は商品生産の経済法則である

* 商品の偶像的性格

第五章 資本主義の単純協業と工場制手工業

* 資本主義の単純協業

* 資本主義の工場制手工業の時期

* 資本主義の国内市場の形成

第六章 資本主義の機械制の時期への移行

* 工場制手工業から機械制工業への移行

* 産業革命

* 都市と工業中心地との成長、プロレタリア階級の形成

* 資本主義的工場、機械は資本が賃労働を搾取する手段である

* 大工業と農業

* 労働と生産との資本主義的社会化、資本主義のもとで機械

がつかわれる限界

* 貨幣は商品交換の発展の必然的な産物である

* 価値法則は商品生産の経済法則である

* 商品の偶像的性格の謎をあばく

四資本家はどのようにして労働者を搾取し抑圧するのか?

——資本と剰余価値

* 資本家が労働者を搾取する魔術

* 資本家が労働者を搾取し抑圧する残酷な手段

第七章 資本と剰余価値、資本主義の基本的経済法則(略)

第八章 賃金

* 労働力の価格、賃金の本質

* 賃金の主要な形態

* 苦汁賃金制度

* 名目賃金と実質賃金

* 資本主義のもとでの実質賃金の低下

* 労働者階級の賃上げ闘争

第九章 資本の蓄積とプロレタリアートの貧困化

* 生産と再生産

* 資本主義単純再生産

* 資本主義拡大再生産、資本の蓄積

* 資本の有機的構成、資本の集積と集中

* 産業予備軍

* 農村過剰人口

* 資本主義的蓄積の一般法則、プロレタリアートの相対的貧困化と絶対的貧困化

* 資本主義的生産方法の基本的矛盾

矛盾

* 賃金は資本主義の搾取関係をおおいかくしている

* 賃金は資本主義の搾取関係をおおいかくしている

* 賃金は資本主義の搾取関係をおおいかくしている

* 賃金は資本主義の搾取関係をおおいかくしている

* 賃金は資本主義の搾取関係をおおいかくしている

* 賃金は資本主義の搾取関係をおおいかくしている

* 賃金は資本主義の搾取関係をおおいかくしている

* 賃金は資本主義の搾取関係をおおいかくしている

* 賃金は資本主義の搾取関係をおおいかくしている

* 賃金は資本主義の搾取関係をおおいかくしている

* 賃金は資本主義の搾取関係をおおいかくしている

* 賃金は資本主義の搾取関係をおおいかくしている

* 賃金は資本主義の搾取関係をおおいかくしている

* 賃金は資本主義の搾取関係をおおいかくしている

* 賃金は資本主義の搾取関係をおおいかくしている

* 賃金は資本主義の搾取関係をおおいかくしている

* 賃金は資本主義の搾取関係をおおいかくしている

いる。プロレタリアートとブルジョアとの階級関係、階級闘争を前面においたことによって、その誤った理解、すなわち、それを単に搾取—被搾取関係としてしか表現しえないという誤謬が、まともにはけだされていく。すべてが搾取の強化、拡大、貧富の差の拡大としてまとめられていることが、そのタイトルからあまのりなくみとれる。では、その内容をみてみよう。

彼らもまた、スターリニストと同じように、マルクスが剰余価値の秘密をあばきだしたということをきわめて形式的に理解し、搾取ということにみづから幻惑され、資本—賃労働の関係を搾取—被搾取の関係に一面化してしまう。だから経済学批判も、単に搾取がどのようにおこなわれているかというこの批判(把握)に一面化される。つまり、マルクスが剰余価値の秘密を暴露することによって、資本と賃労働との関係、すなわち賃労働の資本のもとへの完全な、そしてますます強化・深化する経済的隷属の關係の全構造を把握したということが、まったく無視されるわけである。だから、彼らは次のようにいう。

「資本主義的生産は剰余価値の追求を目的とする商品生産である。資本主義的生産の本質を理解しようとするならば、マルクスの資本と剰余価値の理論を学習しなければならない。マルクスのこの理論で武装しなければ、資本主義の搾取関係を理解し、資本主義は必然的に滅亡し、社会主義が必然的に勝利するという社会の発展法則を認識し、そのうえにプロレタリア階級の歴史的使命を理解して、プロレタリア階級のめざめた革命戦士になることはできない。」(『基礎』P八三)

いわゆる史的唯物論の誤謬はおくとして、ここではつきりみてとれるのは、彼らは「資本主義の搾取関係」の理解が、資本主義への理解の軸点だと考えていることである。

さて、このように彼らは、資本—賃労働の関係を、搾取—被搾取の關係に一面化するので、彼らがおこなう資本主義の分析は、まことに首尾一貫して、この搾取がいったいどのように強化されるか、拡大されるか、という点だけのものになってしまう。つまり、マルクスが、絶対的相対的剰余価値の生産の拡大・強化、蓄積の強化・拡大等によって、ますます賃労働が資本のもとへ隷属していくことをあばきだしたということが完全にすれさられる。この点は、この『基礎』はスターリニズムよりも徹底して

(というのには、すでに述べたように、彼らは、階級関係を軸に考え、

しかもそれを、搾取にたいする闘争としてるので、スターリニストの方は、われわれがまえに指摘したように、まったく混乱し、ことばだけなのだが、マルクスが述べたことを引用してはいるのだが、一方、『基礎』ではかかるマルクスのことばはいっさい捨てられてしまっている。ただ一カ所、

「資本家が労働者を雇用するのは、つまり労働者の労働力を買うことであり、労働者を資本家の賃金奴隷に変えることである」(同前P八五)

なるところがあるが、この引用を見てのとおり、資本家の労働者の雇用は労働者の賃金奴隷化」というなんともオンマツな表現で、ともかく、この『賃金奴隷』という意味がまったくつかまれておらず、このまえにもあとにも内容展開はいっさいない。

また、一例として、

「資本主義の労働過程の特徴は、資本家が生産手段を占有し、労働者は資本家の支配のもとで労働し、労働の成果が資本家に一人じめされることにある」(同前P八六七)

なることがいわれている。ここでいわれている内容は、すでにわれわれが解説してきたように、資本のもとに賃労働が、いまだ形態的に包摂される段階、つまりたまたまばら絶対的剰余価値の生産だけがおこなわれるときにさえ、労働過程が、資本主義的生産過程の一側面としてあらわれるときには、このような二つの独自の現象が呈示され、資本のもとへの賃労働の隷属がはっきりとあらわれる、ということマルクスは述べたのであった。だが、『基礎』ではこのようなことがまったくかえりみられず、ただ、資本主義的労働過程の特徴づけ一般として、ポツンと述べられてはいるにすぎない。あとにもさきにも、これに関しては何にもいわれない。階級闘争とむすびつけられないと、なんと彼らは精彩がないことだろう(なぜといて、彼らは、階級闘争を搾取にたいする闘争としてしかみていないので、労働過程がいくら資本主義的をなしても、搾取とは無関係で、階級闘争とは、無関係なことになるのだ)。

さて、ことほど左様に首尾一貫して、搾取、搾取とワメキらし、一所懸命に搾取の強化・拡大について述べたてていくのである(前掲のタイトルから推して知るべし)。では、そのいきつく先はどうか。

第一に、スターリニズムとまったく同じように、資本主義社会を、貧富の差のある不平等な社会、不公平な分配のおこなわれている社会とみてしまふ。そして第二に、この不平等をますます拡大・強化していくブルジョ

アジのその「悪らつさ」や、「する賢さ」等への告発をもって、経済学批判をおこなう。

「ブルジョア階級と彼らの代言人は資本主義制度を擁護し、資本主義の搾取の本質をおおいかくすために、さまざまなあやまった理論をつくらせて人びとをあざむき、労働者が寒さや餓えになやまされるのは「運が悪い」ためであり、資本家が金をもうけて財をなすのは「勤勉節約」によるものであるなどと言いたてている。これはまったく人をばかにしたたごとである。資本家は労働もせず、ハンマーもにぎらず、機械も運転しないのに、どうして「勤勉」であると言いえようか? 旧社会において、労働者がこのうえもなく貧困であるのは、けっして「運が悪い」ためではなく、労働者が労働してつくりだした成果の大部分が資本家によって略奪されるためである。」「大部分」とあるが、では、小部分にせよ残りはどうなっているのか。このような表現では、労働者も分配にあづかっているとしみきれない。」一口に言え、労働者の貧しさは資本家の豊かさは、同一の根源、すなわち生産手段にたいする資本家の私的占有を基礎とする資本主義的搾取制度に原因しているのである。」(同前P九一)

「旧社会を経験してきた年老いた労働者は、みんな血と涙でつづられた歴史をもっている。旧社会を回想すると、労働者は「豚や犬の食べ物を食って牛や馬がする仕事をして」、政治上では抑圧され、生活は保障されず、暮しは日とともに苦しくなった。これはなぜなのだろうか? 資本家たちは、一年中働かず、労働者の頭上に馬のりになっていばりちらし、酒色におぼれ、ただれて腐れはてた生活を送っていたのに、財産はますます多くなつた。これはまたなぜなのだろうか? マルクスの資本と剰余価値の理論がはじめてこの魔術をあばきだし、この質問に科学的に答えたのである。」(同前P八四)

「資本主義社会では、資本家は労働者を残酷に搾取するばかりでなく、労働者を凶暴に抑圧する。旧中国では、多くの工場の資本家はすべて労働者を抑圧するさまざまな工場規定をもうけていた。……労働者の人身的自由をきびしく拘束していた。」(同前P一〇〇)

「資本主義制度全体は、労働者にたいする資本家の残酷な搾取を基礎として成立するものである。資本主義は人間が人間を搾取する犯罪的な制度なのである。」(同前P九一)

「資本家が労働者を搾取し抑圧する残酷な手段」(同前P九二)

「資本家が労働者を搾取するインチキなやり口はきわめて多く」云々(同前P九八)

「資本主義制度は労働者につくることのない災難をもたらす犯罪的な制度である。」(同前P一〇〇)

「資本の蓄積過程は、ブルジョア階級が金をもうけて富を築き、プロレタリア階級が貧困化する過程であり」云々(同前P一三二)

以上、いくつかの引用からはっきりみてとれるように、『基礎』の立場は、ブルジョア的でないブルジョア的急進主義のそれではない。なるほど、旧中国におけるブルジョアとプロレタリアートの実情は、この『基礎』に描かれてあるとおりであったであろう。旧中国のような半植民地や、あるいは解放まえのサイゴン政権、また朴政権等では、ブルジョア(厳密には買弁ブルジョア、地主)は「一日中酒色におぼれ、ただれきつた生活をしている」ことは絶対に事実だろう。一方、労働者は、それ以上で農村の最下層は、動物なみの生活を強いられることも事実であろう。しかし、こういつたことは、資本主義が存在する限り決してなくならず、必ずどこかにあることだとしても、資本は、このように単純な様相をわれわれに示すものではない。いま、多国籍企業や三菱といつたところの大ブルジョアが、「一日中酒色におぼれ」たりしていたら、それこそ、資本主義は一日もたない。彼らは、腐敗し、無能なエセ革命家や、だぼらをとこととする「左」翼評論家などより比較にならないほどよく働き、さっぱりとしておるであろう。キャツラはあくどいことを働き、われわれの想像を絶するようなへ遊びをもやるであろうが、しかし、自らを律するスベを知っているであろうし、やはり徹頭徹尾紳士然としておるであろう。いうなれば、自らは、なるべくへ悪へに手をめめスベを知っているのである。問題は、ブルジョア個人を、あるいは部分を、悪として摘発することではない。『基礎』のしかたで打倒対象を設定していけば、小モノばかりがひっかかるということになる。

だから問題なのは、資本の運動総体をとらえるということであり、まさしくそれが集約される実体(人格・機構等)としてわれわれの眼に見えるように、闘いを構築することである。多国籍企業の親玉たちが、だれの眼にも、この社会の腐敗と墮落と悪の根源としてあらわれるように、闘いを構築していくことである。

以上、われわれは、主に『基礎』の経済学批判の批判をしてきた。われわれのみてきたところでは、結局、彼らは、スターリニズムに屈服しており、階級闘争の立場を前面にうちだすことによつて、ソ連共産党への優位をしめながら、理論におけるスターリニズムへの屈服から、ブルジョア急進主義の立場にまよいこんでしまつておる。これでは決して先進国のプロレタリアートの闘争は指導できないし、ましてや、コミンテルン再建のイニシヤチブはとれない。だが、彼らが、ますます実践的課題に結びつき、しかもその課題の遂行を大衆闘争としてやろうとしていけばいくほど、この欠点は、大きな障壁になっていくであろう。スターリニズムへの根本的批判は、彼ら中国共産党のことも緊要な、重大な課題となつておる。かかる『基礎』のブルジョア急進主義的経済学批判からは、次のようなプロレタリア革命にたいする驚嘆すべき理解が生れる。

「資本家の資本は、労働者のつくりだした剰余価値が転化したものであるから、労働者階級が権力を獲得したのちに、ブルジョア階級のあらゆる生産手段を収奪してプロレタリア国家の所有に帰属させることは、まったく理にかなつたことであり、それは労働者階級の先祖代々が精を出して労働してつくりだした富を回収するにすぎないのである。」(『基礎』P一三)

これは、資本は賃労働者から盗みだした富である、というブルドン主義とあいづつした見解である。このような議論からは、プロレタリアートの独裁の国家の役割が、なんら把握されることがない。なぜ、生産手段をこの国家が集中的に所有することになるのか、彼らにはこれが理解できない。富の回収などというのは、国家はせいぜいこの回収のためのテコとしてしかないのではないか。ブルジョアジーの所有もプロレタリアートの所有への転換という所有形態の一転換だけがそこにあるだけではないのか。ブルジョアの立場のきわまつたところではないか。

(五) 第三項の解説

① すでに(四)において、資本のもとへの賃労働の経済的隷属化の過程について総合的に述べておいた。ここ第三項では、第四項とともにそのことがより具体的に述べられている。すなわち賃労働者の側からいえば、一方にお

いてはこの隷属の内包的な強化・拡大・深化であり、他方では、その外延的な強化・拡大・深化である。そしてそれゆえ総体としては、全体的な意味でのよりいっそうの窮乏化(ただし注意せよ。この窮乏化とは単なる貧困化ということではない)である。また逆に資本の側からいえば、よりいっそうの資本制生産の発展、資本の増大、資本の全体的諸力の拡大である。この過程は、まさしく資本制生産が資本の増殖を唯一の生産の目的としているその運動である。

「蓄積せよ、蓄積せよ、これがモーゼの言葉であり、予言者の言葉である。『勤勉は、節約によって蓄積される材料を提供する。』(A.スミス『諸国民の富』)だから節約せよ、節約せよ、——すなわち、剰余価値または剰余生産物のうちなるべく大きい部分を資本に転化せよ、蓄積のための蓄積、生産のための生産——この範式において古典派経済学はブルジョア時代の歴史的使命を表明した。」(『資本論』第一巻 P.六二四～五)

だが、資本制生産が、このように、「蓄積のための蓄積、生産のための生産」として真に(ここで「真に」とは、この生産の限界が、資本制生産それ自身もしくは資本それ自身にしかないという意味である)おこなわれようのは、生産過程の技術的基礎がその根本から機械制大工業によってとらえられることを根拠にしている。このことが確立されてはじめて資本制生産は自らの足で立ち、資本の増殖を唯一の生産目的として発展していくことができるのであり、またそれはそれで今度は逆に、不断に生産過程・生産様式を技術的に変革していくのである。

この転換は、資本—賃労働関係からいえば、資本のもとへの賃労働の形態的包摂から、その実質的包摂への完全な移行としてあるものであり、また、資本の価値増殖の点からいえば、絶対的剰余価値の生産を主としたものから、驚くほど多種多様な形態での相対的剰余価値の生産を中心としたものへの移行である。(ただし、この相対的剰余価値の生産の種々の形態は多く、絶対的剰余価値生産の方法をとまらぬものである。)

以上について少し説明せねばならない。まず資本制生産にとっての機械制大工業の意義についてである。生産過程の技術的基礎がすっかり機械制大工業によってとらえつくされること(つまり単純にいえば、機械によって機械がつくりだされること)によってのみ、生産様式のためざる変革が可能になる。というのは、あるい

切の自然発生的に生ずる課題の解決は、人的諸制限、すなわち、マニファクチュアで結合された労働人員によっても程度上で打破されるだけで本質上では打破されない人的諸制限に、いたるところでぶつかっていた。……かくして大工業は、その特徴的の生産手段たる機械そのものを征服し、そして機械によって機械を生産せねばならなかった。そこで初めて大工業はその適当な技術的基礎を創造し、自分自身の足で立ったのである。」(同前P.四〇〇～二)

かくして、資本制生産を特徴づける不断の生産過程の変革の現実的根拠が成立する。(註)

「近代工業は、決して、ある生産過程の現存形態を最終決定的なものとは看なせず、またかかるものとしては取扱わない。だから、近代工業の基礎は革命点である、——すべての従来の生産様式の技術的基礎は本質的に保守的であったのだが。近代工業は機械・化学的処置・その他の方法によって、生産の技術的基礎とともに、労働者の育成および労働過程の社会的結合を絶えず変革する。」(同前P.五一二)

(註) もちろんこの変革には、ある技術上の原理ともいべきものを基礎とした一定の枠内での改良精密化、大型化(巨大化)と、それとは質を異にするかの原理そのものの変革・飛躍(いわゆる技術革新という場合、この原理的な飛躍がいくつ必要となり一連の技術的変革がなされるのである)とが区別され、この後者の場合とりわけ顕著になるが、マルクスが分析したように、ますます人間の諸能力の制限はうち破られ、それらは凌駕されていくとともに、ますます労働者にこれまで要求されていた肉体的精神的諸能力が機械体系の中に移転される。

「蓄積のための蓄積、生産のための生産」を唯一の生産目的とする資本制生産にとっては機械制大工業が固有の生産様式になる。この点から資本制生産の「開化的側面」について論じなければならぬが、この点は後述しよう。

ついでに述べた転換が、資本のもとへの賃労働の形態的包摂からその実質的包摂への完全な移行である点について述べよう。

前者(形態的包摂)は剰余価値生産の点からいえば絶対的剰余価値生産の諸方法(形態)に照応し、後者(実質的包摂)は、それとともとりわけ相対的剰余価値生産の諸方法(形態)に照応している。両者の相違と先に述べた生産過程の技術的基礎との関連を明白にするため、少し長くなるが、用を

くつかの主要産業部門にたとえ機械が導入されようとも、その機械それ自体が機械制生産によってつくりだされえない限り(つまり、人間の生物学的・生理的諸能力の制限によって直接に限界づけられているものもろもろの道具類によってそれらの機械が生産される限り)、その機械による生産はやはり多かれ少なかれ直接的に人間諸能力のせまい生物学的・生理的枠によって限定されざるをえないからであり、それゆえ、生産様式の不断の変革と生産のため生産ということがせまい限度内に制限されるからである。

「大工業がその真先に襲った生産部門で手工業的およびマニファクチュアの経営を止揚した機械は、かのマニファクチュアが生産したのである。かくして機械経営は、それに不適当な物質的基礎のうえに自然発生的に生い立ったのである。特定の発展度に達すれば、機械経営はこの最初には出来あいのままの、ついでには古い形態のままさらに完成された・基礎そのものを変革して、それ自身の生産様式に適合した新たな基礎を創造せねばならなかった。個々の機械は、それが、人間によって運転される間は依然として、矮小であり、また機械体系は、蒸気機関がありあわせの動力に……とって代らない前には自由に発展することができなかつたのであるが、それと同様に大工業も、それを特徴づける生産手段たる機械そのものがその実存を個人的力や個人的熟練に負うていた間は、——つまり機械そのものが、部分労働者がマニファクチュアで、また手工業者がマニファクチュア外で、彼らの矮小用具を操作するに要したような筋肉の発達や視力の鋭敏さや手の巧妙さに依存していた間は、——その全発展において麻痺状態にあった……すでに機械経営の行なわれている工業の拡大も、新たな生産部門への機械の侵入も、依然として全く、仕事の半芸術的本性のために飛躍的ではなく徐々にしか増加されえなかつた労働者部類の増大によって、制約されていたのである。ところが一定の発展段階に達すると、大工業は技術的にも、その手工業的およびマニファクチュアのな基礎と衝突するに至った。発動機と伝導機械や道具類の規模を拡大すること、道具機がその制作をもっと支配していた手工業型から離れてその機械的任務によってのみ規定される新たな姿態を受取るのに応じて機械の諸構成部分の複雑さ・多様性・および規則正しさを増すこと、自動的体系を完成すること、および木材の代りに使いこなしにくい材料たとえば鉄を使用することがますます不可避となること、——これら一

つづけよう。

「絶対的剰余価値にもとづく形態を私は資本のもとへの労働の形態的包摂と呼ぶ。というのは、この形態は、それが直接に発生する(導入される)基礎になるような、以前の諸生産様式からは、ただ形態的に区別されるだけだからである。……形態的包摂の場合に本質的なものは次のような点である。①剰余労働を取得する者とそれを提供する者とのあいだの純粋な貨幣関係。隷属が生ずるかぎりでは、それは売ることの特定の内容から生ずるのであって、この売ること前提されている隷属から生ずるのではない。……この場合に買い手が売り手を経済的な隷属関係に置くのは、ただ労働諸条件の所有者としてのことではない。それは政治的な、社会的に固定された支配・隷属関係ではないのである。②これは第一の關係のなかに含まれていることではあるが……彼の客体的な労働条件(生産手段)も、資本として、彼の労働能力の買い手によって独占されたものとして、彼に對立している。これらの労働条件に他人の所有物として彼に對立することが完全になればなるほど資本と賃労働との關係は形態的にますます完全になり、したがって資本のもとへの形態的包摂、すなわち実質的包摂の条件および前提はますます完全になる。③生産様式そのものにはこの場合にまだ相違は生じていない。労働過程は、技術的にみれば、以前とまったく同じに行なわれるが、ただ、今では資本に隷属した労働過程として行なわれるだけである。」(『諸結果』P.八八～九)

「形態的包摂の一般の特徴、すなわち、技術的にはどんな様式で営まれていようと、資本のもとへの労働過程の直接的な隷属は変わらない。しかしこの基礎のうえでは、労働過程の現実の性質をも、その現実の諸条件をも変化させる技術的にもその他の点でも独自の生産様式——資本主義的生産様式が立ち上がる。この生産様式が現われるとき、はじめて資本のもとへの労働の実質的包摂が生ずるのである。……資本のもとへの労働の実質的包摂は、絶対的剰余価値とは違う相対的剰余価値を発展させるような諸形態のすべてにおいて発展させられる。」(同前P.二〇三～四)

「相対的剰余価値の生産……とともに、生産様式の現実の全姿態がかわって、……自ら資本主義的な生産様式が、(技術的にも)発生し、それを基礎とし、またそれと同時に、はじめて、資本主義的生産過程に

対応するいろいろな生産当時者たちのあいだの、そして特に資本家と質労働者とのあいだの、生産関係が発展するのである。(同前P八六)「絶対的剰余価値の生産が、資本のもとへの労働の形態的包摂の物質的表現と見られることができるように、相対的剰余価値の生産は、資本のもとへの労働の物質的包摂の物質的表現と見られることができる。(同前P八七)

「資本のもとへの労働の物質的包摂のもとでは、……労働過程そのものにおけるすべての変化が現われてくる。労働の社会的生産力が発展させられ、大規模な労働とともに直接的生産への科学や技術の応用が行なわれる。一方では、今では独自の生産様式として形成されている資本主義的生産様式は物質的包摂の形態的包摂とともにも始まるということは確かである。とはいえ、このような資本関係に内在する傾向が、はじめて十分に適合した仕方では現われるのは——そして技術的にも一つの必要条件にさえなるのは——、独自に資本主義的生産様式が、そしてそれとともに資本のもとへの労働の物質的包摂が、発展しているときのことである。」(同前P一〇四〜五)

「労働者がその労働力の価値の等価を生産するにとどまる点を越えての労働日の延長、および資本によるこの剰余労働の取得——これは絶対的剰余価値の生産である。それは資本主義制度の一般的基礎をなし、また相対的剰余価値の生産の出発点をなす。相対的剰余価値の生産にあっては労働日はそもそも二つの部分に分かれていて——必要労働と剰余労働。剰余労働を延長するためには、労賃の等価をより短時間に生産させる諸方法によって、必要労働が短縮される。絶対的剰余価値の生産では労働日の長さのみが中心問題である。相対的剰余価値の生産は、労働の技術的諸過程および社会的成群をすっかり変革する。だから、相対的剰余価値の生産は、一つの独自の、資本制的生産様式を内蔵するのであって、この生産様式は、その諸々の方法・手段・および条件そのものと共に、最初には、資本のもとへの労働の形態的包摂の基礎として、自然発生的に成立し、発展させられる。形式的なそれに代って、資本のもとへの労働の物質的包摂が現われる。」(『資本論』第一巻P五三四〜五)

「絶対的剰余価値の生産のためには、資本のもとへの単に形式的な包摂——たとえば、以前には自分自身のため又は同職組合の親方の職人として労働した手工業者が今では質労働者として資本の直接的統制のもとに現われるということ——だけで充分だとすれば、他方では、すでに明らかにしたように、相対的剰余価値の生産のための方法は同時に絶対的剰余価値の生産のための方法である。しかし、労働日の無制限な延長は大工業固有の産物として現われた。総じて独自の、資本制的生産様式は、それが一生産部門全体を征服するや否や、相対的剰余価値の生産のための単なる手段ではなくなる。それは今や、生産過程の一般的・社会的に支配的な形態となる。それが相対的剰余価値の生産のための特殊的方法として作用するのは、もはや、第一には、従来は形式的のみ資本に從属していた諸産業をそれが襲う限りにおいて、つまりその普及宣言(プロバガンダ)においてにすぎない。第二には、すでにその手に帰した諸産業が生産方法の変化によって絶えず変革される限りにおいてにすぎない。」(同前P五三五〜六)

このようにして、相対的剰余価値の生産のための諸形態がますます発展し、生産過程はたえず変革され、資本の有機的構成はますます拡大し、いわゆる階級分化を促進し、かくて資本のもとへの労働の物質的包摂はいよいよ強まる。つまり資本制生産は、物理学や化学・生物学・医学・数学などの自然科学やもろもろの工学はもちろんで、心理学や経済学や経営学などの社会科学をますます駆使し、資本の有機的構成を高度化させながら断りに生産過程を変革していくという革命的な特質をもっているが、この総体的な人間の諸力の発展、労働の社会的生産力の発展はいつさいがっさい、資本の力、資本の生産力としてあらわれ、そのもとへ質労働をしげりつける力としてあらわれる。だから、質労働にとってはそのすべての面においてますます犠牲を強制され、窮乏化させられていくものとしてあらわれる。

「協業や工場内の分業や機械の応用による、そして一般的に言えば、

特定の目的のための自然科学や力学や化学などの意識的応用への、すなわち技術学などへの応用への、生産過程の転化による、そしてまたこれらのすべてに對する大規模な労働などによる、労働の社会的生産力、または直接に社会的な、社会化された(共同的な)労働の生産力(ただこのような社会化された労働だけが数学などのような人間の発展の一般的生産過程に適用することができるのであるが、他方ではまたこれらの科学の発展は物質的生産過程の一定の高さを前提とするものである)、このような、個々人の多かれ少なかれ孤立的な労働などに對比しての社会化された労働の生産力の発展、またそれとともに、社会的発展の一般的生産である科学の直接的生産過程への応用、これらはすべて資本の生産力として現われ、労働の生産力として現われず、またはたまた資本と同じであるかぎりでの労働の生産力として現われるだけであって、いずれにせよ、個々の労働者の生産力としても生産過程で結合された労働者の生産力としても現われぬ。」(『諸結果』P八六〜七)

「……資本主義制度の内部では、労働の社会的生産力を高めるすべての方法は個々の労働者を犠牲として行なわれるのであり、生産を発展させるすべての手段は生産者の支配および搾取手段に転換し、労働者を部分人間に不具化させ、彼を機械の付属物に格下げし、彼の労働の苦痛をもって労働の内容を破壊し、自立的機能としての科学が労働過程に合体されるにつれて労働過程の精神的諸力を彼から疎外するのであり、それらの方法・手段は、彼の労働諸条件をねじ歪め、労働過程の中では極めて偏狭唾棄すべき専制支配に彼を服せしめ、彼の生活時間を労働時間に転化させ、彼の妻子を資本のジャガノートの車輪のもとに投げ入れるのである。ところが、剰余価値生産のすべての方法は同時に蓄積の方法であり、蓄積のあらゆる拡大は逆に右の方法の発展の手段となる。だから、資本が蓄積されるにつれて、労働者の状態は、彼の給与がどうあろうとも——高かろうと低かろうと——悪化せざるをえないことになる。(註)最後に、相対的過剰人口または産業予備軍をたえず蓄積の範囲および精力と均衡させる法則は、ヘンライストスの楔がプロメテウスを岩に釘づけにしたよりも一そう固く、労働者を資本に釘づけにする。それは、資本の蓄積に照応する貧困の蓄積を条件づける。だから一方の極での富の蓄積は、その対極では、

このような事態がおこるのにはむろん(?)ですでに述べたように、生産過程が資本の生産過程であり、剰余価値の生産(資本の増殖)が唯一の生産目的となつてゐるからであつた。

「生きてゐる労働は——資本と労働者とのあいだの交換によつて——資本に合体され、資本に属する活動として現われるのであるから、労働過程がはじまればそのときは、社会的労働のいつさいの生産力は資本の生産力として現われるのであつて、それはちやうど、労働の一般的な社会的形態が貨幣において物の属性として現われるのと同じである。そこでいまや、社会的労働の生産力および社会的労働の特殊な諸形態は、資本の、対象化された労働の、へ客体的な諸条件——生きてゐる労働に相對するこのように物化的な諸条件——の、生産力および諸形態として現われる。」(『剰余価値学説史』)大月全集版P四九五)

「……独自の資本主義的生産様式の発展につれて、これらの直接的に物質的な物——労働のすべての生産物、すなわち使用価値からみれば物的な労働条件ならびに労働生産物、交換価値からみれば対象化された一般的な労働時間または貨幣——が労働者に對立し、『資本』として労働者

かくして次のようになる。(?)の最後に引用したマルクスの批判的総括をふたたびここに掲げておこう。

「……資本主義制度の内部では、労働の社会的生産力を高めるすべての方法は個々の労働者を犠牲として行なわれるのであり、生産を発展させるすべての手段は生産者の支配および搾取手段に転換し、労働者を部分人間に不具化させ、彼を機械の付属物に格下げし、彼の労働の苦痛をもって労働の内容を破壊し、自立的機能としての科学が労働過程に合体されるにつれて労働過程の精神的諸力を彼から疎外するのであり、それらの方法・手段は、彼の労働諸条件をねじ歪め、労働過程の中では極めて偏狭唾棄すべき専制支配に彼を服せしめ、彼の生活時間を労働時間に転化させ、彼の妻子を資本のジャガノートの車輪のもとに投げ入れるのである。ところが、剰余価値生産のすべての方法は同時に蓄積の方法であり、蓄積のあらゆる拡大は逆に右の方法の発展の手段となる。だから、資本が蓄積されるにつれて、労働者の状態は、彼の給与がどうあろうとも——高かろうと低かろうと——悪化せざるをえないことになる。(註)最後に、相対的過剰人口または産業予備軍をたえず蓄積の範囲および精力と均衡させる法則は、ヘンライストスの楔がプロメテウスを岩に釘づけにしたよりも一そう固く、労働者を資本に釘づけにする。それは、資本の蓄積に照応する貧困の蓄積を条件づける。だから一方の極での富の蓄積は、その対極では、

すなわち、自分自身の生産物を資本として生産する階級の側では、同時に、貧困・労働苦・奴隷状態・無知・野性化および道德的墮落の蓄積である。」(『資本論』第一巻、P六八〇〜八一)

「資本がますますこえふと、一方、賃労働者の側で窮乏化がすすんでいくというこの資本制生産の特質には、だがすでに開化的側面あるいは革命的として示唆したもう一つの面がある。すなわち、資本主義を打倒・揚棄する物質的根柢の成熟過程の面である。このことについては第五項で述べられており、そのくわしいことは(六)第五項の解説」でおこなおう。

ところで、いま述べてきたようなことをレーニンは、簡単に「労働の社会化」の過程として述べている。内容上、かの資本制生産の開化的側面についてもふれられているが、第五項とのつながりからして、ここでレーニンの分析・批判をみておこう。

「資本主義的生産による労働の社会化とは、けっして人々がひとつの場所での労働することにあるのではなく(これは過程の一小部分にすぎない)、資本の蓄積にもなつて、社会的労働が専門化し、各産業部門における資本家の数が減少し、独立の産業部門の数が増大するということ、——数多くの分散的な生産過程が一つの社会的生産過程に融合するということ、にある。たとえば手工業的機械の時代に、小生産者が自分で糸をつむぎ、その糸で織物をつくっていたときには、産業部門の数は少数であった(紡績と機械とは一つに融合して)。生産が資本主義によって社会化されると、独立の産業部門の数が増加する。綿紡績も綿織布も別々に行なわれる。生産のこの個別化と集積そのものは、新しい部門、——すなわち機械制作や石炭採掘、等々——を生みだす。いまより専門化された各産業部門では、資本家の数はしだいに減少する。このことは、生産者のあいだの社会的関連がしだいに減少する。このことは、生産者が一つの全体に結集されていくことを意味する。」(『「人民の友」とはなにか』国民文庫、P六五〜六)

さらに、「物質的過程だけ、生産関係の変化だけ」でなく、「過程の社会的側面、すなわち、労働者の結合や結束や組織」までふくめて次のようにまとめている。

「資本主義による労働の社会化は、つぎの過程のうちに見られる。第一に、商品生産の成長そのものが現物経済に固有な小さな経済単位の割拠状態を破壊して、小さな地方的市場を巨大な国民的(ついでまた

「……価値を生産するものとしては、労働はつねに個々人の労働であり、それがただ一般的に表現されるだけである(註一)。したがって、生産的労働は——価値を生産する労働としては——(註二)資本にたいして、つねに、個々の労働能力の労働として、個々別々の労働者の労働として、対立するのであって、この労働者たちが生産過程のなかでどんな結合をなすかは問題ではない。こうして、資本は労働者に対して労働の社会的生産力を表わすのであるが、労働者の生産的労働のほうは資本にたいしてつねにただ個々別々の労働者の労働を表わすだけである。」(『剰余価値学説史』前出、P五〇一)

「結合労働日は、個々別々の個別的労働日の同等量の合計に比べれば、より多量の使用価値を生産するのであり、したがって、一定の有用的効果を生産するために必要な労働時間を減少させる。与えられた場合に結合労働日がかかる増大せる生産力を受けとる所以は、……ともあれ、結合労働日の独自の生産力は、労働の社会的生産力または社会的労働の生産力である。これは協業そのものから発生する。」(『資本論』第一巻、P三四四〜五)

「……資本家は、百個の自立する労働力の価値の支払いはするが、百人の結合労働力の支払いはしない。独立の人格としては、労働者たちは、同じ資本と関係するが相互には関係しない個々別々の人である。彼等の協業は、やっとならぬ過程ではじまるのであるが、労働過程では彼等はすでに自分自身のものではなくなっている。労働過程にはいると共に彼等は資本に合体されている。協業者としては、一活動的形態の有機的手足としては、彼等自身は資本の特殊の実存様式たるにすぎない。だから、社会的労働者としての労働者が生産する生産力は、資本の生産力である。労働の社会的生産力は、労働者たちが一定の諸条件に置かれると無報酬で自らを展開するのであり、そして資本は労働者たちをかかると諸条件のもとに置くのである。労働の社会的生産力は資本にとっては何も要費しないのであるから、他面それは労働者の労働そのものが資本に属する以前には労働者によっては展開されないものであるから、それは資本が生まれながらもつ生産力として現象する。」(同前P三四九)

さらに、労働過程における資本(家)の指揮もかの形態的包摂のもとでの形式的・外在的なものから、内在的な、必要不可欠なものとして現われる。

世界的)市場に結合する。自分のための生産は社会全体のための生産に転化し、そして資本主義が高度に発展すればするほど、生産のこの集団的性格と取得の個人的性格とのあいだの矛盾はますます激しくなる。第二に、資本主義は、旧来の、生産の割拠状態のかわりに、農業においても工業においても、以前にはみられなかったような生産の集積をつくりだす。……第三に、資本主義は、先行の諸経済制度の破壊しがたい属性となつていた、いろいろの形態の人格的隷属を駆逐する。……第四に、資本主義は必然的に住民の移動性をつくりだす。……第五に、資本主義は農業に従事する人口の割合をたえず減少させ、大きな産業中心地の数を増大させる。第六に、資本主義社会は結社への、結合への住民の要求を増大させ、これらの結合に、前の時代の結合とくらべて特殊な性格を付与する。……資本主義は、全社会を、生産において相異なる地位を占める人々の大きな群に分裂させ、そしてこのような各群の内部における結合に巨大な刺激を与える。第七に、資本主義による古い経済構造の前記のすべての改変は、不可避的にまた住民の精神的風格の改変にもみちびく。経済的發展の飛躍的性格、生産方法の急速な改変と生産の巨大な集積、人格的隷属のあらゆる形態と家父長制的関係との消滅、住民の移動性、大きな産業中心地の影響、等々——これらすべてのものは、生産者の性格そのものを奥底から改変させずにはおかない。」(『ロシアにおける資本主義的發展』(3)国民文庫、P一九八〜九)

② 以上、(資本—賃労働)関係の発展(つまり前者への後者の隷属のよりいっそうの発展)その運動を全体的にみてきたが、それは当項解説の冒頭で述べたごとく、賃労働の側からいえば、一方で内包的隷属の強化・拡大・深化であり、他方で外延的なそれであった。ついでこれらの点についてみておこう。

(1) 協業の発展にもなる事項

大規模な協業の発展およびマニファクチュアでみられたと同様の単純な協業が、その姿をかえて再現する。ここで問題なのは、協業によって生みだされる結合された労働の生産力、これはいっさいが資本の力となるのに、一方、労働者は資本の指揮のもとで結合を強制された個々ばらばらな個人としてあらわれるという点である。

(註一) つまり、商品の価値には、その商品体(労働生産物としての)に対象化された社会的労働一般(抽象的)人間労働が表示されているにすぎないのである。

(註二) かかる厳密な限定は、いま、われわれがここで問題にしている資本にたいする賃労働の孤立性・分散性ということでははずされてもよい。価値を生まさない労働——さまざまなサービズ労働等——もそれが賃労働である限り、ここでマルクスの述べていることは妥当する。

「……本源的には、労働に対する資本の指揮は、労働者が自分のためではなく資本家のために、従つてまた資本家のもとで、労働すること、ということの形式的結果としてのみ現われた。多数の賃労働者の協業が進展するにつれて、資本の指揮は、労働過程そのものの遂行のための要件に、一つの現実的の生産条件に、発展する。生産場面における資本家の命令は、いまや、戦場における將軍の命令と同様に必要かくべからざるものとなる。およそ、大きな規模で行なわれる直接に社会的または共同的な労働は、多かれ少なかれ或る指揮を必要とするのであって、この指揮により、個別的諸活動の調和が媒介され、全生産体の——その自立的諸器官の運動と区別される——運動から生ずる一般的諸機能が発行されるのである。……指導・監督および媒介というこの機能は、資本に隷属させられた労働が協業的になるや否や資本の機能となる。資本の独自の機能としては、指導という機能が独自の特徴を受けとる。」(同前P三四六)

「だから、資本の指揮は、内容からみれば——一面では生産物の生産のための社会的過程であり、他面では資本の増殖過程であるという指導される生産過程そのものの二者闘争性のゆえに——二者闘争的だとすれば、形式からみれば専制的である。大規模な協業の発展につれて、この専制支配はその独自の諸形態を展開する。資本家は、未来的意味での資本制的生産がやっとならぬ開始されるための最小限の大きさに彼の資本が達するや否や、さしあたり手労働から逸れるのであるが、それと同様に彼は、いまや、個々の労働者及び労働者群そのものを直接的かつ継続的に監督する機能を、ふたたび、特殊な種類の賃労働者にゆずり渡す。軍隊が將校と下士官を必要とするのと同様に、同じ資本の指揮のもと、協力する労働者大衆は、労働過程のあいだ資本の名で指揮する産業(支配人、マネージャー)と産業下士官(職長、foreman、

overlookers, control rates)を必要とする。監督労働が彼等の排他的機能に固定する。」(同前P三四七〜八)

この協業と機械制生産との関係はというと、
「……マニファクチュアにおいては、社会的労働過程の編成は、純粋に主体的であり、部分労働者たちの結合である。機械体系において大工業は、労働者が既成の物質的生産条件として見出すまったく客体的な生産有機体を有する。単純協業においては、また、分業によって独立化された協業においてさえも、社会化された労働者による個別化された労働者の駆逐はなお多かれ少なかれ、偶然的に現象する。機械は……若干の例外はあるが、直接に社会化された、または共同的な労働によってのみ機能する。かくして今や、労働過程の協業的性格が、労働手段そのものの本性によって命ぜられた技術的必然となる。」(同前P四〇四)

「協業は、——その単純な姿態、そのものが更に発展した諸形態と相並ぶ特殊の形態として現われるとはいえ、——依然として資本制生産様式の基本形態である。」(同前P三五一)

(2) 分業の発展につれての問題

かかる協業の発展は、別の面からみれば社会的分業、工場内分業の発展である。労働者たちは、一方でますます一職種に付随する細目的熟練を、諸科学の発展——機械制生産の発展として、資本の力たる機械等の労働手段の中に吸収されながら、かつ一方では、このことによりますます卑小でとるにたらない、貧弱な細目的熟練を要求され、それに縛りつけられる。

「労働用具とともに、それを操縦するための巧妙さもまた、労働者から機械に移る。道具の作業能力が、人間労働力の個人的諸制限から解放されている。かようにしてマニファクチュアにおける分業の土台をなす技術的基盤が止揚されている。したがって自動的工場では、マニファクチュア的分業を特徴づける特殊化された労働者たちの等級制のかわりに、機械の助手たちが遂行すべき諸労働の均等化または水準化の傾向が現われ、部分労働者たちの人為的に生みだされた区別のかわりに、年令および性的自然的区別が主要なものとして現われる。」(『資本論』第一巻、P四四一)

だが、この「均等化または水準化の傾向」はそのままますますには現実化

的分業を促進する。けたし機械経営は、それによって促えられた事業の生産力を比較にならぬほど高度に増加させるからである。」(同前P四六八)

もちろんかかる社会的分業の発展は、ここで述べているような直接的生産過程におけるものとどまらない。生産——流通の全過程をおおう網の目のような、しかも重層的な社会的分業体制ができあがる。このことに条件づけられありとあらゆる労働の生産物が、商品として登場してくる。この事態がすすむほど、専門化の過程はますます細分化されたものへとつきすすみ、しかも、もろもろの科学の応用によって、労働の内容は、労働手段の方へと移り、かくて、労働者たちは、ますます貧弱な、空虚な、しかも極度に細分化された専門に縛りつけられていく。紙を右からおるか、左からおるか、といったことへの異常な習熟が要求され、終日それがそれに費されるということになっていく。しかも、公教育制度が発達し、労働者たちがより高い教育を受け、さらに、さまざまな手段——マスコミの発達等——によって、不断に教育手段をあたえられていく以上、労働現場での「疎外感」はいやがうえにも増大していく。精神的かつ肉体的苦痛が普遍化する。もちろん資本家たちは、これに手をこまねいて傍観しているわけではない。H・R(ヒューマン・リレーションズ)の導入とそのさまざまな改善、その他さまざまなシステムが考案され、実施されている。だが、それらとはどこのつまり、一人の労働者の作業範囲の拡大と選択の拡大、グループ化、そして、ある程度の仕事内容への責任の分与、といったこととどまる。だが、このような資本による必死の試みも、最大の根本問題——生産過程はあくまで資本の生産過程であること——がある以上、小手先の技以上にはでない。つまり結果は、労働者の幻滅の増大か、あるいは、彼らの反抗心と結束を高めるかのいづれかであろう。生きている労働者という資本家のスローガンはくりかえしくりかえし登場する。だがしかし、ますます長つづきしないものになる。

(3) 労働日の延長、および労働密度の強化ということについて

機械制生産における「自立的な人間力の諸制限から完全に解放された」一つの自動機械体系の出現は、まさに、それが自然としての人間のもろもろの力能に制約されない、一つの完全な客体性——対象性をうけとることによって、資本制生産においては、生きた労働を吸収する死んだ労働として労働者に対立する。いまや労働者は自らの生理、リズムによってではなく、

しない。

「……大工業は、マニファクチュア的分業——そのもとでは一人の間全体が生産にわたって一細目作業に縛りつけられる——を技術的に止揚するのであるが、同時に大工業の資本制的生産形態はか分業をいっそう怪異なものに再生産するのであって、かかる再生産は本来的工場では労働者を部分機械の自己意識ある付属物に転化することによって行なわれ、その他の所では部分的には機械および機械労働の散在的使用により、部分的には分業の新たな基礎としての婦人労働・児童労働および不熟練労働の採用によって行なわれる。マニファクチュア的分業と大工業との矛盾は暴力的に自己を主張する。それは、なかななく、近代的な工業やマニファクチュア場で働く児童たちの大部分は極めて幼少時から極めて簡単な作業に固く縛りつけられ、後年彼等と同じマニファクチュア場や工場だけで使用されるものたらしめる何らかの労働を修業することなく長年にわたって搾取されるという、恐るべき事実のうちに現われる。」(同前P五〇九〜五一〇)

「……機械は旧来の分業体系を技術的に覆すとはいえ、この分業体系は、さしあたりマニファクチュアの伝統として慣習的に工場内に存続するが、やがては資本により組織的に、労働力の搾取手段として一そり厭うべき形態で再生産され且つ固定される。ある部分道具を操縦する生涯の専門が、ある機械部分に仕える生涯の専門となる。機械は、労働者そのものを幼時から部分機械の部分に転化させるために悪用される。かくして、労働者自身の再生産に必要な費用が著しく減少されるばかりでなく、同時に、工場全体への、つまり資本家への、労働者の心細い依存が完成される。何時でもそうだがこの場合にも、ひとは、社会的生産過程の発展による生産性の増大と、社会的生産過程の資本制的利用による生産性の増大とを区別せねばならぬ。」(同前P四四三〜四)

かかる工場内分業の発展、それへの労働者たちへの緊縛とともに、一方では、社会的分業が著しく発展していく。

「機械経営により比較的少数の労働者をもって提供される原料・半製品・労働用具などの分量が増加するに依りて、これらの原料や半製品の加工が無数の亜種に分化し、かくして社会的生産部門の多様性が増加する。機械経営は、マニファクチュアとは比較にならぬ程度に社会機械自身の生理(油がちゃんといきわたっているか、等々)とリズムにしたがって労働せねばならない。労働日の無制限な延長の基礎ができる。しかも機械の資本制的充用は、価値の源泉たる生きた労働に投下される可変資本部分の全資本にたいする比率を不断におしよげるのであるから、不可避な結果として、労働日の延長へ、その無制限な延長へと、資本をかりたてて結合的性格が著しく高まったコンビナートにおける生産は年一度程度の定期修理以外(それも資本はできる限り圧縮し、簡略化しようとする)、一分の休みもなく働きつづけ、休日や休息を完全にそのリズムにあわせてとらねばならない。近代科学の粋をあつめたそこでは、夜業は絶対不可欠の条件となる。」

「機械は労働の生産性を増大するための、すなわち一商品の生産に必要な労働時間を短縮するための、最も有力な手段だとすれば、資本の担い手としての機械はさしあたり、直接に機械によって促えられた産業ではあらゆる自然的制限をこえて労働日を延長するための最も有力な手段となる。機械は一方では、資本をしてこうして自己の不断の傾向を不羈奔放ならしめることを得せしめる新たな諸条件を創造し、他方では、他人の労働に対する資本の渴望を激化するための新たな動機を創造する。」(同前P四二二〜三)

「……剰余価値生産のための機械の充用のうちには一つの内在的矛盾が横たわっている。けたし機械は、ある与えられた大いさの資本によってもたらされる剰余価値の二要因のうち、一方の要因たる労働者数を減少させることによつてのみ他方の要因たる剰余価値率を増加させるからである。この内在的矛盾は、一産業部門における機械の一般化につれて機械生産商品の価値が同種のすべての商品の規則的な社会的価値となるや否や現出するのであり、そしてこの矛盾こそは、重ねて資本をば、自ら増加することなしに、搾取労働者の相対数の減少を相対的剰余労働の増加によつてのみならず、絶対的剰余労働の増加によつても補うために、乱暴至極な労働日の延長に駆りたてるのである。」(同前四二七〜八)

ここでだが、疑問がでるかもしれない。「なるほど、機械制大工業の発展はよりいっそうの労働日の延長つまり機械運轉の時間の絶対的延長をもたらすだろうが、しかしそれは、労働者にとっては、必らずしも労働時間の延長にならないのではないか、むしろ、週休二日等のように労働時間の減

少をもたらずののではないかと。

ものごとは表面的にはなく、ついでよくみなくてはならない。八時間労働日が普通化されて以降、労働時間の短縮は従来ほとんどみられなかった。たゞ、ここ二、三年来、いわゆる週休二日制が、かなり一般的になってきている。だが、この制度も鳴りものいりて宣伝されたわりには中味はうすいものでしかない。第一に多くの企業では、週休二日のかわりに一日の労働時間を延長し、週労働時間を不変もしくはほぼ不変にしている。これは体裁のよい労働強化である。労働密度の点からいえば、おおむね一日の労働時間をわずかに延長する方が資本家にとって有利なのだ。だからこそ数多くの労働組合が、この週休二日制をニセ時短攻撃としてとらえ闘争している。第二に、それが労働者分断の一つのテコとして使われている。週休二日制が実施される部門とされない部門との。

このように、週休二日制にみられるのは、労働時間を短縮させまいとする資本の強い力である。さらに、コンビナート労働に典型的な年中の機械運転部門では、労働時間は短縮される傾向にあるかを考えてみよう。一日労働時間の短縮や週休二日制などの事態によって機械運転がゆるめられたり、停止されたりするわけでは決してない。交替勤務の編成替えへの資本による強い抵抗がみられる。というより、主な傾向はこの体制の強化・合理化である。これは労働密度の強化となって現われる。

さらにより根本的なのは、昼間の八時間と夜の八時間とを同等の長さの労働日とみなしうるか、という問題である。もちろんそうはいっても労働日はそもそも資本にとってのものであり、価値を生み出すものとしては同等のものとしての意義をもつ。だが、労働者にとっては決して同等ではない。だから「賃金―賃労働」関係から資本の側のその問題への解答は、割増賃金(夜間勤務手当等)であろう。だが同一の長さであれ、またわずかの手当があるにせよ、定期的に深夜の労働を強いられることが労働日の延長でなくてはならない。すでに述べた労働密度の強化、これは一般に合理化といわれる諸処置には必ずしもなう。もっとも単純な形は人へらし、その他機械による労働時間の短縮(高速化等)などによっても。一般に工程が系統的に組みあわせられ、いわゆるシステム化の度合が高まれば高まるほど、個々の労働者においては労働にたいする緊張度が強められずにはない。「標準労働日の基礎」上では、すでに以前の吾々の出会った一現象が発展して、決定的に重要なものとなる。——というのは労働の強化これ

生み出すのであって、この規律は発達して完全な工場体制となり、すでに以前に述べた監督労働を、つまり同時に手労働者と労働監督者との——産業兵卒と産業下士官との——労働者分割を完全に発展させる。(同前P四四五)

かかる兵營的規律を生み出す工場内のそして企業内のヒエラルキーの形成は、協業、分業が発展すればするほど、したがって、一企業資本の規模が大きくなればなるほど、絶対的な、硬化した指揮命令系統をもつものへと向う傾向をもっており、のみならず、かかる体制が社会的に普通化すればするほど、このヒエラルキーは、工場内や企業内にとどまらない社会的なものへ大きな影響をあたえる。もちろん、かかる兵營的規律があまりに強化され、硬化してくると、資本は、価値増殖に支障をきたすという限りにおいて、それを緩和したり規制したりしようとする。これはすでにみたようなグループ化、責任分与等々の手段でおこなわれる。生かぎのいのある労働者への追求であるが、しかし、それも、すでに述べておいたごとく、単なる方策にすぎないのである。

かかる兵營的規律をともなう工場は、ありとあらゆる労働災害、職業病の、あるいはそれへの強制の場である。急速な、あるいは緩慢な労働者の肉体的・精神的磨滅が進行する場である。

「四季の規則正しさをもち、その産業的と殺報告を生み出す密集機械のもとでの生命の危険を度外視しても、すべての感管は、人為的に高められた温度、原料の屑でみだされた空気、耳を聳するばかりの騒音、などによって同じように傷められる。工場制度のもとではじめて温室的に成長した社会的生産手段の節約は、資本の手の中では同時に、作業中の労働者の生活諸条件の——空間・空気・光線の、および、労働者の慰安設備はせんぜん問題にもならないが、生産過程における生命に危険または反衛生的な事情に対する人的保護手段の——組織的、盗奪となる。フリーエが工場を名づけて『緩和された牢獄』と呼ぶのが不当であろうか?」(同前P四四七〜八)

「マニファクチュアおよび手工業では労働者が道具を自己に奉仕させ、工場では労働者が機械に奉仕する。かしこでは労働手段の運動が労働者から起り、ここではその運動に労働者が追従せねばならない。マニファクチュアでは、労働者たちは生きた一機構の手足をなす。工場では死んだ一機構が労働者たちから独立して実存するのであり、労働者

である。絶対的剰余価値の分析に際しては、さしあたり、労働の外延的、大いさが問題であって、労働の強度の方は与えられたものとして前提されていた。いまや吾々は、外延的大いさの内包的大いさは強度への急変を考察しなければならぬ。」(『資本論』第一卷P四二九)

「……一般的にいえば、相対的剰余価値の生産方法とは、労働の生産力を高めることにより労働者をして同じ労働支出をもって同じ時間内により多く生産することをせしめるということである。同じ労働時間は全体生産物に対し相変らず同じ価値を付加する、——なるほど、この不変の交換価値は今やより多くの使用価値で自らを表示するのであり、したがって個々の商品の価値は低下するのであるが。とはいえ、生産力の発展および生産諸条件の節約に歴大な刺激をあたえる強行的な労働日短縮が、同時に労働者にたいし、同じ時間内における労働支出の増加・労働力の緊張の増大・労働時間の気孔充願の濃密化するわち労働の凝縮を、短縮された労働日の範囲内でのみ達成されうる程度にまで強制するや否や、事情は一変する。ある与えられた時間内への多量の労働にかかる圧縮は、いまや、あるがままのものとして、すなわちより多量の労働として計算される。『外延的大いさ』としての労働時間の度量と相並んで、いまや、労働時間の密度の度量がおこなわれる。」(同前P四三〇)

そこで問題となるのは、労働はいかにして強化されるか? ということである。

「労働日の短縮は、さしあたり労働凝縮の主観的条件、すなわち与えられた時間内により多くの力を流動させる労働者の能力を創造するのであるが、この労働日の短縮が法律によって強制されるや否や、資本家の手にある機械は、同じ時間内により多くの労働を搾りだすための客観的な・かつ体系的に充用される・手段となる。そうなるのは二つの仕方、すなわち機械の速度の増大と、同じ労働者が見張りすべき機械・または彼の作業場面・の範囲の拡大によってである。」(同前P四三二)

(4) このことについてはこれ以上の説明をまったく要しない。ついで工場全体からみての影響ということについて。

「労働手段の齊一な歩調への労働者の技術的隷属と男女両性および種々様々の年令の個々人からなる労働体の独自の構成とは兵營的規律を

私たちは生きた付属物としてこの機構に合体される。『同じ機械的過程がたえず反復される果しない労働苦のたまらない繰返しはシチュエーションの苦悩にも等しい。労働の重荷が岩石と同様に、疲れきった労働者のうえにたえず落ち帰ってくる』(『エンゲルス』『労働者階級の状態』)。

機械労働は神経系統を極度に疲れさせるのであるが、他方ではそれは筋肉の多面的運動を抑圧し、また一切の自由な肉体的および精神的活動を不可能ならしめる。労働の軽減さえも責苦の手段となる、というわけは、機械は労働者を労働から解放するのではなく、彼の労働を内容から解放するからである。労働過程であるばかりでなく同時に資本の増殖過程たる限りでのすべての資本制生産にとっては、労働者が労働条件を使用するのではなく逆に労働条件が労働者を使用するということが共通しているが、しかしこの転倒は、機械をまっしてはじめて技術的・感覚的な現実性を受けとる。労働手段は自動装置に転化する。ことよって、労働過程そのもの間、労働者に対し資本として、生きた労働力を支配し吸収する死んだ労働者として対応する。生産過程の精神的機能が手労働から分離するということ、および、この機能が労働にたいする資本の権力に転化するということとは、……機械を基礎として建てあげられた大工業において完成される。内容空虚な個々の機械労働者の細目的熟練は、機械体系中に体化されていて機械体系とも「雇主」の権力をなす科学や膨大な自然諸力や社会的集団労働に較べれば、とるに足らぬ付随物として見る影もなくなる。」(同前P四四四〜五)

かくて、機械制大工業への労働者の直接的影響は次のように簡単にまとめられる。

「……それ自体として見た機械は労働時間を短縮するが、それが資本制的に充用されると労働日を延長するのであり、それ自体としては労働を軽減するが、資本制的に充用されると労働の強度を高めるのである、それ自体としては自然力に対する人間の勝利であるが、資本制的に充用されると人間を自然力によって抑圧するのであり、それ自体としては生産者の富を増加させるが、資本制的に充用されると生産者を窮民化させる、等々……」(同前P四六四)

(5) さらに、いま述べた精神的頹廢と肉体的磨滅については、単に工場(作業場)内にとどまらない。生活過程において、全生活時間にわたっ

て徐々にあるいは急速に労働者を襲う。大気汚染、水質汚濁、騒音や振動、あるいは食品や医薬品の公害、有害物質等々の環境破壊・公害、あるいは交通災害が。こうしてさまざまな病、精神的肉体的障害、死がますます複雑化して、しかも増大する規模で労働者をみまう。とともに、精神的な頹廃や萎縮をもたらすさまざまな要因が増大する。

そのうえ、これらのことは、しばしばより抑圧され、差別された、弱い部分へと集中する。より良好な生活環境の場へと移動しえない貧困な人々、スラムの労働者、そして一族内でも老人や子供（公害認定患者の大部分は老人や小供・幼児である）、あるいは女性だ。

⑤ ついで後者Ⅱ資本のもとへの賃労働の隷属の外延的強化・拡大・深化について。

この事態の進行はすでに指摘したように、次の諸過程によっている。不
断の生産力の発展、蓄積の増大は、資本の有機的構成の高度化をもたらす。
①「資本の構成は二重の意味に解すべきである。価値の側面から見れば、
この構成は、資本が不変資本または生産手段の価値と、可変資本または
労働力の価値すなわち労賃の総額とに分れる、その比率によって規
定される。生産過程で機能する資料の側面から見れば、各資本は生産
手段と生きた労働力とに分れるが、この構成は一方では充用される生
産手段の分量と、他方ではその充用のために必要な労働分量との、比
率によって規定される。私は、前者を資本の価値構成と名づけ、後者
をその技術的構成と名づける。両者の間には緊密な交互関係がある。
この交互関係を表現するために、私は、資本の技術的構成によって規
定されてその諸変化を反映する限りでの資本の価値構成を、資本の有
機的構成と名づける。」（『資本論』第一巻、P六四三〜四）

すなわち、「資本の可変部分を犠牲として不変部分を増加させ」（同前P
六六一）る。かくて資本の蓄積が進行し、また労働者にたいする資本の側か
らの需要が減少する。一方、この同じ過程は、資本制生産の作用（征服）範
囲をますます拡大し、小商品生産をうちほろぼし、あるいは大資本のもと
へ隷属させる。かくて階級分化が広汎に進行し、産業予備軍が増大する。
彼らの資本への隷属が深化・拡大し、しかもますます錯綜した重層的なも
のになっていく。

(1) 資本の集中の進行

率が非常に高い巨大企業は、平均利潤率を生みださないで、その一部
たる利子を生みだす。でなければ、一般利潤率はさらに一そう低落す
るのである。しかるにここでは、一大資本集団が、株式の形態で、直
接の就業場面を見出す。（『資本論』第三巻、P二九二）
先の引用で示された信用業の巨大な役割がある。

「Ⅲ、株式会社の形成。これによって……（二）、個別的諸資本にとっ
ては不可能であった生産および企業の規模の、膨大な拡張。同時に、
従来は政府企業であったような企業が会社企業となる。（二）、即時的
に社会的生産様式に立脚して生産手段および労働力の社会的集積を前
提とする資本がこの場合には直接に、私的資本に對立する社会Ⅱ会社
資本（直接に結合した諸個人の資本）の形態をとるのであって、かかる
資本の企業は、私的企業に對立する社会Ⅱ会社企業として登場する。
これは、資本制生産様式そのものの限界内での、私的所有としての資
本の止揚である。（三）、現実には機能する資本家が他人の資本の単なる
支配人・管理人に転化し、資本所有者が単なる所有者、単なる貨幣
資本家に転化する。……これこそは、資本制生産様式そのものの内
部での資本制生産様式の止揚であり、したがって自己自身を止揚する
矛盾であって、この矛盾は一見あきらかに、新たな一生産形態への単
なる通過点としてあらわれる。かかる矛盾として、それはまた次の現
象にもあらわれる。それは特定部面を独占を生み出し、したがって國
家の干渉を誘発する。それは、新たな金融貴族を、発起人・創立者お
よび単に名目上の重役の姿をとった新種の寄生虫を、——創立、株式
発行、および株式取引にかんする詐欺購着の全制度を、再生産する。
これは、私的所有の統制なしの私的生産である。（四）、株式事業——
これは、資本主義制度そのものの基礎としての資本制的な私的産業の止
揚であって、それが拡大して新たな生産部面をとらえるのと同じ範囲
で私的産業を絶滅する——を度外視しても、信用は、個々の資本家ま
たは資本家とみなされる人をして、他人の資本および所有・したがっ
て他人の労働・を特定の限界内で絶対的に自由にするのを得せしめ
る。自己資本でなく社会的資本を自由にするのは、資本家をして社会
的労働を自由にするのを得せしめる。」（成功も失敗も、ここでは
同時に、諸資本の集中をもたらし、したがって膨大に増える規模での
収奪をもたらす。収奪はここでは、直接的生産者から、小および中資

「競争戦は商品の低廉化によって行なわれる。商品の低廉は、他の諸
事情が同等ならば労働の生産性に依存するのであるが、この後者は生
産の規模に依存する。だから、大資本は小資本にうち勝つ。さらに想
起されるのは、資本制生産様式の発展につれて、事業をその標準的諸
条件のもとで営むに必要ない個別的資本の最低分量が増大する、とい
うことである。だから小資本は、大工業によってはまだ散在的または不
完全にしか征服されていない生産諸部門に殺到する。競争の激しさは、
ここでは、敵対する諸資本の数に正比例し、それらの大いさに逆比例
する。競争は常に、多数の小資本家たちの滅亡をもって終るのであ
って、彼らの資本は、一部は勝利者の手に移り、一部は滅亡する。……
資本制生産につれて一の全く新たな力たる信用業が形成されるのであ
って、これはその初期には、蓄積の謙遜な助手としてひそかに忍び込
み、社会の表面に大小さまざまな分量で散在する貨幣手段を眼に見え
ない糸により個々の資本家または結合資本家の手にかき集めるのであ
るが、やがては競争戦上の新たな恐るべき武器となり、結局は、資本
集中のための膨大な社会的機構に転化する。」（同前P六五九〜六六〇）
「これはもはや、蓄積と同一物たる、生産手段と労働に對する指揮と
の簡単な集積ではない。それは、すでに形成されている諸資本の集積
であり、資本家による資本家の収奪であり、少数の大資本への多数の
小資本の転化である。この過程が第一の過程（個別的諸資本の単なる
蓄積、集積）から区別される点は、この過程はすでに現存して機能し
つつある諸資本の配分の変更のみを前提とし、したがってその作用範
圍は社会的富の絶対的増加または蓄積の絶対的限界によって制限され
てはいない、ということである。一方において人の手にある資本が大
きな分量に膨張するのは、他方において多数の人々の手にある資本が
失われるからである。これは、蓄積および集積と区別される本来的集
中である。」（同前P六五九）
「自立する一産業的事業を有利に経営するために必要となる資本の最
少限は生産力の増加につれて増加するが、この増加は競争戦において
は次のように現象する。……多くの費用のかかる新経営設備が一般的
に採用されれば、小さい資本は将来は経営から排除される。種々の生
産部面における機械的発明の発端においてのみ、小さい資本がそこで
自立して機能することができ。他方、鉄道のような、不変資本の比

本家そのものにも及ぶ。この収奪は資本制的生産様式の出発点である。
資本制的生産様式の目標は収奪の遂行であり、しかも窮極的にはあら
ゆる個人からの生産手段の収奪であって、生産手段は、社会的生産の
発展につれて、私的生産の手段および私的生産の生産物ではなくなり
もはや結合生産者たちの手における生産手段、したがって彼等の社会
的所有たりうるにすぎぬことは、それが彼等の社会的生産物であるの
と同様である。だが、この収奪は、資本主義制度そのものの内部では、
少数者による社会的所有の取得として、対立的姿態をとって現われる。
」（同前P四七七〜四八二）

こうして、賃労働者にとって、支配はますますいりくみ、重層的なもの
になり、敵が視えにくくなる。彼らはもはや単に眼前の雇主に、その資本
のもとに縛りつけられているのではない。眼にみえない何本もの鎖で縛り
つけられ、そこで編まれた鎖の網の中にスッポリいれられているのだ。
(2) 小商品生産の駆逐・隷属化
ここでは、いわゆる独立小商品生産者の駆逐についてである。この事態
が進行する根拠は(1)でみたところと同じである。要するに、レーニンがみ
ごとくに簡潔に規定した次の言葉でそれはいいあらわせよう。
「……資本主義の発展過程は、もつとも一般的な形では、つぎのよう
に表現することができる。／＼発定期——全生産Ⅰ——大規模生産
Ⅰa、小規模生産Ⅰ——Ⅰa／つぎの時期——全生産Ⅱ——大
規模生産Ⅱa+b、小規模生産Ⅱ——Ⅱa+b／大規模生産と
小規模生産の相互関係にかんするありとあらゆる資料がこの表式にあ
てはまるということは、あえてうけあうことができる。そして、この
過程を理解しようとするのぞんでいる人ならだれひとりとして、これがま
さしく駆逐であることを疑うことはできない。二〇〇——Ⅰa+bが、
その大きさの点で、一〇〇——Ⅰaより大きかろうか（相対的駆逐）小さ
かろうか（絶対的駆逐）、いずれにしてもそれは駆逐である。」（「ブレハ
ーノフの第二次綱領草案にたいする意見」『党綱領問題』P九九）
このような駆逐の過程は、ますます大規模におこなわれ、巨大な銀行資
本、商業資本、産業資本の、そしてそれらの結合力が作用するようになる。
この小規模生産の大量発生と大量消滅の、そしてまた巨大な資本の結合力、
組織力によるより大量の弱小資本の吸収と反発とのくりかえしによって、
弱小資本、小規模生産、そして、そこに働く諸生産者たちからの膨大な収

奪がくりかえされ、ますます巨大資本、大規模生産のもとへの弱小資本、小規模生産の従属が強まる。

さて、独立小商品生産者の話にもどらう。ここではとりわけ農業の資本主義化、都市にたいする農村の従属、農民層の分解、大量の賃労働者化、が問題である。資本主義の発展にともなうこの法則・傾向——「頑強な必然性をもって作用して自己を貫徹しつつあるこれらの傾向」(『資本論』第一版への序言)は、むしろ、資本主義の発展の程度によって社会、国、歴史、時代の相違によって種々さまざまの色あいをもっている。とりわけ現代過渡期世界においては、この傾向は著しい変容をうけざるをえなかつたし、またこのことが、「遅れた農業国から資本主義の発展段階を飛びこえて直接に社会主義にすすむ」革命の一つの重要な根拠ともなったのだが、だがふたたび、にもかかわらず、資本主義が直接に浸透し、作用している領域では、かの法則・傾向は、やはり「頑強な必然性をもって作用して自己を貫徹しつつある」のであり、そうではない領域においても、かの傾向をささえている生産様式、経営形態の変化は着実に進行しているのである。で、ここに「遅れた農業国から資本主義の発展段階を飛びこえて直接に社会主義にすすむ」革命にたいしてもきわめて重要な示唆をもつ資本主義発展と農業との関係についてのマルクスの批判的分析をかがげよう。

「農業の部面では、大工業は、それが旧社会の保証たる『農民』を滅ぼし、これに置換えるに賃労働者をもってする限りにおいて、最も革命的に作用する。かくして、農村における社会的な諸々の変革要求および対立は、都市におけるそれらと均等化される。陳腐きわまり、不合理きわまる経営の代りに、科学の意識的・技術的応用が現われる。農業とマニファクチュアとの幼稚・未発達な姿態に絡みついていた両産業の本源的な家族紐帯は、資本制の生産様式によって完全に引裂かれる。だが資本制の生産様式は、同時に、農業と工業との——それらの対立的に仕上げられた姿態を基礎とする——新しくより高度な総合の・合一の・物質的諸前提を創造する。資本制の生産様式は、それが大中心地に集積される都市人口のますます優勢となるにつれて、一方では社会の歴史的起動力を集積させるが、他方では人間と土地との間の質料転換を、すなわち、人間により食料および衣料の形態で消費された土地諸成分の土地への復帰を、つまり持続的な土地豊饒度の永久

のであり、「したがって活動的な側面は、唯物論とは反対に、観念論によって展開されるようにな」っているのだ。環境破壊、資源・エネルギー問題等々は、決して単なる客体としての自然の問題ではない。単なる「自然対人間」の問題ではない。人間化された自然であり、それ自身、対象としてあるところの人間の主体的実践なのである。この点での哲学の貧困から、彼らは、破壊にたいし、破壊をどうにかする(少なくとも、やめる等)、また、乱獲等にたいし、それを制限するといったタワけた単純二分法、直観的把握しかできないのだ。

かかる資本制生産様式に固有な機械制大工業の農業にたいする影響によって、第一に、農村の都市への従属が強められる。これは農業機械、肥料等の生産手段を通じて、そのうえあらゆる生活手段を通じて確実に遂行される。農業生産物が、それゆえ農村分布・配置自体が、都市の動向に規定される。だからその一方では、農村地域のベッド・タウン化、工業団地化等々の農村絶滅・否定である。

ついで第二に、独立小商品生産者の没落、賃労働者化、相対的過剰人口層の形成である。

(3) 相対的過剰人口層——産業予備軍の増大、その賃労働者階級にとつての意義

相対的過剰人口層——産業予備軍の形成は、一方で生産過程の内部で、資本の有機的構成の高度化(資本の側からの労働力への需要の相対的減少が進行すること、そして同時に一方で、資本制生産が外延的にその支配領域をますます拡大することによって)。

すでに述べたように、資本の有機的構成の高度化はすなわち労働力にたいする需要の相対的減少である。だが、こういう反論がある。新たな技術の採用は、また新たな就業部門をみいだすはずだと。これは次のマルクスの反論であえなく破綻する。

「経済学者たちは、もちろん、機械によって過剰となった労働者は新たな就業部門を見出すと、吾々に説明する。彼等は、除隊されたこの同じ労働者が新たな労働部門で就業すると、敢て直接に主張するのではない。諸々の事実は、この虚偽を余りにも明白に否定する。彼等の主張するところは、実は、労働者階級の他の構成部分にとつては、たとえ若し労働者のうちこの衰微した産業部門にはいる用意のすてに出来ている部分にとつては、新たな雇用手段が現れるだろう、と

的自然条件を、攪乱する。かくしてそれは、同時に、都市労働者の肉体的健康と農村労働者の精神的生活を破壊する。だがそれは、同時に、かの質料転換の単に自然発生的に生じた状態を破壊することによって、その質料転換を社会的生産の規律的法則として、また人間の充分な発展に適当な形態において、体系的に再建することを、強制する。農業においてもマニファクチュアにおけると同様に、生産過程の資本制的転形は同様に生産者の殉難死として現象し、労働手段は労働者の抑圧手段・搾取手段・および窮乏化手段として現象し、労働諸過程の社会的な結合は労働者の個人的な活気・自由・および自立性の圧迫として現象する。より大きな地面の上への農業労働者の散乱は、同時に彼等の反抗力をくじく、——集中は都市労働者の反抗力を高めるのだが。都市の工業におけると同じように、近代の農業においては、労働の生産力の増大と流動化の増進が、労働力そのものの荒廃と衰弱によって購われる。そして資本制的農業のあらゆる進歩は、労働者から掠奪する技術における進歩でもあり、ある与えられた期間のあいだ土地豊饒度を高めるためのあらゆる進歩は、同時に、この豊饒度の持続的源泉を滅ぼすための進歩である。ある国が、たとえば北アメリカ合衆国のように、その発展の背景としての大工業から出発すればするほど、この破壊過程はますます急速である。だから資本制の生産は、同時にすべての富の源泉たる土地と労働者とを破壊することによって、社会的生産過程の技術および結合を發展させるにすぎない。」(『資本論』第一巻、P五三〇～五三二)

(註) 環境破壊、資源・エネルギー問題、限りある自然?! 等々として帝國主義・ブルジョアに操られおどらされている終末論者たちその他は、一度でもじっくりこのマルクスの言葉を読んでみるべきであろう。だが人は「あまりにもマルクスは樂觀主義者だ」といつてとりあわぬかもしれない。それにはこういおう。「さよう、マルクス主義者(共産主義者)は、プロレタリア革命について真の樂觀主義者だ」と。マルクスの『フォイエルバッハ・テーゼ』にならうていえば、かの論者たち——「古く唯物論」「直観的な唯物論」の立場にある彼らは、「対象、現実性、感性がただ客体あるいは直観の形式のもとでのみとらえられていて、人間の感性的な活動、実践としてとらえられず、主体的にとらえられていない」

いうことに他ならない。これはもちろん、落伍した労働者にとつての大した賠償だ。資本家諸公にとつては、搾取できる新鮮な肉と血に不足はないであろう。死者をしてその屍を葬らしめよ、だ。このことは、ブルジョアが労働者に与えるよりもむしろ自分自身に与える慰めである。」(『賃労働と資本』岩波文庫、P六六～六七)

しかもこのとき、「機械は、熟練労働者を不熟練労働者によって、男子を女子によって、大人を小供によって、駆逐する」傾向をもっている。草案に「婦人、小供、(外国人労働者)をますます大規模に使用する可能性をブルジョアにあたえる」という点だ。もちろんこれは、資本制生産の外延的拡大である。これによって、成年男子労働者の労働力の価格が、その価値以下に、あるいはその価値それ自体がたえずひき下げられ、かくて一社会的に平均的な労働力価値と価格が不断にひき下げられ、搾取の強化がなされるとともに、他方では婦人、子供、外国人労働者にとつては、資本の直接のエジキに、しかも、男子あるいは大人あるいは先進国の労働者よりもいっそう劣悪で、苦汁にみちたそれになげこまれる。労働者間の競争が高まる。

「機械が筋力を不要ならしめる限りでは、機械は、筋力なき労働者——または肉体的発達未熟だが四肢の柔軟性の大きい労働者——を使用するための手段となる。だから婦人(および児童労働者)というものが機械の資本制的充用の最初の言葉であった。かようにして、労働および労働者のこの有力な代用物は、たちまち、性と年齢との区別なく労働者家族の全成員を資本の直接的統治のもとに編入することにより、賃労働者の数を増加させる手段に転化した。資本家のための強制労働が児童の遊戯にとつて代ったばかりでなく(いまなお、アジア、アフリカ、中南米の新植民地主義下の現状をみよ)、慣例の限度内で家族そのものために行なわれる家庭内の自由労働にもとつて代った。」(『資本論』第一巻、P四二二)

かかる児童・少年および婦人の賃労働への強制とそれによる疾苦・頽廢等々、およびそのあまりのすさまじさゆえに工場法等による規制——これは一つの歴史時代を包括している。だが、かかる法的規制がすすんでいるにせよ、事態の本質はいっこうに変わらない。資本にとつては、安価で摩擦の少い、使いつての労働力群であり、もつとも無内容・単純で、それゆえに労働者相互に競争が極度に高まる分野に投入されるものである。いわ

ゆる主婦のパート・タイマー、内職等を思いうかべればそのことは十分に理解されうる。ところで女子労働力の(そしてさらには年少者労働力の)大きな投入分野たる内職等ともなれば、いっさいの法的規制は無効力であり、それこそ労働日の無制限の延長、精神的かつ肉体的磨滅が著しく進行する。

「労働で未成熟な労働者の搾取は、近代的マニファクチュアでは本来的工場におけるよりも一そう破廉恥になる。……またそれは、いわゆる家内労働ではマニファクチュアにおけるよりも一そう破廉恥となる。けれど、労働者たちの反抗能力が彼等の分散につれて減少するからであり、全一連の盗賊的寄生者(下請け一孫請け一孫々請け等の一系列を想起せよ)が本来的雇主と労働者との間に介入するからであり、家内労働はつねに同一生産部門における機械経営または少なくともマニファクチュア経営と闘争するからであり(たとえば、日本なら日本だけで考えれば若干事情は異なっているが、全世界的に考えれば、いまなおかなり妥当である)労働者が貧窮のために最も必要な労働条件——空間、光線、通風など——を奪われるからであり(都市の最底辺——だがこれはきわめて大きな部分を占める——)となつていく文化住宅やアパート群を想起せよ)、仕事の不規則さが増大するからであり、それから最後に、大工業および大農業によって「過剰」化された人々のこの最終避難所では労働者間の競争が必然的にその最大限に達するからである。機械経営によって始めて体系的に発達させられた生産手段の節約は、そもそも同時に、勝手きままる労働力の浪費および労働機能の正常的諸前提の盗奪なのであるが、この節約はいまや、一産業部門において労働の社会的生産力および結合労働過程の技術的基礎の発展が不充分であればあるほど、この敵対的で人間殺戮的な面をますます多く露呈するのである。」(同前P四八六)

事態はまさに百年まえとなら変らない!! しかも、かかる事態のよりいっそうの進行とともに新たな様相が加わる。外国人労働者の起用、これである。機械制生産の発展、ますます拡大する諸科学の応用、かくて種々の熟練(実はとらならない細目的なそれ)や知識等々が、機械のうちに集積されていくにつれて、ますます大量の単純労働が(そしてそれ自身は、すでに述べたようにますます細目化され、矮小化された熟練を生みだす)生成され、かくて、より安価で、それほどの知識や技術を要しない労働力として、植民地や従属国の、あるいはかつてそれであつたいわゆる後進国・

にその場を移しての単純な、労働集約的な作業が、彼らにわりあてられる。まさしく、もつとも「労働の社会的生産力および結合労働過程の技術的基礎の発展が不充分」で、それゆえに、機械制生産の「敵対的で人間殺戮的な面がますます露呈」されるような労働へと、彼らは集中される。

かかる事態の一方、この婦人、児童、少年、外国人労働者の多量の使用は、一つの階級としてのプロレタリアートにとっては、まさしくその社会的な平均的労働力の価値をたえずひき下げ、あるいはその価格を価値以下に不断にひき下げることを意味する。

「労働力の価値は、個々の成年労働者の維持に必要な労働時間によつてのみならず、労働者家族の全成員の維持に必要な労働時間によつて規定されたのであつた。機械は労働者家族の全成員を労働市場に投ずることによつて、夫の労働力の価値をその全家族の上に分割する。だから機械は、彼の労働力の価値を減少させる。たとえば、四個の労働力に分割された家族(の労働力)の購入には、おそらく、以前に家長の労働力の購入に要したより多くの費用がかかるであろうが、しかしその代りに一労働日(が四労働日となるのであつて、労働力の価格は、四労働日の剰余労働が一労働日の剰余労働を超過するの比例して下落する。一家族が生活するために、いまや四人が、資本のために労働ばかりでなく剰余労働を提供せねばならない。かくして機械は、そもそも最初の最初から、資本の固有独自の搾取領域たる人間的搾取材料と同時に搾取度を拡大するのである。)(『資本論』第一巻、P四一四)

外国人労働者の場合でいえば、労働力の価値が社会的に平均的な労働力としてのものであることを想起すれば、上記の説明はほぼそのまま適用されうる。もちろん、外国人である限り次の点はみておかねばならない。労働力の価値は、一つに、労働者の「いわゆる必然的欲望の範囲」によって規定され、したがって、歴史性と、また「一国の文化段階」によって規定されている。だから当然にも、国によって平均的な労働力の価値は異なるというところ、これである。だが、このことがあるにせよ、問題なのは労働力を吸収する資本にとつての労働力の価格なのであり、したがってその資本が先進国に投下されたものであれ、またたとえば多国籍企業として外国に投下されたものであれ、その資本の母国での労働力価値、つまりは諸先進国での労働力価値であり、またその価格である。この意味においては、現在のICCのように外国人労働者の移入がきわめて恒常的で大量である場合に

地域の労働者たちが、大量に使用されることになる。現在でいえば、西ドイツやフランスにおけるイタリア人、スペイン人、ポルトガル人、ギリシヤ人、トルコ人、アラブ人等、日本における「韓国」人等、こういった外国人労働者たちが、かつての黒人奴隷のように、むきだし暴力と野蠻さによって酷使されるのでない場合にせよ、自然法則としてあらわれる価値法則にもついで、クスマートに大量に使用される(しかし、ここでわすれてはならないのは、「韓国」馬山自由貿易地域で酷使される「韓国」人労働者たちの例のようにしげしげ、むきだしの暴力と野蠻とが横行している、という事実である)。このことは帝国主義の時代にはとりわけ顕著である。レーニンはこの点につき、党七回大会での綱領改訂討議にむけた『党綱領の改正によつて』で次のように述べている。

「以上で同志ニコニコフの草案の検討をおわりますが、彼が提案している非常に貴重な一つの補足を、とくに強調しなければならぬ。私の考えでは、この補足は採用すべきであり、むしろ拡張すべきである。すなわち彼は、技術上の進歩と、婦人労働や児童労働の使用の増大を述べている節に、『ならびに、後進国から移入される未熟練の外国人労働者の労働(を使用する)』という言葉を付け加えるよう提案している。これは、貴重な、また必要な補足である。まさに帝国主義にとりわけ特徴的なことは、後進国からきた低賃金の労働者の労働をこのように搾取することである。富裕な帝国主義諸国の寄生生活は、ある程度まで、まさにこの搾取に基礎をおいている。これらの国々は、『安価な』外国人労働者の労働を法外に、恥知らずなやり方で搾取しながら、より高い賃金で自国の一部の労働者までも買収する。これには、『低賃金の』という言葉と、さらに『また、しげしげ無権利の』という言葉とを補うべきであろう。というのは、『文明』諸国の搾取者は、移入された外国人労働者が無権利であるという事情を、つねに利用しているからである。)(『党綱領問題』P五〇八、九)

このような「後進諸国から移入された」(資本輸出がすすみ、証券投資の形ばかりでなく直接投資の形が普遍化すれば、必ずしも「移入され」ずともまったく同じ意義をもつようになる)、「低賃金の、また、しげしげ無権利の、未熟練の外国人労働者」たちは、先進国労働者たちにはあまりに劣悪で、困苦にみちた労働現場へと、また、そのような職種へと、投入され、収奪される。生進国内部での清掃作業、その他、そしてさらには、後進国

はそれだけ、労働力の価値と価格とに影響をおよぼす。

「機械はまた、資本関係の形式的媒介たる労働者と資本家の契約を根本的に変革する。商品交換の基礎の上では、資本家と労働者とが自由な人格として、独立の商品所有者——一方は貨幣および生産手段の所有者、他方は労働力の所有者——として、対応するということが第一の前提であつた。ところが今や資本は児童または少年(あるいは婦人、外国人労働者)を買うのである。労働者は以前には、彼が形式的に自由な人格として勝手に処分した自分自身の労働力を売つた。彼は今や妻子(あるいは外国人労働者)を売る。彼は奴隷商人となる。児童労働に対する需要は、しげしげ形式上でも、アメリカの新聞広告によくあつたような黒人奴隷に対する需要に似ている。」(同前P四一五)

ここにさらに賃労働者の上層(小商品生産者等)から没落する大量の人々が加わる。とりわけ農村から。かくして、資本制生産に固有な膨大な相対的過剰人口——産業予備軍が形成され、再生産される。いわゆる流動的、潜在的、停滞的という三つの形態をとつて。

「……機械の資本制の充用は、一方では、労働日を無制限に延長する有力な新動機を生みだし、この傾向に対する抵抗を打破するような仕方方で労働様式そのもの及び社会的労働体の性格を変革するとすれば、他方では、一部は労働者階級のうち従来は手のとどかなかつた層を資本の手に寄託することにより、一部は機械によつて駆逐された労働者を遊離されることによつて、資本の命ずる法則に従わねばならぬ過剰労働者人口を生みだす。」(同前P四二八)

「総資本の増加につれて加速され、総資本自身の増加よりも急速に加速されるその可変的成分のこの相対的減少は、他面では逆に、可変資本または労働者人口雇用手段の増加よりも常に急激な労働者人口の絶対的増加のようにみえる。むしろ資本制の蓄積が、しかもその精力とその大きさに比例して、たえず、相対的すなわち資本の中位的増殖欲望にとつて余分な、したがって過剰または付加的な労働者人口を生産するのである。」(同前P六六三)

「すでに機能しつつある社会資本の大きい及びその増加度につれて、生産規模および運動させられる労働者数量の拡張につれて、富のあらゆる噴泉のより拡大・充分な奔流につれて、資本による労働者のより大きい吸引がそのより大きい反発と結びついている規模もまた拡張さ

れ、資本の有機構成および資本の技術的形態における変動の速さが増加し、また、時には同時的時には交互にこの変動をきたす生産部面の範囲が膨張する。だから労働者人口は、それ自身によって生産される資本蓄積とともに、それ自身の相対的過剰化の手段をますます大量的に生産する。これこそは資本制生産様式に独自の人口法則である。(同前P六六四〜六六六)

「だが、過剰労働人口なるものが蓄積の——または資本制的基礎上の富の発展の——必然的産物だとすれば、この過剰人口は逆に、資本制的蓄積の積杆となる。いな資本制的生産様式の一実存条件となるそれは、あたかも資本が自己の費用で飼育したかのように全く資本に属するところの、自由に処分しうる産業予備軍を形成する。」(同前P六六六)

「すでに見たように、資本制的生産様式および労働生産力の発展——これは蓄積の原因であると同時に結果である——は資本家をして、可変資本の同じ支出をもつて、個々の労働力の外延的または内包的搾取の増大により、より多くの労働を流動させることを得せしめる。さらに、すでに見たごとく、資本家は、ますます熟練労働者を不熟練労働者により、成熟労働者を未成熟労働者により、男子労働者を女子労働者により、成年労働者を未成年または児童労働力により、駆逐することによって、同じ資本価値をもつてより多くの労働力を購買する。だから蓄積が進行するにつれて、一方では、より大きい可変資本が、より多くの労働者を募集することなしにより多くの労働を流動させ、他方では、同じ大きい可変資本が、同じ分量の労働力をもつてより多くの労働を流動させ、そして最後に、高級労働力の駆逐によってより多くの低級労働力を(搾取する)。したがって、相対的過剰人口の生産または労働者の遊離は、もともと蓄積の進行につれて加速される生産過程の技術的変革、および、これに照応する不変資本部分に比しての変資本部分の比率的減少よりも、一そう急速に進行する。生産手段はその規模および作用力が増すにつれて労働者の雇用手段たる程度を減ずるとすれば、この関係そのものは、労働の生産力が増加するのと同じ度合で資本は自己の労働供給を自己の労働者需要よりも急速に増加するということによって、ふたたび修正される。労働者階級の就業部分の過度労働は彼等の予備軍を膨張させるが、他方では逆に、予

第四項は恐慌をして産業沈滞期について、そしてそれがどのような影響を労働者にあたえるかについて述べている。この恐慌とそのあとにつづく産業沈滞期は、賃労働者にとって、すでに第三項で述べられた事態——一言でいえば、「貧困・抑圧・隷属・頹廢・搾取」がもつとも集中的に、もつとも激しく、もつともきわだってあらわれる一時期であるのだから、賃労働者におよぼす具体的影響については、さして理解に困難な点はないと思われる。

前項の解説では、その内容上、当然のこととして産業の周期的変動についてはふれていない。恐慌が問題となっていることでは、かの周期変動についてふれておかねばならない。このことによって、恐慌および産業沈滞期が労働者階級、そしてそれゆえに小商品生産者におよぼす影響については理解できるであろう。

「工場制度の龐大で飛躍的な拡張可能性とその世界市場への依存性とは必然的に熱病的な生産とそれにつづく市場の充溢を生み出すのであるが、市場が収縮するとともに麻痺状態が生ずる。産業の生活は、中位の活気・繁栄・過剰生産・恐慌・停滞の諸時代の序列に転化する。」(『資本論』第一巻P四七六)

「近代の産業の特征的な生活経路、——中途に小さい動揺がありはするが、中位の活気・高圧のもとの生産、および沈滞の諸期間からなる十年目ごとの循環という形態は、産業予備軍または過剰人口の絶えざる形成、大なり小なりの吸収、および再形成、に立脚する。産業循環上の有為転変はまた、過剰人口を補充し、しかもその最も精力的な再生産能因の一つとなる。」(同前P六六六)

「……近代の産業の全運動形態は、労働者人口の一部分の、失業者または半失業者へのたえざる転化から生ずる。……ひとたび一定の運動に投げ入れられた天体がたえず同じ運動を反復すると全く同様に、ひとたびかの交互的膨張および収縮の運動に投げ入れられると絶えず同じ運動を反復する。結果がまた原因となるのであって、自分自身の諸条件をたえず再生産する全過程の有為転変は周期性の形態をとる。」(同前P六六七)

この周期性が労働者の賃金を規定する。概して言えば、労賃の一般的運動は、もっぱら、産業循環の周期的変動に照応する産業予備軍の膨張および収縮によって調整されてい

備軍がその競争によって就業者に加える圧迫の増加は就業者をして、過度労働と資本の命令下への隷属とを余儀なくさせる。労働者階級の一部分の過度労働によって他の部分を強制的懶惰に陥らしめること、およびその逆のことは、個々の資本家の致富手段となり、しかも同時に社会的蓄積の進行に照応する規模での産業予備軍の生産を促進する。」(同前P六六九〜六七二)

(註) この引用部分に該当するフランス語版での引用を次にかかげる。全体により平易な表現であり、また、傍線を付した部分は注目に値する。

「蓄積の進行に従う産業の発展は、増大する量の生産手段を充用するのに必要な労働者数を減らすに減少させるだけではなく、それは同時に個々の労働者が提供しなければならぬ労働の分量を増大させる。資本主義体制が労働の生産力を発展させ、したがってより少量の労働からより多量の生産物を引きだすにつれて、それはまた、労働日を延長させるか労働をより強化して、賃労働者からより多量の労働を引きだす手段を、さらには、よりすぐれた高価な労働力をより劣った安価な多数の労働力におきかえることによって、つまり男を女に、成人を青年および児童に、一人のヤンキーを三人のシナ人におきかえることによって、外見的に雇用労働者数を増大させる手段を、発展させる。これらは一つ残らず、労働にたいする需要を減少させて労働の供給を過剰にするための、一言でいえば過剰人口を生産するための方法である。賃労働者階級の現役部分に課せられた過度労働は、予備軍の隊列を増大させ、後者の競争が前者に及ぼす圧力を増大させることによって、前者がより一層従順に資本の命令に従うことを余儀なくさせる。……賃労働者階級の一部分に強制的怠惰を宣告することは、たんに他の部分にたいして、個々の資本家を富ますことの過度労働を課すだけではなく、同時に、資本家階級のために、蓄積の進展とつりあつた産業予備軍を維持するのである。」(『マルクス資本論第一巻フランス語版』林直道訳、大月書店、P一〇九〜一一一)

(六) 第四項の解説

① 恐慌および産業沈滞期が賃労働者にあたえる影響について

る。だからそれは、労働者人口の絶対数の運動によって規定されているのではなく、労働者階級が現役軍と予備軍とに分裂する比率の変動によって、過剰人口の相対的大きさの増減によって、過剰人口が時には吸収され時には遊離される程度によって、規定されているのである。」(同前P六七二)

かかる周期的変動の中で、恐慌およびそのあとにつづく産業沈滞期では、大量の労働者の失業と、一方の就業している労働者における著しい賃金切り下げが、そしてときには過度労働、みられることはいうまでもない。賃労働者にとって、生活の不確かさは極点にたつする。

影響という点については原則的な点でこれ以上述べる必要はない。あとは圧倒的な具体的現実にくわいた実践暴露および組織化の具体的課題がある。これについてはここではあつかえない。

② 恐慌の可能性と現実性

(1) 恐慌問題にたいする二つの誤った態度について
さて、次に恐慌の理論上の問題点について述べておかねばならない。草案では次のようになっている。

「ブルジョア諸国内での右のような事態と、そして世界市場における競争の激化とは、たえず増大する数量で生産される商品の販売をよりいっそう困難にする。過剰生産は多かれ少なかれ鋭い恐慌をもたらし、その後には産業沈滞期がつづく。しかも恐慌の規模はますます拡大していく。」

このように、草案では第一のバラグラフで、恐慌の可能性が現実性へと転化していくことも基本的な条件が簡潔に述べられている。「右のような事態」とは、第三項で述べられていること、すなわち、労働の社会的生産力が、もろもろの方法によって、不断にかつ大規模に、迅速に発展させられること、生きた労働にたいする資本の側からの需要が相対的に減少していくこと、であり、ついで、世界市場におけるたえず激化していく競争、という現実の条件があげられ、この両者の間の衝突が、「たえず増大する数量で生産される商品の販売をいっそう困難にする」と、されている。これこそ恐慌の現実化の基本的根拠に他ならない。

もちろん、それだけでは恐慌の現実化を完全に、述べつくしたわけではなく、これは当然、あり、たとえば、クスマエンゲルスが強調してやま

なかつた恐慌発現の周期性について、十全にあきらかにしえてはいるわけではない。だが、恐慌という問題で大事なことは、そしてそれを綱領であつかうさいに大事なことは、まず第一に、恐慌は発現するとき、必ず世界恐慌としてあらわれるということ、そして第二に、その世界市場恐慌は、資本主義の諸矛盾のトータルな、総合的な噴出・爆発であるということ、これであり、それゆえに、綱領においては、その発現のもっとも基本的な根拠を簡潔に述べるとどめるべきである、ということである。恐慌の具体的なあらわれや形態、その具体的周期等々を綱領において述べることは適切でないし、またできもしない。そのもっとも根本をきつちりおさえることが肝要なのだ。

換言すれば、恐慌の問題をあつかうにさいして二つの誤った考えを批判しておかねばならない、ということになる。

第一は、恐慌を、その具体的な発現形態・周期をもふくめて、資本主義の全歴史時期に妥当するように原理論的に説明しつくそうとする考え方であり、第二は、そのような無謀な試みはしないとしても、現実にはひきつけた恐慌の具体的分析を、党綱領におしこもうとする考え方である。

第一の、宇野弘蔵に典型的な傾向は、てんで話にならない。このような人々は、マルクスの次の言葉、

「世界市場恐慌は、ブルジョアの経済のあらゆる矛盾の現実的総括および暴力的調整としてつかまなければならぬ。」（『剰余価値学説史』第二巻P六八九）

「……資本主義の生産の最も複雑な現象——世界市場恐慌——……」（『同前』P六七七）

を、ほとんど理解しえないのである。

世界市場恐慌（そしてふたたび強調するが、少なくとも現時点では恐慌の発現は、これ以外にはない）がそのようなものである以上、その具体的な発現形態・周期等は、そのときどきにおいて、具体的に分析されなければならない。十全なる原理的解明などそもそも不可能なのである。

ところが、この「そのときどきにおいて、具体的に分析」することを認めたいうでの第二の誤った傾向がある。このような人々は、とどのつまり綱領というものの性格をまったく理解していない人々なのである。綱領においては、草案のように、もっとも基本的な点が述べられるだけであって、恐慌の具体的な、そのときどきの分析は、戦術テーゼや行動綱領にでもふ

くませるべきものであろう。逆に、そのような党文書の中では、現実の恐慌の可能性、あらわれ、きざしの有無等々をできるだけ、具体的に分析しておかねばならない。

(2) マルクス恐慌論について

以上、恐慌を、綱領であつかう理論的態度がきらかにされたので、ついでその内容にたいして考えていこう。

周知のように、マルクスは『資本論』において、いわゆる恐慌論という形でまとめた叙述をあたえてはいない。ここにその後のマルクス学者の無用とも思われる長い、複雑な論争過程が存在しているのだが、われわれは、すでに述べたように、マルクスにしたがって、

「世界市場恐慌は、ブルジョアの経済のあらゆる矛盾の現実的総括および暴力的調整としてつかまなければならぬ」（前出）

「……資本主義の生産の最も複雑な現象——世界市場恐慌——……」（前出）

「……現実の恐慌は、資本主義の生産の現実の運動、競争と信用からのみ説明することができる——……」（『剰余価値学説史』第二巻P六九三）

という点を導きの糸としていえる。すなわち、恐慌を現実であらわれるものとしてはあくまで世界市場恐慌としておさえ、そしてそれを「ブルジョア経済のあらゆる矛盾の現実的総括および暴力的調整としてつかむ」という点である。

この点はきわめて重要である。まさしくマルクスは恐慌をそのように考えていたからこそ、『資本論』の中で一つのまとまった恐慌論をあたえなかつたのである。この点についてはいわずにブルジョア問題の文献学的考察によつてかなり詳細にきらかにすることができ、以下に主要な文献引用をかかげておこう。

「……篇別は明らかにすべきのようになされねばならない。（一）一般的抽象的な諸規定……（二）ブルジョア社会の内部の仕組みをなし、かつ基本的諸階級の基礎となつて諸カテゴリー。資本、賃労働、土地所有。それら相互の関連。都市と農村。三大社会階級。これらの間の交換。流通。（私的）信用制度。（三）ブルジョア社会の国家形態での総括。それ自身との関係で考察すること。『不生産的』諸階級。租税。国債。公信用。人口。植民地。移住。（四）生産の国際的関係。国際的分業。輸出入。

為替相場。(a)世界市場と恐慌。」（『経済学批判序説』『経済学批判』若波文庫、P三二四～五）

「交換価値、貨幣、価格が考察されるこの第一篇では、商品はつねに現存するものとして現れる。形態規定は単純である。われわれは諸商品が社会的生産の諸規定を表現することを知っているが、しかし社会的生産そのものは前提である。しかもこうした諸商品はこうした規定で指定されているのではない。そこで実際には最初の交換は、生産の全体をとらえずまた規定しないところの余剰の交換としてのみ現れる。それは交換価値の世界の外部にある全生産の現存する過剰物である。それで発展した社会でもなお、この交換価値の世界が、直接現存する商品世界として表面上に現われてくる。しかしながら商品生産は自己自身を通じて、自己をのりこえて、生産関係として指定されている経済関係を指ししめす。したがって生産の内部的な仕組みが第二篇であり、国家における総括が第三篇であり、国際関係が第四篇であり、世界市場が終篇をなす。この世界市場の篇では、生産は全体性として指定され、またその契機のいづれもが同様に指定されている。だが同時にそこではすべての矛盾が過程に登場する。世界市場はこのばあいたも同様に全体の前提をなし、その担い手をなす。そのさいの恐慌は、前提をのりこえることへの全般的な指示であり、新しい歴史的形式の受容への促進である。」（『経済学批判要綱』大月書店P一四六）

「わたくしはブルジョア経済の体制をつぎの順序で考察する。すなわち、資本、土地所有、賃労働、国家、外国貿易、世界市場。はじめの三項目では、わたくしは近代ブルジョア社会がわかれてくる三大階級の経済的生活条件を研究する。あとの三項目の関連は一見してあきらかである。」（『経済学批判』P一一）

以上は、『経済学批判要綱』から『経済学批判』にいたる過程のことであるが、この全体系プラン、とりわけ恐慌をふくむ世界市場の項を全体系の総括とすると、この点では、『資本論』を執筆するときにおいてもほぼ変わらなかつたと考えられる。もちろん、地代に関する部分、そしていま恐慌の問題をあつかうさい、大きな問題となる競争、信用の点についても、若干の変更が加えられ、『資本論』の枠内であつかわれりるものはあつかわれることになつたのであるが、しかしあくまで一定の限定がついてのうである。

つた。

「これ『資本論』は第一分冊（現在の『経済学批判』の続きですが、独立に『資本』という表題で出ます。そして、『経済学批判』というのはいまだ副題としてつくだけです。それは、実際はただ、第一篇の第三章をなすはずだったもの、すなわち『資本一般』を含んでいるだけです。したがって、諸資本の競争や信用制度はそれには含まれていません。イギリス人が『経済学の原理』と呼ぶものは、この巻の中に含まれていません。……私はこれの続き、すなわち資本の叙述の結び、競争と信用をドイツ語で書くか、または最初の二作をイギリスの読者のために一冊にまとめるか、どちらかにしようと思つていたので、……」（『マルクスとエンゲルス宛手紙一八六五年七月三十一日』同前P三六三）

「理論的な部分（はじめの三巻）を完成するためには、まだ三つの章を書かねばならない。それからさらに第四巻、歴史的・文献的な巻（現在の『剰余価値学説史』）を書かねばならない。……僕は、全体が目の前にでき上がっていないうちにどれかを送り出す決心がつかないのだ。たとえどんな欠陥があろうとも、僕の著書の長所は、それが一つの芸術的な全体をなしていることなのだ。」（『マルクスとエンゲルス宛手紙一八六五年七月三十一日』同前P三六三）

「私の事情（身体や日常生活のための絶え間ない中断）のために、最初にもくろんでいたように二巻を一度ではなく、まず第一巻を出さなければならぬことになりました。それからまた今度はたぶん三巻になるでしょう。すなわち、この著作全体は次のような部分に分かれます。第一部 資本の生産過程。第二部 資本の流通過程。第三部 総過程の態容。第四部 理論の歴史のために。第一巻ははじめの二部を含みます。だが、結局、第一部だけで第一巻として出版された。第三巻はたぶん第二巻の全体を占め、第四部は第三巻の全体を占めるでしょう。」（『マルクスとエンゲルス宛手紙一八六六年十月十三日』同前P三七九）

「……第二部では、君も知つていられるように、資本の流通過程が、第一部で展開された諸前提のもとで述べられる。……次に第三部では、われわれは、そのいろいろな形態および互いに分離した諸構成部分への剰余価値の転化に移る。……」

いまや我々は利潤を、それが実際に与えられたものとして現われる形態に、……帰着させた。そこで今度は、この利潤の企業者所得と利子との分裂だ。利子生み資本。信用制度。／＼……／＼……に我々は、俗流経済学者にとっては、出発点として役立った諸現象形態に到達した。すなわち土地から生ずる地代、資本から生ずる利潤(利子)、労働から生ずる労賃、というのがそれだ。だが、我々の立場から見れば事態は今では違った様相を呈している。外観上の運動は解明されている。さらに、これまでのすべての経済学の基柱となっていたアダム・スミスの愚論、すなわち、諸商品の価格はかの三つの収入から、つまりただ可変資本(労賃)と剰余価値(地代、利潤、利子)とだけから、成っている、という愚論が、ひっくり返される。この現象の形態における総運動。最後に、かの三つのもの(労賃、地代、利潤(利子))は、土地所有者、資本家、賃労働者という三つの階級の収入源泉なのだから——結びとして、いっさいのごたごたの運動と分解とがそこに帰着するところの階級闘争。」(「マルクスとクルゲルマン宛手紙一八六八年四月三〇日」『資本論書簡②』P一三六—一四三)

「吾々が本章で研究する諸現象は、充分に展開するためには、信用業と、世界市場——これは、総じて資本制的生産様式の基礎および生活圏をなす——での競争とを前提とする。だが資本制的生産のこうした具体的諸形態は、資本の一般的本性を把握した後にのみ、包括的に叙述される。のみならず、これらの形態の叙述は吾々の著作の計画外に横たわるのであって、その続きでも書かれる場合の仕事である。とはいえ、右の表題に示された諸現象はここで一般的に取扱われうる。」(第六章 価格変動の影響、第二節 資本の価値増大と価値減少、遊離と緊縛)『資本論』第三卷P一三二)

「これは、ここでは経験的事実としてのみ言及される。けだし、これは事実上、ここに挙げるべき他の幾多の事項と同様に、資本の一般的分析とは何の関係もなく、この叙述では取扱われない競争の叙述に属することだからである。」(第三篇 利潤率の傾向的低落の法則、第十四章、第二節 労働力の価値以下への労賃の引下げ)同前P二六三)

「信用業と、信用業が創造する諸用具(信用貨幣など)との立ち入った分析は、吾々の計画の範囲外に横たわる。ここではただ、資本制的なく、レーニンが示したように、もっとも基本的な定式をあたえることが唯一正しいのである。」

(3) スターリニズムの過少消費説的誤謬について
なお、ここで次のことを注意しておこう。エンゲルスは『反デューリング論』の中で、そしてレーニンはこれに立脚しながら『経済的ロマン主義の特徵づけよせて』で恐慌問題を論じ、それを資本制生産における生産の社会的性格と取得の私的性質との矛盾から説いている。これをどう考えるか、である。

この点は著書を文脈にそって読めばあきらかであるが、きわめて妥当な、まったく正しい、簡潔な説明となっている。だが、この説明は実はきわめて微妙な問題をふくんでいるのである。すなわち、この説明を歪曲し、まったく誤った理解におちいり、ひいては過少消費説(まさしくレーニンのかの著書では、その過少消費説が批判され、先の説明がなされていたのであるが)に転落しているスターリニズムの問題があるからである。

こうした理由から、ここでレーニンの著作を検討することで、この問題を考えておこう。
経済的ロマン主義者・シスモンディ主義者が「恐慌を生産と労働者階級の消費とのあいだの矛盾から説明するのに対して」『経済的ロマン主義の特徵づけよせて』(国民文庫P五七)、レーニンはエンゲルスを引用して、「生産の社会的性格と取得の私的性質」(同前P五六)から説明しなければならぬと説くのであるが、ここでレーニンの強調するところ、もっとも重大な力点は、シスモンディ主義者が「現象の根源を生産の外部に見いだしているのたいして」(同前P五七)、「それをまさに生産の諸条件のなかに見いだす」(同前)という点である。シスモンディ主義者等の過少消費説にたいし、まさにこの点——生産内部の諸条件から恐慌を説くという点——を強くおしだすためにこそ、レーニンは、エンゲルスを継承し、かの矛盾を述べているのである。

だが、にもかかわらず、スターリニズムは、この最重点を、完全に脱落させ、ふたたび、生産外部に恐慌の原因をもとめようとするのである。どういうことか。

レーニンはいつている。
「第二の理論(エンゲルスの、だからレーニンの理論)は、それをまさに生産の諸条件のなかに見いだす。要するに、第一の理論(シスモン

生産様式一般の性格づけに必要な二、三の点だけを取り上げるべきである。それについては吾々は、商業信用および銀行信用だけを取扱うべきである。この信用の発展と公信用の発展との関連は考察しないでおく。」(「第二章 信用と仮空資本」同前P四三六)

「生産諸関係の物象化、および生産当事者たちに対する生産諸関係の自立化・の叙述においては、吾々は、世界市場・その状況・市場価格の運動・信用の期間・商業および商業の循環・繁栄と恐慌の交替・による諸関連が彼等に対し優勢を無意志的に支配する自然諸法則として現象し、彼等に対し盲目的な必然性として作用する、その仕方様式には立入らない。というのは、競争の現実的運動は吾々の計画の範囲外に横たわり、吾々はただ、資本制的生産様式の内的構造のみを、いわばその観念的平均において叙述すべきだからである。」(「第四章 三位一体的範式」同前P八八五)

では、恐慌はどのようにとりあつかわれたのか。『資本論』に厳格に示されているように、恐慌の可能性と現実性(あるいは必然性)、恐慌の一般的諸条件と現実的諸条件との明確な区別をつけたうえで、「恐慌の一般的条件」を「それらが価格の動揺(これがいま信用制度と結びついているように)と(いまいと)——価格変動とは違うものとしてのそれ——にはかかわりがないかぎり」で、「資本主義的生産の一般的諸条件から説明」(「剰余価値学説史」P六九六)することである。だからマルクスに従えば次のようなとなる。

「世界市場恐慌は、ブルジョアの経済のあらゆる矛盾の現実的総括および暴力的調整としてつかまればならない。したがって、この恐慌において総括される個々の諸契機は、ブルジョアの経済のどの部分にも現われ発展させられるものでなければならぬ。そして、われわれがブルジョアの経済のなかにさらに突き進んで行けば行くほど、一方では、この矛盾の新たな諸規定が説明されなければならぬし、他方では、それらの規定のより抽象的な形態が、より具体的な形態のなかに再現し、またそのなかに含まれていることが証明されなければならぬ。」(同前P六八九)

『資本論』全三巻の中におりおりにてくる恐慌に関する言及は、かかるものとしてあるのである。
このようなことから、恐慌問題の綱領におけるあつかいは、草案のように、一方での宇野式原理論の展開ではなく、他方での行動綱領的叙述でも

「第二の理論は、生産と消費とのあいだの矛盾という事実、不十分な消費という事実を、否定するのだろうか? もとより否定しない。第二の理論は、その事実を十分分とめていた。だが、それによつて、資本主義的生産全体の一部門のみにかかわる事実として、それにふさわしい従属的な位置をあたえているのである。」(同前P五七)

スターリニズムは、「従属的な位置をあたえるのではなく、それを前面にもつて論じているのだ。
「恐慌の基礎は、生産の社会的性格と生産の成果の取得の資本主義的形態とのあいだの矛盾のうちにある。すでにここで、エンゲルスの定式が微妙にかえられていることに注意。取得の性格から取得の形態に。つまり、生産手段所有形態の変革——固定化・集団所有化——への切りぢぢめ」資本主義のこの基本的矛盾をあらわしているものは、資本主義の生産能力が、最大の資本主義的利潤を獲得することをめあてに、すばらしく大きくなるのたいし、他方、資本家は労働大衆の生活水準をたえず極端な最低限におさえておこうとつとめるので、何千万という勤労大衆の支払能力ある需要が相対的に小さくなるという矛盾である。」(スターリン「ソ同盟共産党第十六回大会にたいする中央委員会の政治報告」『スターリン全集』第十二巻、大月書店、P二六九)

「第二の理論は、生産と消費とのあいだの矛盾という事実、不十分な消費という事実を、否定するのだろうか? もとより否定しない。第二の理論は、その事実を十分分とめていた。だが、それによつて、資本主義的生産全体の一部門のみにかかわる事実として、それにふさわしい従属的な位置をあたえているのである。」(同前P五七)

スターリニズムは、「従属的な位置をあたえるのではなく、それを前面にもつて論じているのだ。
「恐慌の基礎は、生産の社会的性格と生産の成果の取得の資本主義的形態とのあいだの矛盾のうちにある。すでにここで、エンゲルスの定式が微妙にかえられていることに注意。取得の性格から取得の形態に。つまり、生産手段所有形態の変革——固定化・集団所有化——への切りぢぢめ」資本主義のこの基本的矛盾をあらわしているものは、資本主義の生産能力が、最大の資本主義的利潤を獲得することをめあてに、すばらしく大きくなるのたいし、他方、資本家は労働大衆の生活水準をたえず極端な最低限におさえておこうとつとめるので、何千万という勤労大衆の支払能力ある需要が相対的に小さくなるという矛盾である。」(スターリン「ソ同盟共産党第十六回大会にたいする中央委員会の政治報告」『スターリン全集』第十二巻、大月書店、P二六九)

「第二の理論は、生産と消費とのあいだの矛盾という事実、不十分な消費という事実を、否定するのだろうか? もとより否定しない。第二の理論は、その事実を十分分とめていた。だが、それによつて、資本主義的生産全体の一部門のみにかかわる事実として、それにふさわしい従属的な位置をあたえているのである。」(同前P五七)

あるいはまた次のような記述をみよ。

「恐慌はなによりも、基本的な消費者である(なんと)深遠な表現であることか?」人民大衆が買うことのできる量よりも多くの商品が生産されて、そのため商品が売りさばけない、という点にあらわれる。資本主義的生産関係が支配しているところでは、人民大衆の購買力付きわめてせまい枠にかぎられている。」(『経済学教科書』初版第二分冊 P三五九)

「このように、生産を拡大する傾向、生産能力を非常に大きくする傾向は、資本主義に固有のものである。ところが実質賃金が上がり、失業がふえ、農民が没落する結果、勤労者の支払能力ある需要は相対的に小さくなる。そのため、資本主義生産の拡大は、住民の大多数の消費のせまい枠にどうしてもぶつかるといふことになる。」(同前 P三五九)

「経済恐慌は過剰生産恐慌である。恐慌の基礎は、生産の社会的性格と労働生産物の取得の私的資本主義的形態との矛盾である。この矛盾があらわれる形態は、第一に、個々の資本主義的企業の間では生産が組織化されているのに、社会全体では無政府のおこなわれているという対立であり、第二に、資本主義の生産能力は非常に大きくなるのに、勤労大衆の支払能力ある需要は相対的に小さくなるという矛盾である。」(P三五九)

こうしてぐればつきりするといふものではないか? 彼らスターリニストは、エンゲルス、レーニンをまったく歪曲し、「生産の社会的性格と取得の私的形態」といふことを中心に、主導的な地位におしあげておしこめ、中心的地位からはずし、よつてもつて「従属的地位をあたえ」ねばならない「不十分な消費」ということを中心に、主導的な地位におしあげているのである。かくて、レーニンが強調した「生産の諸条件のなかに」恐慌の原因をみるという点が完全にすてざられておしこめられている。過少消費説への転落である。

マルクスは次のようにはつきりと述べている。

「恐慌は支払能力ある消費または支払能力ある消費者の不足から生ずるといふのは、純粹な同義反復である。被吸恤民または泥棒の消費を除けば、支払をする消費以外の消費を資本主義制度は知らない。商品が販売されえないことは、その支払能力ある購買者、つまり消費者が見つからないこと以外には何も意味しない(商品の購買が結局は

として出てこないならば、すなわち、商品所有者によって販売され、かくして貨幣所有者によって購買されないならば、その商品は無用となるということを、含んでいる。かの同一性なるものは、さらに次のことを、——この過程は、もしそれが成就するならば、商品の生涯の長かれ短かれ一時期たる一の静止点を形成するということを、含んでいる。商品の第一の姿態変換は、販売であると同時に購買であるから、この部分過程は、同時に自立的な過程である。購買者は商品を得ており、販売者は貨幣を、すなわち、それが再び市場に現われるのが早いか遅いかを問わず流通可能な形態を維持する。商品を、得ている。他の人が購買しないでは、だれも販売することはできない。だが誰も、彼自身がすでに販売したからとて、すぐに購置する必要はない。流通は、まさに、生産物交換の場合に見られる自分の労働生産物の譲り受けとの間の直接的同一性を販売と購買との対立に分裂させることによつて、生産物交換の時間的・場所的・および個人的な諸限界を打破する。自立的に相互に対応しあつて諸過程の内的統一は、外的諸対立において運動するといふことを意味する。内的に非自立的——というわけは相互に補足しあつてからである——なものとしての自立的な自立化が特定の点まで進行すると、統一が、恐慌を通して暴力的に自己を主張する。商品に内在的な使用価値と価値との対立、私的労働が同時に社会的な労働として現われねばならぬという対立、特殊の、具体的労働が同時に抽象的、一般的労働としての意義をもつという対立、——こうした内在的矛盾は、商品の姿態変換上の諸対立において、その発展せる運動諸形態を受けとる。だから、これらの形態は、恐慌の可能性を、とはいえただ可能性のみを、含む。この可能性の現実性への発展は、単純な商品流通の立場からはまだ全く実在しないところの、諸関係の「全範囲を要求する。」(『資本論』第一巻 P一八八—九)

これが恐慌の可能性の第一の形態である。ついで第二の形態。

「支払手段としての貨幣の機能は一の無媒介的矛盾を含んでいる。諸支払が決済される限りでは、その貨幣はただ観念的のもの、計算貨幣または価値の尺度として機能する。現実的な支払が行われねばならぬ限りでは、それは流通手段として——質料交換のたゞ暫時のかつ媒介的な形態として——登場するのではなく、社会的労働の個別的化身・交換価値の自立的定在・絶対的商品・として登場するのである。こ

生産的消費のためであるか個人的消費のためであるかは問わない。だが、もし人あつて(スターリニスト諸君)君たちのことですよ、」労働者階級は彼等自身の生産物の余りに僅かな部分を受けとるのだが、彼等がより大きな分前を受けとり従つてその労働が増加すれば窮状は救われるだろうと語ることに、右の同義反復により深い論拠の印象を与えようとするならば、こう言えよ、——「恐慌はいつでもまさか、労働が一般的に昂騰して労働者階級が年生産物のうち消費にあてられる部分のより大きな分前を現実を受けとる時期によつて準備される、と。かかる時期は——健全で、単純な(!)常識をもつこれらの騎士たちの観点からすれば——逆に恐慌を遠ざけるはずである。」(『資本論』第一巻 P四一四)

さらに、エンゲルスはここにわざわざ注を付してこう書いている。

「ロートベルグスの恐慌理論(過少消費説)を万にも奉信する人々のための注意(同前)と。」

以上のようなスターリニズムによるエンゲルス、レーニンの歪曲を断固として退けて、反デューリング論、経済的ロマン主義の特徴づけによつて理解しななければならぬ。その簡単な説明を把握しなければならぬ。

「(一) 恐慌の可能性と現実性

(二) 述べた考えにかつて、マルクスの言及をあとづけてみよう。

まず「資本論」第一巻第三章貨幣または商品流通で、恐慌の可能性が語られる。

「販売と購買とは、二人の対極的に対立する人物——商品所有者と貨幣所有者と——の間の相互的連関としては、一つの同一的行為である。それらは同じ人物の所作としては、二つの対極的に対立する行為を形成する。だから、販売と購買との同一性なるものは、つぎのことを、——もし、流通という練金術的坩堝に投げ入れられた商品が貨幣

の矛盾は、貨幣恐慌と呼ばれる生産および商業恐慌の時期において、爆発する。貨幣恐慌は、諸支払の過程的連鎖とそれらの決済の人為的体制とが充分に発達している場合にのみ起る。この機構のより一般的諸攪乱につれて、——それらの攪乱がどうして生ずるかを問わず、——貨幣は、突然に且つ媒介なしに、計算貨幣というただ観念的な姿態から、硬貨に急変する。それは卑俗な諸商品によつては代えられないものとなる。商品の使用価値は無価値となり、そして商品の価値は、それ自身の価値形態と較べて見る影もなくなくなる。つい先ほどまで、ブルジョアは好景気有頂点になつて偉そうに云つていた——貨幣は空の幻影だ、商品のみが貨幣だ、と。ところが今や、貨幣のみが商品だ、——というのが世界市場の声である。鹿が清水を求めて啼くように、世界市場の魂は唯一の富たる貨幣を求めて叫ぶ。恐慌においては、商品とその価値姿態たる貨幣との対立が、絶対的矛盾にまで高められる。だからこの場合には、貨幣の現象形態はまったく問題にならない。支払が金でなされる筈であろうと、信用貨幣——たとえば銀行券——でなされる筈であろうと、貨幣飢饉は依然として同じことである。」(同前「第三章第三節貨幣 (二) 支払手段」P一四三—四)

「これらは恐慌の形式的な可能性である。第一の可能性は第二の可能性がなくとも可能である——すなわち、恐慌は、信用がなくとも、貨幣が支払手段として機能するといふことがなくとも、可能である。しかし、第二の可能性は、第一の可能性がなければ、すなわち購買と販売とが分離するといふことがなければ、不可能である。しかし、第一の場合には、恐慌は、単に商品が売れないために生ずるのであって、この場合には、恐慌は、単に商品が売れないことからただけではなく、この一定期間内におけるこの特定商品の販売を基礎とする諸支払の一系列全体が実現されないことから発生するのであり、またそのことからこの恐慌の性格が導き出されるのである。こうして、恐慌は購買と販売とが分離するために現われるのだとすれば、それは貨幣が発展して貨幣恐慌になるのであって、恐慌のこの第二の形態は、第一の形態が現われたときに、すでにもう自明のことなのである。したがって、恐慌の一般的可能性がなぜ現実性となるかについての研究においては、すなわち恐慌の諸条件の研究においては、支払手段としての貨幣の発展から生

ずる恐慌の形態について心を煩わすことは、まったくよいなことである。」(『剰余価値学説史』P六九五〜六)

「商品の交換の場合には恐慌の可能性は次のように表わされる」(同前P六八六)

「すなわち、第一の形態における恐慌は商品の交換そのものであり、購買と販売との分離である。第二の形態における恐慌は、支払手段としての貨幣の機能である。ここでは貨幣は、二つの違った、時間的に引き離された時機に、二つの違った機能を演ずる。第二の形態は第一の形態よりも、具体的であるといえ、この両方の形態はともにもだまされた抽象的である。」(同前P六八九)

「商品流通において発展し、貨幣流通において更に発展する諸矛盾——同時に恐慌の諸可能性——はおのずから資本において再生産される。というのは、実際には、資本の基礎のうえにのみ、発達した商品流通と貨幣流通とは行なわれるのだからである。」(同前P六九二〜三)

「……総商品資本およびそれを構成している各個の商品は、W—G—Wという過程を、すなわち商品の変態を、通過しなければならぬ。したがって、この形態に含まれている恐慌の一般的可能性——購買と販売との分離——は、資本が商品でもあるかぎり、そして商品以外のものでないかぎり、資本の運動の中にも含まれている。そのうえ、諸商品の変態の相互の関連から、一方の商品が貨幣に転化されるのは他方の商品が貨幣の形態から商品に再転化されるからである、ということが明らかにされる。したがって、購買と販売との分離はここではさらに進んで次のように現われる。すなわち、一方の資本の商品形態から貨幣形態への転化は、他方の資本の貨幣形態から商品形態への再転化に対応しなければならず、一方の資本の第一の変態は他方の資本の第二の変態に、一方の資本の生産過程からの離脱は他方の資本の生産過程への復帰に、対応しなければならぬ、というように。別々の資本の再生産過程または流通過程のこのようなからみ合いともつれ合いは、分業によって一方で必然的であり、他方では偶然的である。こうしてすでに恐慌の内容規定は拡大されている。」(同前P六九〇)

「しかし第二に、支払手段としての貨幣の形態から生ずる恐慌の可能性は、資本の変態の過程それ自体のなかに与え

られており、しかも二重に与えられている。すなわち、貨幣が流通手段としての役割を演ずるかぎりにおいて——購買と販売との分離。次に貨幣が支払手段としての役割を演ずるかぎりにおいて。」(同前P六九四)

「……恐慌のこの両方の抽象的形態は現実にそのものとして現われな

いとすれば、恐慌は存在しない。購買と販売とが相互に分離し矛盾するということがなければ、あるいはまた支払手段としての貨幣に含まれている諸矛盾が現われるということがなければ、つまり、恐慌が同時に単純な形態——購買と販売との矛盾、支払手段としての貨幣の矛盾——で現われてくるということがなければ、恐慌は存在しえないのである。しかし、これはまた単なる諸形態——恐慌の一般的な諸可能性——にすぎず、したがってまた、現実的恐慌の、諸形態、抽象的な諸形態にすぎない。これらの形態では、恐慌の定在は、その最も単純な形態のものとして現われ、また、この形態そのものが恐慌の最も単純な内容であるかぎり、その最も単純な内容のものとして現われる。」(同前P六九二)

「恐慌の一般的な可能性とは、資本の形式的な変態そのものであり、購買と販売との時間および空間的分離である。しかし、このことは、けつして恐慌の原因ではない。なぜなら、それは、恐慌の最も一般的な形態、したがって恐慌の最も一般的な表現における恐慌そのもの、以外のなにもでもないからである。だが、恐慌の抽象的形態が恐慌の原因である、などということはできない。だれでも恐慌の原因を問う場合には、その人は、まさに、なぜ恐慌の抽象的な形態、恐慌の可能性の形態が、可能性から現実性になるのか、を知ろうとしているのである。」(同前P六九六)

「しかし、なによりによって恐慌のこの可能性が現実の恐慌になるのかということは、その形態そのものなかに含まれていない。そのなかに含まれているのは、ただ、恐慌のための形態がそこにある、ということだけである。」(同前P六八九)

さて、この資本の運動を考えた場合の恐慌の諸契機は、『資本論』第二巻

能性について言えば、資本の場合には、すでに、この可能性の現実化のためのはるかにより現実的な基礎が現われている。たとえば、織物業者が不変資本全体にたいして支払をしなければならず、この不変資本の諸要素は、紡績業者、製材業者、亜麻栽培業者、機械製造業者、製鉄業者、石炭生産者などから供給されたものであるとしよう。これらの者の生産する不変資本が、不変資本の生産に入っていくだけで、最終の商品すなわち織物にははいつて行かないものであるかぎりでは、彼らは資本の交換によって自分たちの生産条件を補填し合うのである。ところで、織物業者はその織物を一〇〇〇ポンドで商人に売すが、しかし代金は手形で受け取り、したがって貨幣は支払手段としての役割を演ずるとしよう。織物業者は彼としては、手形を銀行に売り、それによって銀行で自分の債務を清算するか、あるいはまた銀行が彼のために手形を割引く。亜麻栽培業者は紡績業者に手形と引き替えに販売し、紡績業者は織物業者に、同じく機械製造業者は織物業者に、同じく製鉄業者と製材業者は機械製造業者に、同じく石炭業者は紡績業者、織物業者、機械製造業者、製鉄業者、製材業者に販売したとしよう。その他に製鉄業者、石炭業者、製材業者、亜麻栽培業者も相互に手形で支払をしたとしよう。いま商人が支払をしないとするれば、織物業者は自分の手形を銀行に振り込むことはできない。亜麻栽培業者は紡績業者から手形を受け取っており、機械製造業者は織物業者と紡績業者から手形を受け取っている。織物業者が支払うことができないのだから、紡績業者も支払うことができない。両者とも機械製造業者に支払うことができないし、この機械製造業者は製鉄業者、製材業者、石炭業者に支払うことができない。そしてまた、これらすべてのものは、彼らの商品の価値を実現することができないから、不変資本を補填すべき価値部分を補填することもできない。こうして一般的恐慌が起こる。これはまったく、支払手段としての貨幣のところでも説明した恐慌の可能性以外のなにもでもないものであるが、しかし、ここでは、つまり資本主義的生産においては、われわれは、すでに、へ恐慌の可能性が現実性発展しうるところの、交互的な債権と債務との関連、購買と販売との関連を見出すのである。」(同前P六九〇〜一)

だから資本においても、

「恐慌の一般的可能性は、資本の変態の過程それ自体のなかに与え

で分析されたいわゆる再生産表式の局面でより具体的にあらわれてくる。二大生産部門間の、さらにはその内部での諸生産部門間の発展の不均衡、対立等々の条件である。

この点についてはここで深くたらいらない。いままで述べたところからかなり容易に理解されうるであろうから。くわしくは、『資本論』第二巻第三篇社会的総資本の再生産と流通、のところ、そして初期レーニンの『市場問題に就いて』その他を参照すべきであろう。そこからは、一社会的総資本が再生産ないし拡大再生産されていくときに、いかにそれが障害にあり、攪乱されるかを読みとることができよう。

ここでは、この点に関連して恐慌の周期性についてふれておこう。われわれがすでに述べておいたように、産業の循環があり、それが一つの周期性をもつことはたしかにせよ、その周期性を具体的に、一般化して析出することはできない、ということであった。何年周期ということは、一般的にはいえない、ということでは大事な点である。それは、現実の具体に即してみなければならぬことであり、それ以外ではないのである。

われわれが把握しうることは、マルクスにしたがって次のようになる。一言でいえば、周期性は、固定資本の回転と密接な関係がある、ということ、これである。

「労働手段の大部分は産業の進歩によって絶えず変革される。だからそれは、最初の形態ではなく、変革された形態で補填される。一方では、固定資本——一定の現物形態で投下されており、その形態のまま一定の平均寿命を生きぬかなければならぬ——が大量であることは、新たな機械などが漸時的にしか採用されない原因をなし、したがって、改良された労働手段の急速な一般的採用を妨げる一障害をなす。他方では競争戦は、殊に決定的変革に際しては、旧式労働手段をその自然的死滅前に新式のものに代えることを余儀なくされる。より大きな社会的規模での経営設備にかかる時ならぬ更新を強要するのは、主として破局——恐慌である。」(『資本論』第二巻P一六四〜五)

「……資本制の生産様式の発展につれて充用固定資本の価値量および寿命が発展へ増大するの比例して、産業、および各特殊の投資における過剰資本の生命が発展へ延長して多年——たとえば平均して十年——にわたるものとなる。一方では固定資本の発展がこの生命を延長する。れば、他方ではこの生命は、やはり資本制の生産様式

の発展につれてたえず増大する生産手段のたえずなる変革によって短縮される。だから、資本制生産様式の発展につれて、生産手段の変化、および、生産手段が物理的に死滅するよりもずっと以前に道徳的磨損によってたえず填補される必要もまた、発展する。大工業の最も決定的な諸部門にとっては、この生命循環は今日では平均して十年にわたるものと看なされる。だが、ここでは一定の年数が問題ではない。つぎのことだけは明らかである。——資本がその固定的成分によって緊縛されている連結的諸回転からなる幾年にもわたるこの循環により、周期的恐慌、すなわち、事業が弛緩・中位の活気・ごったがえし・恐慌の継起的諸期間を通過する周期的恐慌の物質的な基礎が生じる。なるほど、資本の投下期間は極めて様々で重なりあっている。とはいえ恐慌はつねに、——社会全体を考察するならば——多かれ少かれ、次の回転循環のための新たな物質的基礎をなす。」(同前P一八〇)

「発作的な諸変動によってもたらされる生産の膨張は、その突然の収縮の根本原因である。収縮はもちろん次に膨張をひき起こすのであるが、出発点たる生産の法外な膨張は、資本の意のままになる予備軍なしに、すなわち人口の自然的増加とかかわりのない労働者の増加なしに、ありえようか？ この増加は、労働者を毎日街頭に投げだすというきわめて簡単な過程によって、すなわち、労働をより生産的にすることによって労働にたいする需要を減らすという方法を適用することによって、得られる。かくしてたえず繰り返される、労働者階級の一部の、これと同数の半失業ないし完全失業の働き手への転化が、近代産業の運動に、その典型的な形態を押し印する。天体が、ひとたびその軌道に投げ入れられると、無限にこの軌道を描くのとちょうど同じように、社会的生産も、いったんこの膨張と収縮の交互的運動に投げ込まれば、機械的必然性をもってこの運動を繰り返す。結果はつきには原因となるのであって、はじめのうちは不規則で、一見して偶然的な有為転変は、しだいに正常な周期性の形態をとる。だが、その継起的諸局面が数年を包括し、しかもそれがつねに一般的恐慌——これは一つの循環の終りでもあれば他の循環の出発点でもある——に到達するような回帰的循環が開始するのは、機械工業が十分深く根をはって、国民的生産全体に優勢な影響を及ぼすようになった時、機械工業のおかげで対外商業が国内商業を追いこしはじめた時、世界市場

という前提のもとで事項が展開されており、(2)で述べたように信用や競争について当初のプランの範囲をこえてあつたようではあるにしても、やはり一定の限界内なのである。

具体的には、第三篇第十五章法則の内的諸矛盾の開展、および第五篇利子と企業者利得への利潤の分裂、利子生み資本、のところが中心となつてゐる。

「……総資本の増殖率たる利潤率が資本制生産の刺激である(資本の増殖が資本制生産の唯一の目的である)かぎりでは、利潤率の低落は、新たな自立的資本の形成を緩慢にし、かくして資本制生産過程の發展を脅威するかに見える。それは過剰生産、投機、恐慌、過剰資本ならびに過剰人口を助長する。」(『資本論』第三卷「第三篇利潤率の傾向的低落の法則」第十五章法則の内的諸矛盾の開展 第一説概説」P二六九(二七〇))

「直接的搾取の条件とその表現の条件とは同一ではない。搾取とその表現とは、時間的および場所的のばかりでなく概念的にも別のものである。前者は社会的生産力によってのみ制限され、後者は、相異なる生産部門間の比率性により、また社会的消費力によって制限されている。だが社会的消費力は、絶対的消費力によつても絶対的消費力によつても規定されえないで、敵対的な分配諸関係——これは社会の大衆の消費を、多かれ少かれ狭い限界内でのみ変動する最少限に縮小する——の基礎としての消費力によつて規定されている。それはさらに、蓄積衝動、すなわち、資本を増大し剰余価値生産の規模を拡大しようとする衝動によつて制限されている。この衝動は資本制生産にとつての衝動であつて、生産方法そのものにおける絶えざる革命、これと絶えず結びついている現存資本の価値減少、一般競争戦、および、単に逃亡から免れて存続するための手段としての生産の改良およびその規模拡張の必要、によつて与えられたものである。したがつて市場がたえず拡張されねばならぬが、その結果、市場の諸関連とこれを規制する諸条件とは、ますます、生産者から独立した自然法則の姿態をとるようになり、ますます統御できなくなる。内部的矛盾は、外部的生産面の拡張によつて均衡をえようとする。だが、生産力は、發展すればするほど、消費諸関係によつてたつた狭き基礎とますます矛盾するようになる。この矛盾にみちた基礎では、資本の過多が人口の累

が新世界で、アジアやオーストラリアで、つきつきに広大な地域を併合した時、さいごに、あいたたか工業諸国が十分多数になつた時、このような時以降である。いままでのところ、この循環の周期の長さは一〇年から十一年であるが、この数字を不変のものともみなすべき理由は何もない。反対に、われわれがこれまで展開してきた資本主義的生産の諸法則からは、それは可変であること、そして循環の周期ははたして短縮されるであろうことが結論されねばならない。」(フランス語版『資本論』第一卷P二八〇、林直道編訳「マルクス資本論フランス語版」大月書店版P一〇七(八))

マルクスのいつている「周期短縮傾向」については一言述べておかねばならないであろう。

すでに引用し、解説してきたところから理解されうと思ひが、一般的に述べた場合、周期の短縮という傾向よりは、その不変性という点に重点のあることは明白である。マルクスは恐慌をあくまで資本制生産の諸矛盾の総括としてとらえているのだからである。ただ、マルクスの時代にその具体的分析において、短縮傾向があるということであり、それが現代、すなわち帝国主義の時代にただちにあらはれようとすることはできないのである。この点について、くわしく展開することは、ここではできない。帝国主義—現代過渡期世界の部分で展開しなければならぬ。ここではつきりさせておくべきことは、周期性の存在と、だが、その具体的な年数は原理的に述べないということ、これである。

さて、ついで『資本論』第三巻でふれられている恐慌に関する問題である。ここでは、マルクスの『経済学批判』全体系中の位置からして、なお、たとえば、

「恐慌が商品の価値変動とは一致しない価格変動および価値革命から生ずるかぎりでは、それは、当然、資本一般の考察のところ(前項(2)のマルクスからクーゲルマン宛手紙参照)で説明することはできない。資本一般の考察のところでは、価格は商品の価値と一致していることが前提されているのである。」(『剰余価値学説史』P六九六)

「恐慌の一般的な諸条件は、それらが価格の動揺(これがいま信用制度と結びついているといふこと)——価格変動とは違つたものとしてのそれ——にはかかわりがないかぎりでは、資本主義的生産の一般的な諸条件から説明されなければならない。」(同前)

進的過多と結びついているのは全く何らの矛盾でもない。けれど、両者を結合すれば生産される剰余価値の分量が増大するだらうとはいへ、それと同時にこの剰余価値の生産の条件と表現の条件との矛盾が増大するからである。」(同前P二七二(三))

「……恐慌は、つねに、現存する諸矛盾の一時的な暴力的解決にすぎず、攪乱された均衡を瞬間的に建設する暴力的爆発にすぎない。矛盾は、まったく一般的に表現すれば次の点、すなわち、資本制生産様式は生産諸力の絶対的發展への傾向を含む……が、他面ではそれは、実存する資本価値の維持およびその最高度の増殖(……)を目的とする、という点にある。資本制的生産様式の独自の性格は、資本価値の最大可能な増殖の手段としての現存資本価値に基づいている。その目的達成の方法は、利潤率の減少、現存資本の価値減少、および、すでに生産された生産諸力を犠牲としての労働の生産諸力の發展、を含む。現存資本の周期的な価値減少は、——これは、利潤率の低落を阻止し、新資本の形成による資本価値の蓄積を促進するための、資本制的生産様式に内在する一手段であるが、——その内部で資本の流通および再生産過程が行われるべき与えられた諸関係を攪乱し、したがつて、生産過程の突然な諸停滞および恐慌をとまらう。」(同前「第二節 生産拡張と価値増殖との衝突」P二七七(八))

「利潤率の低落につれて、個々の資本家の手で労働の生産的充用に必要な——労働の搾取一般のために必要であり、また、充用労働時間を商品生産に必要な労働時間たらしめ、商品生産に社会的に必要な労働時間の平均を超過させないために必要な——資本の最少限が増大する。それと同時に集積が増大する。けれど、特定の限界を超えれば、小利潤率の大資本は大利潤率の小資本よりも急速に蓄積するからである。この漸増的集積はまた、特定の高度に達すれば、ふたたび、新たな利潤率低落を招来する。かようにして、小さい分散した諸資本の大量は冒険の道余儀なくされる、——投機、信用眩惑、恐慌。いわゆる資本過多なるものは、本質的にはつねに、利潤率の低落を自己の分量によつて償えないような資本——新たに形成されつつある新生小資本はつねにそうである——の過多、または、自分自身では独自の行動をとりえないこれらの資本を信用の形態で大企業部門の指導者に委ねるような過多、に連関する。この資本過多は、相対的過剰人口を

生ずるのと同じ事情から生じ、したがって、相対的過剰人口を補足する一現象である、といつても、両者は相対立する極に立つ——失業資本は一方にあり、失業労働者人口は他方にあり——ののだが。」(同前「第三節人口過剰のもとでの資本過剰」P二七九)

「資本制の生産の三つの主要事象。/(一)、少数者の手における生産手段の集積。かようにして生産手段は、直接的労働者の所有として現象しえなくなり、その反対に生産の社会的力能に転化する、——最初には資本家の私的所有として現象するといえ。資本家たちはブルジョア社会の受託者であるが、この受託の全果実を自分のポケットに入れる。/(二)、社会的労働としての、労働そのものの組織、——協業、分業、および、労働の自然科学との結合、によって。/どちらの側からみても資本制の生産様式は、私的所有と私的労働とを——対立的形態においてだといえ——止揚する。/(三)、世界市場の成立。/資本制の生産の内部で発展する、人口に比しての膨大な生産力は、また、同じ比率ではないが人口よりも遙かに急速に増大する資本価値(;)の増大は、増大する富に比してますます狭溢化する基礎——右の膨大な生産力が作用するための基礎——と矛盾し、また、右の膨張する資本の増殖諸関係と矛盾する。だから恐慌が生ずる。」(同前「第四節補遺」P二九六)

さらに「第五篇 利子生み資本」において数多く恐慌について言及がなされており、しかも、かなり具体的に、形態的になされている。だが、それゆえにそれらはそれで別個に分析されねばならないものであり、独立の論稿を必要とする。それは『資本論』第三巻の編集者であるエンゲルスの次の言及によっている。

「主たる困難をきたしたのは、全巻中の込み入った対象を取扱う第五篇である。また、まさにこの第五篇のところでマルクスは仕上中に前述の重い発病の一つに襲われたのである。だからここには、出来上った草稿はなく、仕上の輪郭たるべき梗概さえもなく、ただ、一度ならず、注意書きや評言や抜粋の形で資料やの無秩序な推積に終る仕上げかけたものがあるだけである。私は最初、第一篇ではどうにか成功したように、遺漏を補い示唆にとどまる断片を仕上げることによってこの篇を完成して、この篇が著者の書こうと意図したすべてを少くとも近似的に提供するようにしようとした。これを少くとも三たび試

との運動に集中され、再び種々雑多の補遺的なものをもって終つていく。『先資本制的なるもの』(第三十六巻)はこれに反し完全に仕上げられていた。『混乱』以下の、そしてそれ以前の箇所にとり入れられなかったかぎりでの、これら一切の材料から、私は第三十三〜三十五章をまとめた。もちろんこれは、連絡をつけるための私自身の多大の挿入なしには行われなかった。この挿入が単に形式的なものでないかぎりでは、私の書いたものとして明示してある。かようにして遂に私は、とにかく問題に関係ある著者の言説のすべてを、本文にとり入れることに成功した。抜粋の一小部分……以外には、とり落されたものは何もない。』(『資本論』第三巻「序言」P(6)~(8))

(七) 恐慌論についてのものも誤つた所説の批判

第四項の解説においてすでにスターリニズム恐慌論を批判しておいた。一言でいえばそれは、エンゲルスの定式である、生産の社会的性格と取得の私的性格との矛盾の誤つた理解からする過少消費説への転落であった。議論の一方の旗頭——スターリニズムの批判がすすんでいるので、ここでは、他方の旗頭——宇野恐慌論を批判しておく。

① 宇野の問題意識と宇野恐慌論の内容

遊部久蔵編著『資本論研究史』で、「……恐慌論の体系化への動きのなかで最も注目すべき」(ミネルヴァ書房復刻版P一〇八)もの、「戦後の恐慌論研究史における一面期をなすもの」と評され、事実、大きな影響力と独自の位置をマルクス経済学界(?)で占めた宇野恐慌論とはいつたいなんであるか。それは、マルクス経済学批判体系を修正し、換骨奪胎し、独自のブルジョア経済学体系||宇野経済学体系をつくりあげるさいのいわば画竜点睛をなすものであった。『資本論』からまことにたんに「毒」と「骨」とをとりさり、宇野体系の根幹||原理論(実は、体系とはいえ、この原理論だけが内容をもって現存しているものであって、あとは単なる見取図や枠組みといったものである)をつくりあげたとき、まさしくこの恐慌論によってはじめて、原理論は、論として、宇野お望みの閉じた系となったのである。以下、ややくわしくみていこう。

宇野はそもそもその出発からして、『資本論』の不純なところをとり

みだが、そのたびに失敗したのであって、そのために失った時間こそは遅延の主因の一つである。ついに私は、このやり方ではためなことを知った。このやり方ではこの領域の膨大な全文献を渉猟せねばならぬであろうが、しかも最後には、マルクスの著書でもないものを作りあげることになるであろう。私に残された途は、ほどよい程度に手早く切りあげ、現存するもののできるかぎり整理するだけにして、どうしても必要な補足だけにとどめておいた。……/個々の章について言えば、第二章(第二章はだいたい仕上げられていた。第二章はおよび第六章では、引用資料の選別と他の箇所にあった材料の挿入が必要であった。第七章および第九章は殆んど全く原稿に従って作られたが、第八章ではどこどころ配列を変えねばならなかった。ところが第三十章から本来の困難が始まった。この章からは、引用文からなる材料ばかりでなく、たえず挿入文・岐論などによって中断されて他の箇所——しばしば全く付随的に——続けられている思想経路をも適当に整理することが必要であった。かくして第三十章は置換えや削除——この削除されたものは他の箇所でも使った——によって出来上がった。第三十章は再びもつと連絡よく仕上げられていた。ところがその次に原稿では『混乱』と題する長い一篇があるが、これは、一八四八年および一八五七年の恐慌に関する議事報告書の純粹な抜粋から成立して、そこには二三人の実業家や経済学的著述家の、殊に貨幣および資本・金流出・過渡投資などに関する陳述がまとめられ、ところどころには諸諷刺的な短評が加えられている。ここでは、質問者によってあれ、応答者によってあれ、貨幣と資本との関係に関する当時行われた殆んど一切の見解が代表されているのであって、マルクスは、貨幣市場では何が貨幣であり何が資本であるかに関することに暴露された『混乱』を批判的諷刺的に取扱おうとしたのである。私はいろいろ試みたのち、この章を組立てるのは不可能なことを悟った。その材料、殊にマルクスによって批評されているものは、それと関連のある箇所でも利用されている。/その次ぎには、私が第三章にとり入れたものが可なり秩序だつて続いているが、その次ぎにはまた、この篇でふれられたありとあらゆる対象に関する議事報告書からの新しい一束の抜粋が、著者の長短さまざまな評言をまじえて続いている。終りの方では、抜粋や批評はますます貨幣金属と為替相場

ぞいて純化する(つまり、革命的なところをとり、その修正主義化||ブルジョア化する)ことをめざし、宇野の頭の中だけにのみ存在する原理論体系をつくらうとするのであるから、当然にも、資本制生産に固有な現象としての恐慌、そしてそのもつともトータルな諸矛盾の爆発たる恐慌を、彼の原理論中で原理的根拠を説かねばならないことになる。

「……恐慌論がかくの如き景気変動論にすり替えられるということは、いい換えれば原理論が現象論に、しかも決して正しく展開されることなき現象論に圧倒せられることに他ならないのであって、価値論の如き基礎理論までが価格論に埋没せられ、はては解消せられるという傾向をさえ免れない。実際またいかに精密に考察せられ、正しく展開された価値論によって原理論が体系づけられたにしても、恐慌の必然性が論証せられないようでは、そのいわゆる鼎の軽重を問われるのも止むを得ないであろう。』(『恐慌論』はしがき「若波書店版P一〇二」)

「恐慌論もまた以上述べてきたような経済学の研究方法(宇野のいわゆる原理論——段階論——現状分析の三段階論)を明らかにした上で展開されないと、無用な混乱を免れない。従来、多くの恐慌論はこの点を明確にしていなかったのでそれは特に重要である。いい換えれば恐慌現象もまた経済学的には先ず第一に資本主義的経済に必然的なものとして原理論的に説明されなければならない。個々の具体的恐慌の過程は、この原理論による規定なくしては、決してその基本的なる面と共に、その個別的なる面を明らかにされることにはならないのである。」(同前P二二~二三)

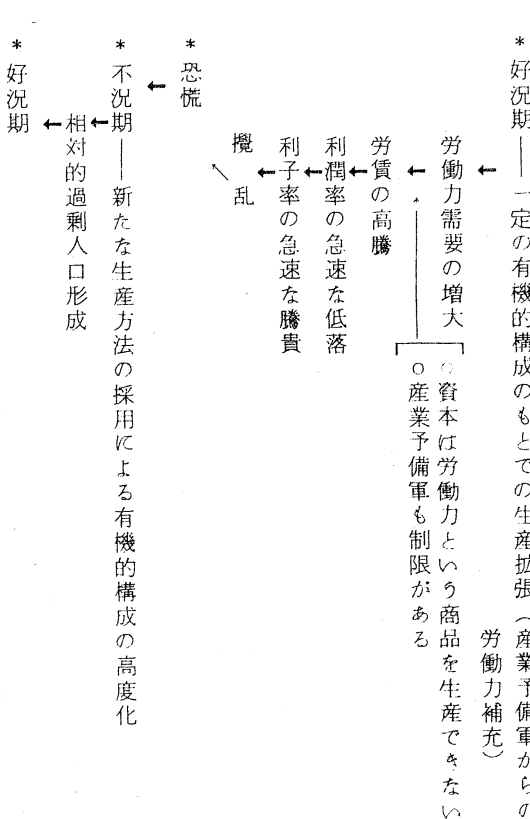
われわれが(第四項の解説)で力説しておいたように、恐慌現象を「ブルジョア社会のあらゆる矛盾の現実的総括および暴力的調整」としてつかみ、だから「この恐慌において総括される個々の諸契機」を、「ブルジョア経済のどの部分にも現われ発展させ」るものとしてあきらかにしなればならないにもかかわらず、勝手に「くりだした方法にしたがって、恐慌を原理的にもあきらかにしえなければならぬ」とするこのような宇野の見方は、実は、宇野独自の価値論に規定されているのであって、だから、恐慌論を原理論的に説かないかぎり、価値論が、無効化するという危惧をいっているのがある。この点は、後に論じるが、ともかく宇野は、恐慌論を原理論中、価値論と表裏一体をなすもの、それを裏からささえるものと考えている。そしてこれを媒介するものが、あるいは、根拠

づけるものが、労働力商品化論なのである。

すなわち宇野は、労働力商品化論を「発見」(?)したことによって、彼らの体系を、その中心を、原理論を構築しえたのであるが、だからこそ恐慌をもそこから「原理的」に説くということになつてゐるのである。

「労働力の商品化は、資本主義社会の根本的な基礎をなすものであるが、しかしまた元来商品として生産されたものではないものが商品化してゐるのである。その根本的弱点をなしてゐる。恐慌現象が資本主義社会の根本的矛盾の発現として、そしてまた同時にその現実的解決をなすといふことは、この労働力の商品化にその根拠を有してゐるのである。……恐慌論は、先に述べた典型的恐慌現象を基礎にして、資本の蓄積の増進と共に、資本にとつて一定の限度をもつた条件の下に商品化しうる労働力を中心として、周期的にその矛盾が爆発し、またその矛盾が解決されるといふ関係がいかにして必然的に生ずるかを明らかにするものとして、経済学の原理論のいわば結論をなすのである。」(同前P七一)

以上述べたような問題意識にたち、労働力商品化論によつて展開される宇野の恐慌論は、次のように図式化される。



れるのであつて、価値法則によつて直接決定されるものではない。すなわち資本主義社会は、価値法則を原理としながら、この法則をもつてその価値を直接には規定しえない労働力商品を中心としてゐるのである。」「宇野弘蔵著作集」第四卷P四一七)

傍線を引いた部分に注目してほしい。こういつてゐる。賃金↓生活資料総額↓労働力価値」と。恐慌に媒介される産業循環によつて労働力価値がさがる、といつてゐるのだ。なんとこの転倒だらう。なんとブルジョア的な見方であらう。次の引用は、よりこのブルジョア性、俗物性の精華である。

「価値法則に集中的に表現される商品経済の法則は、いわば社会的に無規律性を不断に止揚しつつ実現される規律性といつてよいのであるが、この商品経済を全面的に確立する労働力商品だけに、この不況の止揚がないのである。……労働力商品の場合、資本によつて直接生産せられない商品として、他の一切の商品と異なるのである。商品経済は、資本家的商品経済として、その法則性をも全面的に展開するのであるが、それは労働力商品という、他の商品のようにその価格の動きを不断に価値法則によつて是正されるとはいえない、特殊の商品に基礎づけられて、始めて確立されるのである。もともと労働力商品が資本によつて直接に生産されないといふことは、労働によつても直接には生産されないといふことによるのであつて、その商品化は無理なのである。その価値を決定する、生活資料の生産に要する労働時間にしても、生活資料の質と量とが、生理的最低限はあるにしても、必ずしも一定してゐないのであつて、実際は一定の期間にわたつて上下する労働賃金によつて平均的に与えられるものといふ他はない。恐慌に媒介される好況と不況との産業循環の過程が、労働者の一定の生活水準を形成し、それによつて一定の生産力のもとに展開される労働者と資本家との間の生産関係としての剰余価値率は決定されるのである。……労働力商品にあっては、一定の期間をとつて、その価値規定を考察しなければならぬ。そこでは価値から離れた価格の変動も一定の期間は訂正されないで昂進する。むしろかかる価値から離れた価格自身も、価値を規定する要因となるのである。」(「経済学方法論」東大出版会版P二六二～三)

② 宇野恐慌論の核心——労働力価値規定の批判

上記の図式がなぜ、彼にとつて原理論的にあきらかにされるのか。ここに宇野恐慌論のポイントはある。というのも、この図式自体は、宇野独自の見解(とりわけ、有機的構成の変化についての見解など)をおりこんでいるにしても、決して宇野お望みの原理論の内実はなく、単なる現象記述でしかないからである。だからこの点であれこれと宇野を攻撃しても、その恐慌論は破綻されぬ。問題はこの図式の外にある。それはなにか。一言でいへば、労働力商品化論——価値論である。宇野は次のようにいう。

「資本家的商品経済における労働力商品の地位と同様に、経済学原理論における恐慌論の地位は、価値論のような積極的意義を有するものとはいえない。しかしそれは価値法則の全面的展開を支える軸をなす労働力商品化の基礎を規定するものである。産業循環としてあらわれる資本の再生産過程を説明する恐慌論は、労働力商品の価値の実質的内容を規定するものとして、価値法則のいわば裏打ちをなすのである。」(「宇野弘蔵著作集」第四卷P四一七)

……資本主義社会に特有なる人口法則こそ資本主義社会における資本家と労働者との関係を確保するものである。この人口法則の展開を明らかにする恐慌論は、かくして価値法則を明らかにする価値論を、いわば内部から支えているものといつてよい。恐慌論を欠く限り経済学の原理論は、その体系を完成するものとはいえないのである。」(同前P四一七～八)

宇野はなにかしら深遠なことをいつてゐるように見えるが、次のようなことをいひたいのである。つまり、

「資本主義社会において、……唯一の単純なる商品を生じ、資本によつては直接に生産されない商品である。」(「価値論」P七〇)

労働力商品はいつたいいかに価値規定されるか(そもそもかかる疑問そのものが、宇野の独得な価値論によつてゐるのであるが、それは後述)、という疑問をなし、これにこうこたえるのである。

……労働力商品の価値規定は、その再生産に要する生活資料の生産に要する労働時間によつて決定されるにしても、その生活資料の「総額」自身は資本の価値増殖によつて制限せられる賃金によつて決定さ

価格変動によつて価値がさがるといつてゐるのだ。価値論を価格変動論に解消してゐるのだ。先の「恐慌論」からの引用で、宇野は、恐慌論が景気変動論に解消される危険性とか何とかいつてゐるが、実は宇野は、原理論全体を景気変動論に、単なる現象論に解消してゐるのである。

労働力の価値規定に特殊な性格があるのは自明のことであるが、しかし、宇野のような疑問を提出することはできない。マルクスは次のように述べてゐる。

「労働力の価値は、他の商品の価値と等しく、この独自の財貨の生産したがつてまた再生産に必要な労働時間によつて規定されている。それが価値たるかぎり、労働力そのものは、それに対象化された社会的平均労働の一定分量のみを代表する。労働力は、生きた個人の資質としてのみ実存する。だから労働力の生産は、生きた個人の生存を前提とする。個人の生存が与えられておれば、労働力の生産とは、個人自身の再生産または維持のことである。自分を維持するために、生きた個人は、ある特定額の生活手段を必要とする。だから、労働力の生産に必要な労働時間は、この生産手段の生産に必要な労働時間に帰着する。すなわち労働力の価値は、労働力の所有者の維持に必要な生活手段の価値である。ところが労働力は、その発現によつてのみ自らを実証する。しかるに労働力の実証たる労働によつては、人間の筋肉・神経・脳髓などの或る一定分量が支出されるのであつて、これはふたたび填補されねばならない。この支出の増加は収入の増加を条件とする。労働力の所有者が今日の労働を了したならば、彼は明日も、力や健康の同じ条件のもとで同じ過程を反復することが出来なければならぬ。だから生活手段の総額は、労働する個人を労働する個人として、彼の正常の生活状態において維持するために充分でなければならぬ。食物・衣服・暖房・住居などのような自然的欲望そのものは、一國の氣候的その他の基本的な諸独自性に依つて相異なる。他方において、いわゆる必然的欲求の範囲は、その充足の仕方と同じように、それ自身一つの歴史的産物であり、したがつてまた大部分は一國の文化段階に依存するのであり、なかならずまた本質的には、如何なる条件のもとで——したがつていかなる慣習や生活要求をもつて——自由労働者の階級が形成されたかといふことに依存する。だから、労働力の価値規定は、他の商品の場合とは反対に、一の歴史のおよび精神的な要素

を含んでいる。だが一定の国にとっては、一定の時代には、必要生活手段の平均範囲が与えられている。『資本論』第一卷P一七八〜九）われわれが傍線を引いた部分がポイントである。宇野はこのところが理解できない、というよりも、彼独自の原理論理解のため、それはダメだというのであり、まさしく、マルクスのいう「歴史のおよび精神的な要素」を否定したうえで、彼独自の「原理的」な価値規定を与えねばならないとするのである。宇野にとっては価値規定において、マルクスのように、「歴史のおよび精神的な要素」を考へることは、理論からの逸脱だと考へてしまっているわけである。

宇野はいう。
「……労働者の生活資料の価値も、労働者が資本の生産過程において自ら生産したものを、その賃金によって買戻すという関係で、その生産に要する労働時間によって決定されることを明らかにされるのであるが、それと同時に、労働者の生活資料の『一定の総額』自身も考慮せざるをえない。しかしこの資本の生産過程においては、その『一定の総額』の生活資料の生産に要する労働時間は問題にしようとしても、その『一定の総額』自身は、問題とするわけにはゆかない。……マルクスのように、労働者の生活資料の『一定の総額』は『自然的』に、『歴史的』に与えられたものとして、なおそれに二、三の補足を加えることによってますますというわけにはゆかない。」（『宇野弘蔵著作集』第四卷P四一五〜六）

そもそも宇野の「理論」によって解明できない問題を勝手にとりだし、解明しようとしているのである。こういう課題をつくりあげるからこそ、宇野は、労働力の価値規定を価格運動の中に解消してしまうのである。だが宇野は、マルクス経済学者を自称する以上、そうはつきりといってしまうわけにはいかず、ゴタゴタとごまかすのである。他の箇所では、自信たつぷりにマルクスを「批判」する宇野が、ここではなんと歯切れのわるいことか。たとえ、宇野弘蔵編『資本論研究』（筑摩書房）という本がある。その第二巻の座談会——宇野を中心に、大内秀明、桜井毅、降旗節雄、山口重克といった宇野派オールドスターによる——で次のようにこの点について語りあっている（実はなくさめあってゐる）。さわめてこっけいであるので引用しておこう。

降旗：……労働力の価値というのをその生理的最低限というかたちでつ

宇野：そうですね。

鎌倉：そうしますと不況期には、労働力に対する需要が少なからず、価格が下がる。そこで生活水準（注意！）が下るといっていいのですか。

宇野：いいです。それは勿論そうです。「先ほどは一定、いまは変動、こういうしだいだ」

鎌倉：そうするとあとでは相当上がりますね。

宇野：ええ、そうです、上がる。「ヤレ、ヤレ」

鎌倉：その価格の変動というのは、一応……「なにを、こいつら、グチャグチャいっとるのか、エエかげんにしてくれ」

宇野：その生活水準の変動と、価格の変動をいっしょに論ずると問題が複雑になるだけだろう。「宇野のゴマカシ、ゴマカシ」例えば、好況期のときには労働者の生活水準が上がり、不況期には下がるといってもいいが、生活資料の価格は、また好況期には上がり、不況期には下がるといふことになる。それに賃金の動きがまた物価以上に上がったり下がったりする。そしてその運動の中で形成される平均が、いわば労働力の価値ということになる。労働力商品は、直接に労働によって生産されるものではないので、その価値規定がこういう関係で与えられるというのだ。「ハイ、ハイ、こくろうさん」

桜井：その違いはよくわかるのですけれども。「よしよし、いい子、いい子」

大内：そうしますと労働力商品自身については、労働力の価値と価格との区別はあまりしないほうがいいことになりませんか。「ふひ、君は、なかなか正直だ、だがもっとも正直、素直になりたまえ」「あまりしな」ではなくて、「全然しな」というのが、君たちの主張じゃなからか

宇野：原理的には、その関係が他の商品のようにはゆかない。「宇野原理解」これで、なにかいってつもらんだね

大内：もし区別があるとすると、もっぱら生活資料のほうの価格変動の反映として考へるなら考へる。

宇野：もちろん労働者の人口法則が基礎になる。そして一般には生活水準が上がったり、下がったりすると、それと一定のその平均はあるというだけでよいわけだ。価値と価格の関係が複雑なのだ。「要するにワカラんということだ」

桜井：『労働力の価値と価格』という論文（『宇野弘蔵著作集』第四卷

かまえていられるものですから、恐慌現象が起って産業予備軍が増えると、何か死ぬより仕様がないうような機械的な理解になってしまう。そうではないのだといったほうがいいのではないですか。「なにを軽薄なことをいっているのだ。つごうのよいように勝手に相手をつくるな」

宇野：それはそうかもしれない。
降旗：幅があるのは労働力の価値であって、それが圧縮されようが相当延びようが、基本的には労働力の価値を基準にして動いているのだというふうに。「謹聴！ 謹聴！ 降旗茶坊主の一大発明！ 幅のある価値だつて！ それは価格というのだよ」

大内：どうなのですかね。「お、さすが『協会』おかかえ学者、いちおう、疑問はいつてみるものだね」またその問題をむし返すことになるかもしれないが、労働力の価値規定はそういうかたちで与えられるとして「ガクッ」大内君、君もか、やはりネ、一般には労働力の市場価格といましようか、労働力の価格である賃金も、やはり景気循環のなかで決まるのではないのでしょうか。「ん？？ これはなんじゃ、転倒思想の精華！ 大内君、君はやはり、降旗君よりも、首尾一貫した軽薄ぶりだよ。価値規定はある幅があつて、産業循環のなかで上下すると、疑問の余地なく理解し、一方、価格（賃金）は、景気循環の中で決まるのでは、とおそろおそろいう。あんた、もう経済学をやるのヤメなさい」

宇野：もちろんそうなんだ。「アッハッハッ！ 宇野派かけ合い漫才というヤツネ」しかし基本は生活水準の問題が景気循環の中で決まるということにある。「それら、それら、宇野式労働力価値規定にずらしていくよ、なんと、宇野は弟子思いなのだ」つまり、市場価格という問題には、生活資料の市場価格の問題と、生活水準による生活資料の質の問題が重なってくるから、それでむつかしくなるのではないか。普通は生活資料の市場価格が問題になる。これは好況期の物価論になって、これがなかなかむつかしい。労働力の価値の方は理論的に生活水準の上り下りということになるが、具体的には論ぜられない。しかしそのほうはそうむやみに変動するのではない。大体一定しているものといつてよい。「ほらほら、ゴマカシになつてきたヨ」

鎌倉：どうなんですか。ある景気循環の過程の中で一定の生産方法が与えられる場合には、それに見合ったというか、一応生活水準も決まっているわけですね。

に所収）では、その点がはっきりしていませんね。

宇野：そう、まだはつきりしていませんかと思ふ。「ホー、ではいまははつきりしているのかね、もともとはつきりできないのではないか」

山口：労働力の価格というときに、生活資料の市場価格とは別に、労働力そのもののほうにも市場価格的な価格、つまり個々の資本の蓄積の競争の過程で、産業予備軍からの吸引とか、資本間の移動を媒介する価格というのがあると思いますが、その問題を入れたらどうなりますか。「はあ？」

大内：労働力に対する需給関係の問題を入れたらどうかというわけね。「なにをくだらんことをいっているのだ」

桜井：いや変動は景気循環のなかでしかでてこないだろう。それが一般商品と違う。労働力の需要というのは普通の商品と違うからそういう問題ではでないのではないですか。そうではなくて、労働力の価値というのか、価格というのか、どちらかという点はどうもわからないのですが「桜井君、君はなんと正直者なのだ」だが、君、そんなに正直だと、宇野派からいびりだされるよ、生活資料のほうの価格の騰貴は、まさに市場価格の問題だろうと思ふ。生活水準が上がったり、下がったりする問題だということでは……

大内：なおかつ一定の生産力水準では一定の基準がある。その場合、その蓄積が許すという限りにおいてね。それでも上がったたり下がったりするので、その関係をどういうふうにして処理したらいいかという問題ですね。「自分勝手に、矛盾、問題をつくりだすと、本当に苦労するネ、ゴッローサン」降旗：それは生産物ではないからね。どうしても生産物の価値と価格は違つてきている。違つてきているというのがわかればいいのではないかな。「おっ、もう降参か」

大内：そこが労働力商品の特殊性だということのかなあ。

桜井：その点もつとわかればいいのだけ……。「アッハッハッ！ なんと、なんと、宇野派解散か、結局のところこうなのだ」

山口：景気循環を通して動くような価格変動でもよいのですが、その価格変動の中心にあるというよりな価格は考えられるのか、考えられないのか、ということなのですが……。「いきつくところまでいきつきましたね」宇野：「いえば一定の生活水準があるのが価値だといつてよい。もちろん景気の上昇がつけば、生活水準は上がる。そしてそれは価格が上がつたといつてよい。それはただちに価値が上がつたとはいえない（注意！）」

その点に、不況期の下落が対応する。いずれにしても、資本の蓄積の過程で、歴史的に一定の労働者の生活水準が形成せられ、賃金も一定の程度を与えられている。それが価値を規定するものになる。「要するにゴマカシ、マルクスの労働力価値規定を不十分と置いておいたところからは、労働力価値はともかくきまるという呪文を唱える他はないのだ」

山口：価格変動の中心としての価値についても、生産条件によってひっぱる中心というのではない……。「ん？ じゃ、なにがひっぱるの、価格変動がひっぱるといいたいのだらう、正直にグロってしまえ」

宇野：そう、それは生産に必要な労働時間というのではないからそうだ。実際また拡張再生産はすぐにはできないから、そういう面も問題になる。マルクスの場合は、賃金が上がれば生産方法も変わるかのように考えているところもあるが、そうはゆかない。マルクスは人口法則を発見しながら、労働力商品の特殊性を十分に考えていないようなふしがある。他の商品と同じような具合に考える傾向がある。しかもこの労働力という特殊な商品と対応して固定資本があるという、ひじょうに重要な関係が無視されている。それが労働力の特殊性を十分に考えなかつた原因になっているのかもしれない。固定資本というのは、資本にとっては労働力みたいなもので、動きがとれない。自分自身に邪魔になる面がある。労働力もやはり資本に欠くべからざるものなのに、自由にはならない。資本自身妙な関係にあるわけだ。「なにをくだらないことをグタグタいっとるのか、資本の運動は資本それ自身を制限してしまおうということではないか、それ以外ではない、固定資本と労働力だつて、では、流動資本はどうなんだ」

大内：そこに先生のいわゆる資本主義の基本矛盾というのがあるわけでしょうね。

宇野：そう、そこに基本矛盾の根源があるわけだ。「なんとうるわしの師弟愛、お涙ちょうだいの一場劇、これにて幕。メダシ、メダシ」あれほど偉そうにマルクスの不十分性をいいたて、それを克服するなどと大みえをきつた宇野恐慌論の核心はかくのごときでいたらくなのだ。マルクスにありもしない疑問を提出したとたんこうなることは必定なのだ。

③ 宇野恐慌論の淵源——価値論のデタラメさ

以上みてきたごとく、宇野恐慌論の核心は労働力価値規定が、結局労働力価格論(賃金論)に解消されてしまっているのは、マルクスのいう「歴史的」規定を無視してしまうところからきているのだが、実は、これは、宇野がそもそも、価値規定について完全に誤った見方をもっており、それにマルクスの労働力価値規定への「疑問」が結びついた結果なのである。つまり「原理論」の内在的誤謬が、価値論を価格論に解消してしまふ淵源となつていのである。この点を批判しておくことで、宇野恐慌論は、完全に論破される。

この間の事情を宇野は次のごとくに語っている。先に引用した部分(宇野弘蔵著作集「第四巻P四一五〜六」)なのであるが、そこで省略した部分をも再現してみよう。

「マルクスのように、その労働価値説を二商品の交換関係によって論証しようものとしていないで、労働力の商品化を基軸とする資本の生産過程において始めて論証しようものとする、われわれの方法であると、労働者の生活資料の価値も、労働者が資本の生産過程において自ら生産したものを、その賃金によって買戻すという関係で、その生産に要する労働時間によって決定されることを明らかにされるのであるが、それと同時に、労働者の生活資料の『一定の総額』自身をも考慮せざるをえない。しかしこの資本の生産過程においては、その『一定の総額』の生活資料の生産に要する労働時間は問題にしようとしても、その『一定の総額』自身は、問題とするわけにはゆかない。その点は、労働価値説を資本と労働との関係を基礎にして論証しようとするだけに明確にせざるをえないのである。いわばこの『一定の総額』生活資料」自身が資本の生産過程によって、極めて重要な問題点をなしていることを示しているのである。マルクスの場合がそうではないというのではないが、すでに二商品の交換関係によって論証された労働価値説によって、労働力商品の価値を規定するということは、資本による商品の生産過程によって行われる、したがってまた労働力商品の価値規定をも同時に考慮しないではなしえない、労働価値説の論証と異なるものがあるといえるのではないかと思う。マルクスのように、労働者の生活資料の『一定の総額』は『自然的』に、『歴史的』に与えられたものとして、なおそれに二、三の補足を加えることによってますますというわけにはゆかないとでもいへば直接の関係の有するものとしてあらわれるのである。」

傍線部分がいま再現した部分だが、この全体をみてよくわかるように、

商品論で価値実体を説くのはおかしい、(三)価値実体は、資本の生産過程で説くべきだ、これである。

ここから宇野は、デタラメな商品論(宇野にとってはイコール価値形態論)を展開するのだが、われわれはここでは、その(三)の宇野の見解をみておくことで、それを照射したい。

問題は、宇野が価値の実体をいつたいどのように考えているかにある。結論からいってしまえば、宇野は、マルクスとはまったく違ったものを価値の実体と考えてしまっているのであり、ここから先の三つの主張ができているのである。このくわしい批判・論証は、多くの紙幅をさかねばならないので、ここでは簡単に要点だけにおくことにする。

宇野は、マルクスが価値の実体を商品で表示された抽象的・人間的労働であるとすることが理解できない。それは、宇野が、生きた労働の二面的属性と、商品で表示された労働の二重性とを明確に区別しえないことにもとづいているが、またそれゆえに、生きた労働の抽象的・人間的労働の属性と商品で表示された抽象的・人間的労働とを混同させることになっている。だから宇野は、マルクスが、商品で表示された抽象的・人間的労働に価値の実体について、

「……諸商品体の使用価値を度外視すれば、それらになお残るものは、一つの属性、すなわち労働諸生産物だという属性だけである。ところが、その労働諸生産物もまた、すでに吾々の手で転化されている。もし吾々が労働生産物の使用価値を捨象するならば、吾々はまた、労働生産物を使用価値たらしめる物體的な諸成分および諸形態をも捨象するわけである。……労働諸生産物の有用的性格とともに、労働諸生産物で表示されている諸労働の有用的性格が消失し、かくして、これらの労働の相異なる具体的形態も消失して、それらはもはや、互に区別がなくなり、すべてのこらず、同等な人間的労働すなわち抽象的・人間的労働に還元されているのである」(『資本論』第一巻P四二二)と述べ、

「これらの物は、それらに共通なかかる社会的実体の結晶としては、諸価値——諸商品価値である」(同前)

つまり、宇野は、「相互に独立して営まれる私的諸労働」が商品体(労働生産物)に対象化されてはじめて、その対象的形態においてはじめて社会

宇野が、労働力の価値規定に②で批判したような特殊な意味を付与しようとしたのは、宇野独自の価値論に淵源があるのである。宇野はこれを、マルクス労働価値説の論証の難点として述べているのだが、まさしくここが問題である。宇野がマルクスに難くせをつけて、「われわれの方法」と豪語している点とは宇野によって次のようにいわれている。

「マルクスは、『資本論』の第一章『商品』の第一節を『商品の二要因』として『使用価値と価値』を論じているが、その『価値』については、直ちに『価値実体、価値の大きさ』を説明するのである。これは、それにつづく第二節の『商品に表わされる労働の二重性』と相俟って、マルクスの労働価値説をなすのであるが、『商品』論の冒頭に『価値実体』を説明しようとする方法は、第三節で展開される、マルクスによって始めて確立された『価値形態』論に、いな、第一章を『商品』論とした彼の方法自身にも相応するものとはいえないのである。『商品』論は、それにつづく貨幣論、資本論に対応して形體的に展開せられるべきものであって、価値形態論はまさにその核心をなすものといつてよ。ところがこの価値形態論に先んじてなされる『価値実体』論のため『商品』論の中心が曖昧になると同時に、価値形態論自身もその影響を受けることになり、労働価値説の論証もまた決して十分なるものとはいえないことになっているのである。」(『経済学方法論』P一六九)

「労働価値説の論証は、従来の方法と異って『資本の生産過程』において行われなければならない……」(『原理論』岩波全書版P五九)

「……マルクスは、価値の実体規定を与えうる資本の生産過程でそれを論証しないで、商品論でなお生産を論じないうちにこれを行ってしまった。そこでは生産過程では、すでに価値は労働によって形成されるものとして生産過程を説明するということになった。僕は、……資本の生産過程で労働価値説を論証するという方法をとっている。」「(『価値論の問題点——経営セミナー』(2)法政大学出版局P七一)

最後の引用では、「それ」とか「これ」とかがいつたいなにをさすのかあまいであり、また同様に、価値と価値実体との区別があいまいで混乱しているが(この混乱は、宇野価値論の誤謬の核心的なものである)、ひとまずこれはおいておくとして、ともかく宇野は、次の三点を主張している。(一)商品論は、「形體的に展開」されねばならない、(二)だからマルクスのように、

的労働となることが理解できず、生きた労働としての私的諸労働それ自体が社会的労働になるのだと考える。だから、マルクスが、生きた労働の二面的属性について、

「おおよそ労働は、一方では、生理学的意味での人間的労働力の支出であって、同等な人間的労働または抽象的・人間的労働というこの属性においては、それは商品価値を形成する。おおよそ、労働は、他方では、特殊な・目的を規定された・形態での人間的労働力の支出であって、具体的・有用的労働というこの属性においては、それは使用価値を生産する。」（『資本論』第一巻P五二）

と述べたことを、正しく把握しえない。ここではマルクスは、まさしく、商品で表示された（だから対象の形態における）労働ではなく、生きた労働について述べているのであるからこそ、その労働の抽象的人間的労働の属性を、「生理学的意味での」労働という表現をして、ただちに、社会的実体の規定をしなかつたわけである。ところが宇野は、商品で表示された労働の二重性と生きた労働の二面的属性とを混同してしまっている。生きた労働そのものが、厳密には、その抽象的人間的労働の属性それ自体が、社会的労働の実体として、あらわれねばならぬとするのである。

かくして、その労働の二面性そのものが、混同され、明確に区別されず、「生理学的意味での」という点から、この生きた労働の抽象的人間的労働という属性は、いかなる社会にも共通なものだと考えられてしまい、だから、かかる共通なる実体が、いかなる社会的諸条件のもとで、社会的に妥当なものとして支配的に現存するのか、ということが、価値実体の確定だと考えられ、しかるがゆえに、そこではじめて価値論が論証されるとするわけである。

つまり宇野は、マルクスが、今度は、生きた労働ではなく、商品で表示された抽象的人間的労働に関して、「簡単労働」「複雑労働」を分析しているところ（『資本論』第一巻P四八〇九）を生きた労働の側からとらえ、いかなる社会にも共通なものとして生きた労働の抽象的人間的労働の属性を具体化して、その、社会に支配的な形での実現条件を確定せんとして、機械制大工業制の支配・拡大による単純労働化の分析へと移っていくのである。

要するに、マルクスがあれほど強調した「労働の二重性」について、な

法論【P一七七〇八】

この宇野のように、単純労働化を価値論に直結するのは大きな誤りである。すでに述べたように、マルクスは、労働の単純化についてもそれがドンドン進行していった、支配的になるとはならないのであるが、それより問題なのは、価値において表示される「簡単な平均労働」であり、これはあくまで、抽象的人間的労働の属性においてとらえられているものである。宇野が難くせをつけている複雑労働の簡単労働への還元にしても（『資本論』第一巻P四八〇九）、マルクスが述べているのは、まず、商品体の中に対象化された労働について述べているのであって、宇野のように生きた労働に関してではないこと、そして第二に、それゆえ、複雑労働、簡単な平均労働ということも、抽象的人間的労働において述べられていることであり、この点がまったく理解されていないのである。マルクスが「種々の種類の労働がそれらの度量単位としての簡単労働に還元されている種々の比率は、生産者たちの背後で一の社会的過程によって確立される……」（同前）といっているのは、宇野のいうような労働の単純化のことでは決してないのである。

【付】

これまで述べてきたように、宇野は、商品で表示された労働の二重性と生きた労働の二面性におけるその二重性、二面性をもあいまい化しているわけだが、ここから商品・価値論を、マルクスにあれこれ難くせをつけながら、価値形態論——実は交換過程論へとおしこめんとして四苦八苦している。かの宇野—久留間論争において有名になった宇野の、商品所有者の欲望を、第一章商品ですてに導入せねばならぬという所説も、この「苦勞」(?)のあらわれである。宇野は「価値論」第一章 価値の実体—価値を形成する労働という。

「マルクスが『資本論』第一巻第二章第二節で明らかにしている『商品で表現された労働の二重性』も、したがってこの観点から理解しなければならぬ。それは単純にいわれる有用労働と抽象的な人間労働との二面の対比としてではなく、むしろこの二面が商品生産において特殊の形をとって対立的なものとしてあらわれる点に注意しなければならぬ。元来商品の使用価値は、商品の生産者ないし所有者にとっての使用価値ではない。したがって使用価値を生産するものとしての労働者自身がすでにロビンソンの場合と異なった性質を有するも

直接的生産過程において、生きた労働の精神的諸力を生産手段の方へとしたいに疎外していくことは事実ではあるが、しかしまた他方では労働者をつまらない細目の熟練に縛りつけるのであり、この意味からも、労働が単純化していくとは一般にはいえないわけである。宇野が、あるいは凡庸な論者がいのように、単に労働の単純化がメンズン進んでいくというのならなぜ、政府や、企業が、「教育」「教育」と叫びまわるのであるか。説明不能ではないか。

このように宇野は、生きた労働をその具体的有用的労働の属性からみて、それが単純化していくとし、これをもって、価値を形成する労働の生成と考えてしまっているのである。つまりなんども述べてきたように、マルクスがあれほど強調した商品で表示された労働の二重性を正しくつかみえず、かくして、価値、価値実体、価値形態、交換価値、価値の源泉について、しっかりとした概念的区別をなしえず、混同してしまっているのである。このことのゆえに、あのような労働力価値規定をめぐって混乱に混乱をかさねることになってしまうのである。

労働価値説を資本の生産過程で論証せねばならないなどとなにか大した内容をいつているようにみえるが、その実、いつているのは、彼の価値論における謬論のゆえに提出された言明に他ならないわけである。たとえば、宇野は、次のようななんとも混乱したことをいっているのである。生きた労働を価値実体に、しかも、それを具体的有用的労働の属性からみた単純労働をもって価値実体とする宇野の混乱ぶりが如実にあらわれている。

「……商品の価値規定の内容をなす社会的実体は、種々なる社会に共通なる物質的基礎としての労働生産過程にほかならないとしても、その特殊な形態と『切りはなして』は考察しえないのである。マルクスが与えた『価値形成実体』としての社会的平均化は、資本形態のもとに把握された労働生産過程において具体化されるのであって、それは単なる商品交換関係の内に抽象してえられるような一般的な規定をもつてすることはできないのである。事実、資本主義社会の出現とともに商品経済的な、社会的平均化は、旧来の束縛を脱して、資本主義に特有なる生産方法の発展の内に急速に具体化されてきたのであった。協業・マニファクチュア的分業・機械的大工業の発展は、全く商品経済的平均化を実現するものにほかならない。いわゆる複雑労働もこの生産方法の発展とともに単純化されるものといつてよい。」（『経済学方

のともいえるのである。その有用労働は、商品においては抽象的人間労働とそのまま結合せられたものとしてではなく、むしろ同じ労働が、一面ではすでに他人のための有用労働として、他面では他人の有用労働において実現せらるべき自己の人間の労働として、たがいに対立的な関係にありながら統一せられたものになっている。極言すれば有用労働自身は、その労働の担当者にとっては直接関心をもったものとはいえないものとして現われるのである。」（『宇野弘藏著作集』第三巻P二六九）

価値形態論のまえに価値実体を説くのはオカシイとする宇野の当然の混乱であり、また、彼のその価値形態論をも混乱に導いている。『資本論』第一巻「第一章第四節（P七八〇九）」の生産者たちの私的諸労働のもつ二重の社会的性格についてのくだりを参照。

↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑

火花 第二九号

発行日 一九八四年一月十五日

編集発行 共産主義者同盟（火花）

定 価 八〇〇円